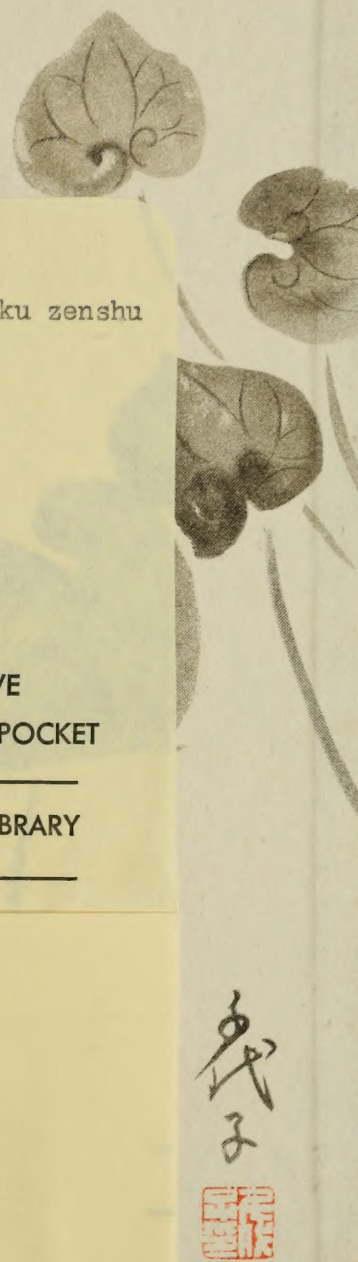




松平春嶽全集

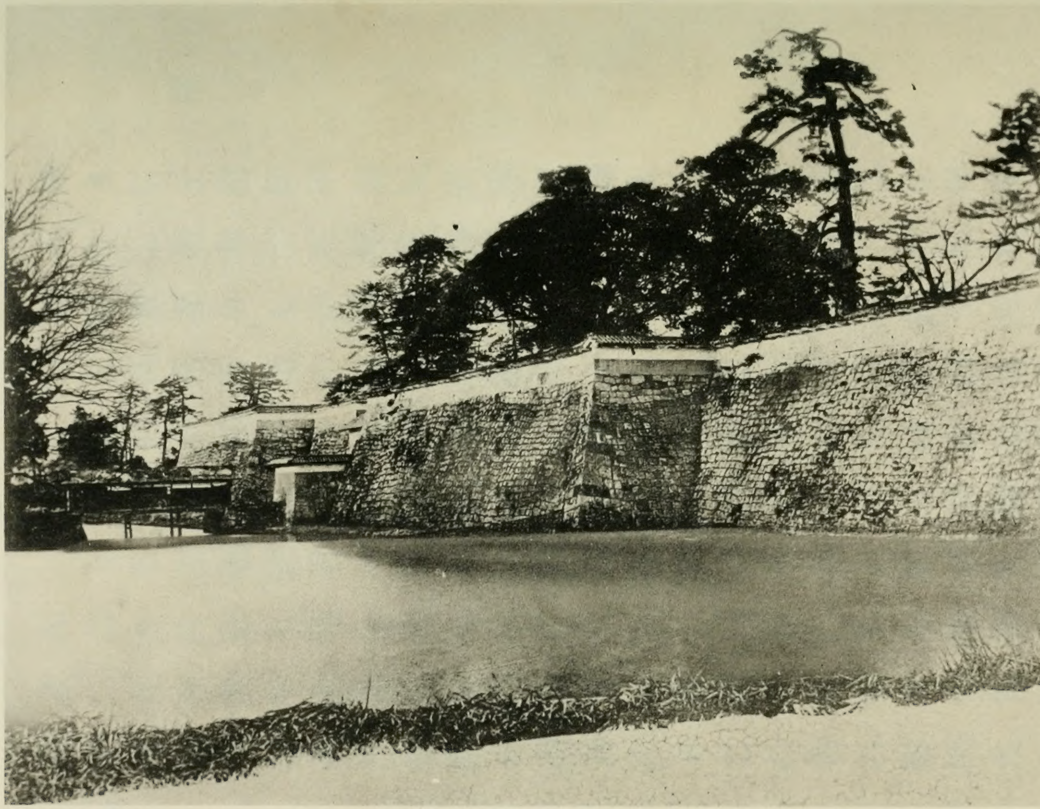
茂民書



松平慶永公御寫眞（表）



（裏）



（橋を隔てて木立の見ゆる處福井神社境内豫定地）

舊福井城御本丸御廊下橋の景

序

曩きに子爵松平慶民君、尊考慶永公の歿後五十年を記念せんとし、昭和十三年冬、春嶽全集第一册を發刊せられ、尚續出の計畫なりしが、偶〻舊福井藩の有志も亦、この機を以て慶永公を別格官幣の社に奉祀せんとし、之を官に申請せり。尋いて同十五年冬、幸に聽許の内命を蒙りたれば、直に社殿の造營に着手すると共に、又かねて企圖せる公の記念事業の一として、慶民君の計畫に係れる公の全集の續刊を援助せんことに決し、乃ち之を君に諮りしに、直に其の快諾を得たり。是に於て全集編纂刊行會を組織し、慶民君の外に、侯爵松平康昌・侯爵德川義親の兩君にもこの會の顧問たらんこ

とを懇請して、其の指揮を仰ぎ、さきに第一册の編纂刊行に當れる蘆田・糟谷・島の三氏に再び之を委囑し、其の業を開始せり。然るに今春偶〻島氏の訃音に接し、哀傷遺憾措く能はざるものありしが、三秀舍員倉澤氏克く故人の意を體して之に當り、爾來三氏共に共に拮据勉勵、ここに其の第二册の刊行を見るに至れるは誠に欣幸とするところなり。

抑も慶永公の活眼達識、而かも忠誠昭乎として日月の如きは、余の夙に熟知するところなりしが、今この集に就き其の收むるところの建白建言を親しく讀むに及んで、更に敬服せしむるものの多きに、驚嘆せざるを得ざるなり。幕末世を擧げて尊王攘夷を唱ふるの時、率先獨り開國勤王を提げて我が國是の嚮ふところを明にし、參覲交代の舊制を廢して諸侯の財政を救濟し、大政の奉還を德川慶喜公に勸告し

て王政復古の氣運を促進せんとせられたるが如きは、已に一般の知れるところなり。而かも今より約百年前、ペリー渡來の時に當り、頻りに現時の所謂高度國防國家體制の必要を論じて、國體の宣揚に努められ、且つ臣道實踐萬人一心の語を以て朝廷に忠誠を致すべきを力說せられしことあるに至つては、余は其の透徹せる千古不易の公の國體觀に對し、眞に萬腔の尊敬を拂はんとするものなり。

嗚呼この全集、啻に公の遺德を顯彰するのみに止らず、洵に以て現今國民の龜鑑となすに足らんか。

昭和十六年六月

松平春嶽全集編纂刊行會長　岡田啓介識

凡例

一この集には、慶永公建白書類、建言集記、建言拾遺等公の建言建策を輯錄せるもの三册と、外に公の日錄に係れる合同舶入相秘記六册の中、第一卷より第四卷に至る四册とを收載せり。

一この集の原稿は、建白建言に關するものは前記輯錄の書册を底本となし、之を公の自筆に係れる草稿、又は控書に據りて校訂し、努めて其の精確を期したり。合同舶入相秘記は、專ら公の自筆の原本に據れり。

一建白建言に關するものは、年代の先後に拘らず、前記輯錄の書册の舊に依つて之を收載し、其の所載の各文書には、輯錄三册を通じての番號を附し、且つ題を揭げ、以て閱讀と彼我對照とに便ならしめ、更に編年の目錄を作成して、之を卷頭細目の前に置き、年次による檢索の便となせり。

一建白建言の文書には、題目の次に細字を以て、之に簡單なる說明を附記せり。唯僅に讀者をして、該文書提出前後の事情を知らしめんがためのみ。尙說明文の終に(何判何尺何寸)とあるは、其の原本の形と大さとを示すもの

なり。

一行文中の假名の混淆、並に撰と選、義と儀の類、及び「被爲安」「難相適」「不忍聞」等の字句の如き、今敢て之を訂し又は返り點、送り假名を施すの煩を避け、總べて原本の舊に依れり。　此等はいづれも當時の慣習なればなり。

一凡そ文書の連載に當り、各文書の間には太き……線、又一編の文書中、之に附屬する添狀・返翰並に說明文等數通を併載の時には、其の各通の間に細き‥線を挾み以て相互の區分を明にせり。　其の他全文の句讀、鼇頭の註記、及び目錄の毎月日の頭に○を冠するの類は、皆編者の加ふるところなり。　而して編者の說明及び行間の註記には、首に○を置き、或は上下に（）を加へて以て本文と區別せること既刊の集に同じ。

一この集に所載の重要事項は、之を一括して索引を作成し、卷末に附收して閲覽の便に供せり。

一この集の背文字と扉の文字とは、公の男子爵慶民樣の揮毫に係り、見返しの繪畫は、公の女公爵夫人三條千代子樣の染筆なり。

一この集より書冊の大さをA列5號に改めたり。

一公の自筆本は頗る難讀のもの多かりしが、原稿の作成に當り、其の謄寫は專ら糟谷季之助氏之を分擔し、印刷に關しては三秀舍員倉澤直男氏終始之を斡旋せり。若夫れ編次校訂其の他に過誤あらば、是一に其の責編者に在り、喜んで大方の叱正を迎へんと欲す。

昭和十六年六月

蘆田伊人識

松平春嶽全集第二卷總目次

卷頭圖版　松平慶永公御寫眞
（明治十一年四月廿一日御撮影）
舊福井城御本丸御廊下橋の景
（橋を隔てゝ木立の見ゆる處福井神社境內豫定地）

序　岡田啓介

凡例

總目次

建白建言編年目録

編年目錄終

松平春嶽全集第二巻細目

慶永公建白書類……一

合同船入相秘記卷三……四五五

細目終

○慶永公建白書類　一册

この書は編者並に編次の年代共に不明なれども、若し續再夢紀事の引用書に見ゆる「慶永公建白類」と同書ならば、續再夢紀事の編纂せらるる以前、卽ち明治廿二年前のものにして、恐らく松平侯爵家家職の手に成れるものなるべし。收むるところの書類約卅編、而かも其の編次の模樣より察すれば、當時公の坐右に在りし多くの書類を整理の際、偶々其の建白建言に關するものを集めて、大略の順序を建て、之を一册に輯錄せるものに過ぎざらんか。其の重要なる書類の脫落、年次考定の過誤あるが如きは、卽ち是が爲なるべし。されど、この書從來侯爵家の藏本として宮內省臨時編修局並に文部省維新史料編纂會等に提出せられ、已に其の書名の世に知らるること久しきを以て、今亦この集に之を採收せり。但し年次其の他の過誤等は一々之を訂正せり。本文の說明に詳なり。尙本書は今は春嶽公記念文庫の所藏に係る。

○建言集記　一冊

この書も亦編者並に編次の年代を詳にせず。されど、この書は恐らく續再夢紀事の編者佐々木千尋等が其の編纂の際、過目せる公の建言文書の中、前掲建白書類に漏れたるものを輯錄して一冊と成せるものなるべし。而して其の特に明治元年以下のもののみ收めたるは、是、以前のものは續再夢紀事已に採錄せしが故なるべし。載するところ凡そ廿七編、略ほ年月を追うて編次せられたり。この書ももと松平侯爵家の藏本なりしが、今は春嶽公記念文庫の所藏となれり。

○建言拾遺　一冊

抑も公の建言建策に關する文書其の數頗る多く、前記二書の所收は僅に其の主なるものの一部に過ぎざるなり。この書は昨年秋この全集を刊行するに當り、前記二書に脫落せるものの中特に顯著なるもの二十四編を選び新に編次して姑く建言拾遺と名けたるものなり。唯採錄の便宜に由れるのみ。

二十四編各出典あり、多くは草案又は控書に採り、他は公の日錄・書翰留其の他に據れり。

○合同舶入相秘記　六冊

合同船とは亞米利加合衆國の船舶の義にして、入相とは相模國に侵入の義なり。卽ち安政元年正月米國艦隊再渡來せし時の日錄にして、中には多少の命を受けて侍臣の筆寫せるところもあれども、多くは公の自筆に係り、米艦の動靜、彼我應接の模樣、及び福井藩の品川御殿山警固のことなど、或は浦賀方面警衞の諸藩より、或は侍臣の親しく偵察せる情報並に圖畫等を掲載し最も詳細を極むるものなり。卽ち

第一卷は嘉永七年(安政元年)正月一日より正月廿三日まで
第二卷は同年正月廿四日より二月六日まで
第三卷は同年二月七日より二月十一日まで
第四卷は同年二月十一日の續きより二月二十日まで
第五卷は同年二月廿一日より二月廿六日まで

第六卷は同年二月廿七日より二月廿八日まで
を分載せり。この集には都合上第一卷より第四卷までを採收せり。尙第
六卷に關し聊か附記すべきことあれども、それは其の卷を收載する次の集に
讓るを便とすれば、今は省略せり。

略解題　終

慶永公建白書類

一　安政二年十月十六日水戸老公（前水戸藩主徳川齊昭）江被遣御直書

〔この御直書は建白書類の原題には「嘉永六癸丑年水戸老公に被遣御直書」とあれども、嘉永六年は誤りにして、正に安政二年十月十六日のものなり。今之を訂正してこゝに掲書せり。　按ずるに、諸侯の疲弊は安政二年十月二日江戸の大地震のため其の邸宅の倒潰燒失等によりて一層の深刻を加へたりしが、然かも尙一方には外國との關係により、海防の經費は益〻增加するに至れるを以て、公は其の對策として水戸老公を通じて幕府に其の意見を建議せられたるなり。　尙昨夢紀事には其の間の事情を詳記せり。　乃ち左に之を抄出して以て參考に供す。

〔昨夢紀事〕三　安政二年

一、十月十六日水老公へ被進御書并御別册如左

一翰謹啓向寒不同之候ニ御座候處、益御清泰被成御起居奉賀候。　然は去ル二日夜前代無比之大變、絕言語畏懼之至御坐候。　先以　大樹公御別條不被爲在益御機嫌能御同意此上之恐悅奉存候。　乍併御城郭を初上下一統大破壞死傷等も不少趣、大息之外無之候。　貴邸も餘程之破頽ニ相成候由、先〻御別條無之

此上之御儀に奉存候。御家臣にも壓傷等有之趣傳聞仕候何角御痛心共と萬ゝ奉察上候。去ル三日には早速之御觸達にて、一統難有奉謹承候。弊家は外並に比候而ハ、破損位にて、當時之手當を仕、住居ニ無指支、此上之幸甚に御座候。乍併處々屋敷武器藏不殘、硝藏米藏等悉く潰頽、當惑之次第、右ニ付而も外之大潰敗或は罹災にて今日之手當にも指支候向も可有之、實ニ察入候事ニ御座候。京師を始諸國の樣子は、先ツ安心の方ニ相聞え、重疊之儀何分重嶮逼至之時節と恐入候。且又、先日御垂問ニ付建議、今度地震ニ付愚考共別紙二通致進呈候間、宜敷御推覽被成下、御內慮垂諭奉伏希候。御教示被成下候上ニ、阿閣へも右書付指越挨拶承り、愈覺悟相極、國許へ申越候趣ニ御座候間、此節別而御繁劇と恐入候得共何分不日御返翰奉願候。尤諸端無伏藏吐露仕候儀に御座候得は、御教示も何卒無御斟酌被仰聞被下候樣吳ゝも奉希上候。先此節之御動履相伺度、且前文御內慮相伺旁如此御座候。已上

十月十六日

再伸向寒之節別而當時折角御保重爲天下奉萬祈候。此比中早速御安否可相伺と存居候得共、別而繁多と指控居候儀ニ御座候。一兩日先ツ鎭まり候哉にて少安意申候。扨一纏之內輕品御座候得共聊御見廻申上候驗迄に奉拜呈候、御笑捨可被下候。

一、是迄ハ筆尖にて情狀難通儀も御座候節は、戶田藤田等へ腹心之者指出、御內慮も相伺候積りニ罷在候。然ル處今般兩人樣子承り、實ニ駭嘆痛惜之至御座候。就而ハ以後右等之儀御座候節、誰方へ指出候而可然哉兼而相心得置度奉

存候間、御内〻御教諭奉希候。　以上

とありて、この次にこの御直書を載せ、且つ「今般地震ニ付愚衷」と題せる一通の御直書をも之に附收せり。この二通の御直書は、卽ち右に抄出せる御書翰の中に「且又先日御垂問ニ付建議今度地震ニ付愚考共別紙二通致進呈候」とある其の建議と愚考との二通に該當するものにして、從つてこの御直書は、嘉永六年にあらずして、安政二年十月十六日のものたることは明かなり。　然るに建白書類の編者、建議に係れる御直書を以て嘉永六年のものと誤認し、而して之を其の最初(一)に收め、愚考なる地震に就いての一通は、之を別に離して、それより後(六)に移し置きたり。　今、年代の誤は之を訂正せるが、編次は姑く舊のままに之を存せり。　今、現存せる控書によりて收錄せり。(美濃判十六枚)

(表紙上書美濃判)

覚

口に必戰を唱へて心に必戰の誠なし

天保度打拂停止の命令により戰はんと欲して戰ふこと能はず

愚衷

一先般阿閣(老中阿部正弘)内話ニも、當今之時態必戰を期候外無之段申聞、將又尊書中ニも必戰之覺悟御至願之旨被仰越拜承仕候。然ル處方今天下之具瞻萬人之依頼第一尊公、次ニ阿閣之上に歸し有之候處、右樣等敷必戰之覺悟御至願ニ於而ハ、天下之人心も上風下草、必戰を期し可申勢ニ可有之候處、指當り都下すらも因循偸安之風習相替候儀無之候ハ、理之解すへからさる處ニ候得共、反求深考仕候處、拙生輩も專ら必戰を唱へ必戰を勸メ候得共、弊藩之風習も亦都下同然ニ而殆當惑之仕合ニ御坐候。此理を推究仕候得共、拙生輩口ニ必戰を唱へなから、心ニ必戰之誠無之故と憂慚之外ハ無御坐候。就夫何故ニ必戰之誠意無之哉と熟思仕候得ハ、畢竟不決斷より起候事ニ候得共、右決斷と申爲事理ニおゐて決斷不致候半而ハ難相適故、及決斷候事ニ而不及決斷儀を決斷可仕樣も無之候。此外寇一條ニおゐても、天保度打拂ひを被相止候命令以後ハ、不及必戰國體ニ相成候事ニ候得ハ、如何ニ致候而も必戰ニ決斷仕、必戰之覺悟ニハ實以相成兼候。是ハ申も不及必戰時ニ當り、必戰之備ニ

和親を結びながら其の條約を信ぜず必戰を覺悟すべし

覺悟よりも其實を示すに如かず

及候故、徒ニ奔命ニ而已勞役し、必戰之期を不待して國家困弊ニ至り候事ハ勿論之儀と奉存候。　只豫備無油斷と申程之儀者、誰々も心懸之淺深次第、甲乙共ニ支度ハ可仕候得共、唯今誰ありて必戰を決し、必戰之備を可致事とハ不被存候。　其子細者魯墨英之三夷と永世不朽之御親睦、此度御破談ニ相成候旨御開示候ハヽ、如何ニも必戰之時節到來ニ而、天下必戰之覺悟ニも可相成候得共、當今ハ是ニ反し、是迄ハ以而成不測之變を生し候半も難計と、恐惶致候夷情も、此度之御條約ニよりて相定り、無二之御和親御取結ひ之上ハ、一統可致安心旨被　仰出候儀、事理之的當可有御座候處、兩國之全權會議之上及盟約候條約者御信用無之、測量船主之請求御斷ニよりて、內海江乘入如何樣之互患を發候半も難計候間、必戰と覺悟を致候樣ニとの御趣旨ニ而者、人每ニ御教諭有之候而も、恐らく信用仕る者ハ有之間敷と恐察仕候。　乍憚尊公阿閣と以へとも、右等之邊如何御覺悟被成候哉、如高示二百數十年之昇平、必戰之事實拂地之時ニ候得者、必戰之覺悟を御勸誘御座候より、必戰之實を御示し被成候方時務ニ適當可仕哉、右ニ就而者大小之群牧をして、必死之地ニ勞し、必生之地ニ佚し候樣無之候半而者難相成、右勞佚之分判然たる御仕

諸獻上諸贈進火防門番等の免除以て諸藩の疲弊を救ふに足らず

向ニ相成候ハヽ、天下の士氣所嚮を知り、安定ニも至り可申儀と奉存候。此儀他ニ相求候儀ニも無之、近く微軀弊藩ニ體驗仕候而申上候事ニ御座候。已ニ大小の侯伯疲弊御救助之爲メ、諸獻上物の御省略、諸有司江の贈進、或は御兩山を始、火防及御門番等も御免除の御評議も御座候哉の趣難有儀ニは御座候得共、私家の身上ニ比較仕申上試候得は、兼而逼迫の勝手向ニ御座候故、兩山火防等被仰付候得は、右費用別段才覺金を以取賄候次第ニ而、兼而備置候ふも無之候故、御免御座候得は、才覺の勞を省き候丈、他借相增候儀無之迄の儀ニ而、別段有餘ニ相成候譯ニも無之、又獻上物惣而御免相成候迚、中々數千金ニは至り不申候得は、武器の修整彈藥儲蓄の用ニ充候位の事まて、中々夫を以必戰を期候事ニは至り不申候。尤同し必戰必死とは乍申、時所ニよつて天下の御稗益ニも相成、又は犬豕同樣の事ニ而相濟候儀も可有之候。去レハ犬豕の死を厭ひ、天下の御爲メを存候迚、和親御取結ひの當年より、後來御破談ニ可相成哉の用意として、一ト廉の御奉公可仕程の手當致置候儀は誰迚も出來不仕、又幕廷ニ被爲置候而も、少人數ニも召呼候ニは不及との御趣意ニ候得は、此儘ニ

この節の大名ほど果敢なきものなし

而者必戰の覺悟仕候ニもいさせ、必戰の手段無之候得者、唯必死而已に候得共、必死者所謂犬豕の死ニ而、公私ニ取毫髮の益も無之、國許ニ指置候譜代恩顧の侍共も、一人として何の役ニも相立不申、右樣ニ相考候得者、此節の大名程誠ニ果敢なき身上者無之、匹夫まして匹夫丈ケの心力を竭し候者まも相劣候次第ニ而、實ニ覺悟も極り兼、痛歎の至泣血潜然の外者無之候。

在府大小名の衷情

拙生如此ニ候得者、外ニ大小名も少ゝの異同者可有之候得共、大凡相變候儀者有之間敷、諸侯の通患此事ニ止り申候。 仍之在府の大小侯伯、事あるま臨ミ不得止事義を守りて必戰の覺悟を極め必死ニ處候而も、右樣心ニ飽足候事無之候得者、戰候而も勝算無之、又死しても天下ニ益なき事勿論ニ御座候。 乍恐廟堂ニ被爲置候而も、甚御心細き御成行ニ者有御座間敷歟と奉恐察候。 されハとて 公私共、心丈夫ニ御座候程人數召呼候樣被仰出候ハヽ、是亦兩三年まして天下の疲弊極り可申奉存候。 當今の形勢者、必死常勞の道を以諸侯御使役ニ相成候姿故、却而生を貪り佚を樂ひ、竊ニ憤然さる事能者さるの勢ニ而、實ニ御大事の儀まも可有御座と恐懼の至奉存候。

慶永公の對策

依之諸侯の勞佚を分ち候拙策左ニ相記申上試候。

参覲制度の改革

一當時天下ゝ諸侯を二分して、隔年ゝ交替相成有之候處、先十五年を限り四分して四年ニ一度ゝ參覲ニ相成、兼而御定ゝ持場相固メ不安心ニ無之程人數召連候樣ゝ御規定ニ相成り候ハヽ、三年在國中演武を專まして、自國ゝ守衛を嚴まし、政事幷講文ゝ餘暇ニ而山野ゝ遊獵等を相催し、暢欝遣情筋骨を養ひ英氣を蓄へ、扨四年ニ一度ゝ參覲ニ而、將卒共ニ必死を極メ、治世平常ゝ務ハ盡く致放下、一向防禦守衛ゝ備ニ精力を盡し、惣而陣中ゝ心得を以て致在府候樣相成候ハヽ、不令して華美奢麗ゝ弊習ハ自然相止、在番中ゝ費用も方今ゝ類とて拔群相違も可仕と奉存候事。

但嫡子庶子とも國邑へ召連候儀、勝手次第可被仰付事。

在府は陣中と同じ

一四年ニ一度ゝ在府、陣中同樣相成、諸侯禮式服制等ゝ儀、御年限中夫々格別ゝ御制度被相立、其以下も是ニ准し可申事、陪臣ゝ分ハ不撰尊卑、野羽織立付伊賀袴等着、登　城ゝ供さりとも同樣にて、主人くにゝ年始ゝ禮も甲冑着用之事。

妻女を國邑に移す

一右に付而ハ、諸侯妻女も銘々國邑へ引移し可申事、先年及建白候通りニ而、此表大小侯伯ゝ邸宅在府無之分ハ、留守ゝ者兩三輩門・番少々指置候迄ニ

可有之事。

旗頭と旗下

一在番ハ大名ニ而旗頭を被定、小名を旗下ニ御附屬有之、一手ツヽ御分配守衛可被仰付事。

一在府ハ大小侯伯をして、御府內閑曠ノ地ニおゐて四季ニ一度ツヽ、一手限りノ人數操練可有之事。

海軍旗頭

一右樣相成候ハヽ、武相房總御固持場ノ四家も勞役無間斷姿ニ候得共、是亦海軍旗頭ニ被命、海國ノ小諸侯御附屬有之、四年一度ノ勤番ニ而海軍を督し、常々軍艦中に在て海城を相守候樣可被仰付事。

但四家海軍ノ御備有之候得共、此邊陸地御固メノ儀ハ、小諸侯ニ被命、士着可被仰付事。

砲臺守衛の旗頭

一品川御臺場持ノ諸侯ハ、是亦砲臺守衛ノ旗頭被命、麾下を御附屬可有之事。

但屬下ハ小諸侯ニ不限、御旗本御家人等ノ類ニ而も可然歟。

定府の諸侯

一定府ハ小諸侯諸御旗本ノ類、惣而軍制ニ關係ノ向も悉く之を四分し、其一分をして輪流交番一ヶ年ツヽ必死必戰ノ地ニ被指置、其三分ハ諸役御放免ニ而專ら文學を講究し、武術を鍛錬可仕旨可被仰付事。

軍艦製造

其の費用は石高に割り付くべし

但大小諸侯初三年ノ休暇中、政事幷文武ノ修治行屆キ、又ハ徒ニ安佚ニ耽リ候類、精詳ニ御吟味ノ上、夫々御賞罰可有之事。

一軍艦製造ノ事、兼テ御沙汰モ有之、如何樣軍艦無之候テハ海防全備モ難致、且夷虜及海賊、海運ヲ妨ケ、或ハ掠奪等ノ節抔モ、當時體ニテハ實ニ被成方有御坐間敷候得ハ、此御備ノ儀ハ一時モ早ク御完整願ハしき儀ニ御座候得共、拙生如キ瘠地ノ大名ニテ相考候得ハ、如何ニモ財用難續手關ニ及ひ兼候得ハ、甲乙ハ可有之候得共、大小侯伯共多分逼迫ノ折柄故、此儘ニ被指置候ハヽ、有志ノ向とゐへとも容易ニハ出來申間敷候。右ニ付テハ外寇ヲ禦キ、神州ヲ護候重器ノ故ヲ以日本全國ノ石高ニ割付、譬ハ越前國六十餘萬石御料私領寺社領除地ノ差別なく、高百石ニ十金ツヽノ課役ヲ以、國所ニ應し多少ノ軍艦及ひ製造使用ノ法爲致習熟候樣、國々旗頭ノ大名ニ被仰付候ハヽ、越前國ニテモ六萬餘金ヲ出し、幾數艘ノ軍艦造出し可申候。尤一時ニ成功可致儀ニモ無之候得ハ、課金ノ儀ハ追々ノ御取立ニテ可然事故、下民ノ難義ニ及候程ノ事爲有之間敷候。如此して沿海ノ諸國悉く軍艦ヲ備へ、自國ノ守衞他國ノ應援ニ充、且定額ヲ被立、爲御警衞江府

軍艦は亦京都の警衛に充つべし

以上は空論虚策にあらず

近海に勤番被仰付、前條海國之人員是ニ據て守衛を事とし、四季之操練を
陸軍同樣ニ可有之事。

但軍艦之儀、中國西國之諸侯へ之別而早速製造候樣被命、在國之面々事あるに臨んて右軍艦を以

京師御警衛被仰付置候ハヽ、御手厚ニ可相成事。

一本文高割出金之儀、國之廣狹肥瘠有之、已ニ奥羽邊と弊國等とは莫大之相違有之事に候得共、猶又人別高を以御斟酌有之度事。

右諸侯之勞佚を分判まて、天下之形勢を一變し、必戰を期するの拙策ニ御坐候。右之趣共御採用御坐候ハヽ、他家ハ不存、於拙生も、祖先をも辱めは天下之手本ニも可相成程之御奉公も、急度相勤可申と存詰申上候事ニ而、傍觀紙上之空論虚策ニ而決而無之、自家丈ケ之儀ハ一々講究躰驗仕候上之儀ニ御坐候。私家如斯ニ候得共、列侯も同然と奉存候間、伏而奉冀尊考候。將又假令拙策を御用ひ無之候とも、大小侯伯之儀も、戰陣ニ臨ミ候而も、御奉公甲斐有之候樣、何とか御仕向ニ不相成候而も、只今之爲躰如何にも前途曹然難得死然勢ニ御坐候得共、體ニより不滿を抱キ、事を左右ニ託し、參覲を怠候樣之

諸侯追々出來可申歟と竊に恐懼仕居候。何分此體ニ而ハ、他人ハ扨置、拙生ニ於而ハ豫め必戰之覺悟ニ而相成兼候間、此段兼而申上置候。乍併不得止事持場等、被命死地ニ爲御臨被成候ハヽ、一足も不去夫を最期ニ必戰必死も可仕、左樣致候迚、天下之御爲ニ而ハ決而不相成、右等之儀ハ兼て御斷申上置候。私家如斯ニ候得ハ、外諸侯も同然之儀と奉存候。何分當今之御時世ニ當り、必戰之覺悟出來候樣御仕向無之、徒ニ必戰を而已御勸誘御坐候ニ於而ハ、將卒をして空敷怏々不滿之地ニ斃さんとするの勢ニ御坐候得ハ、如此形勢ニ而

廟堂獨り御安全を可被爲得理ハ有御坐間敷奉存候。

但前條之次第御採用ニ付而も、日本全國中眞ニ必戰之覺悟ニ相成候樣、

公邊ニ被爲置候而、御必戰御覺悟之實を以御示し御坐候儀肝要と奉存候。

一右ニ付而ハ、日本全國沿海へ異船渡來之節、取扱方區々相成、御條約之御信義、不相立候樣之儀有之候而ハ不相濟候間、前以詳審ニ御示置御坐候樣仕度候事。

條約は平等たるべきこと

一外夷御條約、魯墨英ニ御差別有之候ハ如何、彼之請ふ所ハ、兎も角も本邦ニ

おゐて御許容可相成廉々御規定有之、夫丈ケ之儀を請ニ任せて萬國一般ニ御許容有之、定制之外ハ、萬國擧而相願候而も、御許容無之御國體ニ相成候半而ハ、必戰之覺悟も極り兼可申事。

二 安政二年十月十八日阿部閣老（老中伊勢守正弘）に被遣御直書

（一）この御直書も建白書類の原題には「嘉永六癸丑年阿部閣老に被遣御直書」とあれども、前掲第一號文書に說明せるが如く、嘉永六年は誤りにして、正に安政二年十月十八日のものなることと昨夢紀事に由つて明かなり。故に今これを訂正してこゝに掲書せり。公は十月十六日時局に對する建議（一）と、地震についての愚衷（六）と二通の御直書を水戸老公（徳川齊昭）に遣されたりしが、老公の回答頗る公の意に充たざるものありしが如し。故に公は更に十八日同趣旨の建白書を幕府老中阿部正弘に提出せられたり。是即ち本書なり。（美濃判十四枚）

（表紙上書美濃判）

覺

必戰は天下一般の認むるところ

愚衷

一兼而之御內話ニも當今之時態、必戰より外無之旨御申聞、將又水府老公書通中ニも、必戰之覺悟至願之段申來候。然ル處方今天下之具瞻、萬人之依賴、貴兄ハ水老公ニ歸し有之候處、右同樣ニ必戰之覺悟御至願ニおゐてハ、天下之人心も一統必戰を期し可申勢ニ可有之候處、指當り御當地すらも因循苟安之風習相替候儀も無之候て、合點不參處ニ候得共、退而深案之處小生輩迄專ら必戰を唱へ、必戰を相勸め候得共、弊藩之風習も亦御當地同然ニ而、實ニ當

愚衷

一 兼而御内話ニも當今之御態ハ必戦より外無之旨御申聞候
且又水府老公書通中ニおゐても必戦之覚悟ハ致し候様被下
来候然ル處方今天下之真勝算ハ假令戦争ニ不し
水老公之論ニ而ハ然し處ハ右同様必戦之覚悟ハ決致候ニ
おゐてハ天下之人心も一統必戦を致し可申筈ニ可有之候處
於當時ハ當地ニおゐても因循苟安之風習未相離候儀無之

必戰の誠なき理由

和親の條約を信ぜず却て必

惑し仕合ニ御座候。此理を推究候得て、小生輩口ニ必戰を唱へなから、心ニ必戰し誠無之故と慚歎し外無之候。就夫何故ニ必戰し誠意無之哉と致熟思候得て、畢竟不決斷より起り候事ニ候得共、右決斷と申も事理ニ於て決斷不致候半ゐて難相適故、及決斷候事ニゐ不及決斷義を決斷可致樣も無之候。此外寇一條ニ於ゐも、天保度打拂ひを被相止候被　仰出以後ハ、不及必戰國體ニ相成候事ニ候得て、如何ニ致候ゐも必戰ニ致決斷、必戰し覺悟ニて實以相成兼候。是と申ゐ必戰ニ不及時ニ當り必戰し備ニ及候故、徒ニ奔命ま而已勞役し、必戰し期を不待して國家困弊ニ至り候儀ハ勿論と存候。只豫備無油斷と申程し儀て、誰ニも心懸し淺深次第、甲乙共に支度て可致候得共、只今誰ありて必戰を決し、必戰し備を可致事とて不被存候。其子細て魯墨英し三夷と永世不朽し御親睦、此度御破談ニ相成候旨御示有之候ハヽ、如何まも必戰し時節到來ニゐ必戰し覺悟まも可相成候得共、當今ハ是ま反し、是迄ハいゐ成不測し變を生し候半も難計と致恐懼候夷情も、此度し御條約まよつて相定り、無二し御和親御取結ひし上て、一統可致安心旨被仰出候儀事理し當然ニ可有之候處、兩國し全權會議し上及盟約候條約て御信用無之、測量

戰の覺悟を勸む

先つ必戰の實を示すべし

船主之願望御斷迄よつて、内海へ乘入如何樣之儀出來候半も難計候間、必戰之覺悟を致候樣ニとの御趣意ニ而ハ、人每ニ御教諭有之候而も信用致候者ハ有之間敷と致恐察候。　乍憚貴兄水老公と以へとも右等之邊如何御覺悟ニ候哉、二百數十年之昇平必戰之事實拂地之時ニ候得ハ、必戰之覺悟を御勸誘御座候よりハ、必戰之實を御示し被成候方時務ニ的當可仕哉、右ニ付而ハ、大小名をして必死之地ニ勞し、必生之地ニ佚し候樣無之候半而ハ難相成、右勞佚之分判然さる御仕向ニ相成り候ハヽ、天下之士氣嚮ふ所を知り、安定迄も至り可申儀と存候。　此儀他ニ相求候儀迄も無之、近く微軀弊藩ニ躰認之上申陳候事ニ候。　已ニ大小名疲弊御救助筋追々可被　仰出哉之趣、過日來も御觸達等難有儀ニハ候得共、下地逼迫之事ニ候得ハ、拙家等ニ而ハ右御手當筋ニ而も別段有餘ニ相成候譯ニも無之故、夫を以必戰を期候事迄ハ至り不申候。　尤同し必戰必死とハ乍申、時所ニよつて天下之御裨益ニも相成、又ハ犬家同樣之事ニ而相濟候儀も可有之、されハ犬家之死を厭ひ、天下之御爲〆を存しハ逆和親御取結ひ之當年より、後來御破談ニ可相成哉之用意として、一ト廉之御奉公可致程之手當致置候儀ハ誰迚も出來不致、又

必戰の手段なき必死は犬死に同じ

公邊ニ被爲置候而者、諸家人數も召呼置候ニハ不及との御趣意ニも候得共、此儘ニ而ハ必戰之覺悟致候ニも以ことを、必戰之手段無之候得ハ、只必死のミニ候得共、必死ハ所謂犬死之死ニて、公私ニ取毫髮之益も無之、國許ニ指置候譜代恩顧之侍共も、一人として何之役ニも相立不申、右樣ニ相考候得ハ此節之大小名程誠ニはかなき身上ハ無之、匹夫ましても匹夫さけ之心力を盡し候者ニも相劣り候次第ニ而、實ニ覺悟も極り兼、痛歎之至ニ候。拙生如此ニ候得ハ、外ニ大小名も少々之異同ハ可有之候得共、大凡相替候儀も有之間敷、諸侯之通患此事ニ候。仍之在府之大小名事あるニ臨ミ、止事を得は義を守りて、必戰之覺悟を極め必死ニ處候而も、右樣心ニ飽足る事無之候得ハ、戰ふニも勝算無之、又死しても天下ニ益なき事勿論ニ候。乍恐

公邊ニ被爲置候而も、甚御心細き御成行ニハ有御座間敷歟と奉恐察候。されハとて　公私共心丈夫ニ候程人數召呼候樣被

仰出候ハヽ、是亦兩三年ましても天下之疲弊極り可申候。當今之形勢ハ必死當勞之道を以、大小名御使役ニ相成候姿故、却而生を貪り佚をねかひ、竊ニ憤

以上に對する慶永公の方策

參覲制度の改革

然さる事能ささるの勢ニ而、實ニ御大事之儀ニも可有之哉と恐懼之至奉存候。依之諸侯之勞佚を分ち候拙策左ニ相記試候。

一當時天下之諸侯を二分して隔年之交替ニ相成有之候處、先ツ十五年を限り四分して四年ニ一度之參覲ニ相成、兼而御定之持場相固メ、不安心ニ無之程之人數召連候樣之御規定ニ相成候ハヽ、三年在國中政事演武を專らまして自國之守衞を嚴まし、且又文學講究之餘暇ニて、山野之遊獵等を相催し筋骨を養ひ英氣を蓄へ、扨四年ニ一度之參覲ニハ、將卒共ニ必死を極め、治世平常之務ハ盡く致放下、一向防禦守衞之備ニ精力を盡し、惣而陣中同樣之心得を以致在府候樣相成候ハヽ、不令して華美奢麗之弊習も自然相止、在番中之入費も只今とハ相違必然ニ存候事。

但嫡子庶子とも國邑へ召連候儀、勝手次第可被仰付事。

一四年ニ一度之在府陣中同樣相成、諸侯禮式服制等之儀、御年限中夫々格外減省之御制度被相立、其以下も是ニ准し可申事、陪臣之分ハ不論尊卑、野羽織・立付・伊賀袴等着用、登　城之供さりとも同樣まて、主人主人々の年頭之禮も甲冑着用ニ而相濟候事。

諸侯の妻子を國邑に移す

一右ニ付而ハ、諸侯妻女も銘々國邑へ引移し可申事、先年及建白候通りニて、此表大小名ゝ屋敷、在府無之分ハ、留守之者兩三輩門番少々指置候迄ニ可有之事。

一在番ゝ大名まて旗頭を被定、小名を旗下ニ御附屬有之、一手ツヽ御分配守衞可被仰付事。

一在府ゝ大小名をして、御府内閑曠ゝ地ニおゐて四季ニ一度ツヽ、一手限りゝ人數操練可有之事。

江戸灣の防備

一右樣相成候ハヽ、武相房總御固場持ゝ四家ハ、勞役無間斷姿ニ候得ハ、是亦海軍旗頭ニ被仰付、海國ゝ小名御附屬有之、四年一度ゝ勤番まて海軍を督し、常ニ軍艦中ニ在て海城を相守候樣可被仰付事。

但四家海軍ゝ御備有之候得ハ、此邊陸地御固メゝ儀ハ小諸侯ニ被仰付、土着可被命事。

一品川御臺場持ゝ諸侯ハ、是亦炮臺守衞ゝ旗頭被仰付、麾下を御附屬可有之事。

但屬下ハ小諸侯ニ不限、御旗本並御家人等ゝ類ニ而も可然歟。

定府小諸侯のこと

一定府之小諸侯諸御旗本之類、惣而軍制ニ關係之向者悉く是を四分し、其一分をして輪流交番、一ヶ年ツヽ必死必戰之地ニ被指置、其三分ハ諸役御放免ニ而、專ら文學を講究し、武術を鍛練可仕旨可被仰付事。

但大小名初三年之休暇中、政事並文武之修治行屆キ、又ハ徒ニ安佚ニ耽り候類、精詳ニ御吟味之上、夫々御賞罰可有之事。

軍艦の製造

一軍艦製造之事兼而御沙汰も有之、如何樣軍艦無之候而者海防全備も難致、且夷虜及海賊、海運を妨け或者掠奪等之節抔も、當時之體ニ而者實に被成方有之間敷候得者、此御備之儀ハ一日も早く御完整願ハ敷儀ニ候得共、拙生如き瘠地之大名ニ而相考候得者、如何にも財用難續手關ニ及ひ兼候得者、甲乙ハ可有之候得共、大小名共多分逼迫之折柄故、此儘ニ被指置候ハヽ有志之向といへとも、容易ニ者出來申間敷候。

製艦費と其の財源

右ニ付而ハ外寇を禦き神洲を護候重器之故を以、日本全國之石高ニ割付、譬ハ越前國六十餘萬石、御料私領寺社領除地之差別なく、高百石ニ十金つゝ之課役を以、國所ニ應し多少之軍艦及製造使用之法も致習熟候樣、國々旗頭之大名ニ被仰付候ハヽ、越前國ニ而も六萬餘金を出し幾數艘之軍艦造出し可申候。　尤一時

に成功可致儀にも無之候得ハ、課金之儀も追々御取立まて可然事故、下民之難義ニ及候程之事も有之間敷候。如斯して沿海之諸國悉く軍艦を備へ、自國之守衛他國之應援ニ充、且定額を被立、爲御警衛江府近海へ勤番被仰付、前條海國之人員是ニ據て守衛を事とし、四季之操練ハ陸軍同様ニ可有之事。

但軍艦之儀、中國西國之諸侯へハ別而早速製造候様被仰付、在國之面々事あるよ臨んて、右軍艦を以

京師御警衛被仰付置候ハヽ、御手厚ニ可相成事。

一本文高割出金之儀、國之廣狹肥瘠も有之、已ニ奥羽邊と弊國抔とハ莫大之相違有之事ニ候得ハ、猶人別高を以御斟酌有之平等ニ有之度事。

右諸侯之勞佚を分判し天下之形勢を一變し必戰を期する之拙策ニ候。右之趣共御採用有之候ハヽ、他家ハ不知於小生ハ、祖先をも辱めは天下之手本ニも可相成程之御奉公ハ、急度可相勤と存詰陳述之事ニ而、傍觀紙上之空論虚策ニハ決而無之、自家丈ケ之儀ハ一々講究體驗之上之儀ニ候。小生如斯ニ候得ハ、列侯も同然と存候間、偏ニ賢考所希ニ候。將又假令拙策ハ御用ひ無之候とも、

異船の取扱方を示すべし

外交條約は平等な

大小名之儀ハ戰陣ニ臨ミ候而も、御奉公甲斐有之樣何とか御仕向ニ不相成候而者、只今之爲體如何迄も前途瞢然難得死然勢ニ候得者、體ニより不滿を抱き、事を左右ニ託し參覲を怠候樣之諸侯、追々出來可申歟と竊ニ致恐懼居候。何分此體ニ而者、他人ハ不知小生ニ於てハ豫め必戰之覺悟ニハ相成兼候。乍併不得止事持場等被　仰付、死地ニ爲御臨被成候ハヽ、一足も不去必戰必死をも可致、左樣致候迚決而天下之御爲ニハ相成不申候間、右等之儀兼而御斷申置候。小生如斯ニ候得者、外諸侯も同然之儀と存候。　何分當今之御時世ニ當り、必戰之覺悟出來候樣御仕向無之、徒ニ必戰を而已御勸誘御座候ニ於てハ、將卒をして空敷怏々不滿之地ニ斃さんとするの勢ニ候得者、如此形勢ニ而廟堂獨御安全を可被爲得理者有御座間敷奉存候事。

但前條之次第御採用ニ付而も、日本全國中眞ニ必戰之覺悟ニ相成候樣、公邊ニ被爲置候而御必戰御覺悟之實を以御示し御座候義肝要と存候。

一右ニ付而者、日本全國沿海へ異船渡來之節取扱方區々相成、御條約之御信義不相立候樣之義有之候而者不相濟候間、前以詳審御諭示被置候樣致度事。

一外夷御條約魯墨英ニ御差別有之候ハ如何、彼之請ふ所者兎も角も、本邦ニお

ろべし

早く和戰

ゐて御許容可相成廉々御規定有之、夫丈ケㇾ儀ハ請ニ任セて萬國一般ニ御許容有之、定制ㇾ外ハ萬國擧ゐ相願候ゐも、御許容無之御國體ニ相成候半ゐ。ハ、必戰ㇾ覺悟も極り兼可申事。

三　嘉永六年八月阿部閣老（老中伊勢守正弘）江ㇾ御書翰

り米艦渡來よりこゝに二閲月、其の國書を以て請ふところの通商許可の可否に對する答申書（四）（五）は已に八月六日提出せられしも、而かも尙幕府は因循未だ和戰を決するに至らず、爲めに海防其の他に於て時機を失せんの怖あり。是に於て公は再び書を裁して幕府に其の促進を建白せられたり。是は卽ちその書翰なり。（半紙判七枚）

先日罷出候節、段々ㇾ御懇諭にて粗致降心候得共、尙又申上度儀御座候故、冗雜不文ニハ御座候得共、愚存書取入貴覽候間、痴情氷釋ㇾ御垂諭希上候。

一此間御内話ㇾ趣ニ而、諸侯ㇾ建白相揃候上ニ而、御決定ㇾ被　仰出も可有

の何れかを決し因循時機を失することなからんことを警む

必戰と決すれば早く其の實を示すべし

大城の銅瓦を以て大炮鑄造の資に充

御座哉之旨、御尤之御儀と致承知候得共、退而倩相考候處、左候得ハ、いつれに來月にも相成可申と奉存候。諸侯之建議とても畢竟和戰之兩途を出申間敷、假令其餘ニ如何樣之儀申出候にもいたせ、於　公邊さへ必戰御決斷ニ御座候ハヽ、一刻も早く不被仰出候半而ハ、元來之御手後れ、彌以御手後れニ可相成哉と致恐懼候。乍併實ニ於　公邊御必戰之御覺悟に被爲在候ハヽ、御含蓄之御英氣何となく世上へも相著れ可申哉之處、今日ニ至る迄墨夷渡來以前同樣依然たる形勢にて、具足師之致繁昌候迄之事ニ御座候。右ニ付竊ニ致恐察候處、水府老公幷閣下等ハ必戰之御覺悟被決候得共、一體之廷議或ハ和或ハ戰、衆議紛然と相成居候事故とも奉存候、和戰之兩議交も行はれ、徒に歲月押移り、終ニ墨船渡來之期に至候而ハ、當夏も同樣ニて、血淚を揮ふて城下之盟をなし候より外ハ致方無之事ニ相成、誠以御大事千萬之事ニ候得て、必戰不服之族ハ立地に御黜罰御座候而成共、早々御英斷御座候而、御旗本を始勇鋭致作振候樣之御仕向有之、天下之御處置におゐても、都府之片端ゟ人家御取拂ひ、大城之銅瓦も御引剝き、大砲ニ御鑄造被成候程之大英斷、非常之御取行を御示し被成、戰鬪一途ニ被決候得ハ、士心いかてか安逸を偷ミ可

て急迫せる必職の賞状を示し以て士氣を鼓舞すべし

江川太郎左衛門に炮臺建築を命ずると共に早く海防に當れる元帥を立てるべし

防禦は一に元帥の謀略に基くを要す

申、自然と奮然興起可致儀と奉存候。唯々一日も早く被
仰出有之、將士〻心志相定候樣致度、摸稜〻間に時宜相後れ可申儀と深く御察申上候。貴慮如何。

一江川太郎左衛門へ被　命、炮臺建築〻繩張出來候由承及候ニ付、家來共〻內差越一見爲仕候處、夥敷御仕構〻由、海中すら右樣〻御次第ニ候得は、內地〻儀ハ猶以御嚴重可被　仰付儀ニ而、追々其邊の御運ひニ相成候哉と難有奉存候事ニ御座候。乍併兼而申上候元帥を不被立候半而ハ、御固メも御備へも魂入り申間敷候。元帥の謀略ゟ出候地取繩張ニ候得ハ、勝算も其內ニ備はり可申儀ニ候得共、先後倒に相成、何事も半表半裡〻際に相定り、夫を以元帥江指揮を被　命候而も、譬ハ馬乘に猿廻しを爲致候如く、得手違に相成、其人〻藝能も相著れ不申而已ならす、却て嘲りを招く樣相成可申候。是も馬乘を最負に存候者計りニ候得ハ、氣の毒にも可存候得共、過半ハ仕損しを待居候者も有之樣にてハ、內崩れに相成、萬端埓明事にハ無之候。馬乘を出候からは、金銀を惜ます好キなる馬を充行ひ、馬具飼方迄も十分に致し、爲乘候てこそ如何にも見事に可有之候。

防禦地點の決定は頗る重大事なり

夫故ニ防禦の策を被定候ニ付而ハ、第一番に元帥を被建、地理要害悉く元帥と共に御巡見之上、元帥之指圖にて、炮臺も何も相定可申ハ勿論に御座候。太郎左衞門之方策遺算ハ有之間敷、且已に御見分も御座候事ニ候得共、天下之公評ニ而異議ハ無之筈ニ候得共、何を申も數萬人之死生ニ相拘候場所柄にて、一ト通り之御普請所にも無之候得共、例之一日も早く元帥を被建、其上にも廣く衆謀を來とされ、毫も御遺策無之處へ御取極、猶又元帥諸閣老を初萬端御手輕にて、少も下々之迷惑ニ不相成樣、再三御巡見之上御治定相成候ハヽ、名實も正敷御安心之御儀ニ而、炮臺守衞之向も快心死守之志にも相成可申候。近日之御見分ハ如何之御振合而ハ不存候得共、御規形斗の御見分而已にて相濟候而も、何とやら御手薄の事にて、炮臺の儀ニ付不服之族ハ後言喋々敷、遂にハ不安心之事之樣に、議說行はれ候如く相成候而ハ、將卒之英氣も相挫ケ、不容易御大事にも可相成と奉存候故、不顧憚見越之事共申述候。此一擧之御所置方抔ハ、別而士氣之興廢に致關係候事にて、一通りならさる事ニ候得ハ、兎も角も一日も早く元帥を被建候而、此邊之儀共御委任可被爲在儀には有之間敷歟。且又炮臺も殊之外御大造之事にて、容易ニ御成功ハ

炮臺完備するも士氣揚からざれば無用の長物なり

諸大名は一に幕府の指導に由る

先幕府旗本の志氣を鼓舞するを要し徒に諸侯に命するは不可なり

無覺束哉ニも承り候得共、猶以御差急きニ相成候樣願ハ敷、大砲ハ別而之儀と奉存候。乍併大炮臺場は如何程見事に出來候而も、元帥擧らず士氣振ひ不申候半而ハ、所謂無用之長物に可有御座と奉存候。貴慮如何。

一諸大名之樣子を相考候處、氣を掛候向ハ武器取揃へ、大炮鑄造、家來共炮術爲心懸候位之事ニ而、夫ゟ以下ハ左程にも無之も隨分可有之候。其內必死を極め防戰一途に志候向は、定而可有之候得共、愚眼には見え兼申候。御旗本之面々ハ、猶以不相變柔懦にて、銘々着具之心懸さへ致し得不申向も有之哉に承り及申候。御膝本御固め、肝心之御旗本をヶ樣に遊惰に被指置、何そと申セハ諸侯を御遣ひ被成候而ハ、諸大名ニおゐても快くは存し不申譯合ニ御座候。右之次第ニ候得共、何分懸河之御勢ひニ而、御皷舞無之而ハ、中々以、來春之御間に合候樣にハ相成兼申候。是も一ト通リ之事ニ而被指置候得ハ、及出勢候處が上々之仕合ニ而、武器炮銃無缺乏相揃候迄にて、眞武之英氣ハ決而振興致間敷と奉存候。夫ニ付前文にも申陳候必戰之御覺悟被　仰出、元帥を被建、無二無三ニ御鞭策御座候樣願ハ敷存候事ニ御座候。此儘尋常之御引立にて、御事足り可申との御評議ニ而、來春に至り臨時警衛被　命、

御書面計の必戰ゝ被　仰出、實事と相成爭端相開候ゐも、衆力一致ゝ場合にも相成間敷、迚も立派ゝ防禦出來可申とも不被存、江府ハ御敗衂必然と奉存候。是社通諺ゝなま兵法大傷ゝ基と申如く、御安心ゝ御見詰も無之者を御賴被成、御取歸しも難出來御大事に相成可申歟と致恐怖候。不教民を以戰ふと申如く、將卒を棄殺し、
皇國の神民を面視に汚され候よりハ、願通り御許容にて、當座遁れの御平穩の方相勝り候程の事と奉存候。左樣ゝ事ニてハ相濟不申、御日數も立候ハゝ、必定夫々ゟ被　仰出も可有御座とハ奉存候なから、夫をも待兼指越候事共申上候段不惡御汲察被下、尚又御心腹ゝ儀も御垂諭被下、小生丈ヶゝ安心ニゐも出來候樣奉仰冀候。

八月

四　嘉永六年八月六日山縣三郎兵衞を以て牧野閣老（老中備前守忠雅）へ被指出


嘉永六癸丑年十一月廿日

扣

御答書

○是より先、七月朔日幕府は米國國書の和解を諸侯に下し、其の要求するところの通商許可の可否を諮問せり。この書状は其の答申書にして、即ち七月二十九日鈴木主税等家老本多修理と共に草稿を携へて國元より出府し、更に反覆商議の結果作成せられたるものに係り、翌八月六日山縣三郎兵衛を以て幕府に提出せしめられたり。尚建白書類には、答申書草稿控の表紙の裏に便宜書留め置かれたる閣老阿部伊勢守の演達を以て、別に「嘉永六癸丑七月朔日營中にて阿部閣老御演達」の題を掲げ、恰も他の建白書と同様に之を取り扱はれたるが、今之をこの答申書の初めに収め、以て草稿控の舊に復せり。（美濃判十枚）

（表紙上書）

嘉永六癸丑年八月六日山縣三郎兵衛を以
牧野備前守殿へ被指出

御答書草稿

扣

○右表紙の裏に書き留めあられたる阿部閣老の演説書左の如し

老中の演達

七月朔日御登城御居殘、黒鷺御杉戸際に而阿部伊勢守殿御演達、
此度亞墨利加船持參之書翰、於浦賀表請取候儀ハ、全く一時の權道に有之候間、右に不相泥、存寄之趣可被申聞事。
御黒書院出禮之面々へ
今度浦賀表へ渡來之亞墨利加船ゟ指出候書翰之和解寫二册相達候。通商之儀ハ是迄之御仕來も有之、御許容之可否ハ不容易事に而、實に國家の御一大事に候間、右書翰之趣意得と遂熟覽、一體之利害得失、後來之處迄も厚く思慮を被盡、假令忌諱に觸候事に而も不苦候間、銘々心底を不殘、見込之趣十分に可被申聞候事。

答申書

今度浦賀表へ渡來之亞墨利加船より指出候書翰之和解寫二册御渡、通商御許容之可否、一體之利害得失後來之處迄厚致思慮、見込之趣十分に申上候樣御達に付、存寄之趣左に申述候。
伯理璽天德書翰之趣に而ハ、二百餘年之嚴制を犯し、數ヶ條之難儀相願、就中彼

ペリー我國を以て無智の政體と稱す

有限の財物を以て無盡の嗜慾と交易するは衰弊日を刻するのみ

一時の權道とすべきにあらず

理呈書中ニ者使命を遂んか爲ニ兵威を挾ミ、或ハ御國法を以無智之政體と稱するゝ類、實ニ
本邦を蔑視をるゝ甚敷、言語道斷之至ニ而不堪憤激、全船粉碎して
神國之御武威を萬國ニ不被輝候半而者難相成秋与奉存候得共、退而方今之時態を致熟慮候得者、左樣ニも御取計難被成も無御據次第ニ而、誠以開闢以來未曾有之御困厄ニ而、御大事無此上与奉存候。 乍併彼の情願之儘御許容御座候而者、
神武之屈辱者不及申、風聲を追而萬國擧而及出願候ハヽ、 本邦有限之財物を以萬夷無盡之嗜慾ニ交易致候時者、衰弊日を刻して俟而く、若又三五年之程限を被立、彼か情願ニ任せ暫く英氣を避ケ被置、防禦全備を待而御斷ニ相成り、其屈を伸へ候半も亦一時之權道ニ而、當分適宜之御處置ニも可有御座候得共、當夏渡來之儀ハ、既ニ昨年与端々巷說も有之事ニ候處、別段御嚴備之御待受も無之、臨時書翰御受取ニ相成候事故、一時之御權道与ハ乍申、有志之徒ハ甚以殘念至極ニ存居候處、再御權道与被稱和親御約定等ニ相成候ハヽ、全く兵威ニ恐を彼か術中ニ落入候姿ニ候得者、奮勵之士氣も摧折ニ及ひ、御年限濟ニ至り、俄ニ

彼は我が國防の備なきに乘ぜん

和魂は固有の國風なれば或は事端を開かん

作新可致儀ハ一向無覺束次第と奉存候。萬一願之通御許容相成候ハヽ、欣然歸帆可致哉之御見込ニ御座候共、彼ハ既ニ内海之測量も相整ひ、浦賀海口を初一も恐るへき備なきを致親察候事ニ候得ハ、自然貪心相開け、再渡之節ハ御返答をも不相待如何體之振舞可致も難測、若又一段御許容御座候共、追々防戰之御用意有之を察して、其御備之完からさる内ニ兵端を起さん事を相謀り、英夷之中山ニ於るか如く猖獗を恣まし、御府内を横行し、又ハ商館を開かん事を强願致候抔、傍若無人之難題を申出候ハヽ、假令

公邊ニ而ハ御寛宥之御沙汰ニ相成有之事ニ候共、萬國ニ卓越せる和魂ハ固有之御國風ニ候得ハ、容忍ニ堪兼候處より事之敗きニ相成、釁端隨ふて相開け候半も亦必然之勢ニ有之、且萬國共ニ御年限ニ而御指免ニ相成候而ハ、則萬國之下ニ屈候と申物ニ而、汚辱ハ不及申、御斷ニ相成候節ハ數多之大敵一時ニ來寇之運ひニ相成、愈以防戰御難儀ニ可相成儀と奉存候。　右樣御屈辱を御忍ひ被

成候

御武德之衰弱を見透候時ハ、異國ハ扨置全國之大小名迄も如何見取可申哉ニ而、御國地之御政道も是迄之御振合ニハ立行兼、足利氏之末世同樣ニも可有御

寧ろ許容なきに如かず

必戰の用意をなすべし

大元帥を建て戰地を定むべし

江戸灣の防備に就いて

座歟と致恐怖候。左候得ハ何れの道ニも御許容無御座候方、御長策ニ可有御座と奉存候。乍併御許容無之時ハ必兵端ニ可相成ハ勿論ニ候得ハ、たとひ大軍艦幾十艘致渡來候共、御一戰の御覺悟を不被相極候半而ハ御斷ハ難被成儀と奉存候。右ニ付而ハ墨夷願の趣御取揚無之御斷ニ相成候間、明春渡來の節ハ必戰の心得ニ而共用意可致旨、列國の諸侯大夫士江被　仰渡、專ら防戰の術を御勉勵有之、天下向ふ處の心志を御治定御座候而、先ッ大元帥を被建、兵馬の權柄を御委任御座候義最第一の御急務ニ可有御座と奉存候。次ニ戰地を御定無之候而ハ、御廟算も可難相立候。仍之相考候處、戰地ハ全く御府内ニ可有御座と奉存候。右ハ近年來浦賀邊海口におゐて、追々砲臺御取建の趣ニハ候得共、砲礮ハ大船一艘の數ニも足り不申、剩小彈の物多く、炮臺も實用ニ適候ハ少く、又戰艦の御備も無之哉ニも承及候得ハ、四家の人數如何程嚴重ニ海陸を相固候而も、會而戰鬪の用にハ相成申間敷候得ハ、堅牢の異船海口ニおゐて遮止候儀ハ萬々無覺束儀と奉存候。且たとひ如何程の大礮ニても、彈の至候ハ僅十四五丁計ニ而、海口の中心迄ハ難相達由ニ候得ハ、海口の儀ハ軍艦御備ニ相成候より外、防禦の良策ハ有之間敷と奉存候得共、當時彼に對すへき軍艦無

御府內を戰地と定むべし

諸國海岸の警戒

儉約以て國防の充實を計るべし

之、海口之捍禦如何にも術計無之候得て、是非御府內に驀地に乘附可申、夫に付ゟて御府內を以其儘戰地に被相定候より外ハ無之候。然ル處當今之如く第宅民屋櫛比致居候ゟて、彼方より火攻之策を行ひ候節、避遁之餘地無之海岸之防禦決ゟ難行屆譯に候得て、先ツ沿海之第宅民屋、海岸より五丁計之處不殘御取拂に相成、要地を始として聯綿炮臺を築き、大礮數千門を鑄て是に備へ、彈藥を具備し、軍艦を造つて進擊之用に充て、戶籍を改めて遊手素餐之徒を生國に歸し、戶口を積りて軍糧を積蓄へ、必戰策定る之勢を天下之將卒に示し、又諸侯をして各國に就らしめ、

帝京を護衞し、

皇國を守らんゟ爲に、各國海岸之備を嚴まし、外寇之邊海を侵すを防き、江府之戰闘防禦之儀て、八萬騎之御旗本勢に、領分海岸無之諸侯を御人數に加へられ御備配有之、猶不足も有之候ハヽ、就國諸侯之內御人撰を以加勢被　仰付、大元帥是を統領指揮し勉勵練業セしめ、又內にハ大儉を修め給ひ、乍恐御一身之御衣食住て雨露飢寒を被爲凌候迄にゟ冗費を御減殺有之、後宮之奢侈を禁し、婦人之數を被減、土木之構營て

國防を完充して以てペリーの再來を待つに如かず

是に於て神洲の美名を全うせん

禁闕之外ハ假令日光山之
御宮たりとも、海防御全備無之内ハ御修覆も御見合ニ相成、是ニ准シ一切之治
務ハ悉皆御擲却ニ而、愈以防戰一途之御處置ニ天下之財力を傾け、夜を日ニ繼
て御修治有之候ハヽ、來年季春迄ニハ凡二百餘日之日數有之候得ハ、大方成就
不致儀ハ有之間敷、左候得ハ將士死守之志を固ふし、俟ことある之英氣振興可
致儀ニ而、異船渡來候共當年之形勢ニ事變り、整々之旗堂々之陣、沈深靜定犯し
難き眞實之御嚴備を以て御待受被遊、扨御返答之儀ハ漂民御撫卹之外ハ、願之
趣御取揚難被成段、非を咎めて夷情を激せは、威を憚りて我を屈せは、義理分明
公正穩當ニして、嚴然たる御取扱ニ相成候ハヽ、漸蔑視之夷情を挫き、暗ニ朶頤
之念を絶つて、
神洲之英武往昔ニ復し、萬古獨立之
帝國、地球上ニ冠絕せる之御美名も初而全かるへき儀と奉存候。然ルを年久
敷致染習候太平之餘澤ニ溺れ、因循ニ安んじ和戰之兩議決せは、荏苒日を送候
內異船再渡ニ及ひ、摸稜苟安之策行ハれ難き時ハ、彼益共備なきを熟察し、火丸
都下を焚き、霰彈將卒を斃れニ至り候ハヽ、土崩瓦解殆不可支、死屍如山、號泣道

征夷將軍の本務

路ニ滿候儀ハ眼前ニ而、擾亂之極と奉存候。　此時ニ當り先般之如く諸侯へ警衞を被　命候而も、防禦之全策御開示も無之事故、各一手限之働きと相成、全勝之儀ハ勿論、如何程多人數を國許ゟ召呼候而も、忠勇之士空敷亂砲之下ニ憤死可致ハ必然之勢ニ而、可惜可憐ハ不及申、果して天下衰弱之基と相成、遂ニハ降和之策行ハれ、夷虜之屬國奴隷と可相成歟と憤歎慷慨無止時、實ニ寢食も難安皇國之安危存亡此秋ニ限候儀と存詰候得ハ、唯々講和之妄議ハ一切御禁遏御座候而、今日只今ゟ必戰之　御廟算御畫定之趣急度被　仰出、元帥を被建候儀急務中之大急務と奉存候。　一日を空敷致候得ハ、一日之防禦相後候事ニ候得ハ、何卒非常之御英斷を以立地に御決評御座候樣乍憚奉專祈伏而冀。

公邊におかせられ候而も專ら夷虜之侮りを禦せられ、

天祖の皇統御動轉なく萬〻世ニ傳へられ、天下を泰山之安きに措かせられ候儀こそ征夷大將軍當今之御先務にて、

御祖宗にも御追孝も亦此上之御義ハ有御座間敷と奉存候。　海防之儀ニ付、今日之治務ニ亙り障碍御座候儀抔ハ、前書之御大事ニ御比較御考定御座候ハヽ、實ニ絲髮輕塵之儀と奉存候。　右ハ不肖淺陋をも不顧、躐等不敬之失言も不少

候得共、御一大事之譯を以御垂問之折柄、不忍默止、不殘心底十分ニ申上候事ニ御座候。猶委細之儀ハ別紙(五)ニ相認候得共、何分ニも必戰と元帥之二條ニおゐてハ、早急御評議之程伏而所仰希御座候。以上。

五　嘉永六年八月六日御答添書

この添書は、前掲第四號山縣三郎兵衛を以て老中牧野備前守忠雅に提出せられたる米國國書の要求に對する幕府諮問の答申書に添へし附屬の文書にして、海防・戰備・軍資金などの問題に關し、更に答申書の趣きを敷衍して、詳細に其の意見を具陳せられたるものあり。而して其の中に公の參覲交替制改革案の前提とも見らるべき論説のあるは大に注意すべきものならん。今現存せる草稿控により收錄せり。(美濃判十五枚)

（表紙上書）

嘉永六癸丑年八月六日山縣三郎兵衛を以
牧野備前守殿に被指出

御答添書草稿

扣

本紙不盡ノ處も御座候得共、其邊迄も認取候得ハ、不文愈以冗長煩雜ニ相成候ニ付、猶又本文ノ餘意を左ニ陳述致候。

江戸を戰地に選びたる理由

一江戸を以戰地に被定候樣と申儀ハ、御府内ハ第一彼ゟ火攻を施さんと欲するノ地、動さんと欲するノ根據ニ候得ハ、其火攻ノ謀を伐ち、其動さんと欲するノ根據を固定すへきノ先務ニ而、海防ニおゐて缺ゐからさるの一大事と奉存候事ニ御座候。其子細ハ海口之防禦手段無之候得ハ、是非内海江乘入

右様不異之変も此節ニ有之其道ニ至りて聴入候得ハ
不文無以冗長頗雑書取ニ御座候拙文本文之儀を
乍憚陳述候

一 江戸を以戦地と決定之儀ニ付御府内ニ而も一度火攻を
施さんと欲すると地動さんと欲するとハ根拠を存し甘心致し候
依之其勤さんと欲するも根拠を固定すへき先務と存候
扨而勤無之ニさるの一大事ニ存候得者其子細ハ
日本御深手浅く各自も無乏非同々ニ宗之入ハ其当り如何程

海岸の人家を立退かしむること

江戸生れ以外は其の本國に移すこと

可申、其節如何程御固人數被仰付、海岸に無透間並列致候而も、異船ゟ火丸を所々に飛し風ニ乘して致火攻候ハヽ、都下之億兆一時ニ及騷動、蹂躙雜踏無此上儀と可相成候。左樣相成候時ハ、防禦之人數迚も火煙に咽ひ、多勢に被阻、中々防戰處ニも有之間敷候。仍之海岸筋急度御嚴備ニ相成候ニ付而ハ、人家入交り之地ニ而ハ、防戰ハ難相適事ニ候得ハ、海岸より五丁計之處大名屋敷町家共悉く御取拂ニ相成、假令夫ゟ以內之人家致焚燒候而茂、海岸防禦之場處迄ハ波及不致樣相成有之候得ハ、心靜ニ防守ハ無手拔行屆可申儀と奉存候。尤大數之人家御取拂と申も不容易事ニハ候得共、當然之難儀を憚り此儘ニ被指置候而ハ、防禦之術も難施、防禦不全候得ハ都下ニも全きを得可たく、江府一敗ニ就候ハヽ、天下之耳目も一變致し、本邦も保全しかたき勢ニも可相成候。是等之利害を御商量御座候ハヽ、是式之儀ハ九牛ニして一毛を損候同前ニ而可有御座候。右御取拂ニ相成候人衆之儀、江戶產ニ無之者ハ悉く本國に罷歸り、又此表出生ニ而有力之徒、他所に致移居度段相願候ハヽ代地被下置、又夫等之手廻も出來兼候徒ハ親類等に御預被成、親類無之者ハ富商大賈に御預け、猶夫ニ洩候向ハ、御救小屋被相建御賄ニ相成候半而

者難相濟儀と奉存候。勿論當分者種々相歎き可申候得共、不時の火攻ニ逢ひ候ニ競へ候ハゝ、如何計の迷惑ニも無之候得者、御勇斷を以御取行ニ相成候ニおゐて、決而御指支の義者無之候。且眼前の悲歎を御憐愍ニ而姑息ニ御指置被成候而も、不遠して燒爛粉虀者必定の事ニ候得者、唯今平穩の内ニ轉遷被　仰付候儀者難有御仁政と奉存候。且又後來を思量致見候而も、萬國の勢ひ强キを凌き弱きを服し、通商も次第ニ相開け行候趣ニ候得者、此末迚も御國地ニ來舶出願等の儀有之間敷とも難申候得者、旁以今般の機會ニ後年の儀迄も、萬安の遠圖を御施置被成候儀、是亦當時の御長策ニも可有御座と奉存候。

芝增上寺に對する處置

其内三緣山の儀者甚氣遣ハ敷御場所柄ニ候得共、容易ニ御遷轉可被成樣も無之候得者、近傍海岸の守衞を嚴にし、且火防の御手當被成置候而可然御儀と奉存候。

元帥を建て軍政を布くこと

一元帥を被建候者、軍國兵馬の權柄者不及申、當時ニおゐてハ今日刑賞の御政務筋迄、一切御委任可被成御英斷御決定の上ならてハ、名實全からさ、威令難被行候得者、必勝の策も相立申間敷と奉存候。畢竟治平の時ニハ海防も政治の一端に相成有之候得共、國家の存亡ニ關係致候秋に相成候而者、至重

徳川一宗の内にて徳望兼備の仁を元帥に選ぶべし

當時の天下は軍政を以て治むべし

有志の建白も求むべし

一應和蘭

之大事無此上儀と相成候。當時殆亂世ニも可相成際ニ候得者、君臣共ニ力を軍務ニ竭し、心を籌策ニ委ね可申時節ニ候得者、御宗室之内御德望御兼備之御仁躰を元帥ニ被建、御軍事御政務一切御委任ニ而、唯々神洲之御武德地ニ墜不申樣、千慮萬考精力を盡候より外ニ政治も、事務も無之事ニ候得者、此御一擧、何より以大急務と奉存候。其子細ハ天下を治候儀、政事之大源たるハ勿論之處、當時之天下ハ軍政ならてハ可相治見詰無之候得者、其軍略を御掌握御統轄可被成大元帥を被立、必戰之機を天下ニ御示し、士氣奮然致興起候得者、必房謀ニも陷り不申、天下も治り可申候。元帥無之時ハ、當時之躰ニて可有之、當時之體ニ而因循時日を費候得者、風俗政治共陵夷頽敗ニ就き、一度外寇之侵掠ニ逢候ハヽ、一敗塗地ハ眼前ニ而、遂ニハ天下之傾覆ニ可及程之儀と奉存候得者、前條之通元帥を被建候上ニも、猶日本國中有志之建白を御求被成候ハヽ、定而神機妙算も可有之、如此衆知を合セて防禦之企策を被建候ハヽ、天下之勇鋭頃日ニ百倍すへきハ勿論之儀と奉存候。且又和蘭之儀ハ、萬國之事情ニも通達仕居候事ニ候得者、今般墨夷之書翰指出候一件ニ付、取捨成敗共ニ一應和蘭之意見御垂問御座候儀御有益ニ

の意見も聞くべし

ペリーに遣る返翰に就いての意見

防禦の方

も可相成、數年風說書も指上、且交易ニ付てハ二百年來御國制を謹守致居候事ニ候得者、御義理ニおゐても御尋御座候方可然御儀と奉存候。御返答之儀も、御都合出來候儀ニ候ハヽ、蘭船へ御託し、墨船出帆以前彼地へ相達候樣被指越候ハヽ、御義理合も御届き被成可然御儀と奉存候。尤其節ハ御返翰守護之爲、彼理も見知居候浦賀奉行之內一人被指添候も可然候半歟、且又御返答之內、漂民御撫卹之一條御許容御座候ニ付て者、彼方ニ蠶蝕之遠謀も有之候ハヽ、夫ニ付種々之妨害を生し、漂民ニ事寄セ年々歲々沿海處々江致來舶候樣之儀有之間敷共難申候得共、此儀ハ內地之御備さへ堅固ニ候得者、事ニ臨ミ候てハ取計ハ如何樣ニも致方可有之候。何分呈書中ニも、本國之民亦是五倫之內抔と、夷情すら倫理を正し人類憂憫之筋を以願出候處、夫をさへ御斷ニ相成候てハ、仁義之御國風共難申、且天保之度御憐恤之御觸達も御食言ニ相成、信を萬國ニ被爲失候てハ、是亦御國體ニ相拘り不容易御儀と奉存候得者、成丈ケ後患ニ不相成樣之御懸合ニて、御許容ハ可有御座儀と奉存候事ニ御座候。

一防禦之儀ハ廣大多端、中々以短才之拙者式不能議論候得共、存付候概略を申

法に就いて

構築は江川太郎左衛門と佐久間修理とに命ずべし

燭臺火鉢總べて大炮鑄造の資となすべし

火藥のこと

試候。前文町家等御取拂之上、海岸之要地を撰ミ炮臺を築き可申と奉存候。築方之儀者江川太郎左衛門、幷松代之藩士佐久間修理等江被　仰付可然と奉存候。要地之分成就以たし、異船も未渡來不致候ハゝ、追々ニ堤防を築き海岸江周匝し、大炮之儀者處々之炮臺ハ勿論其餘之堤上共ニ、何等之礮種を如何程被相備哉、御詮議之上五千ニ而も一萬ニ而も早々御鑄造可被　仰付、右ニ付銅材不足之儀も有之候ハゝ、都下一圓ニ無用之銅器ハ不及申、燭臺火鉢之類、たとひ日用缺へからさる物たりとも、木石ニ代へて用を辨すへき器材迄も銅類之分悉く御引揚ニて、時日を刻し御製造相成、炮架礮車右ニ准し御造製有之、彈藥器械十分ニ御取揃之上、處々之炮臺を夫々之御人數江御割賦有之、守衛被　仰付、尚有餘之人數ハ陸戰ニ被備、日夜操練可有之ハ勿論ニ候。

尤古風之軍制を改革し、不用の雜兵を省き、成丈ケ夫食之費を減し、精練之逞兵而已御撰用可有御座ハ不及申事ニ候。乍併火藥之儀者、御府内有合候計ニ而ハ不足可致候得者、何とろ急速御取集之御趣法無御座候而ハ不相適儀と奉存候。大方幾千萬斤之御入用と相積り、和蘭江御注文ニ而、外國より急

軍艦のこと

都下必戰の策に對する意見

々御取入ニ相成候も可然哉と奉存候。尤當時諸大名此地之御備ニ致所持居候大炮彈藥共、御買揚ニ相成候ハヽ、是亦少々之御間ニも合可申候。且又軍艦無之候而ハ、籠者之城を守るの如く、進擊突戰之術難施候得も、是非御製造不相成候半而も難相適事ニ候得も、是亦早々御取懸りニ不相成候半而も、御手後レニ可相成候。乍併新製之儀故、容易ニ出來申間敷候得も、大小五十艘計火藥同樣和蘭に御注文ニ而、急速御買入ニ相成候も可然歟。尤舟計有之候而も、兵士習熟不致候半而も、其用を爲し難く候得も、今日より初而船軍ニ可被　命分も、海船ニ乘習ひ波濤を凌き逆風を乘切候而も、平坦席上に座するか如くならしむへき儀と奉存候。此外防禦ニ付而ハ、百般之術計可有之儀ニ候得も、夫々堪能之仁ニ御委任有之、天下之御威勢を以誠精御取急被成候ハヽ、如何樣之大事とり共恐らく成就不仕儀も有御座間敷と奉存候得も、何分頭燃を拂ふ之御勢ひニ無御座候半而ハ、不日之成功ハ無覺束儀と奉存候。

一於御府內御必戰之策を被相建候ニ付而ハ、日本全國武備完整ニ相成、別而沿海之諸國も嚴備ニ不相成候半而ハ、

尾紀の兩華冑を以て元帥となすべし

海岸を有する諸侯には歸國を命ずべし

諸侯と共に皇國を守護せん

徒らに諸侯を在府せしむるは都下の人口を增して騷擾を倍するのみ

神洲ノ御國威相振ひ不申事ニて候。仍之先第一ニ
皇都守衛ノ元帥ニ尾紀ノ兩華冑を被相建、近傍ノ諸侯を御附屬有之、且領國ニ海岸有之諸侯ハ歸國被仰付、軍艦ノ製造も御指免し、何分自國ノ海防無油斷可被仰付儀第一ノ急務と奉存候。左候得ハ一ニハ都下ノ夫食を減し、二ニハ諸侯ノ疲弊を補ひ、三ニ事ニ臨んて日本全國ノ騷ニ可相成妨害を防き可申儀与奉存候。都下必戰ノ時ニ當り可被召集諸侯を、却而歸國被　仰付候儀者、表裏ノ儀ニ候得共、此時ニ當り諸侯と共に
皇國を御守護被爲成候大忠大公ノ御雄略を、天下ニ御示し可被成御儀と奉存候。當時ノ體ニ而者、日本半國ノ諸侯在府ノ姿ニ候得者、領國留守ノ家來共都下必戰与承候得者、誰壹人主人ノ身上を懸念不仕者ハ無之候得ハ、各先途を見屆候半と不召呼候而も先を爭ひ可致出府者必然ニ而候。左候時者全國ノ騷動ニ相成、都下ノ人數も多きニ過き、騷擾を陪し軍粮を費し、諸侯ノ入費も夥敷儀ニ可相成、且國々ハ總て空虚ニ可相成候。加之此表迚も多人數御手厚ノ姿計ニて、先般ノ如く一手々々ノ出勢ニ而御廟策も不致承知、人心渙散防禦ノ具も無之、勇士逞卒一途ニ死を爭候計ノ兵勢ニ而、所謂以卒與

之を要するに都下の警衞は旗本勢を以て之に充つべし

敵格言之如く、亂炮如雨死傷山を爲候より外ハ無之、正ニ是日本半國忠勇之士を一集して、夷虜之手を仮而致殺戮候も同然ニ而、如何ニも難忍事共ニて萬々一得も無之候。畢竟都下之御警衞ニハ、數萬之御旗本勢有之事ニ候得ハ、節制致完備候ハヽ、御府内海岸之守衞ニおゐて御不足之儀ハ有之間敷候得共猶又御譜代衆之内領分海岸無之諸侯を被召加、其上ニも國持衆之內兩三輩御指加へ被成、領國之守護ハ隣國隣領ニ後援被　仰付候ハヽ、所領危殆之顧念も無之、十分之御嚴備ニ可相成儀と奉存候。尤諸大名之儀ハ、兼而操練致置候人數ニ應し、夫々之御場所御割賦有之、御場所附之器械は火炮を初惣而御渡ニ相成候樣無之候半而ハ、國元と此表と兩途之備向ハ難相整儀と奉存候。又御府內防備向之義ハ、御廓廻りも同樣之儀ニ而、公邊におゐて御完整ニ可相成儀ハ當然之御儀と奉存候。加之御加勢人數之儀ハ、軍粮之儀も、公邊ゟ御取賄に不相成候半而ハ、平生と違ひ多分之人數指出置候事故、是亦兩途之失費ニ相成候而ハ國力疲弊ニ及ひ可申儀と奉存候。且又在國之諸侯留守屋敷之儀も、如何程小勢ニ而も還兵指置候樣被　仰付置候得ハ、事ニ

大名の妻女をも歸國せしむるに如かず

臨ミ一廉ミ御用便ニ可相成儀と奉存候。

一諸大名妻女ミ儀も、當分領國江不被指越候半而て、必戰ミ　御策ハ難被相建可有御座と奉存候。　右て諸大名共、治世ミ流弊ニ而多分ミ婦人召抱置候事故、事ニ臨ミ候而狼狽敗亡可致儀故、其邊ミ手當方も面々、不心懸置候半而ハ難相成事ニ而、夫ニ付而ハ相應ミ人數も指添不置候半而も安心も難致、ゑとひ如何程手當方致置候而も大亂ミ中江婦人を引纒ひ致周旋候儀て不容易次第ニ而、體ニより如何成耻辱ミ儀出來致候半も難計事故、此儘ケ様ミ危地ニ被指置候而て、不安心ミ餘り何とやらん　御仁厚ミ御所置とて、不相心得様ミ處より人心離散ミ端ニ相成候而て、是亦不輕事柄ニも候得て、唯今靜謐ミ内當分領國ニ指置候様被　仰出候得て、右等ミ顧念て無之、且て奢侈華麗ミ源を塞き、疲弊ミ一端を救ひ可申儀と奉存候。　平生とて乍申、不益ニ夥敷糧米を費し、且其筋指向置候役人も不少、武邊ミ妨ニ相成候儀萬々ニ候得て、旁以當分ミ處國住居不被　仰付候半而て難相適儀と奉存候。

諸御住居に就いて

一諸御住居ミ儀も、

公邊江御引受、當分甲府御城江御移住ニ相成候儀可然と奉存候。　諸大名ニ

江戸灣外の防備と江戸に糧食を蓄積すること

おゐて貴重之御方を御預り申上候儀、如何ニも懸念至極之事ニ候得ハ、此儀ハ是非共一段之處
公邊江御引受ニ相成候樣仕度儀と奉存候。

一必戰御策相定り、彼方之願御斷ニ相成候ニ付而ハ、たとひ即時之戰鬪ニ相成候程之儀ハ無之共、海口以外豆相房總之海面ニ出沒し、海上之通路を絶候儀ハ必定ニ而候。共節唯今之體ニ而ハ、都下數月ならすして飢餓ニ及ひ可申事ニ候得ハ、先ツ都下ニ致輻湊候士民之人口を量り、夫ニ准し兩三年を支へ可申程之糧米鹽噌を初、凡人之喰ひて活くへき物を夥敷御蓄積可有之儀と奉存候。是も要害之地を御撰ミ、御貯ニ不相成候半而ハ、不慮之難事も到來可致儀と奉存候。

江戸の遊民を諸國に移して農業に就かしむべし

一都下空手之遊民夥敷事ニ候得ハ、戸籍御改正有之、他國ゟ來住之者ハ悉く生國江御返し被成、たとひ御府内出生之者たりとも、商賈之外ハ田舍江被指越、農業ニ就候樣御世話有之、何分不益之戸口を減し、食を足し候御所置無御座候半而ハ難相成と奉存候。

伊豆七島

一伊豆七島之儀ハ、攻守之軍艦無之候而ハ、御持堪へ之儀決而六ケ敷可有之候

得共、其儘被指置候而ハ、夷人掠略可致ハ眼前之事ニ而、七島之居民悉く本地ニ移し、民屋を取拂ひ井を埋め赤地之無人島となして、取捨共彼方ニ任セ候方可然と奉存候。但移民之儀ハ、近國之領主地頭江御頒ち御預被成、罪人之儀ハ、輕き者ハ徒刑と致して軍役ニ遣ひ、重き者ハ佐州江被遣可然儀と奉存候。

一右條々ニ就而ハ於

公邊數千萬金之御入費可有之候得共、此儀ハ定而非常御備金も被爲在、御指支之儀ハ決而被爲在間敷候得共、此度之儀ハ二百餘年太平之恩波ニ浴し、金銀之息を以產業となし、豪富諸侯を傾候大坂之大商共之積蓄置候金銀、分限ニ應し御引揚ニ相成候ハヽ可然と奉存候。惣而此度及建白候件々之內、繁盛無比之江府を戰地となし、居民を移し遊民を逐ひ、戶口を減し蕭條之境となし、或ハ富商之膏腴を絞りて用途ニ當らるヽを初、殘酷嚴急之所置ニ而、平世ニおゐてハ尤忌憚すへき條々ニ御座候得共、古今時運之衰替ハ前車之覆轍も有之、今更不及申事ニ候得共、人情治安ニ慣れ將士柔懦ニ落入、因循を專らとし苟且ニ安んし、今日之艱難を忘れて將來之禍害を防かさるより、事起

候儀ハ昭々灼々ニ候得共、乍恐今ノ儀も、大敵前ニ臨ミ衰運後ニ迫り候御時節と奉存候處、依然として太平ノ舊格を逐ひ、瑣々たる儉政を以此大難ニ當らセられ候御事、萬々御不覺悟ノ至と奉存候ニ付、不堪憤懣赤心を吐露仕候事ニ御座候。竊惟ニ

神州萬古以來外國ノ侮慢を不受、就中

神祖御創業御初ゟ痛く外國ノ妨害を恐れ給ひ、寛永ノ隆治盛政遂ニ通商を禁絶し給ひ、御武徳を宇内ニ輝かし給ひし以往、外寇股栗屛息して敢て近海ニとも不近寄候處、近年至而往々覬覦ノ醜態を見し、遂ニ今般ノ輕蔑を被爲請候儀恐多くも

前將軍様御一世ノ御恥辱ニ而、誠以言語道斷ノ御儀御座候得ハ、深く

神祖在天ノ

神慮を御體認被爲成、激發奮勵日を刻し時を逐て御創建有之、

前將軍様地下ノ

台慮を安んセられ、御在世ノ御恥辱を被爲雪候儀當今無比ノ大御忠孝ニ而又難被棄置當前ノ御急務と奉存候得ハ、先ツ此一大難事を御完整無之内ハ、

千緒萬端御放下ニ而、只管海防ニ天下之力を不被爲盡候半而ハ難相濟御時節と存詰候得ハ、今日ゟ始而夫々之御所置御座候樣奉懇祈候。 彼是御評議之内來月共相成候而ハ、最早御手後レ切ニ相成、何樣之善者ござり共奈何とも難致次第ニ可相運と奉存候ニ付、疎漏杜撰之建白不敬之文段も萬々ニ而多罪遁候ヽ處無之候得共、御垂問之折柄覆藏仕候も不忠之至と奉存候ニ付、不殘心底陳告仕候事ニ御座候。 以上

六　安政二年今般地震ニ付愚衷

[illegible]この建白書は、安政二年十月二日に突發せる江戸の大地震を契機となし、さきに提出せる嘉永六年八月六日の答申書(四)に於て建議せるところの國防の整備と、及びこの書と共に更に建白(二)に係れる參覲交替制の改革とを即時勵行せられんことを幕府當局に迫促せられたるものなり。 從つてこの建白書は、前掲第一號第二號の兩文書に各附屬すべきものにして、即ちこの建白書中に「別紙及建議候」とある別紙は即ち第一號並に第二號の文書を指し、「一昨年も

及建白候通り」とある一昨年の建白書とは即ち前掲第四號の嘉永六年八月六日の答申書並にそれに添附せられたる第五號の「御答添書」との兩文書に當れるなり。參看を要す。今現存の控書に據る。（美濃判八枚）

（表紙上書）

覚

今般地震ニ付愚衷

地震は是天戒なり

一　近年天變地妖荐臻し處、今般も既ニ都下ニ相迫、實ニ駭愕必天戒と奉存恐懼

今般地震ニ付愚衷

一 近年天変地妖荐臻シ、変モ今般ニ至テハ既ニ都下ニ於テ逼実之
程、将必天戒ト奉存、恐懼戦兢不堪奉存候、就テハ第一
可恐ハ外寇ニ而、万一其儘ニ候而ハ変災無之後ニ於テ武備
御手薄ニ相成候而ハ可被及御大変付而ハ其節ニ依リ候而ハ御用
公辺ニ而ハ只今迄 大樹様御儀、霊鑑之御遊通ニ付
保護之通ヲ御附縮相成候ニ付、一切従来之補理筋之ニ 西山

武備を先にして修覆を後にすべし

戰競不啻奉存候。就ゟも第一可恐ハ外寇之一條ニ御坐候處、兼ゟ手後レニ相成候武備、彌增撓屈可致与深憂此事ニ御坐候。依之此時節

公邊ニ被爲置候ゟも、大城御修覆を初過日御觸之通り、御取締場所之外一切御取補理無之、兩山

御廟所等御破損所も、常體之御修覆ニ相成候ゟハ、却ゟ御追孝ニも相成間敷哉と奉存候間、別段

御名代を以被　仰譯有之、當時之處武備御整ニ相成候迄ハ、至ゟ御假繕ニ被成置、此御儀すら如斯ニ候得ハ、其他治世之御格式ニ關り候儀ハ、御年限を以萬般都ゟ御擲却、彌一途ニ御必戰之御所置ニ相成、扨諸侯伯へも嚴令相下り、必戰之覺悟御奬勵ニおゐてハ、三夷ハ御條約も相極候處、墨夷又々測量等之儀申出、此末之儀も如何成願望可有之哉、追々萬國輻輳可致形勢と相成候事ニ候得ハ、其内にハ强ゟ非分之義を申立、或ハ亂妨ニ及候ゟ難計、加之今般古今未曾有之烈震ニ而殊更御不安心之儀ニ付、於諸侯ゟも

公邊御同樣必戰之覺悟相極、家作等之儀御年限中ハ大身之面々たりとも、陣屋同樣雨露を凌候迄ニ取補理、精々入費相省キ、武備一偏ニ相成候樣嚴敷被

この際参覲交替の制を改むべし

仰出無之候半ゐて指當り家作等ゝ費用ニ疲弊いたし再武備御引立ゝ期て有御坐間敷奉存候事。

一別紙及建議候諸侯伯交替ゝ儀、此節ゝ折柄被仰出候ハヽ最可然奉存候。　就ゐて過日御觸達有之候地震并火災ニゐ、格別難儀ゝ面々て勝手次第御暇可被下置旨被仰出有之候得共、願無之分も夫々御撰ゝ上、當年在府半分當節早速御暇被　仰出、猶來年參府ゝ面々も半分參覲御指免相成、來年迄在府ゝ分ハ夫々持場等被　仰付、別段ゝ御手當被成下、國許より人數召呼嚴重ニ相備候樣被　仰付候歟、又ハ當時何れ屋敷長屋向キ等大破ゝ事ニ候得て、在合ゝ人數ニ御旗本勢被指加、兼ゐ調シ合セ、必戰ゝ覺悟仕置候樣被　仰出有之候樣仕度候事。

軍艦製造の儀に就いて

一別紙及建議候軍艦製造ゝ儀て、急務中ゝ大急務ニゐ、日本全國士民ゝ力を不合候ゐて出來不仕儀と奉存候。　當節早速何とぞ被　仰出無之候ゐて、諸侯伯も窮迫ゝ折柄、今般邸宅破壞等ゝ入費を國民ニ課し候樣ゝ爲體ニゐて、其上軍艦製造ゝ儀、全國へ難被　仰付次第ニ相運ひ可申哉と奉存候。

諸御住居

一諸御住居ゝ儀も、此御時節ニ被准、御衣食住共御省略、御召使婦人て、非常ゝ節

及び召使の婦人を減少すべし

國邑に移したる妻女に就いて考慮すべし

妻女の佚樂奢侈を嚴禁すべし

御足手纒ひニ無之樣三分一計りニ被減、男子之分も御引移之御當坐而已ニ而、御附人被相止、兼而被　仰出之通り、代々妻女之通り相心得萬端御手輕ニ相成候樣仕度奉存候事。

但諸家御住居有之分ハ、入費を不厭尊崇之振合故、國計盡果武備も難相整振合ニ候處、此節柄老女を初婦女子ハ、只地震をのミ恐怖戰兢罷在候事ニ候得者、如何樣之被仰出も行ハれ易き勢と奉存候。

一妻女國邑へ引移し候儀、別紙及建議候得共、尚又此頃ニ至り世上之樣子觀察仕候得者、外寇も追々御當地へ目指油斷難成折柄、今度之地震等ニ而柔弱之輩ハ愈膽を潰し、是迄之江戶好も俄ニ國好ニ可相變勢之處、參覲間遠にて妻子共國邑ニ居住と相成候而者、却而佚樂ニ耽り武備ハ愈相弛ミ、只參覲を厭候樣相成候樣之儀者有之間敷哉、深考仕候得者人情之趨向爲難計候間、此意味御熟考被下候樣仕度奉存候。自然妻子之儀者此儘ニ被指置候事ニ候ハヽ、衣食住之嚴制被相立、都て奢侈を被禁、主人在國邑中ハ〆切同樣之振合ニ被仰出候樣仕度奉存候事。

但衣類之義、過分之地合者勿論、第一ニ者縫物幷過當之染模樣等、其織元染

江戸の遊民を歸農せしむべし

元迄も嚴重御指留ニ相成候様仕度奉存候事。

一　一昨年も及建白候通り、都下之遊民夫々故郷へ歸農之一條、此節大機會と奉存候事。

右等之條々御處置も、兎角因循苟且之人情乘而行ハれかたき儀も、今般之大變未人心洶々たる折柄、却而行ハれ易き勢ニ可有之、若荏苒時日相移候得ハ、自然依舊之常態ニ復し可申ハ必然ニ付、早速
御英斷、舊習御一新、轉禍爲福之御處置千萬奉仰望候。此餘愚考之條々も有之候得共、當今之急務ニ而無之儀ハ追而可及陳告奉存候。以上

七　安政元年十二月阿部閣老（老中伊勢守正弘）へ被差出御書

（い）この御書も建白書類の原題には「安政二年乙卯春側用人中根靭負江戸表へ指下し阿部伊勢守へ差出控」とあれども、昨夢紀事によれば安政元年十二月十三日の御書にして、使者は中根雪江にあらず、其の日の晩出發の飛脚なりしが如し。故に今之を訂正してこゝに掲書せり。

按ずるに安政元年は皇居の炎上、兩度の大地震などありて、人は皆天災地妖に畏怖しけるに、更に其の九月十八日には魯國使節プチャーチンが艦隊を率ひて大坂灣に進入し、大に京都を騷擾せしめたり。この時公は就國中なりしを以て、直に其の九月廿六日目付千本藤左衞門に上洛天機を奉伺せしめ、尋いで越前と京都との地理の便宜を考へ、且つ徐に當時天下の情勢に鑑み、親藩なる越前が京都警衞の任に當らんことは、亦宗家德川氏の爲にも謂れなきことにあらざると決意し、之を老中阿部正弘に建言して以て幕府の許可を得んとせられたるなり。

玆に採錄せる御書は公の直筆に係り、言々句々悉く肺腑より出で、敢て辭に雕繪なきといへども、其の皇室に對し給へる忠誠の熱血は、淋漓として自から其の間に迸しるの觀あるのみならず、擡頭缺畫措辭の頗る謹嚴なるは大に注意すべきなり。(美濃判十六枚)

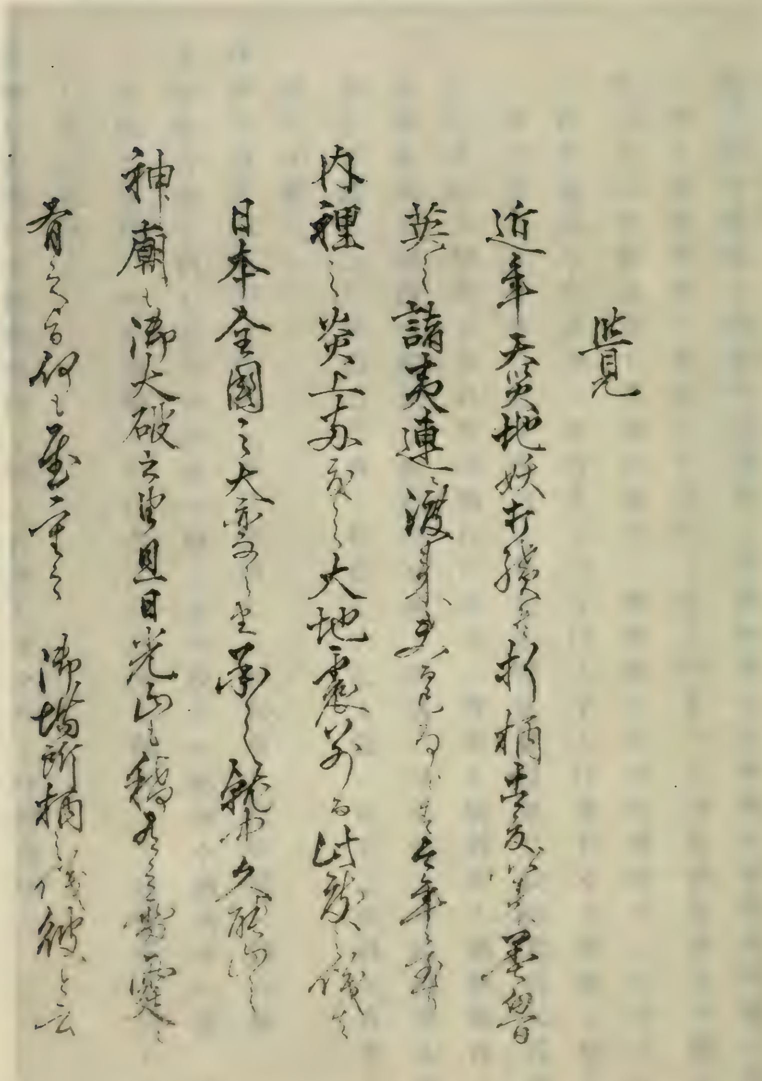
（表紙上書）

覺

安政元年四月六日皇居炎上し六月五日近畿に十一月四日豆相駿遠に並に大地震あり

覺

近年天災地妖打續候折柄、去夏以來墨魯英之諸夷連ニ渡來、夫而已ならす今年ニ至り
內裡之炎上、兩度之大地震、別而此度之儀ハ日本全國之大變之由承之、就中久能山之
神廟も御大破之由、且日光山も稀有之雷霆ニ有之旨、何も至重之　御場所柄之



覚

近年天変地妖打續候折柄去寅以来異国
並ニ諸夷連々渡来いたし既ニ当年ニ至リ
内裡ニ炎上有之且又大地震等ニ而武蔵之儀ハ
日本全國之大[illegible]ニ而[illegible]事ニ候處[illegible]
神廟ニ御大破之由且日光山ニも稀なる大變之
有之候何も悲歎之至ニ候　御場所柄ニ付御触之云



安政元年九月十八日魯國使節プチヤーチン大坂灣に入る

安政元年九月廿日彦根藩京都警衛の手兵を增加す

儀、彼と云是と云如何成　御厄運ニ被爲當候御事歟と憂患恐懼ノ至ニ御座候。素ゟ無妄ノ禍變兆朕、淺智ノ可測知事ニ而無御座候得共、指當り外寇ノ一件ハ、形迹指見へ候儀ニ而、當時ノ姿ハ御寛大ノ御取扱故、彼亦平穩ノ趣ニ候得共、元來數萬里ノ波濤を凌き、　御國地を目指致渡來候ニ付而ハ、いつ迄ニ深き姦謀可有之事ニ候得ハ、何分片時も早く待事有るノ御備ノ儀ハ申迄も無之、此儀ニ付而ハ、去年來追々愚衷及陳告餘蘊無之候得共、尚又近來ノ勢を以及熟思候處、去夏以來墨船江戸近海へ渡來ノ儀、將來ノ禍胎無此上、加之、先頃魯船大坂湊へ碇泊ノ儀、恐怖至極ノ次第と奉存候。畢竟夷情大坂ノ膏腴を思欲いたし候而已ノ事ニ候得ハ、夫迄ノ儀ニ可有之候得共、自然日本ノ地を中斷し、
京畿ニ逼候遠謀等ニ候ハヽ、誠以無極ノ　御大事と被存候。然ル處
京都御警衛ノ儀ハ、昨年井伊家へ被　命、今般又々郡山小濱其外へ被　仰付、御手配り被爲　在候御姿ニ候得共、江戸近海ノ御固メニ比候而ハ、同日ノ論ニも無之、且竊ニ
京師ノ風聞を承候處、夷虜ノ儀ニ付而ハ、兼々殊ノ外被爲惱

安政元年九月廿三日朝廷には魯艦の大坂灣進入により國安を七社七寺に祈らしめ給ふ

京畿關東其の間百餘里を隔て臨機の變に應じがたし

叡慮、於
朝廷も
伊勢八幡之祖廟を初、御祝禱之
御至誠を被爲竭、外攘之謀略も毎々關東へ
勅問有之候得共、被爲安
宸襟候程之　御答も無之、因循年所を經、御警衞之御手配も無之內、此度之渡來
ニ而一旦ハ雲上も騷ヶ敷事ニ有之候由、且又近年江戸
御本丸炎上之節も、　御經營御指急き、不日之御落成ニ相成候處、
內裡　御造營之儀も、今以御取掛り無之ニ付而も、彼是雜說も有之候由、元より
街談巷評、一向取るニ足らさる儀とハ存候得共、假りニ此說ニよつて申試候
ハヽ、
京畿關東百餘里を隔て、臨機應變之策を施しかたく候へは、萬一夷虜東品海ニ
逼り、西大坂を襲ひ候ハヽ、
本邦ノ形勢立地ニ分裂し、關西諸侯之心兩端を持し、或は事を左右ニ託し、兵
を自國ニ斂めて天下之大勢歸する所を察し、或は旗を

關東に事ありとも京畿だに磐石の如くなれば本邦は已に安全なり

京都の御警衛は一に大義に係る

京畿ニ建て、尊
王之義を唱へ候時ニ至り候ハヽ、西國中國之侯伯
帝京之動亂を看過し、數百里を經て馬を　關東へ進候者ハ、十ニ一二を得ると
かるへく候。乍恐　征夷之大號一度他姓ニ遷り候ハヽ、御威令爲今日之
如くニて有御座間敷候。伏惟萬一關東ニ事ありとも、
京畿磐石泰山之如くニ候ハヽ、本邦惣崩れニ不相成間敷、御地何程御嚴重ニ
候共、
皇阯壹度動候ハヽ、　本邦ハ瓦解之勢ニ可有之と實ニ戰兢寒心之次第ニ御座
候。左候へハ方今
京都御警衛之儀ニて、大義ニ係る處勿論ニて、時勢ニおゐても又十分御手厚ニ無
之候而御大切之御儀と奉存候。右ニ付而憂慮之餘り心緒多端如湧ニ
ハ御座候得共、歸る處ハ皆以追々及陳述置候外ニ出不申、兎角非常之時運ニ
被爲遭候而、又非常之御所置を以、上ハ
叡慮を被爲安、下ハ天下之人心安堵固定致候樣之御計畫、今日之大急務ニて、左
樣無御座候半而難相適　御時態と奉恐察候。尤此上追々被　仰出候御

越前と關東とは其の間遠隔し急變に應じがたし

儀にも可有御座候得共、例之婆論躐等失言之罪ハ幾重にも御宥恕可被下候。扱天下之公論ハ前文之通りニ候得共、又退而自己之進止歸宿を致思慮、何分にも此節一廉之御奉公可相勤覺悟無之而ハ、事ニ臨み狼狽必然ニ而、御地急變之心懸ケ第一之儀とハ存候得共、御承知之窮家にて、此末御地ニ應變之備へ可致置國計にも無之、其上夷情遠大之黠計にて、緩々徐々遂ニ志を果候手段ニ候ハヽ、徒らに半治半亂之奔命ニ行疲れ、一大事之節に臨み、一敗塗地再擧振ひ難きに至るへきハ必定ニ御座候。されハとて萬一關東ニおゐて事起り候節、在府ニ候得て不取敢有合候人數召連候共、誠ニ僅々たる小勢にて、見附壹ケ處も慥ニ持怺らへ可申とも實にハ不被存、此處ニ至り憂悶苦惱殆相極り申候。尤義を重んし死を輕んし、陣頭ニ屍を曝候ハ素ゟ當然之事ニ候得共、徒らに共死然を潔く致候迄にて、果して天下ニ益なきの遺憾ハ萬々ニ御座候。左候迚、國許ゟ人數召呼候共、急速之用にも難相立、たとひ不指急候共、大變ニ至り候而、驛路之運送今日大平之時之如くにも有之間敷候得て、軍器兵糧之輜重搬運、悉く一國之夫役課役を以可取計事ニ候。左候へハ所謂軍行五里にて、數十日を經ずしてハ東着爲難致、萬人數十日を支候糧食

供給之計事出る處を知らさ、半途ニして困難極り、空敷餓死之外ハ有之間敷歟。よし又辛らくして及東着、一戰打勝候共、再戰之見詰曾而無之、將卒一擧して倒れ、一國困極ニ就候迄まて、更ニ天下ニ益可有之とも不被存候。出軍之儀ニ而ハ、此節專ら軍制改正取調中ニて、遠地出勢之計畫ハ殆當惑罷在候折柄故、前文之難儀ハ實ニ眼前指掌之心地ニ候へハ、變ニ當り百里を隔候領國ゟ、人數召呼候与申儀ハ、名のミまて、實事ニおゐてハ當今決而取計兼候儀まも可有之哉と被存候。假令大平之今日、宿次人馬無指支時節ニ而も、一戰も可仕と存候程之人數、國許ゟ召呼候儀ハ中々以不容易大費まて、夫限りま國計盡果可申勢与被存候。是も國許ゟ到着、無程及戰鬪、運命之開達否塞を決候事ニ候得ハ、兎も角も召呼候所詮も有之候得共、仕出しさる事もなく、安然束手旬日を經候樣ニ而ハ、窮家ハ不戰して亡滅ニ及ひ候より外ハ無之候。右樣致考量候得ハ、何分在府中、應變之御奉公可相勤見詰ハ曾而相立不申、又在國中關東之變を承り、致出立候歟、又ハ被爲召等ニ而、國許人數召連れ打立候運ひニ相成候而も、前文同樣之次第ニ而、十ニ八九ハ中途ニ而窘迫羸憊必然ニ御座候。右等之譯ニ候故、於御地之忠勤と申セハ、唯一命を抛チ一身を

京都の警戒は外寇の和戰に不拘嚴重を要す

紀伊藩は京畿の御警衛に適せず

越前藩畏れながら皇都の御守護に當らん

越前と京都とは地理に便なり

致候より外ハ無之、畢竟匹夫同様ニて、國持相應之御奉公と申而て、可相勤算無之、殘念至極歎息之次第ニ御座候。　仍之反復及論議候て、前文

京師之儀て、外寇之和戰ニ不拘、只管御嚴重ニ不被成置候半而て、於他家親衛之權柄を窺覦いたし候様相成候ハヽ、御大事至極之儀と被存候。　然ル處

京畿近傍ニ御家門之諸侯御手薄ニ有之、紀藩之儀ハ事あるニ臨んてハ退而守らさる事を得さるの國勢ニ候得て、

京畿之御警衛ニハ難相適可有御座候歟。　就夫私論を去つて他方及評判ニ候ハヽ、拙藩之儀不勝手ニハ候得共、家柄ニおきてハ他ニ讓るへくとも不被存候得て、是を

皇都之御守護ニ被命、豫而一手之人數も指出置候程之儀ニ相成候得て、今ニ比候而て御警衛向も御手厚ニ而、天下之御爲ニも可然儀とも可申歟。　又是を私ニとり相考候へて、領國方路程も近く、海運之便りも宜候得て、

京都御用之儀ニ候ハヽ、國主相當之御奉公も相勤まり可申哉ニ被存候。　乍併豫而人數相指置候程ニ、御嚴重被　仰付候儀ニも候得て、從來之逼迫故、此儘之躰ニ而て夫而爲ニ疲弊相窮り、中々御奉公處ニハ無之、右様之御仕向ニ相

若し御警衞の命を蒙らば大名らしき忠勤相勤むべく將士一同之を本懷とせん

越藩が京都を守護するは亦德川氏の爲にもなるべし

成候事ニ候ハヽ、相房御固之諸家之如振合ニ而、最寄之領地並陣屋取建等之
御手當者不被成下候半而者相勤まり不申、若又彦根同樣一ト通り之御警衞
而已之事ニ候共、彦根程ニ便利ニ者無之候得者、兼而一番二番之差別可有之
事ニ御座候。　何分右樣蒙　仰候得者、大名らしき忠勤可相勵目當も相立、將
士一同嚮ふ處を知り、勇鋭を競ひ可申儀と本懷至極ニハ御座候得共、拙藩一
家ニ而御事足らせらる儀ニハ勿論無之、且願之上相勤候樣相成候而者、第一
逼迫之國柄ニて用途給しがたく、將何とやらん關東之御奉公を避候樣ニ相
當り恐入候次第ニて、公然主張も難仕候得共、實ハ
公邊之御爲ニも可然儀と奉存、又私家ニ取候而者、御時節柄存分之御奉公も
相立、祖先へ對候而者、社稷を受嗣き候面目も有之候故、旁以一同及密議候事
ニ御座候。　先年來御地近海持場之儀、追々諸家へ被　仰出候得共、私へ者臨
時御固而已ニて、別段被　仰付も無之儀竊ニ致推考候得者、全以賢兄之御回
護、多々可有之と御厚情不淺感荷罷在候事ニ御座候。　乍併從來之時勢昨春
と申、又々今度因州を始夫々被　仰付、
京
都御固も近國之諸侯へ被　命、列侯之持場多分相定候時ニ當り、徒ニ致傍觀

今京都の守護を請ふも敢て關東の御奉公を厭ふに非ず唯地理の便に從はんのみ

候而も心中恐入、且自然此上之御周旋ニ相成候様之儀出來候而者、彌増之御氣之毒、其上追々之御運ひまて、千一御地近海御固場等被　仰付候而も、前文之趣遠路之申不如意之儀、事實ニ於て迚も相應之御奉公者難出來候故、公私ニ付愚衷之趣有体及御相談候事ニ御座候。不外御儀故打明申上、御内慮も相伺ひ、御相談も被下度奉存候事ニ御座候。呉々關東之御奉公を厭ひ候譯まハ神以無御座候得共、不如意之拙家百餘里を隔候遠國之御奉公ハ、如何様相考候而も、見詰相立兼、

京師之方ニ候得者、國持之所詮も可有御座哉と奉存候ニ付、不顧惶恐意中之概略賢兄限り及密啓候。尤右様申立候得者、甚嗚呼ヶ間敷相聞へ候得共、全無餘儀時宜ニ候條、宜御汲察可被下候。尚心事委曲之儀、御相談も被成下候思召まも御座候ハヽ、重役共之内指上可申候間、御地之御模様、且貴慮次第指出候程合、御内諭被成下候様仕度奉存候。以上

十二月　　　　松平越前守

八　安政二年十一月執政への御書下

○この御書下は建白書類には「無題號執政御書下」とあれども、昨夢紀事によれば安政二年十一月國許の家老中へ下げ渡されしものにして、前揭水戸老公(一)阿部閣老(二)へ遣されたる御直書並に地震に付愚衷(六)と大略同樣の趣旨を國許の一般家臣共にも周知せしめんが爲めに特に下げられしものなるべし。故に題號は訂正して之を揭書せり。(半紙判五枚)

米英魯と條約を結ぶに就いては愈ゝ武備を嚴修すべし

大震災を契機として苟安因循の弊風を一掃すべし

近年來、異船頻ニ諸港へ渡來、不容易御時態之儀ニて何レも承知之通りニ候。殊ニ三夷へ御條約書も御渡ニ相成候ニ就而て、彌以武備振興致不申候半而て難相叶、於

公邊ゟ御作新之折柄、今般都下前代未曾有之烈震、加之所々之火災、 大城之御破損も廣大之儀、諸侯邸宅を始崩壞或ハ罹災實以絶言語候光景、何とも駭然恐入候外無之候。呉々も下地困厄之世態ニ、今般之變妖を帶候而て、誠ニ以何とも重嶮之時勢、一通之事ニ而て迚も亨通之理ニ無之、乍去轉禍爲福候儀、却而致易き事も可有之候得共、何分苟安因循之弊習弗ニ斷絶し、必戰之覺悟を今日ニ期し候儀第一之事ニ候。 今度之大變ニ一同右等へも相運ひ不申候半而て難

實行を以て士氣を振興すべし

日常尙戰地に臨むが如くすべし

相適折柄ニ候得共、篤と及默察候處、二百數十年之昇平ニ浴し、櫛風沐雨之艱苦を親しく身ニ蒙らす、自ら恬然として不覺苟且偷安之風ニ馴致せる故ニ候。其怠惰之本心を以、口ニ必戰を唱へ候而藩中を奬勵せんと致候故ニ、士氣勃興を致不申、却而彼是批判を相立、文武も眞實ニなくして花法同様ニ相成、調練亦同然之事ニ相成候儀今更憂慚之至ニ候。此義者近く躰驗之上ニ申試候。乍恐

幕府之形勢も亦同様なるへくニ就而者、國許之趣も有之、甚以御案し申上候餘り、先鴻相廻し候愚衷二冊、水老公兩閣へも指出候事ニ而、箇上之趣ハ披讀ニ而承知可致候。依之者我等始建白之趣意ニ違戾以爲し候而者、則欺罔幕府以爲し候筋ニ付、自今以後此一災妖を好機會と以爲し、何事も着實躰驗之上ゟ相詰、戰地ニ相臨之候而も、少しも差支無之手配りを始、兼而今日ニ必戰必死之覺悟を相定メ置候へハ、事あるまゝ當て狼狽ハ有之間敷、所謂笑ふて待之英氣を含蓄以爲し置度、左されハ

祖宗之鴻恩を聊相報候御奉公も無遺憾迄相盡し、

徳川家華冑之甲斐も可有之と存候。右必死之覺悟なけれハ犬死と相成、寔奴

ノ僕さる事必然なるへく、加之、如何なる汚辱を蒙り候哉も難斗候。呉々其覺悟戰場而已ニ無之、今日ノ動履ニ有之、是迄ノ偷安ノ念ヲ更ニ芟除ノ覺悟ニ候間、各ニ於ても厚く右趣意相心得、互ニ研究琢磨可致候。以右家中をも奬勵為し候ハヽ、越國ハ其風習ニ靡き可申候。何分當今ノ世態、坎中ノ坎、着實ノ工夫ニ而着實ノ取行專要ニ候間、左樣可相心得候。右ノ通必戰ノ覺悟も不相立、偷安ノ通情ニ相染ミ候而て、祖宗ニ對し申譯次第も無之、此旨相心得候樣可致候也。

九　文久二年六月御用談御登城の御辭表

○是よりさき、公は安政戊午事件に連坐せられ、江戶靈巖島の邸に閑居中なりしが、萬延元年三月櫻田の事變後其の九月四日謹愼を免ぜられ、尋いで文久二年四月二十五日漸く從來の筋總べて御免となりて、こゝに初めて靑天白日の御身と成らせられたり。而して其の五月七日召によつて登城是日幕府より以來御用の筋有之候間折々登城致すべきの仰を蒙らせられたりしが、而かも

此のことは、この時幕府が公をして當時紛糾せる朝幕關係の難局處理に當らしめんとの意圖なりしを以て、公は早くも之を察せられ卽ちこの辭表を提出せられたるなり。（奉書卷紙長さ四尺七寸四分）

（裏端書）
「文久二年戌六月
御用談御登城御辭表」

先達ゐ　御用筋御座候ニ付、折々登　城御相談可仕旨被　仰出、祖先江之面目と申、一身之冥加ニ於ゐも重疊難有仕合奉存候。然ル處其節茂申上候通り、素ゟ不肖不才之義ニ付、再三及御辭退候得共、御懇諭之
台命難黙止、當分及御請登　城ハ仕來候得共、不容易御事件指湊候折柄、否徳非力更ニ前途之見込も付兼、誠以當惑之外ハ無御座、加之兼々菲薄之體質ニも御座候故、
御大政御加談以來、別ゐ氣分不宜不快勝ニ罷成、往々勤續之程も無覺束奉存候。不一方
御懇命をも奉　蒙候儀、何分ニも粉骨精勤仕度とハ奉存候得共、前條之次第此

先達而　御用筋被仰付候ニ付
折々登　城被相談可
仕旨被　仰出　祖先ニおゐて
面目之申一身之冥加於いて
重疊難有仕合奉存候
然ル處又ニ者被成申上候通
素ゟ不肖不才之儀ニ付
再三及御辞退候得共
御懇諭之
台命難黙止當分及御請
登　城も仕来候得共不
容易御事件相發候折
柄否德非力更ニ前途之
見込も付兼誠以當惑之
外ニも無御座加之
菲薄之体質ニ御座候故
御大政被加談以来ハ
氣分不宜不快勝之罷
在往々勤務之程も無
覚束存候不一方
御鈞命ニ付奉蒙候
何分ニも粉骨精勤仕
度ト存候得共
前条之次第ニ付候而勤
居候而者重々恐入候仕合
御座候ニ付何卒　御用
御免之儀
御免被成下候様奉内願候
御時節柄不顧身命
精励可仕旨御諭も御座
候得共不得止事情共深く
御汲取被成下度之次第
御聞届ニ被成下候様御執
成之程偏以奉願候
以上
六月廿三日
松平春嶽

儘相勤居候ゟて、重々恐入候仕合ニ御座候得て、何卒　御用御相談ㇱ儀御免被成下候様奉内願候。　御時節柄不顧身命、精勵可仕て勿論ニ御座候得共、不得止事、事情共深く御汲察、歎願ㇱ次第御聞屆ニ相成候様、御執成ㇱ程偏以奉賴候。　以上

六月廿三日

松平春嶽

一〇　文久二年十月政事總裁職御辭職願

（この願書は建白書類の原題には「文久二年八月政事總裁職御辭職願」とあれども續再夢紀事によれば中根雪江の樞密備忘を引用して、之を十月十三日の條に收めたり。　今之に從ふて揭書せり。　按ずるに、是歳六月勅使大原重德江戶に下向勅諚を幕府に傳へらる。　乃ち幕府は朝旨を拜して其の七月九日公を政事總裁職となし、以て朝幕の關係を調整せんとせり。　而かも、幕府は倚因循にして更に尊王の誠意を示さざるのみならず、攘夷のことに關して勅使三條實美等の再び江戶に下向せんとせらるるあり。　是に於て公は其の職責を全うすること能はざるを慮り、この辭表を提出せらる。（半紙判罫紙十六枚）

（表紙上書）

覺

覺

一當秋以

叡慮被仰遣候ニ付、政事總裁職被命候以來、小子日夜存詰候處ニ而ハ、是迄於

幕府品々御混雜、御不正之筋も不少候得共、何分第一ニハ君臣之大義を明らかにし、

御祖宗以來之御規則も有之候得共、都而天下之御政道

政事總裁職としての政治の方針

君臣の大

覚

一 当状以
厳慮ヲ被遊候ニ付 政吏復旧裁断ヲ命シ以来未タ
日頃存諸侯変革有之候処
第府県ニ法規雑法而モ之ニ不少候世間ヨリ
知一ト一系候之大義を明らかにし
法祖宗以来之法規ヲ基トシ候後都ヲ天下之
御政道
厳守法遵奉之

従前府県候道候

義を明かにし幕府は臣道を以て奉ずべし

叡旨御遵奉有之、從幕府ハ臣道を以何事も御尊奉被爲在、諸事無御隔意、天下重大之事柄ハ其節々以御使
叡慮御伺有之又ハ
（家茂）大樹公御直々御上　洛御伺等之義も被爲在、日本大小諸侯へも議を下し、天下一致萬人一心之御政治ニ無之候半而ハ、內不能治日本、外不能接外國と存詰、此儀方今
廟堂之國是と奉存候事。

幕府從來の政治

二右ニ就而も是迄　幕府御政事之御模樣、二百年來昇平之因循ニ馴致之義ニ候哉。

私を滅して公共の理に基くべし

京師を度外ニし、諸侯を輕んし、覇府之御私意を以御取計有之候舊染之汚習有之ニ付而ハ、何分不相濟義と存付候故、只々諸端　幕府之私を除却させられ候而、天下公共之道理ニ御本つき無之候半而ハ難相成段、已ニ惣裁職被命候當日、閣老へも委曲申聞候處、何レも同意之由申聞候故、左候ハヽ不肖之小生重任を蒙り何分乍不及盡心力可申旨相答へ、無異儀當任及御請候事。

三大原卿歸京後、於

大原卿歸京後の京都の情勢

京師ニ而品々御評議被爲在、且薩州長州土州其外浪人共抔滯京有之、兎角人心治り難く混雜之模樣ニ付、主上ニも御疑惑被爲在候御樣子ニも相伺ひ奉り、實ニ恐入候次第ニ付、　大樹公早々御上洛之上、是迄外國御取扱、其他欺罔之御所置も不少、重疊御不都合之御次第共、御悔謝被仰上、尙叡慮をも深く御伺ひ、天下之國是を被定度、　台思ニて被爲在候得共、何分將軍家之上洛と申てハ、鹵簿急速ニ難相整ニ付、右等之事件ニ付、御名代旁刑部卿殿早々上京被有之候樣被　仰出候ニ就きて、實ニ今度之一擧ハ、官武離合之機會、天下治亂之分判、至重之一大事と奉存候故、日夜及愚考候處、　幕府從來因循苟且之御所置振ニ成行候原因ハ、私政を去つて天理公共之道ニ御本つき無之ゆへニて候。　依之畏強壓弱之手段之外ハ乍恐不被爲在、外國御所置も偸安ニ出て、第一とる

將軍家茂の名代として一橋慶喜の上洛と共の重大意義

この機會を以て幕府從來の罪過を朝廷に謝し一に叡慮を遵奉せん

天朝御尊奉、君臣之大義を明らかにする事も不被爲出來、諸侯を鎭服せる事而不相叶候へとも、日々尚舊染之氣習に流れ、日本國内の事ニ就而も、御氣儘の義而已多く、

天朝ハ幕府あるによつて相立ち候との御私心、兎角消却致兼候故、日本國中人心不平憤激を生し、幕府之御大政を不受ゆゑん、此所ニありと奉存候故、今度ハ　幕府由來之因循を一洗し、只管叡慮御遵奉にて、刑部(慶喜)卿殿御登京之上ハ、是迄　幕府不都合之罪を被謝、癸丑以來外國と結約之章程を破却し、改而

天意御窺之上、國中大小之侯伯と議し、改而外國と和交相成候ハヽ、戊午以來違

詔之罪過を悔候確定之證も相見え、尚外國へハ、右等之事狀詳細ニ滯在之公使へ申聞、全權之使節海外五箇之政府へ遣し、其段申聞且及相談候ハヽ、天下之政道都而奉

叡勅、次ニハ大小諸侯と謀議を遂け、全國一致ニして必　幕府一己之私政ニ

上洛後主上並に公卿に對する慶喜の方針

ハ無之、是國是ゝ第一と心付候故、刑部卿殿並老中へも、於御用部屋中聞候事。
尤其節ハ肥後守(容保)殿ゟも差出候同趣ゝ書付も有之候へとも、執政ゝ内ニは不同意ゝ趣も相見え、何分方今ゝ時世、開國ニ無之候かは迚も難被行、
京師へゝ御都合はいか様可然候へ共、外國承引無覺束と肥後守と論談様々有之候事。

四其後刑部卿殿登　城ゝ節段々御存寄相伺候處、畢竟今般ゝ一條ハ開鎖を議するの主意ゝハ無之、刑公御上　京ゝ上、第一
主上へ奏聞、公卿百官へ應接ゝ心組は、春嶽殿御存寄とハ相違いさし候事ゝて、私存候ニハ元來是迄ヶ様不都合成行候次第と申ハ、掃部(井伊)頭並久世安藤斗りゝ罪とも不被存、段々さかのほり見候へハ、抑癸丑夏、米利堅使節彼理到來候節、彼ゝ兵威ニ畏縮して、許和交候阿部伊勢守(正弘)以來ゝ義と奉存候。左きれハ伊勢守始其罪ニ相當り候事ゝて、必しも掃部頭久世安藤のミニ候ハす、其後種々ゝ欺罔を結構して、第一
天朝を輕侮し、甚しきは承久元弘ゝ先蹤を繼かんとす、此確的ゝ證も照々として承知致居申候。

是等是迄行違ひ、不都合欺罔ゝ罪を俛迄奉謝候心得まて有之候。乍去方今
萬國ゝ形勢を視察せる處、信義を本とし條理ニ本つき、天理ま從ひ候政治ま
て、古昔水草をおふて移る夷狄ゝ比ニハあらす。又日本ハ環海ゝ國柄まて、
迚も獨立致候事ハ難叶、況ャ彼レ蒸氣船發明以來ハ、就中の事まて、鄰里ニ行
くも同樣まて、陸地のとく相心得候へハ、古昔ゝ環海ゝ天險を恃ミ、一旦掃攘
ニ及ひ候へハ、再渡來不致樣ゝ義まハ無之、其上萬國同盟ニ候得を、一同申合
セ大擧して及攻擊候時ハ、假令一度二度ゝ勝ちハあるとも、百戰百勝ゝ覺へ
ハ毛頭無之、一敗塗地を眼前まて、中々以弘安蒙古ゝ比ニあらす、夫ゆへ日本
獨立ゝ勢を成し候事、於天理難出來、此儀照々乎さる事ニ候へハ、假令　天慮
まもあれ、只今攘夷抔
降　勅有之候ても、御請難相成候へハ、何分此上ハ刑部卿殿ニ被爲置候てハ、
右ゝ條理分明ニ
天朝へ被仰上、公卿百官へも一々辯駁いさし、薩長を始右等ニ不審ゝ者ニハ、
誰レても罷出可申上、其節を一々御說得被爲在候思召まて有之、彌攘夷ゝ
天慮御脫却、開國ゝ

勅使三條卿等の江戸下向と攘夷の勅諚とに就いて

叡念と被爲相替候節ハ、是迄因循苟且ニして、欺彼罔我ノ念を一轉して、大ニ日本國をして興起セしめ、益武備充實ニ致度、是卽眞ノ尊　王ニして、必しも是迄通り京都を壓付ケ候て、開國ノ論致候存ニハ無之、日本ノ御不爲と乍知、叡慮と申て攘夷を御請ケニ及ひ候而て、第一天理ニ背違して、將軍家ノ御職掌、且ハ後見ノ大任を蒙候詮も無之と奉存候。固より京師を尊奉セしして、幕府ノ私政を押通し候心得ニ而て無之、此所貴君ニも能々御合點有之、思召被回候樣致度候との御議論ニて、小生重疊敬服御尤ノ趣申上候事。

五　其後、於此表　勅使御引受と相成候ニ付、又刑君へ申上候趣ハ、今般ノ天使を乍恐德川家ノ興廢、幕府ノ存亡、大ニ皇國ノ盛衰ニ關係いさし候事ニて、實ニ未曾有ノ一大難事と奉存候へハ、何分是迄ノ幕府ノ私を御除却被遊、充分京師御尊奉ノ御誠意相貫き候所よりして、御應接ニ不相成候半而て、迚も御六ケ敷と奉存候。假令

徳川家は政權を京都に奉還し一諸侯となりて攘夷の叡慮に從ふべし

叡慮なれハとて、　皇國之御不爲と思召候義を、　將軍家之御職掌ニ於て、御請ケ被遊兼候御譯合を懇々切々、兼而貴君先日相伺候御持論之通り被仰上、徳川家之浮沈ハ暫く扨置、第一即今之攘夷と申樣ニ相成候而ハ
皇國之御爲不相成候のミならす、遂ニ眞ニ難被安
宸襟相成可申哉。　今日迄政權御委任相成候　幕府ニて、
皇國之御爲を存候へハ、鎖攘之御請被遊兼候段、泣血漣々被仰上候而も、
天使御聞入無之、於當今、拒絶攘夷ニ無之候而ハ難相叶段、遮而被仰出候ハヽ、
其節ハ實ニ無是非御次第ニて、最早被成方無之候へハ、
東照宮以來二百餘年關東へ御委任相成候政權を
京師へ御指上ニ相成、　皇國之安危を
天意ニ被任、徳川之御家ハ一諸侯と被爲成候上ニて、掃攘之
叡慮御尊奉有之、列侯と共ニ御忠勤を可被勵、左樣ニも無之、幕府之職任ニあつて無謀ニ二百餘年太平之化を損ひ、生靈を土炭ニ被陷候義ハ天理ニ逆ひ候事故、御請ニ被及兼候と御決心無之而ハ難相成儀と奉存候。　最大權御返上之儀ハ、上奉始　將軍家、下閣老其外迄、聊さりとも擁して遂事之意味有之

候而ハ不相濟儀と奉存候。此儀御同意ニ候ハヽ、早々閣老へも被仰談、御用部屋丈ケハ御一致ニ相成り候上、
上へも其段申上、於
上も無御遺憾樣被遊、御決心候半而ハ難相濟段申上候處、至極尤之筋ニ付篤と勘辨之上、尚又御相談可致旨刑君被仰聞候事。

其後に於ける慶喜の所存

六其後刑部卿殿ゟ先日申上候義御勘考如何哉と相伺候處、何分如貴示、今度之
天使ハ實ニ不容易、一應ヤ二應て歸洛ハ致間敷候へ共、何分鎖攘ハ難相成候間、開國ニてどこ迄も申上、其上まて刑君
天使を御同道まて御登　京之御見込まて、今更大權を奉返上候と申場合ニ而ハ有之間敷、已ニ或執政ニハ
主上眞之思召ニ候ハヽ、如何樣御不尤ニ候とも、盡條理申上候へハ可然候得共、畢竟今度之
天使と申ても、實々
叡慮ゟ出候儀ニ而ハ無之、薩長を始浪人輩之思召まて有之、彼等之爲ニ二百年來之大權を奉返上候事、甚以不可然との事と被申、迚も　幕府を捨てヽ

慶喜大權の奉還に賛せず

三條實美よりの書付に就いての批難

辭職内願の理由

叡慮尊奉之念頭ハ毫も無之樣子ニ有之候。

七其後肥後守、從

京師内々家來持下り候轉法輪ゟ之書付、御用部屋へ持出し段々之主意相咄候處、或執政申候ニ、かゝる重大之事件を、肥後殿御家來轉法輪ゟ受取候事甚以失体之至、且ハ其家來肥後殿ゟ差出し候迚、御請取ニ相成、御用部屋へ御持出し被成候事、甚以御輕忽之至、此等之義ハ從

京師所司代か御附江、御内々御渡相成候とも可然事ニ候を、肥後殿ニ剩へ周旋被致候樣被命候ハ、甚以

京師之御不都合、且ハ御尊奉筋ニ、是迄

祖宗以來充分之義ニて、今更御改正ニも不及と、危言交りニ發怒被申聞候人も有之、小生承候而も實ニ不忍聞、赧汗之次第ニて、是を及論究候へハ、却て御爲ニも不相成と奉存候故、其儘默座罷在候事。

八兼而惣裁職被命候時よりの愚衷ハ、何分日本之國是ハ

天意を遵奉して、全國一致之上ニ無之候而ハ、内修外攘迚も難出來次第と心得居候處、昨今

幕閣は依然舊體制なり

外夷に畏懼して開國するは眞の開國にあらず

廟堂ノ形勢、矢張舊來ノ私を主張し、
叡慮尊奉ノ念ハ毫も無之、夫ゆへ開國も此儘ノ開國ニ致し、
京師ハともかくも押付ケ、諸侯をも壓服セしめ、只管ニ外國を畏懼して、彼ノ
所願ニ任セ度との念慮十分有之候故、百事因循ニ陷り候外無之、
京師ノ御見込ニ而、於關東全く外夷を畏懼する念頭ゟ、彼ノ無飽貪婪ニ被
任候御所置而已ニ成行候て、
征夷ノ職掌ハ、度外ニ被付候義と、深く
御洞觀、御激怒被爲在候より、何卒
幕府ノ御威權、再ひ滿天下ニ輝キ候樣被遊度との深重ノ
叡念ゟ、攘夷名目を以
幕府を御督責被遊候御事、感泣ノ次第難有儀ニて、臣慶永ニ於而も深く、
宸慮を奉伺候へハ、徳川氏を御惡ミ被遊候ニハ毛頭無之、只々御憐恤ノ御愛
情と奉恐察候。然ルニ刑部君ニて、最初ノ思召ハ、全く
叡念御遵奉十分有之候上まて、開國ノ儀
皇國ノ御爲ニ被仰上候御心算ノ樣奉伺候所、只今と相成候而ハ、矢張閣老同

公と慶喜との意見相反す

様の開國にて、

京師御尊奉之御念ハ、傍ニ相成候樣ニ被相伺申候。是卽因循之開國にして、

深重攘夷之

叡慮御汲取ハ不被爲在義と奉存候。此所ニ至り、列君之御趣意、先日之御賢慮とハ氷炭いたし候様被存候。畢竟只今と相成候ても、開鎖之論判ニても無之、只管

叡意御尊奉之一途ニ止り候事ニ候へハ、今般

天使御參向之上ハ、是迄之罪過を被奉謝、

敕命之趣速ニ御遵奉之御請ニ相成候義、君臣之分ニ於て義理之至當と奉存候。且ハ先日肥後守ゟ差出候ヶ條之外ニも、是迄御名分不正之廉々被對、

天朝僭越之御儀共ハ、悉く御改正ニ相成、全く

御尊奉一筋ゟ、御應接相成候樣致度と、不堪日夜之至願候。小生常ニ薄弱之體質を以、惣裁之大任を蒙り、以來日夜之憂苦積累之餘り不食ニ至り、心疾相發し應接す慵く、終日默然危坐而已送光陰候次第ニて、別ゟ當今累卵之御時節柄、長く登城不仕候義、心の外ニて深重恐入候へ共、何分前條之次第ニて、勤

續無覺束候へハ、於
廟堂も深く御憐察御亮恕被成下度事ニ候。夫ゆへ愚衷ミ趣、不殘心底充分
及吐露候。已上

松平春嶽

二　文久二年八月被指出愚衷

○この愚衷書は建白書類には政事總裁職御辭職願(十)の次にあれども、實は其の前に置かるべきものなり。乃ち公が政事總裁職御就任の際、幕府當局に約するに、從來の私政を改めて公正ならしめ、且つ天朝を尊奉して諸事叡慮に遵奉すべきを以てしたるに、爾來因循姑息毫も改正の徵なし、由つて八月二十九日再びこの書を大目付岡部駿河守長常に提出せられたるなり。(美濃判十二枚)

拙生先達而総裁之命を掌候得共不及
其器及建言候由而向後
幕府従来之御私政を改候而天下と
共ニ治平を御図り可被成御指向ニ相成候ハヽ
職位ニ居候義も出来不申候義又是迄之御旧
套を以御押通し之ニ相成候而ハ危
乱相迫り候而御財用之又ニ窮迫し尺法無之
候再御廻し之候処御私政御改革ニ者可被成
与の御事兼而此心得を以去ル廿三日之也

幕府従来の私政を改めずんば總裁の職に居ること能はず

（表紙上書）

愚衷

松平春嶽

○裏表紙に「文久二年壬戌八月指出」とあり

拙生先達ゟ總裁ミ命を蒙候ニ付、乍不及其節及建言候通り、向後幕府従來ミ　御私政を御改有之、天下と共ニ治平を御圖り可被成御趣向ニ相成義ニ候ハヽ、職位ニ居候義も出來可申歟、若又是迄ミ御舊套を以、御押通しニ可相成との御義ニ候ハヽ、危亂相迫り居候御時節、更ニ前途ミ見詰無之段再應申立候處　御私政御改革ニも可相成との御事故、其心得を以去ル廿三日迄登

近來幕威地に墜ちて分裂の兆あり

凡威權は公に歸して私に離るゝものなり

其の例をペリー來航の時に見るべし

替も仕來候得共、

御政務御改革の筋ニおゐて、何一ツとして捗取候義も無之、非才の程殆不堪憂慚、此成行きまてハ、追々天下の人心安堵仕候樣の義ハ、甚以無覺束御座候ニ付、猶又當前見込の次第を及陳述候。國初の義ハ不可申、

幕府の　御武德御旺盛ニ御座候節ハ、

天朝を奉初、諸侯已下草奔黎庶ニ至る迄、

幕府よ依賴信隨仕、天下の權柄を擧けて

幕府に委任し奉り、露計りも疑事なく、危踏事無御座候。然ル處近年來

幕府の　御威權外國の爲に挫候より、天下の人心暗よ嫌疑を抱き、奉戴せさるの勢と相成り、甚敷ニ至り候而ハ、

幕府の權柄を分ち奪ふて、各自の上ニ還ふせんと欲するの兆御座候。凡威權ハ、公なるよ歸して、私なるに離れ候事自然の理勢よして、癸丑(嘉永六)の度亞墨利迦の使節浦賀港へ致渡來候ハ、開國已來未曾有の珍事ニて、日本國の大事よ御座候故、和戰の策被列候よ　御垂問ハ御座候得共、其御用捨の際ニおゐてハ、曖昧糢糊として曾て公然たる御開示無之、彼國への應接を悉く

外交は天下の一大公事なり

天下の嗷々たるは要するに幕府の私に基くなり

廟堂の密議に出、秘して我國人の聞く事を御厭ひ被成、其待遇の形迹に至つてハ、怯懦屈辱を極められ候故、天下擧つて奮激を發し、嫌疑を抱き、
幕府の　御威力凋衰して、威信の立難きを推量し、人心各其好む處に向ふて恣奔横走に及ひ、議論天下ニ紛興して、敢て
幕府の制令を甘んし受不申樣相成候義、慨歎の至ニ候得共、是皆
幕府の權柄を私せるに失はれ、下に授け與へられさるも同然の事ニ御座候。從是已後も、外國の應接待遇の筋は、皆前轍に依り秘して天下に公にするの御所置無之、
幕府一己の私議に任セられ候故、遂ニ誣妄を
天朝に及ほされ候程の大事と相成候。畢竟二百年來の鎖鑰を開ひて、外國を待れ候は、制度の變通天下の一大公事に候處、
幕府の私を以是を擅にセられ候故、天下嗷々として公論を唱へて服し不申は、其謂れ有之事と被存候。國初已來
幕府の
御政令私なしとも難申哉ニ候得共、天下ニ嫌疑の念無之時は、安堵遵奉して

姑息の小計は不可なり

須く私見を去つて公道に隨ふべし

誰あつて犯し侮る者も無之候ひしか、外國ノ事件ハ惣て制外ニ出候ニ付、公私ノ分舊套定格を以覆ひかくし難き次第と相成候故、天下悉く幕府ノ私を咎め、議論を究め、人心大ニ乖戾を生し候得共、幕府ハ是ニ反して、更ニ其私なる事を察せられす、舊時ノ威力猶今日ニ施すへき歟との御見込ニ而、非義暴政殆其極ニ至り候故、人心ノ離叛も大ニ窮り、櫻田坂下ノ變を初として、勤王義擧ノ説競ひ興り、將ニ干戈を動さんとする勢ニ相成候故、幕府ニおゐても不被得止事、聊人心ニ應する姑息ノ小計を用ひられ、纔ニ其暴發を御鎭定有之候得共、譬ハ阿片を以暫時痙攣を鎭し如く、是ニ繼く全治ノ定算無御座候而ハ、險症再發して救ふへからさるニ至り、本復太平を望む由無之候。 斯時ニ當り候てハ、唯非を悔ひ過を改め、私見を去つて公道に隨ひ、天下と大同ノ政を御執行ひより外ハ有之間敷と被存候。 然ル處方今幕府在廷ノ臣僚、誰あつて一己ノ私心可有之様も無之、一向幕府　御威權ノ衰弱御舊套ノ頽敗を慨歎し、專ら是を維持挽回し、正直を以天下ニ臨んと欲する忠愛ノ至情ニおゐてハ、實ニ間然無御座候得共、其至情

幕政の維持に忠なれども其の事に當るや私に陷り易し

要するに天下の人心に戮力すべし

幕府の力を以て天下を治めんとするは不可なり

幕府公に

事業ニ發候得者、多く者
幕府舊染之私政ニ落入候故、天下之人心ニ契合致兼候。此義者忠信
幕府ニ奉するニ餘りあつて、天下ニ答ふるに足らさる故ニも可有之歟。
幕府の心力を盡して天下を安セん事を務めて、天下と心力を戮せて
幕府と共ニ天下を安んするニ意なき歟とも被存候。當時ニおゐてハ
幕府從來之私心を舍、天下輿論之公ニ從ひ、非とし私と斥す處ハ悉く去り盡し、天下ニ謀つて天下を治め、人心ニ從ふて人心を安んし候ハヽ、天下惣而
幕府と一體と相成可申候。天下一體之如くニ相成候得者、
幕府ハ自ら首領之威權あるへきハ必然之勢ひニて、胸腹手足制を首領ニ仰かさる事を得さるも、亦自然之道理ニ有之候。若自然を失ふて施爲ニ亙り、
幕府の力を以天下を治めんとするハ、一身を以衆敵ニ當るも同樣ニ而、力盡き身殪るヽニ至つて、始めて一己之力を恃んて、衆人の愾を取りし事を後悔するニ止り可申候。公私去就之理、利害之辨、明らかなる事白日灼火の如くニて、
幕府公ニ從へハ、威權復すへく弊政興るへく候。私ニ從へハ滅亡之外者有

從へば威權回復し私に從へば滅亡せん

幕府依然因循にして建言に省みず

之間敷候。當今

公武を合せ外國に應する、惣而天下の公論正義に從ふて、

幕府の私意を用る事無之、天下の望を慰し、天下の心を安んし候義先務肝要

さるへくと被存候。斯かるに

幕府猶姑息に因循し、舊習を去るに忍ひす、從前の制令を以御押通し有之而ハ、上ハ

天朝の

聖慮に戻り、下は生民の希望に背き、次第に潰亂の世態に落入可申儀ハ洞見仕候事ニ御座候而、於拙生は此外ニ當時人心を安んじ、天下を維持すへき覺悟無御座候ニ付、先達而已來斯心を推て建言衆議仕候得共、

幕府の時勢に適當不仕候哉、又は否德の義故信用難相成故にも候哉、何事を申出候而も、一向ニ進歩不仕、勿論閣老初諸有司ニおゐても、敢而不服と申樣にも無之候得共、又體認擔當の人も無之候て、御親見の通の事ニ御座候。其

上蒙　命已後、兎角日々致涌出候事務の多端なるに逐れ候而、國是の事業の講究も行届兼候而已ならす、たとひ逐々論辯評決の場へ相運ひ候にもいさ

を、只今之體ニ而ハ、諸般之大事務、初始ゟ終末ニ至る迄、一身之力を以驅逐不致候半而ハ、前進不仕勢ニて、中々勤續き出來可申とも不被存候。畢竟總裁之職任ニ而ハ、乍不及
御大政ニ關り候諸局之可否を、及裁決候義ニも可有之處、當時之體態、拙生不見識故、我ゟ職分を墜し失ひ居候姿ニ相成、嘆しき事ニ御座候。されハ沈默して日月を費候御時節とも不奉存候故、不得止事彼是及立言候處、昨日之論定セし處ハ、今日之事務之爲ニ空茫ニ屬し、左件を辨し候間ニ、右件ハ無用之如く相成り、事理徹底貫通不仕、實ニ當惑至極之仕合ニて、全く非德不才之致き處勿論ニ候得共、今更其儀を申出候迚何之所詮も無之候故、忍んて默止罷在候得共、如此危急之時ニ迫り、緩漫遲鈍天下ニ對して一事之見るへき無之候而ハ、人心再ひ疑惑を抱き、憤勵を生候ハ眼前之義ニ而、奉對
叡慮　台命重々無申譯次第ニ御座候。
幕府在廷丈ケ之心力を戮セ候事さへ難相成微力を以、天下之大同を期候義、萬々不可及ハ勿論之事と覺悟仕候得ハ、實ニ恐惶窘迫之極と相成り、更ニ天下之御爲可相成見詰無之、在職も仕兼候勢ニ御座候ニ付、愚衷吐露奉汚高聽

候事ニ御座候間、出格之御憐察を以、當職御罷免之御評議被成下候樣奉內願候。以上

八月　松平春嶽

一二　虎豹變革備考

○この一編は年紀を缺き、且つ聊か建白書の體を備へざるの觀あれども、仔細に檢討するに文久二年公が政事總裁職御就任前後に起草せられたるに疑なし。故に今建白書類の編次に從ひ姑くここに收む。（半紙判越國圖書寮罫紙十一枚）

覚

一 文武忠孝一和之事

一 衰弊挽回維持之事

一 芟去華飾私事

一 大擴更定策之事

一 救天下之困弊之事

一 武備張皇之事



（表紙上書）

虎豹變革備考

覺

一公武御一和之事

一衰季挽回維持之事

一芟去幕私事

一大攘夷定策之事

一救天下之困弊之事

一武備張宣之事

（公武御一和之事）
○公武御一和之事

○公武御一和ハ、第一從　幕府眞ニ
天朝を崇奉せられ、征夷之御職任を御盡し被爲遊候儀肝要之事。

（諸侯の輪番上京）
○近來諸侯一年を四分して、一季ツヽ輪番上　京之規則ニ從ひ候て、

（將軍の朝覲）
大樹公ゟ三年ニ一度、五年ニ一度之朝覲被爲在度事。尤至極之御手輕にて、火舶行可然儀と被存候事。

但三年ニ一度、五年ニ一度之朝覲ハ、兼而之御規則ニ被爲成置候て、其外ニも從　京都御用之節ハ、極々之御手輕にて、一年ニ數度ニ而も御上　京被爲在候御手筈有之度事。

（老中の京都勤番）
○江戸表ゟ老中一人ツヽ　京師江勤番有之、尤一年代り之事。

但是迄情實、東西致阻隔候儀ハ、双方之事情貫徹不致ゟ事起り候事ゆへ、如斯相成候ハヽ可然。尤幾年詰ニ相成候而も、矢張阻隔之基本にして、所司代も

同然なるへく、一年詰相當之事。

天下の大事件は叡慮を待つて行ふべし

○德川御一家之儀ハ、於關東精誠盡衆議、施行當然之事ニ候得共、天下至重至大之事件、萬人之生活ニも可關係事ハ、一々天朝江御伺、經　奏聞待叡旨御取行可相成事。

但天下至重之大事件と申ハ、指當り開鎖之義抔之事

禁裏の御入費を增額すべし

○兼而禁裏御暮し方等、極々御急迫まて、年々御入用御不足相立候事ニ候得ハ、御臺所御入費、並御築地御普請等、其外迄も格別之御尊崇、天下江著然不致候而ハ不相濟候事故、從　幕府拾萬石之割を以、御金又ハ米、或ハ二十萬石之割を以、米金御獻納相成候事。

攝家宮並に堂上方を御救助すべし

○攝家宮並堂上方薄祿ニ而、今日を凌被兼候者多々有之候事ゆへ、年々金子又米等を以、不足之急を不生程迄ニ御救助可有之事。

皇胤を御手厚くすべし

○法中宮を被廢候而、還俗セしめ親王宣下有之度、皇胤御手厚く被爲成候樣致度儀と被存候事。

皇女の尼

○皇女ハ是又尼とふし候事を廢し候て、還俗セしめ諸侯當主之制度被相立候

とならせらるるを廢すべし

天子春秋の行幸

幕府の朝廷を輕蔑する念を去るべし

京都を嫌ふ心あるべからず

幕府の宿弊親藩を重んじ外藩を疎んず

天下の公論に對しては親外藩の別あるべからず

事。

○天子春秋行幸有之度候事。

○於幕府天朝を尊奉して、変去幕私候事ハ、第一輕蔑朝廷の一念を消却セしむる事肝要之。

○此輕蔑と申者ハ、渾而従京都被仰出候事有之候へハ、甚くこれを嫌惑して不奉行、此一條廢セすんバあるべからさるなり。

○これによつて考ふる事、老中の權を廢するにあり。

○從昔幕府の政度、親藩を重んし、外藩を疎んする宿弊、今に至つて甚し。且又、方今ハ親藩をも疎んする弊害起りて、親藩といへとも怨嗟なきことを不免、東照宮の遺旨に戻ること不少、今此政度を改革して、德川御一家の事にハ親藩を愛重せられ候事勿論なれとも、天下之公論を以申候時ハ、親藩外藩の差別を不隔して、萬事御相談可有之候事

但御譜代大名同斷

○親藩外藩の差別なく、世に有名の諸侯を擧用して、これを　幕府の上に登せ

有名の諸侯を擧用し下院に於て公共の論を議して以て朝廷に伺ふべし

小事件と大事件

朝廷に對しては將軍も諸侯と同じ

幕府を君諸侯を臣とするの風を改むべし

幕下の臣も諸侯の臣と同等にして區

て、天下公共之論を下院ニとりて、又公共之論を議して、　幕府より
朝廷江御伺ひ可有之事。

○小事件ハ、時々書牘之往來も可有之筈なれとも、大事件ニいたつてハ、幕府登用之諸侯時々火船之航海ニて、上　京可奉伺
天意事。

○大樹公自ら幕府舊來之自重を廢して、諸侯同等之禮儀を被爲用度事。

○幕府を君とし諸侯を臣とするの所置ハ、國初撥亂反正之餘風ニして、今ニ至つて其害甚し。　國初ニハ天下第一等之御武威海外ニ輝きて、
東照宮ニハ諸侯同等之禮儀を被爲用候て、諸侯を臣とする　台慮ニハ無之、
盛德自ら溢盈して、諸侯より臣事せる之禮儀を以てせり。中古乍恐
御武威聊柔橅之光景ニあさり故ニ幕威を以壓服せしむるの外なし。諸侯を臣とし、我を以君とする事の弊起れり。今般之一擧ニこれを改正して國初之舊制ニ復するこそ尤必要なり。

○幕下之臣を麾下之臣と稱呼し、諸侯之臣を陪臣と稱呼する、幕私之甚きなり。方今此稱呼を改正して、幕府之臣も諸侯之臣も、同等之禮儀を用ひすんハある

別なし

へからす。是幕府自ら謙譲を天下に示すゆゑんなり。幕府ノ改正此ニ意を用ゆへし。

但幕府ノ臣諸侯ノ臣ニ、同等ノ禮儀を用ゆるとも、諸侯ノ臣より自ら尊崇の道を極むるにいたるへし。

老中には賢明の諸侯を任ずべし

○老中を撰任する、五万石以上三万以上（石脱カ）城主ニて無之候ては登用せられされとも、自今以後はこれを改正して、外藩内藩御譜代ノ大名を不論、假令壹万石ニても又拾万石ニても、城主無城ノ隔てなく、有名賢明ノ諸侯を撰任せしめ度事。

徒に諸侯に繁役を命ずべからず

○幕府舊來ノ自重を變するには、諸侯ノ疲弊をも不厭妄ニ國役を命し、江戸をのミ守衛する事ニ繁役せられ候と、諸侯ノ忿怒を生せしむるゆゑん之。故ニ如斯繁役を廢して、旗本或は舊來ノ御譜代大名へのミ命せられ、此御譜代大名も繁役ノ患を免かるゝ所置なくんばあるへからす。

江戸横濱の守衛と見附番

○江戸の砲臺横濱守衛等は、旗本の大臣たる者をして命せられ、見附番ノ規則もこれに倣ふて公共ノ論を擧くるにしくハなし。

幕府諸藩の士氣を振興すべし

○諸侯を國に就かしめ、專ら文武を勵精し、眞ニ戰鬪ノ覺悟を定め、藩士ノ士氣興廢する事を、幕府鄭重ノ弊を廢して屢々巡查使を下し、これを巡撿して、士氣

の興れる地ニハ賞を下し、賞するに佩太刀又ハ封祿を増し、繡章を賜ひ、愛重を加ふへし。士氣ゝ萎弱するにそ嚴罰を下して削秩、又當主隱居を命じ閉蟄せしむるか、又甚きニいたる時そ、其隣藩ニ號令を下して征伐し、或幕府自ら親征せしむる事ニいたるへし。

○天下公共ゝ論を議してこれを用るにそ、巴力門（ハルリモン）、高門士（コンモンス）則上院下院ゝ擧なくんハあるへからす。

滿清　日本ゝ制度ハ、自ら權を政府ニ掌握して、恣ニ賞罰黜陟を用ゆ、西洋諸州ゝ史をミるに、ハルリモン、コンモンス、アリて、國中ゝ政事を公共ゝ論議ニ登せ、これを賞罰黜陟せしめ、與奪といへとも又然り、英ノ王も佛の帝といへとも、これを自由ニする事を得す、今

皇朝ゝ制度も一變革して、巴力門を江戸ニ、高門士を江戸ニ創建し、此巴力門そ幕府の臣下又ハ諸侯の内なるへく、高門士そ諸藩士の有名ゝ者之。

○又ハ巴力門を諸侯の藩士ニ命し、高門士そ百姓町人、又ハ庶人を加ふるも一法なるへし。

○天子將軍といへとも、此公共ゝ論ニいたつてハ、これを動搖する事を得す。

銅山を開き銅座の制を廢すべし

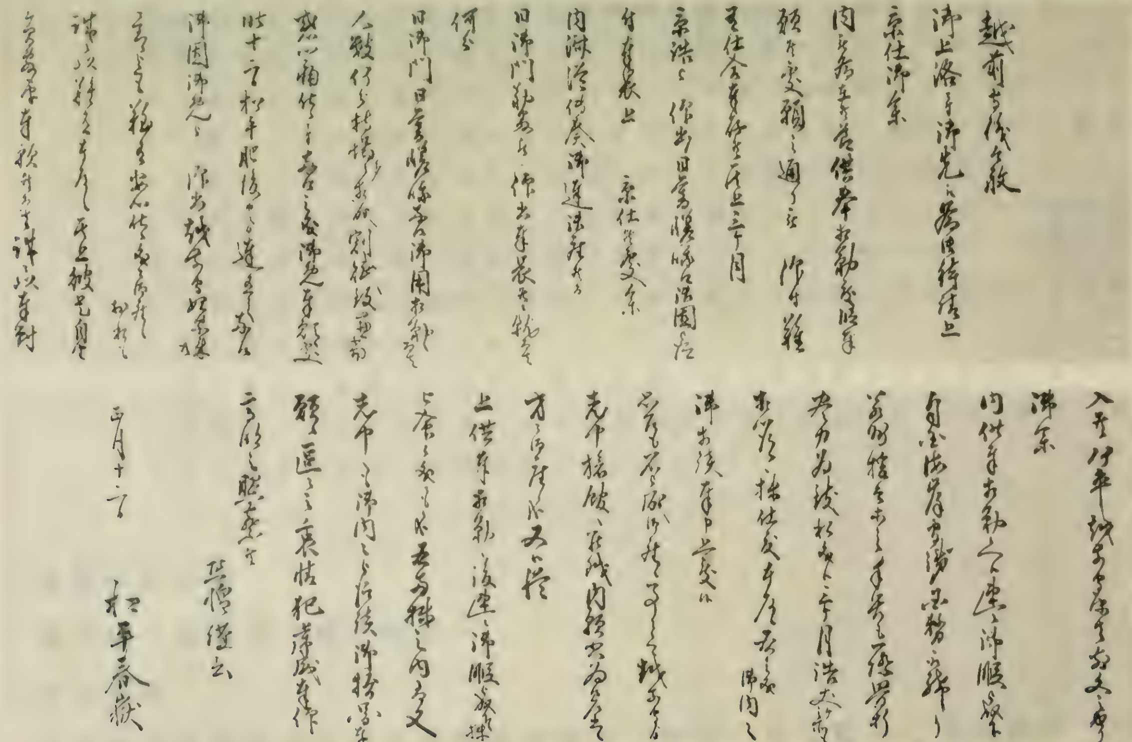
貨幣制度の改革

幕吏旅行の弊を改むべし

○従　朝廷天下の政事を　幕府ニ委任し、委任ニ　朝命を奉して古來ニ制度を改むることなきときハ、幕府ニ罪尤重し。こゝを以天下ニ公共ニ論を求むる、巴力門高門士ニ擧ふくんハあるへからさるこ。

○天下を殷富するそ、銅山を開くにしくハなし。幕府ニ私を去ル、大坂銅座ニ制度を廢して、諸侯自由ニ銅山を開き、銅を鑄る權を幕府ゟ與へ給ふニあり。又百文錢或ハ金銀を、諸侯共國中ニ入用ニ、天下ニ錢と混更セしめさる爲メ、極印を打つか、又ハ何國通寶ニ文字を用ひて區別し、自儘ニ通用を許容する令を施し、又ハ大坂銅座ニ買直段ニ、世間相場ニて銅を買ひ取り、幕府廉價を以銅を買とる宿弊を廢するニあり。

○幕府ニ臣下、街道を旅行する普通ニ宿賃を以拂ひ、暴威を逞ふして驛夫を勞役セしむる弊害(を脱カ)除去し、御朱印繼立ニ舊套を廢セすんハあるへからす。


越前守殿

松平春嶽

十三　元治元年正月十二日將軍後見職一橋慶喜への請願

〔〕是よりさき、文久三年三月公は政事總裁職を辭して歸國せられたりしが、其の歳十月六日朝廷より早々上京すべきの仰を蒙り十八日上洛、尋いで十一月七日皇居の勤番を仰せ付けられ、且つ十二月晦日朝議參豫の命を拜せられたり。然るところ、翌元治元年正月七日在福井の茂昭公に皇居日御門の警衛と三ヶ月間の京詰との命ありたれば、乃ちこの請願に及びたるなり。

〔〕尙本文書に見ゆる御上洛とは、將軍德川家茂が上洛のことにして、家茂は是月八日海路大阪に着し、其の上洛二條城に入りしは十五日なり。而して十六日幕府は公に命じて隨時二條城に登營し、將軍の諮問に與らしめ、共に公武の一和に關し盡瘁せしめたり。

〔〕建白書類の原題には「越前守儀今般御上洛ニ付御先ニ爲御待受」とあるのみにて年代を明かにせざれども、今續再夢紀事其の他によりて之を考定し、改めてここに掲書せり。（奉書半切五尺八寸六分）

越前守（茂昭公）儀、今般
御上洛ニ付、御先ニ爲御待請上
京仕、御參
内被爲在候節供奉相勤度段奉願候處、願之通被　仰付難有仕合奉存候。其上

茂昭公日御門の番を勤む

慶永公茂昭公に代つて三ヶ

三ヶ月
京詰被　仰出、日暮嵯峨口御固被　仰付奉畏上　京仕候處、參
内濟、從傳奏御達御座候而、
日御門勤番被　仰出奉畏候ニ就而者、何分
日御門・日暮・嵯峨兩口御用相勤候而者、人數何分持場多ニ相成、割賦致兼當惑心
痛仕候ニ付、兩口之義御免奉願候處、昨十二日松平肥後守ゟ達有之、兩口御固御
免被　仰出、越前守始家來共ニ至候迄も難有安心仕候義ニ御座候。於私も誠
ニ以難有奉存候。其上彼是自由ヶ間敷候義奉願候而者、誠ニ以奉對
上重々恐入奉り候儀ニ而者御座候得共、越前守儀三ヶ月　京詰仕候義ハ當然之
事ニ候得共、父子滯京仕候而者、兼而難澁必至切迫之勝手向ニ御さ候へハ、終ニ
ハ御奉公筋も難相成、家中扶助も難出來次第ニ可相運哉と、實ニ當惑心痛仕候。
依之何卒越前守儀ハ、
御上洛御待請申上、御參
内之節供奉相勤候へハ、速ニ歸國之御暇被成下候儀ハ出來申間敷哉、左様相成
候へ者、三ヶ月詰之所者、伊達伊豫守同様私相勤心得候様相成り候へハ、別段三

月の京詰を勤めんと請ふ

ヶ月詰越前守代り大名不被仰付候而も相濟可申と奉存候。尤私三ヶ月詰相勤心得ニ候へ共、乍恐御不都合ニも相成申間敷哉、三ヶ月之任滿チ候へ共、是迄之通り在京仕居、御用筋相勤、決而任滿チ候迚歸國之御暇被下候ニ而不及候間、此段ハ何卒賢考被成下候樣奉願候。　徒ニ父子滯京仕罷在、國力疲弊財貨虚耗仕候而ハ、父子共不出數月之中、滯　京も重き御用筋も難相勤相成、不得止事歸國之御暇相願候樣相成候而ハ、奉對
朝廷、奉對　幕府、重々奉恐入候。　何卒越前守儀ハ前文之通り御參內供奉相勤候へハ、速ニ御暇被成下、自國海岸守衞、國務取締り、若州援兵等之手筈も、一際骨折盡力爲致、私儀ハ三ヶ月詰丈ヶ之所も相心得候樣仕度奉存候。
右之儀御內々御相談奉申上度候。
思召も不被成御座候事ニ候ハヽ、越前守方老中旅館へ罷越、內願書爲差出候方ニ御座候哉、又ハ從
上、供奉相勤候後速ニ御暇被成下候樣被命候義ニも候哉、右兩樣之內、尚又老中へも御內々被仰談、御指圖奉願候。　區々之衷情犯虎威奉仰高明之照察候。　恐惶謹言。

正月十二日　松平春嶽

十四　文久三年出府猶豫願

○この願書、建白書類の原題には「御相談之筋有之ニ付云云被仰出」とあるのみにして宛名年月日の記載なし。　但し何人かの附箋に「此御書面は少將公ヨリ幕府へ出サレシモノナルベシ、扨御書面ノ出タル年月ハ記載セラレサレ圧、御家譜ニ文久三亥年六月十六日少將公ニ御相談云云出府アルベキ旨奉書ヲ以テ仰サレシヿアンバ定テ此時ナルベシ」とあり。

今按ずるに、この願書に「最初攘夷拒絶之期限御請ニ相成候以來云云」とあるのは、將軍家茂が文久三年三月四日入洛し、五日參內、尋いで四月廿日に至り攘夷の期限を來る五月十日と定めんことを奉答せることとあれば、卽ちこのことに當るべく、次に「既ニ掃攘期限之儀、一橋殿御引請ニ而御東下有之候得共、不日ニ拒絕御取扱難被成段、御斷被仰立候趣追々傳承致候」とあるのは、是も亦同文久三年四月二十二日將軍後見職一橋慶喜が攘夷の勅諚を奉じて東下、五月八日江戶に歸着、五月十四日書を關白鷹司輔熙に上り、攘夷を行ふ能はざるを以て後見職を辭せんことを請ふことあり、卽ちこのことを指せるなるべし。　次に

清水様之御事ニ付云々之儀先生御出府早々出
府之後答之筈再応思召御座候ニ付通り先
日来持病之痛気未タ快難儀罷在候ニ付精々
療養有之方ニ候得共[illegible]居可被為[illegible]
何共当惑仕候心外之至難黙止候得共御顧慮被成下
候而之[illegible]ニ付[illegible]中ニ御願致候
七月[illegible]御伺候之上清水様御全快御出勤迄
之時日御猶予[illegible]極奉存候[illegible]
思召之程相伺度如此ニ御座候

「松平大膳大夫父子幕府ゝ命令ヲ不待して兵端を起し」とあるいは、萩藩主毛利慶親大膳大夫と其の世子毛利定廣が攘夷の期限五月十日に到れるを以て幕府の命を待ず其の五月十日に萩藩の軍艦庚申癸亥の二艦をして、豊前田ノ浦の沖に假泊せる米國の商船ペムブロークを砲撃せしことを指せるものにして、又「朝議直ニ近國ゝ諸大名に應援ミ勅を被傳候云ゝ」とあるは、其の五月七日三條中納言實美卿から禁闕御守衞兵のことが達せられ、幕府は之に由つて十萬石以上の諸侯に令して親兵の貢進を催促せることなどを指せるものなるべし。而して其の文面より推して、將軍家茂がまだ滯京中の時なれば、從つてこの請願書は文久三年五月の下旬から六月上旬にかけてのものなることは明かにして、附箋の推定誤なきに似たり。されば茂昭公の出府猶豫の願書を慶永公の建白書類中に收めたるは、是恐らくこの願書が慶永公の代作に係れるが爲なるべし。（半紙判罫紙四枚）

幕府茂昭公ニ出府を促す

御相談ゝ筋有之ニ付云々ゝ被仰出、奉畏早々出府可致筈ゝ處、再應及御屆置候通り、先日來持病ゝ脚氣相煩致難儀候ニ付、精々療養を加へ快氣次第出府可致心得ニて御座候得共、當此節心底難默止儀共不顧恐及言上置候て、今般出府ゝ上御相談被成度と申御趣意ハ、乍恐別儀ニて有御座間敷、全く當今切迫ゝ御時

公武不和の根元は外交問題たり

文久三年五月八日慶喜攘夷の勅諚を奉じて江戸に歸る

勢ニ就而之御事柄と恐察致候。抑天下之形勢を熟思默考致候處、素々公武之御間柄ニ無御據御隔意被爲出來候より、漸々今日之御場合ニ被爲迫候儀ハ、千緒萬端其所以可有御座哉ニ候得共、根元と申ハ、都而外國御取扱之一途ニ歸し候と奉存候。就夫既ニ二百有餘年之廢典をも被爲興、御上洛之上、御尊奉を被爲盡候而、外面一段御合體之御姿ニハ相見江候得共、第一外國之御所置ニ於而、都而叡慮之儘ニ御布告有之候共、却而御內實御同意ニ無之儀ハ、天下擧而注目洞觀致し居候。則事實を推而相窺候ニ、最初攘夷拒絕之期限御請ニ相成候以來、叡慮ハ少しも不被爲替、彌增御切迫之勅諚ニ付、既ニ掃攘期限之儀、一橋殿御引請ニ而御東下有之候得共、不日ニ拒絕御取扱難被成段、御斷被仰立候趣追々傳承致候ニ付而ハ、乍恐御上洛中、攘夷之儀惣而何等之御異議不被爲　在候共、今度還御被爲在候上ハ、必定廟算一橋殿御同轍ニ可被爲出と、天下人心疑懼寒心罷在候。則攘夷拒絕一件ニ付而ハ、屢區々之鄙衷及建言置候通り、今更敢而異案別策可有之樣も無御座候。如何ニ爲今日天下蒼生之塗炭ニ不被爲忍候迚、

攘夷の期限を約して行はざれば違勅に當らん

萩藩米國商船を砲撃す

禁闕守衛の兵を諸藩に徵す

攝海に來寇と京都の危急

福井藩は

還御之上忽攘夷之儀御斷被仰上候得共、乍恐違勅之御罪譴被爲負候ニ相當可申哉、將又勅諚被爲　重候迚、無謀之掃攘被爲決候而者、御代々將軍之御職掌被爲襲、上天子下萬民を泰山之安ニ被爲措候御筋合も難相立、事之爰ニ至り實ニ御進退被爲極候御儀、切齒血涙之至ニ御座候。加之松平大膳大夫父子　幕府之命令を不待して兵端を起シ、朝議直ニ近國之諸大名江應援之　勅を被傳候趣相聞江、廟算如何可被爲在哉不相辨候得共、所詮此體ニ而ハ、關西關東既ニ及隔絕、天下之勢隱然と四分五裂之地位を成し、臣子之分此境ニ臨ミ、更ニ其處置を難得、惶恐躊躇罷在候。右長州之戰爭ニ付而者、彌以攝海來寇之期、何時とも難計、帝都之危急不可言之變ニも可被爲運哉、其期ニ至り千萬噬臍共不及儀と存詰候得共、御祖宗之御深意を以、祖先以來帝都近くに藩屛ニ被指置候御旨ニ對し奉り、眼前危急之

帝都の守衛に當らん

帝都を指置、他に擧動可致義には更に難相心得、不測の事變次第、速に致上京、菲材微力をも不顧、抛身命
皇國の御爲に寸志を可遂事に覺悟致し罷在候。於然は、追々持病順快致候共、當分出府の儀は御猶豫被成下候樣伏而奉願候。右樣御猶豫相願候上は、無二の親藩に罷在、今日の形迹不當の筋にも相聞え可申哉、重々恐入候得共、前條
御祖宗の御深意に對し、覺悟罷在候義は
皇國の御爲は勿論
御家の御爲を存詰候而の儀に、幾重にも厚御憐察被下度、此段兼而及言上置候事に御座候。誠恐誠惶。

十五　明治元年閏四月岩倉右兵衛督への密啓

○この密啓は、建白書類の原題には「密啓」とのみありて年月を缺如せるも、其の

大久保一翁を以て田安龜之助の後見となさんとす

文面より推して明治元年閏四月のものたる明かなり。而して「昨日愚衷申上候」とある愚衷は、下に收むる建言集記の明治元年閏四月十日岩倉公に提出せられたる建白書（四〇）を指せるなるべし。

○尚三條實美の關東監察使として江戸に下り、徳川氏處分の命を受けたるは同年閏四月十日にして、江戸着後、勅旨を田安龜之助（達家）に傳へて徳川の宗家を承かしめしことは同月二十九日なり。（半紙一枚）

密啓

田安龜之助後見大久保（忠寛）一翁へ被命候儀、昨日愚衷申上候。其後尚又令熟考候處、三條殿御東下ニ上從
靜寬院（和宮）宮御願被爲出來候て、一翁後見被命候へハ、上都合ニ候得共、若万々一、田安中納言抔或ハ天璋院等ゟ故障を入レ候て、
靜寬院宮御願六ヶ敷義等立至り候ハヽ、御委任被爲在候　三條殿故、其節ハ斷然以
叡慮、一翁へ龜之助後見被仰出候
御沙汰書被指出候樣仕度奉存候。一翁も復飾ニ上、先官位越中守従五位下被復候樣

被
仰出候へハ、當人盡力もいゝし易く、格別難有可奉存候。此段早々三條殿へ被仰入ニ仕度、乍序令言上候。頓首々々謹言

右兵衛督殿　慶永

密啓

十六　慶應三年七月英國公使土佐國へ罷越ニ付山内容堂江の御直書

（この御直書は英國軍艦「イカルス」號水夫暗殺事件に關するものなれば其の慶應三年のものなる明かなり。）

福岡藩士某英國水夫殺害の件

一翰奉拜啓候、秋熱難堪御座候處、先以賢臺愈御清祥被成御起居奉壽候。陳ハ昨廿八日徵　命有之午後登　營候處、直ニ　拜謁被　命候而御沙汰被爲在候ハ、今度英國公使北海より攝海へ相廻候序ニ崎陽へ立寄候處、英人害殺ニ折柄ニ有之、公使其次第を承り糺し、直ニ攝海入投錨、老中へ申立候ハ、殺人ハ土藩ニ相

下手人は土佐人なりとの說

幕府內旨を慶永公に傳へて土佐藩に善處せしむ

違無之間（貴國横笛と申御手船ニ乘組居候者之由）是非公使幷水師提督、土國へ罷越手嚴敷應接致度、依之、早々土國行之儀差許呉候樣いたし度と申立候而、甚心痛ミ次第ニ候。彌公使等罷越候事ニ相成候へハ、應接之次第ニより、先年薩英之如き戰爭等引起し候樣相成候半も難計、左候而ハ容堂之苦心ハ不及申、土國幾万之生靈ニ關係不容易事と申、結局如何成騷亂ニ可相運哉、實ニ重大之事件ニ付、公使初土國へ罷越候事ハ先々留置候。圖書頭始三人土州へ遣し、穩便事濟相成候樣篤と熟談いたさせ候積ニ候。爲夫伊賀守も大阪へ殘し置候。共上勘考之處、此度ハ幕府へ對シ嚴敷申立候と申廉ニハ無之候得共、事之次第ニより、是非土國危難ニも可立至形勢ニ而、何共不堪杞憂奉存候。兼而忠實無私之容堂と申、格別懇意ニも有之、萬一紛擾を起し候樣相成候而ハ、實ニ不忍坐視事故、此度ハ容堂格別之盡力を以、早々遂吟味、妄殺人土藩ニ相違無之候ハヽ、條約面之通、立派ニ所置致候樣有之度、左すれハ外國江之信義も相立、土國も平穩ニて可相濟、於我等も如何計り安心之事ニ候。尤圖書頭始遣し候も、右之趣意ニ而、決て責問等之譯ニハ無之候。大藏大輔ニハ、容堂とハ兼而懇交いたし居事ゆへ、此義申遣し、我等案勞之內情徹底候樣いたし度候との御內談ニ御座候。老生も御懇厚

ゝ御禮申上、御趣意奉畏、早速賢臺へ申遣候樣可仕と御請仕退出候。依之今日參邸ゝ上、賢弟へも此段御相談申上、幷御重役へも可申談と存候而、昨夜賢弟へ以寸書參邸ゝ儀伺候處、折惡敷御所勞ニ付御斷り、不得止御重役召呼委細申談候事ニ候。尙御重役ゟも言上可仕奉存候。伏而希くハ賢臺大樹公御懇切ゝ御親情御體認ゝ上、十二分ゝ御盡力を以、明白ゝ御所分被爲在度候。左なく候てハ、貴國危殆生民塗炭而已ならす、次第ニより皇國ゝ動靜ニも關係可致義と不堪悲泣、知己ゝ僕輩も實ニ憂痛不啻奉存候。貴國兼而ゝ士氣と申、猶更御痛心ゝ御次第と不堪痛察候。此段早々及拜啓候。書ハ不盡言區々ゝ意衷、仰高明ゝ御亮察候。至急ゝ用事如斯、書外平生ゝ心緒も期他日ゝ鴻候。早々頓首

七月廿九日

辱弟　慶永

悲泣拜上

容堂老盟臺

玉几下

十七　慶應四年八月廿日會桑庄内等の處分に關し岩倉具視への答書

（この答書は、輔相岩倉具視が奥羽平定後の參考として慶永公に其意見を徴したる時の答申書にして、同年十二月七日詔を以て奥羽の諸藩を處分せられたる時、會津藩松平容保の處分書に「乾度可被處嚴刑之處、至仁非常之寛斷ヲ以テ死一等ヲ減ジ池田中將へ永預ケ被仰附候事」とあり。尚次の第二十號の「會津御處置之義尚又及再考」を參看すべし。（半切卷紙六尺三寸二分）

会津桑名庄内降伏後の處分に就いて

（裏端書）
「慶應四年戊辰八月廿日岩倉卿へ差出」

會津桑名庄内、結局及降伏候ハヽ、如何可被處哉之御尋被爲在、以封書所存奉言上候樣奉敬承候。右三藩、悔悟謝罪輕重淺深之次第柄により、

御所置之品も被爲定候儀ニ而、只今より至當之

御所置、是ト相定難申上候得共、愚衷尚又左ニ奉拜陳候。

會津に對する意見

一會津君臣眞ニ彌、悔悟恭順謝罪之道相立候ハヽ、何レ

朝廷至仁至慈之典ニ行ハレ度奉存候。乍去、大垣若州共他之侯伯之如キハ、伏

文久二年以來京都の政權を握る

愚直頑固終に事を誤る

奧羽戰爭は會津の煽動なり

水ノ戰爭、事蒼卒ニ際ニ起リ、一時奉抗　官軍候而、
朝敵ノ名ヲ負ヒ、悔悟謝罪ノ道相立チ、
御寛大ノ　御所置トハ同日ノ論ニアラスト奉存候。　別而如會津ハ、去ル戊年
守護職以來攝關ヲ十分手ニ入レ、朝彦ヘ諸事入說、
朝廷ノ政令實ハ其掌握ニ落チ、有志ノ搢紳諸侯草莽ノ者ト雖、言路已ニ壅塞シ、
天下ノ怨憤欝積ス。　徳川慶喜亦會ノ愚直頑固ニハ甚迷惑、コレヲ制馭スル不
能ヲ嘆シ、此上モ會ト手切レヨリ外ナシト慶永ヘ話候義も有之、別而昨冬
御一新ノ際、渾而會ノ愚直より、徳川氏事を誤リ候メ立到リ、伏水等ノ如キ、慶喜
ノ罪ニモ有之候得共、其實全ク會津ノ爲メ煽惑セラレ、且
大總督宮御東下後慶喜恭順謝罪ノ道相立、寛大ノ
叡旨ヲ以、徳川氏家名相續祿高被仰出候得共、今日迄奧羽東北戰爭不相止、諸侯
疲弊蒼生苦塗炭候モ、全ク會ノ爲メ天下ノ人民苦められ候儀、別而仙米ノ諸藩
ヲ始、奧羽大半會ノ煽動ニ遭、勤
王ノ道ヲ忘却ス。　此滔天ノ罪イカテ可許哉、乍去眞ニ悟既往ノ罪責謝罪候ハ
ヽ

一に朝廷の至仁を仰くのみ

朝廷至仁ノ
聖旨ヲ以、格別ノ寛大ノ典ニ被爲行、肥後義ハ蟄居、養子若狹ヘ多少祿被下置、是迄於
京師樞密ニ關セル者ハ、相當ノ所置有之度候事。
但所替ノ儀モ、其時ノ宜キニ任ス。祿高何レ減スベシ。血食ヲ繼カレ候ハヽ、實ニ難有事と奉存候。

桑名に對する意見

桑名
御所置ノ儀ハ、先般
御沙汰書を以被
仰出候樣奉存候。右
御沙汰書ノ表ヲ以、被任　公議可然奉存候。

庄内に對する意見

庄内
御所置ノ儀は、御尋ニ候得共、元來庄内ノ罪惡十分承知不仕候故、何とも難申上候。

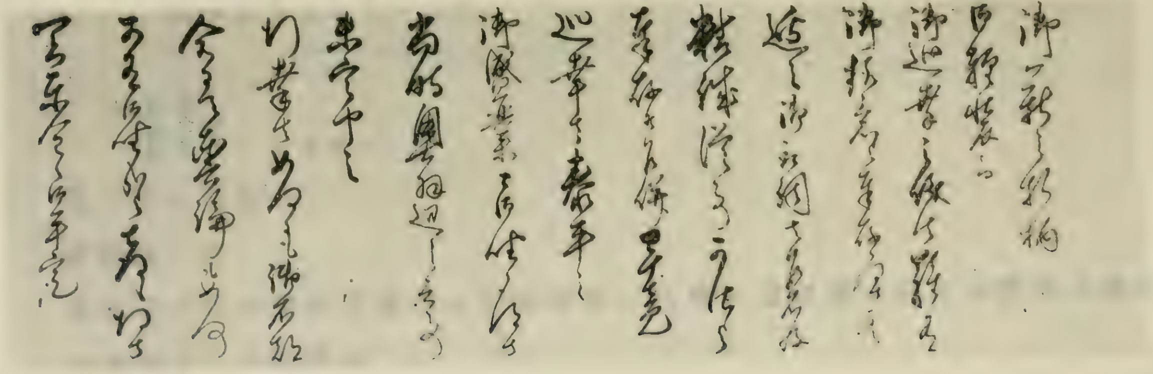
仙臺と米澤

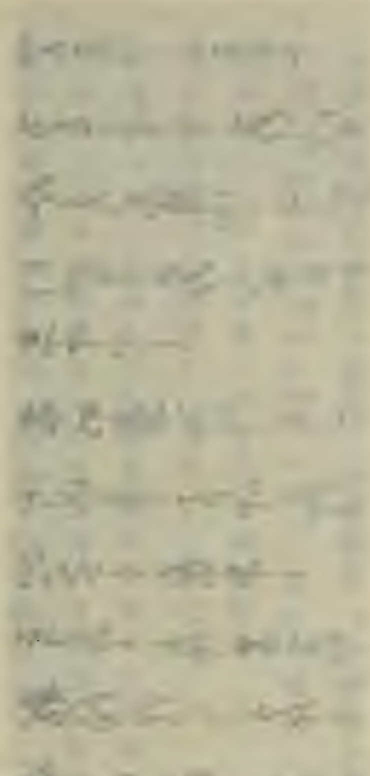
仙米ノ儀ハ、會津ニ煽惑セラレ、奉抗

官軍候罪、深重ニ可有之候得共、眞ニ悔悟謝罪、降伏相立、勤
王ノ實効著ハレ候ハヽ、
朝廷ニ於テ者至仁ノ
叡慮を被爲　垂、寛典ニ被處、陸奥彈正隱居、又ハ蟄居ニテ、先祖中納言政宗、彈正
大弼輝虎、謙信ノ功績ヲ被爲　思召、養子へ家督被下置、本領安堵、〇下札に「仙米本領安堵養子ニ家督被　仰出候ハヽ、兩侯へ相當之御用全可被　仰付事と奉存候事」とあり　重臣ノ者抗
官軍候輩ハ、夫々至當ノ刑ニ行ヒ候樣被
仰出、秋田萬之助同樣とハ不參トモ可宜候、
此邊前條申上候通り、悔悟謝罪淺深輕重ノ次第柄ニより、
御所置ノ品も可相極、何レ共節公議ヲ以被爲定候樣仕度候。慶永愚存ノ趣
御尋ニ付不顧忌諱奉言上候也。恐惶謹言

八月廿日

慶永





御巡幸は泰平の盛業なり

奥羽兵亂中關東に行幸は如何

十八　明治元年七月御東幸ニ付建白

○この建白書は、建白書類の原題には「御一新之折柄御輕裝ニ而御巡幸」とあれども適當ならざれば今改めたり。即ち是歳九月二十日車駕京都を發して御東幸の途に就かせらるるに先ち、七月二十二日岩倉公よりの御沙汰にて執筆せられたるものなるが、今戊辰日記によれば御都合にて提出なかりし趣なり。

（奉書卷紙八尺三寸二分）

（裏端書）

「御自筆

御東幸ニ付御建白」

御一新之折柄、

御輕裝ニ而

御巡幸之儀ハ、難有御趣意ト奉存候得ハ、其邊之御取調ハ乍不及、精誠從事可仕

ト奉存候。乍併畢竟

巡幸ハ、泰平之

御盛業ニ御座候得ハ、當時奥羽邊之兵事未定中之

行幸ハ、如何ニも御不都合ニて、輿論も如何可有御座哉ト奉存候得ハ、關東早く

御平定、

輪王寺宮に關する風說

眼前の小惠は却て大德の累とならん

御成功ノ上ニ被遊候方、御至當と奉存候事。
一已前と違ひ、方今ハ外國も間近く傍觀仕居候義と申、何ゟ不穩ノ巷說も相聞候折柄ニ候得ハ、旁以今暫く時勢御見据ノ上、被仰出候方御至當と奉存候事。
一東賊ノ內ニハ、頗强暴ノ徒も有之哉ニて、已ニ輪王寺宮ハ錦旗ヲ何山ニ被建候而、奧羽ノ諸侯を朝せしむる抔ノ風聞も有之候程ノ儀に候得ハ、遠程ノ
行幸御途中も、何トやら懸念奉存候事。
一御眞率ノ御趣意ニて
龍駕ノ被爲到候處ハ、夫々
御恩澤を蒙候御施設等有之、一時歎聲相聞候樣ニ而も、全國兵禍ニ苦ミ、諸侯ノ軍費悉く下民ノ膏血ゟ出候事ニて、怨嗟滿地ノ景況ニ候得ハ、眼前ノ御小惠ハ、却而
御大德ノ御累とも可相成儀と奉存候事。
一慶永御案事申上候條々如右御座候得共、
行幸被爲在候得ハ、東國ノ干戈も鎭靜ニ歸シ、蒼生も塗炭を免れ、覆載ノ

王化在地ニ行はれ、萬姓悦服仕候。慥成御定見被爲在候御義ニ候へハ、是も一時之御權宜ニ而、別段之御事柄とも奉存候得共、王事ニ權道を被用候義は、御好ミ不被遊様仕度義と奉存候。何分兵亂中御先急

行幸被爲在候

御主意、慶永之愚昧も了解仕候様、判然たる御條理相伺候上ならてハ、御尤と御同意申上候義ハ難仕奉存候事。

十九　明治二年正月再度御東幸國是御確立の御下問に對する御答書

○この御答書は、建白書類の原題には「今般御東幸天下之群牧被爲召」とあるのみにて年月日を明にせず。されど文意より推して明治二年正月輿論公議に依り國是を定めんとせられし時の御下問奉答書なること疑なし。今其の控書によりて收錄せり。（奉書半切五尺六寸七分）尙後收の建言集記（**四八**）（**四九**）

の兩文書を參照すべし。

（裏端書）
「御東幸ニ付御下問御答書」

今般
御東幸、天下之群牧被爲
召、輿論公議ヲモツテ國是ヽ大基礎可被爲建
聖慮ニ付テハ、此地
御發輦前、アラカシメ議參、盡考慮、
御評議可相成條件ヲ記シ差出候樣
御命ニ付、臣不顧駑鈍以テ奉對答
御下問候。

國是御評議の條件

一御制度御創立ノ事

御制度御創立のこと

臣伏テ惟ルニ
皇政一新以來、夫々

今般
御東幸天下之君牧被爲
召衆論ヲ議シモツテ國是之
大基礎可被爲建
聖慮ニ付テハ此地
御發輦前アラマシ議參盡
考慮
御評議可相成条件ヲ記シ出
出ス様
御命ニ付臣不顧駑馬鈍以テ奉
對答
御下問候

一御制度御創立之事
臣伏テ惟ルニ
皇政一新以来夫々
御制度御規則萬端相立
御政體既ニ相定戦制御改
正被爲在候得共兵馬蒼
皇中ノコトニシテイマタ完善ノ
因キヲツクサヽルニイタルコレマタヤ
ムヲ不得ノモノナリ北陸粗平定
干戈已ニ収マル此際即大機ノ
會日一新ノ皇張セサルヲ不得故ニ
聖上ノ
御東臨ヲ以期トス大小侯伯各公
論ヲ奏シ議事院公平ノ會議
ニヨリ
御制度諸端

御制度御規則萬端相立、御政體既ニ相定、職制御改正被爲　在候得共、兵馬蒼皇中ノコトニシテ、イマタ完善ノ宜キヲツクサヾルニイタル、コレマタヤムヲ不得モノナリ。北陲粗平定、干戈已ニ收マル、此際卽大機會一新皇張セサルヲ不得、故ニ
聖上ノ
御東臨ヲ以期トス、大小侯伯各公論ヲ奏シ、議事院公平ノ會議ニヨリ、
御制度諸端

公議の正論と施行の緩急

御造立勿論ニ候得共、臣聊コヽニ見ル所アリ。侯伯公議、或會議必正直ノ論ナルヘシ。於時勢行ハレサルヿモアルヘキ歟、緩急遲速其宜キヲ得サレバ却テ大ナル妨害ヲ生スヘシ。ヨッテ天下衆議一定ノ後、議參商量考思ヲツクシ、遲速緩急コレヲ議シ、其行フヘキヲ採リ、其行ハレサルヲ後ニシ、其施行スヘキヲ謹上シ、尙補相コレヲ三復九思シ、奉乞
宸斷、國是大基礎
御決定被爲在度事。

皇國大基礎のこと

一皇國大基礎ノ事

我國體は世界に冠絶

外國に心酔するを警む

唯外國の長を採らんのみ

臣伏テ惟ルニ
天祖神器ヲ
瓊尊ニ傳授以來幾千歳、今日ノ久キニイタルマテ一系ノ
皇統綿々、萬姓仰之如日月、
皇國ノ尊重、實ニ地毬ニ冠絶ス。海外諸國ノ敢比肩スヘキニアラス。然レ圧
文物制度學術諸端等ノ事ニ至ツテハ、海外諸國ノ盛大ニシカス。ユヘニ、コレヲ海外ヨリ採取セサルヲ不得、コレマタ衆人ノ明白所知ナリ。臣コヽヲモツテ考フルニ、方今
皇政維新ノ際會ニ遭遇シ、ヤヽモスレバ外國ノ事ニノミ拘泥心酔シテ、
皇國ノ文物制度、コト〳〵ク長スル所ナシ、只管外國ノ制度ヲノミ景慕シ、コト〳〵ク外國ニ傚ヒ、彼ノ長短分辨セスシテ、皆採擇シテ
皇國コレヲ以テ大基礎ヲ定メンヿヲ志願スルモノモ亦不少トオモヘリ。臣ノ所考ハシカラス、
皇國素長アリ、モトヨリ短アリ、外國モトヨリ長アリ、素短アリ、我ノ長セル所ハ可成丈ケ採用シ、其短ナル所ヲ棄テ、彼ノ長スル所ヲ補ヒ、宜クコレヲ公平折衷

シテ、モツテ

皇國ノ大基礎ヲ決定センヿヲ希フ。臣コヽニ著眼シテ目的ヲコヽニ立ツ、希

百官有司、彼ニ拘泥心酔セスシテ、其短長ヲ明白ニ解剖シ、一ニ奉感戴

聖懐、同心戮力勵精有之度候事。

一人材御擢用ノ事

人材御擢用のこと

臣伏テ惟ルニ、刑賞與奪ハ人主ノ大權タリ。大權ヲ天下ニ施ス、モトヨリ人材ヲ登用シテ擢任センハアルヘカラス。然レ𪜈人材必大用トナリ、或ハ妨害トナル、天下ノ治否人材擢任ノ當否ニアリ、愼マスンバアルヘカラズ。ユヘニ益人材ヲ精撰シ、其長所ニ適スル職掌ヲ充ツルヲ要ス。タトヒ、人材トイヘ𪜈、無君父倫常ニ闕缺スルモノハ、コレヲ廟廷ニ登用スルヲ嚴禁ス。願只才力捷敏、智慧卓絶ノミニ不限、溫厚篤實ナルモノヲモ擧用セラレンヿヲ希フ。臣常ニ志願スル所ヲ記ス。

會計ノ事

外國交際ノ事

海陸軍ノ事

府縣ノ事

二十　明治元年會津處分ニ付再願

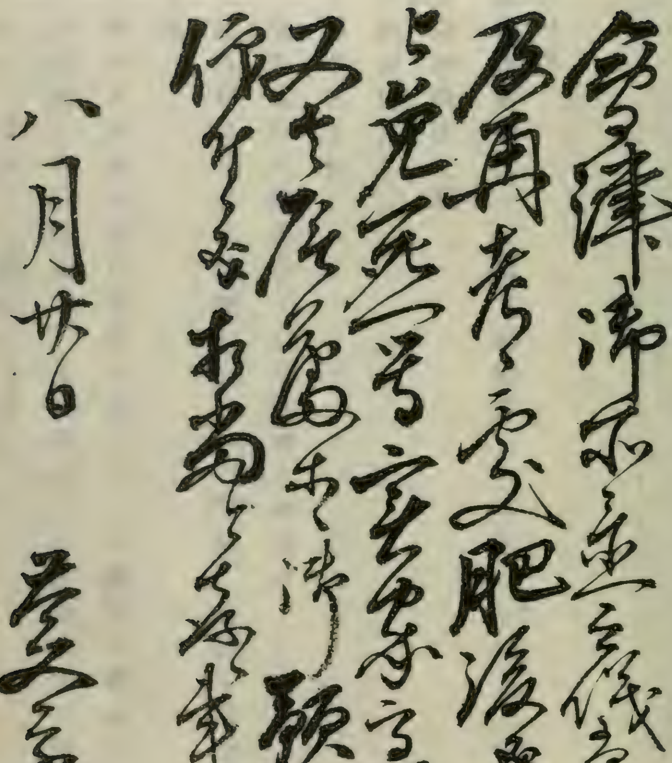
〔一〕この願書は前掲第十七號の答書提出後の再考に係るものなり。（半切一枚）

會津御所置之儀、尚又及再考候處、肥後義ハ被免死一等、實家高須、又ハ尾藩等へ御預被　仰付候義、相當と奉存候事。

八月廿日　慶永

二十一　明治元年十一月東北諸藩の處置に關する奉答書

〇曩に東北諸藩の處置に關し、議定參與等に其の意見を具申（十七・廿）せしめ、更に十一月四日奥羽の平定せるを以て、重ねて其の所存を錄上せしめたり。こ


八月廿日



の奉答書は卽ちこの時のものにして、建白書類の原題には「戊辰十一月四日奥羽諸賊降伏ニ付御下問御答」とあり。（奉書半切五尺六寸）

（裏端書）
「御自筆」奥羽諸賊降伏ニ付御下問御答」

○附箋に「戊辰十一月四日」とあり

奥羽諸賊降伏之輩

御所置振、依

御下問奉言上候。

仙臺之儀者、當四月陸奥養子左京歸國之砌、深厚

勅諭之趣も有之。且又陸奥江（太政官日誌第九號）被　仰出も有之、旁以東國之雄藩、第

一ニ遵奉

勅意シ、諸賊ヲ討伐シ、或者降伏ヲ誘引スヘク處、却テ到抗

王師、力盡彈盡キテ以降伏ス。其實降伏トイヒカタシ。然レ𪜈

朝廷至仁ノ　寛典ヲ以、祖先之功勞被

思召、養子左京へ多少ノ祿秩ヲ賜、轉封被　仰付候而者、如何可有之候哉。

陸奥蟄居、罪魁重臣御所置ノ事。

但左京賜祿之義、被存血食候迄ナリ。

會津藩

會津

先般奉申上候通り、只天下之罪魁、餘り之御寛典ニ而ハ却而不可然候事。

但、萬一被存血食候ハヽ、蝦夷等賜り候而ハ如何。

浪人出來可申、何分此御所置、被爲得至當度事。

庄内藩

庄内

等級ヲイヘハ、會ニ繼タル罪魁、當主隱居、若州御預ケ、被存血食候ハヽ、蝦夷等之僻遠ニテ、聊采地ヲ賜リ候テハ如何。

其の他諸藩

其餘歸降ノ諸藩。

御所置無異存候。コレ委曲之情狀ヲ不得ルト、不才之所致ニ御座候。此外別ニ可奉言上事件無御座候。以上

十一月四日　　慶永

二白是等ノ儀、他迄盡公議、事理當然ノ御所置ヲ被爲得度事。

米澤藩

米澤

會仙庄ノ三賊ニ比シ候テハ、其罪輕シ。
御寛典被爲在度候事。

二十二　明治元年九月大久保一翁への內書

○是より先、閏四月二十九日田安龜之助家達をして德川の宗家を繼がしめ、尋いて五月廿四日駿河府中に封じ、七十萬石を賜ふの敕諚あり。書中、興山公とあるは、卽ち慶喜のことにして、慶喜久しく水戸弘道館に謹愼中なりしが、是歲七月十九日水戸を發して二十三日駿府に着し以來同地寶臺院に幽居せり。大久保一翁、名は忠寛、左近將監、伊勢守越中守と稱す。幕府の重職に歷任し、明治元年正月松平康直の後を受けて幕府會計の總裁となり、二月八日若年寄に轉補、尋いて中老と改まり、勝義邦等と共に公武の間に在りて最も其の周旋に盡力せり。其の後八月九日宗家の主龜之助に從ひて駿府に移る。故にこの時は駿府に在住せり。（美濃紙二枚）

「明治元年九月十五日夜大久保一翁老へ御內書案」（裏書）

使者永田儀平

今般江戶へ家來永田儀平差越候ニ付、一寸貴家へ爲立寄申候ゆへ、一筆申入候。
冷氣追々增加之處、先以
興山公御當主樣益　御機嫌能被爲入奉恐悅候。隨而足下愈御安全珍重之至ニ候。下官義も碌々無異在職罷在候條、乍憚御放念可被下候。扨又、春來ニ不可言之大艱難、實ニ古來ニも不可比絕言語候次第まて、泣血恐入候外無之候。嘸々興山公之御苦痛萬々ハ、乍恐奉深察恐入候。先々爲天下御恭順十分被爲盡候ゆへ、先々宗家之社稷不墜地　當公へ御相續被　仰出、乍聊御祿高も相極り、乍切齒中聊安堵難有奉存候。興山公之御恭順御貫徹相成候ハ勿論之義ニ候へ共、足下飛川等之御大盡力故と追々承之、爲　宗家不堪感激之至候。春來每々御書通も被下候得共、何分從

徳川家の家名相續を祝す

朝廷往來留ニ相成居、且ハ議定相勤居候故、旁以乍不本意御疎遠打過し申候。只今と相成候而ハ、先足下之書通位ハ宜哉ニ被考申候故、御安否承旁呈書之事ニ候。興山公此頃御消閑之義如何被爲在候哉、御所も替、嘸々御無聊御不自由、萬々奉遙察候。爲天下折角御愛重被爲在度候。過日東鴻まて承候得ハ、御領

祿高の下

賜を賀す

地も駿遠參之地まて出、清水領も十一萬石餘御預ヶ被　仰出、全飛川之盡力と申事ニ候而、寄難有奉存候。儀平御内々差出候間、一寸　興山公御機嫌伺書差出申候間、宜御取計被下度、何そ獻物と存候得共、品物ニ而ハ目立候故、乍失敬代料まて差出候まゝ、　御肴御差上可給候。誠ニゝゝ恐入候餘り、此書狀足下へ差出候も不堪怖懼之至候。當今と相成候而ハ、　皇國之維持大切まて、外國ニ不被有工夫之外無之、別而下官汚重職候事故、乍不及爲　皇國大基本相立國内早ふ平定相成候苦慮耳ニ御座候。御心付之義も候ハゝ、幾重ニも御教示希入候。足下飛川も又不啻　德川、爲　皇國御心付之義ハ江戸役人へ御申立可被下候。

慶喜公に物を贈る

御出輦廿日と被　仰出候。其餘無別條、意長紙短態と令閣筆候。書餘期後日之好便候也。

京都御發輦の日を報ず

明治元年九月十五日夜第九字於洛東客邸　　越前〇〇〇

淮一翁老杖足下

尚々乍麁末此茶足下ニ令進覽候、御笑留可被下候。時是冷氣、爲天下御自愛

令專一ニ候也。

二十三　明治元年二月上孝經參釋表

〇孝經參釋一卷、慶應四年の刊行に係り、舊上野沼田藩儒川崎魯齋の釋補するところ、秋月種樹と土岐賴之沼田藩主との序を載せたり。（奉書半切三尺一寸三分）而して獻上の後、秋月種樹より之を感謝せる書狀あり、左に掲げて參考に供す。

（奉書紙一枚）

（裏端書）「慶應四年戊辰二月十三日」

種樹頓首再拜謹復

宰相越前公閣下種樹嘗序孝經參釋、獻諸

閣下、々々一閱、以爲有用不可欠之書、又日呈

亞相茱公、將供乙夜之

御覽、

上表下際詳領其由、嗚乎種樹何幸荷此至榮也、雖然賤名誤達

九重、恐懼屏營不知所爲、特逡巡而已、夫我邦立敎、以孝爲首、古先

種樹頓首再拜謹復

宰相趙前公閣下 種樹 嘗序李經參輝

獻諸

閣下、、一閱以為有因不可久之書又

呈

亟相某公將供乙夜之

御覽

上表下眎詳領其由嗚呼 種樹 何幸得此

至榮也雖然賤名誤達

也寔恐懼所當不知所為特逡巡却已大哉

邦立教以孝為首古先

帝王暨下

詔勸之勤有所緩讀有感于此也今 種樹 雖賤道

則鄭氏斯道達

至萬歲 國家之全寔也

王政之基本也何喜如焉 種樹 頓首再拜謹復

帝王履下
詔勸之、鄙序所綴實有感乎此也、今種樹雖賤、道則尊矣、斯道達
至尊、實　國家之大幸也、
王政之基本也、何喜加旃、種樹頓首再拜謹復、

（裏端書）
「孝經御獻上」

上

孝經參釋表

臣慶永謹奉言上候。今般臣右京亮秋月種樹、上　京仕候而、臣ニ孝經參釋一本ヲ送リ候。臣披閲仕候處、有用不可闕ノ書ト奉存候故、別ニ一本及所望、兩亞相公迄奉呈上候。自然被爲供乙夜之
天覽候ハヽ、乍恐　御裨益ニ茂可相成歟ト奉存候。臣慶永實恐實惶頓首々々
謹言百拜。

二月十二日　慶永

中山前大納言殿

正親町三條前大納言殿

二十四　明治二年五月皇道興隆の勅問に對する奉答書

○明治二年五月廿一日皇道興隆のことに關し勅問あり。この書は其の奉答書なり。(美濃紙八枚)今左に勅問の原文を記して參考に供す。(本書半切木版)

我
皇國
天神
天祖極ヲ立基ヲ開キ給ヒシヨリ
列聖相承天工ニ代リ天職ヲ治メ祭政維一上下同心治教上ニ明ニシテ風俗下
ニ美シク
皇道昭々萬國ニ卓越ス然ルニ中世以降人心偸薄外教コレニ乘シ
皇道ノ陵夷終ニ近時ノ甚キニ至ル天運循環今日維新ノ時ニ及ヘリ然トモ紀綱
未タ恢張セス治教未タ浹洽ナラス是
皇道ノ昭々ナラサルニ由トコロト深ク、

御苦慮被爲遊今度祭政一致
天祖以來固有之
皇道復興被爲在億兆ノ蒼生報本反始ノ義ヲ重シ敢テ外誘ニ蠱惑セラレス方
嚮一定治教浹洽候樣被爲遊度
思召候其施爲之方各意見無忌憚可申出候事

五月

（表紙の端書）
「五月廿一日
御下問」

祭は政政は祭なり

祭政一致ノ
勅問臣實ニ感激謹畏之至リニシテ、
陛下之
聖慮、今日コヽニ及フ、天下ノ幸甚タリ。夫、政ヲ祭事ト訓スレハ、祭ハ政、政ハ祭
ナリ。希クハ
天祖ノ
聖慮ヲ以テ

聖慮ト被爲遊、
天祖
皇孫ニ授與シ玉フ　三種ノ神器、知仁勇ニ擬セラルヽヨシ、臣常ニ傳承仕候。

三種の神器と知仁勇

此知仁勇ノ
聖慮ヲ深ク被爲在
御體認、
皇國中土地人民ハ勿論、一草一木ヨリシテ萬物コト／＼ク
天祖ノ物ニアラサルハナシ。雖

皇國中の萬物は天祖の所有なり

陛下コレヲ私有シ玉ヒテ、
陛下ノ物ト不被爲
思召、カルカユヘニ
皇政
御親裁被爲在候モ、
御深重
御思惟有之、一草一木損傷ス、即

天祖の物を損傷すべからず

是祭政一致の基

陛下に奉する尙天祖に仕へ奉るが如し

天祖ノ物ヲ損傷スルト
思召サレ度、此
聖慮ヲ、群臣奉戴シテ、常ニ樞務ヲ議スレハ、凡テ
公平明白、一箇ノ私ヲ挾ムルヲ恥ルニ至ルベシ。
コレ便
祭政一致之基タリ。 徒ニ
神社ヲ煥麗シ、祈禱奉幣ノ類ニアラス。 此
聖明之政行ハル、天下萬姓
陛下ニ奉ズル
天祖ニツカウマツルカコトシ。 日新月盛、風俗淳美質朴、蓋
神世ニ異ナルナカルヘシ。 澆季浮薄之陋習消滅シ、始テ地毬冠絕スル富强最
大ノ
皇國トナルベシ。 ハシメテ潮沫凝結之各邦、仰
聖化、今日ノ艱苦ハ滅却シテ、以テ雖海外强國、我掌握ニ落ツ、何ソ蝦夷ヲ患ヘン、
何ソ英佛ヲ患ヘン、

是皇國萬安の基

皇國萬安ノ基礎コヽニアルカ。臣實ニ犯宸嚴、不堪怖懼戰汗之至、誠恐誠惶頓首々々百拜、俟斧鉞謹奉奏對。

五月廿四日

民部官知事
臣慶永

二十五　明治二年八月廣澤眞臣への愚衷

○是より先明治二年五月十五日公は民部官知事に、廣澤眞臣は其の副知事に補せられ、次で七月八日大政官官制の改定により、公は民部卿に廣澤眞臣は民部大輔に改補せられたり。この時大藏省は其の長官卿の闕を以て、大隈重信を大藏大輔に補したりしが、偶〻七月二十二日重信を民部大輔に轉じ、翌二十三日廣澤眞臣を參議に轉補せり。斯くして八月十一日民部・大藏二省の併合となり、公は民部・大藏兩卿の兼務、重信も亦民部・大藏兩大輔を兼ぬることになりたり。この愚衷はこの時廣澤眞臣に與へて、公が當時の心境を披瀝せられ

たるものなるべし。扣へ書は楷體を以て半紙四枚に認め、終りに「香西成持參」とあり。香西成は當時の家令なり。

愚衷

民部卿の重責

慶永天資庸劣、加之才短ク徳薄シ、謬テ天下ノ望ヲ屬セラレ、遂ニ蒙無上之聖寵、別テ一昨冬以來、屢辱大任。才徳淺少、實ニ其任ヲ負擔スルヿ能ハス、常ニコレヲ慨歎スルノミナリ。當初夏東上、無程民部卿ニ任セラル。民部ハ、天下億兆ノ所關、其職掌政府ヨリモ實ハ至重トス。鄙才何ヲ以テコレニ堪ンヤ。欲捧辭表、然レ𪜈以廣澤其大輔ニ任セラルヽヲ聞テ、止辭表。爾來民部省日々出仕、一日不參アルノミ。卿ノ職掌以瑣細コレヲ裁スルニ不及、只省中日夜俛焉樂ンテ力ヲ盡サシメ、怨鬱ヲ伸ハシ、心志ヲ大ニ勵精ナサシムルノミ。

廣澤等の輔佐

幸ニ大輔廣澤アリ、大丞津田中村アリ、權林渡邊アリ、諸有志ノ輔助懇切、殊ニ同心戮力ノ幸福ニヨリ、今日マテ鄙徳ノ慶永辱卿官ニ至ル。加之玉乃世履ヲ始、各司知事大錄小錄筆生マテモ、長官ノ令ヲ奉シテ面從後言ノ患ナク、言路大ニ開ク、同心戮力ノ狀ト云ヘシ。慶永ノ幸福ノミナラス、卽天下ノ甚幸タリ。遂ニ往

民部省は諸省の標準

々民部省ハ諸省ノ標準トナリ、府藩縣ノ目的トナリ、聖徳ヲ宇中ニ光被シ、萬姓ヲシテ皥々如鼓舞セシムルヲ期スルヲ樂ムナリ。

廣澤轉任

豈圖ンヤ、廣澤參議ニ擢用セラル丶、尙落膽シテ目的ヲ失シ、大丞權大丞ト今後ノ事ヲ議シ、廣澤ニモ密ニコレヲ談ス、又止辭表。　廣澤遷任後、大丞ヨリ大事ハ密ニ廣澤ト談セシメ、小事ハ大丞ニテコレヲ裁セシム。　民部省中、彌同心戮力シテ維持ス。

大藏と民部の併合

聖徳ヲ四海ニ光被セシムル目的イマダアリ。　豈圖ンヤ、大藏省民部省ノ合併ヲ命セラル丶、卿ヲシテ二省ヲ兼任シ大少輔モ亦然リ、二省兼任宣下アリ、未拜　命、退省已ニ大丞權大丞トコレヲ議ス、ユヘニ翌日參　朝奉命。　爾來ノ景況、民部ヲ廢セサルト雖モ、自廢スルノ勢ナリ。　奉　命スル何ノ目的カアル、民部大丞・權大丞、各司知事大錄マテモ、兼大藏テトモニ彼省ニ往ク、

民部廢官に似たり

名合併ニシテ、其實ハ各俛焉力ヲ盡サシムルヲ目的トス。　豈圖云々ノ議アリ。　昨夜來焦心苦慮、滿胸鬱塞、終夜不寐、遂ニ時邪ヲ感スルニ至ル。　今後目的トスル所樂ム所、或ハ手足ヲ失ヒ、或ハ同心戮力ノ方向ヲ失ス。　英雄ノ資材略アル者ハ、一人ニシテコレヲ維持スヘシ。　如慶永寡徳劣才、イカテカ此任ニ堪ンヤ。

加之兩省ハ天下ノ樞杻萬姓ノ生命ニ管ス。苟且汙此ニ重職、偷安消日、後瓦解ニ及ンテ其責ヲ遁ル丶能ハス、罪蒙斧鉞トモ、萬姓ノ生命ヲ救助スル能ハス。先見ヲ以テコレヲ辭ス。聊
聖恩萬分ノ一ニ報答スト云ヘキカ。愚衷ヲ十分縷述ス、希クハ推恕アランヲ。

八月十五日　　慶永

廣澤參議閣下

二十六　明治二年六月職制に關する奉答書

○明治史要明治二年六月二十三日の條に「官位相當表及び職員令ノ草案成ル、是日百官ニ勅シテ其可否ヲ議セシム」とあり、卽ちこの時の奉答書なるべし。
(美濃紙七枚)尙左に其の勅問書を掲げて參考に供す。(奉書半切木版刷)

大寶以降官名沿襲ノ久シキ有名無實ノモノ不少昨春更始之際專ラ實用ニ被爲基職制ヲ被爲設候得共未タ其名ヲ被正候ニ暇無之依テ今般舊官ノ名ニ據テ更始ノ實ヲ取リ斟酌潤飾別紙之通被相定更ニ衆議ヲモ被

聞食職制一定名實相適候樣被遊度
思食ニ付銘々熟考意見無忌憚可申出事
六月

（表紙上書）

奉答

臣慶永上

臣謹テ上奏ス。去ル二十三日於
天前職制

勅問之
御旨趣臣謹テ奉リ候。臣伏テ惟レハ、今般之
御變革ハ、
文武帝以來ノ
聖斷ニ被爲在候得者、乍恐容易ニコレヲ
御確定被爲在、他日再
御改正等被
仰出候樣ニテハ、昨春兵馬倥偬中
御設置之
御政體ト違ヒ、實被爲對
先皇、且ハ天下後世外國マテモ、コレヲ何トカ謂ハン、臣窃夙夜之ヲ憂患ス。仰
願クハ、詢蕘好問ノ
聖意ヲモッテ、十分輿論ヲ被爲
聞食、在位一定遺憾ナク、草野感仰無異論ヲ待ッテ、再不可變易萬世不抜ノ職制、
以

製鐵所は大藏省に燈明臺は外國省に付せん
外國省の文字に就いて

聖斷
御創立被爲在度、臣至願スル所コヽニアリ。臣謹テ職員令ヲ奉拜觀候。臣モトヨリ有職ノ事ニ暗ク、精詳可否ヲ辨別シテ言上スルアタハスト雖、兵部省ニ製鐵所、燈明臺ヲ付スル聊在所見、製鐵所ヲ大藏省ニ付シ、燈明臺ハ外國省ノ關スルモツテ穩當トス。且外國省、卿大少輔蓋天下異論アルヘシ。別ニ穩當ノ名ヲ精撰シモツテ外國ノ名ヲ改ムヘシ。海陸二軍、大將中少將ノコトキハ、兵部省、海陸軍守衞軍備ヲ管轄スルヲモツテ、コレヲ當省ニ付シテ、別ニ設置スル繁雜ノ患ヲ防クヘシ。宮內ノコトキハ、モトヨリ八省中ナリ、舊ノコトク省ヲ建ツベシ。臣別ニ鄙衷ナシ、其當否ヲ採擇ス、臣知ル所ニアラス、伏テ仰
聖裁、臣慶永不堪戰恐惶悚ゝ至、百拜頓首謹テ
奏聞ス。

明治二年己巳六月二十七日

民部官知事
臣慶永

服制に就いては別に所見なきもこゝに建言のことあり

贋造楮幣のこと

二十七　明治三年六月服制に關する御下問に對し建言書

○明治三年六月服制改正のこと明治史要其の他に所見なし。或は公のこの建言のため否決となりたるか。

今般服制
御改正ニ付、
御下問被爲在、見込言上可仕旨、奉謹承候。臣服制之儀ハ、至テ不案內、所考更ニ無御座候。仍別段言上可仕事件無之旨、御答以別紙奉言上候。臣別ニ愚考仕候儀、不顧恐懼奉建言候。當今內外乍恐
御多端、燃眉之
御急務中、尤　御急務ナルモノ如岡阜歟ト奉察候。內ニ在テハ滿天下贋造ノ楮幣若干、日ニ熾ンニ月ニ盛ンニシテ、結局眞正ノ楮幣公布ヲ妨害スルニ至ランカ。萬一公布停滯スルトキハ、天下億兆立トコロニ窮困スベシ。遂ニ今日之

蝦夷開拓のこと

支那天津の佛人等殺害のことより世界の大變起らん

この變に

御盛業、委却スルモ難計、迅速此
御取締被爲在度コレ一也。蝦夷開拓是亦、御急務ノ一ニシテ、一日モ不可闕ノ事ト奉存候。況ヤ俄羅斯ノ如キ、黠虜疆域ヲ接シ、浸潤日ニ迫リ、蠶食年々ニアリ、朶頤ノ情深厚可畏懼ノ甚シ、迅速此
御所置被爲在度是二也。最日夜杞憂スヘキハ、先日於天津佛人ヲ殺シ、又俄夷ヲ殺スト風聞仕候。臣考フルニ、今般西洋各國、必支那ノ罪過ヲ正スタメニ、軍艦ヲ送リ征討スヘシ。魯亦必始メニ征スヘキカ、又ハ支那ニ應援スヘキカ、何分世界ノ一大變ノ機ト奉恐察候。結末英ノ印度ニ於ケル如ク、各國支那ヲ分割シテ領スヘクト存候。乍恐御國ハ一大海中ノ一大島ニシテ、有蝦夷、有支那、加之朝鮮接近セリ。如右一大變一タヒ起候節トモ
神世ノ儘ノ
御國ヲ萬代
御維持被爲安、
天ツ神地神不被惱
祖宗之

處し豫め廟謨を建つるを要す

叡慮、豫メ今日綢繆ノ
廟謨ヲ被爲建候御儀、第一ト奉存上候、是三也。此三大事件ノ御急務ハ、
御國之存亡、億兆之安危ニ御座候得者、乍恐衣服制度
御改正等ノ儀、
朝廷ノ
御大典御急務ニ被爲在候御儀ニハ可有之候得共、前件ニ比スレハ區々タル御
事件ト奉存候。他日内憂外患ノ日ナキヲ待テ、
御改正被爲在候トモ、御遲引ニハ相成間敷奉存候。仍前條不可止ノ
御急務ヲ先速ニ
御廟謨ヲ被爲建、其
御所置被爲在度、臣日夜懇願之至リニ不堪候。臣如例越俎ノ僭言、敢干犯
嚴威、激切懇々多罪怖懼ノ至リニ不堪、臣慶永誠恐誠惶、頓首々々百拜謹上。

庚午

六月廿九日　　大學別當臣慶　永

○前掲建言に見ゆる別紙左の如し

今般服制
御改正ニ付
御下問被爲在候間、見込言上仕旨謹テ奉リ候。臣別段所考無御座候。仍言上
仕候也。誠恐謹言
庚午六月廿八日　慶永

二十八　元治元年七月征長副總督辭退書

○元治元年七月二十六日禁裏守衞總督の德川慶喜が、公を長州征伐軍の副總督となさんとし、幕府の目付戸川鉡三郎忠愛を使者として福井に下し、公に上京を促したるに對し、公は之を固辭せられたり。本書は卽ちその時提出の辭退書なり。尙この時使者が持參せる慶喜の書翰と公の復書とを左に掲げて參照に供す。

慶喜の書翰

秋暑難去候得共、愈御淸安被成御起居、欣然之至候。然ハ京地之動亂追々御承知被成候半、禁闕ニ發砲之條難捨置、速ニ追討之勅命被仰出候ニ付、人數之

慶永公の復書

義卄一落へ相達候處、第一總括之任無之、於公武御當惑此事ニ御座候。就ゐハ種々評議も致候へ共、何之道副將之任貴兄兼々之御名望ニ於て、御遁れ無之儀と申合、半三郎差上候間、委細同人より御聞取、武門之御名譽、一ト際御奮發、早々御上京被成候樣致度候。此段急ぎ申進候。草々不一

七月廿六日認　　一橋中納言

松平大藏大輔樣

再白、時下御自玉專要奉存候。御不快加何、關心ニ御座候。御樣子委敷承知致度候。小子義無異、御安意可被下候。

〰〰〰〰

尊翰拜誦仕候。如貴示秋暑難去御座候處、先以益御安泰被成御座恭慶之至奉存候。然ハ尊地之形勢追々傳承、就中禁闕ニ發砲之條、彌御捨置難被成ニ付速ニ追討之勅命被仰出、人數之儀卄一落へ御達ニ相成候處、惣括之任無之、於公武御當惑之御次第ニ付、種々御評議之上、私へ副將之任被命候旨ニゐ、伴三郎御差下し、委細同人方拜聽可仕旨、其他御懇諭之趣共逐一拜承仕候。則同人へ面會、夫々謹承仕候。何分私身ニ取、重疊冥加至極、難有仕合奉存候。御請之次第ハ、同人迄申達候間省文仕候。右ハ尊書御請迄、艸々如此御座候。

七月晦日　　松平大藏大輔

一橋中納言樣

猶々時下御愛護爲皇國奉專禱候。

近來之賢勞實ニ不堪恐察候。乍併追々朝幕之御都合も御宜趣ニゐ奉恐

悦候。不快御懇等被下奉萬謝候。以上

三軍指揮の方略なし

當春紀伊茂承に命じ今之を變更するは不可なり

開國蘭癖の者の上京は害あり

第一元來不肖之身を以三軍之號令を總攬し、諸藩を指揮可仕覺え無御座、致恐懼候事。

第二當春　御上洛中、於
御前紀公(徳川茂承)へ　御直ニ
御名代之　台旨被　仰出候處、今更隱居之私罷出、大任を辱候而て、乍恐
幕府之御失體ニも可被爲成歟。將紀國君臣之思て〻、隨從諸藩之居り合も如何可有御座歟と致恐懼候事。

第三此節御取仕切鎖港之被　仰出御座候折柄、開國蘭癖之名を取候弊藩上京被　命、軍事參謀仕候而て、　朝野之人心又々開鎖之兩端を抱き、別而關東方抔、折合申間敷儀ニ候得ハ、御爲ニ不相成而已ならず、却而方今御趣意之御邪魔と相成候者、必然之理勢と致恐懼候事。

右樣申立候得て、事を左右に托し、上京を怠候樣ニ而恐入候得共、決而左樣ニ而て無御座、上京仕候而も、軍事之義て、如前條困難ニ而御受も仕兼、其他

将軍上洛諸侯を會して國是を定むへし

持論採用ならは上京すへし

皇國之御爲ニ御相談与御座候得ハ、御承知之持論を反復仕候より外ニ見込無御座候。御採用之思召も被成御座候ハヽ、素ゟ御承知之議論ニ而、此節柄片時も早く、將軍樣御上洛、有志之諸侯御會集ニ而、於闕下今後之御國是も（征長之義等存干此中）御治定ニ相成候樣願而敷奉存候。右樣之御次第候得ハ、決而御辭退も不仕、其節ハ登京可仕奉存候。又持論御取用無之節ハ、上京仕候而も、昨春今夏之如く、又々旗を捲き國元へ引取候半而ハ相成不申候。當今之時勢ニ而、私壹人上京仕候而ハ、物議紛興、朝幕之御爲可相成とも不奉存、寸功微益も無之事ニ、度々上京仕候而、其都度〳〵舊來疲困之國力彌增窘迫ニ陷り、遂ニ士民之扶助も難相成地位ニ至り可申勢ニ而、實以當惑至極仕候。猶書余之委曲、戸川監察迄及御答候へハ、猶又從是も家老酒井與三左衞門を以拜啓可仕候。區々之意衷、奉仰高明之亮察候。誠恐誠懼頓首謹言

別啓

國力有餘さへ御座候得ハ、此度之大變ニハ、特

國力疲弊上京直談をなしがたし

命無之とも速ニ上京仕、第一天機をも相伺ひ、乍不及前條の次第御直談も仕候得ハ、本懷至極ニ候得共、昨今年父子東西の奔走ニて、此節も國用以の外窘迫ニ及ひ、指出し置候人數手當方さへ、彼是心配仕候程の折柄ニ而、自分心底ニ任せ不申候。其中ゟ強而上京仕候へハ、實ハ夫〻限りニて、最早再擧の見込無御座運ひニ付、唯今の處ニ而ハ、必定御爲ニも可相成とろ、又ハ必死を極候境とろ斷然疑懼ニ互り不申候時節ならては、打立兼候國勢ニも相成居候處、如前陳懸念の條々も御座候而ハ、何分當惑至極仕候段ニて、恩諭と申、取る物も取り不肯、應命面晤、前條陳述可仕ハ當然の義ニ御座候得共、實ニ無是非次第共、深く御憐察を仰き候外ハ無御座候。先年來諸事不殘淵底吐露仕候事故、憂慚の事情迄も、有體ニ奉申上候間、萬々御恕察被成下度、失敬の亂筆奉仰御涵容候。　頓首

慶永公建白書類　終

建言集記

二十九　明治元年二月外國使臣をして參朝せしむるの建議

○この建議は前高知藩主山内豐信、萩藩世子毛利廣封、鹿兒島藩主島津忠義、廣島藩世子淺野茂勳、熊本藩世子細川護久との連署なり。（太政官日誌）

天下大勢の機に從ふべし

臣等謹ゟ按するに、古之能く天下の大事を定むる者ハ、必先ッ天下の大勢ヲ觀て、緩急機に從ひ、處置宜を得候。故ニ唯功德の一時ニ光被するのみならす、萬世不拔の業、是に於て相立候。今や
皇上始て　大統ヲ繼せ給ひ、　御政權復一に歸し、凢百の宿弊を更始一新し、天下萬姓目を拭ひ、治を望むの秋なり。即在
朝の百官自ら奮發し、内ハ
皇上の　御德化を輔け奉り、外ハ
皇威を萬國に張り、臣子之分を盡さん事ヲ欲す。就中、今日の急務ハ、

今日の急務は外國との交際にあり

皇國と外國との交際を講明せすして不叶儀に奉存候。近頃
朝廷始て外國事務の官職を設られ、其人を御撰擧遊され、專ら御力被盡され候ハ、天下の人をして、方向する處を知らしめ給ハんとの
御趣意にて、
皇威被萬國に赫耀せしめ候ハ、此時に可有之と不堪感銘奉存候。乍併、古語にも人心不同ハ面の如しと申候て、在上在下の人、未た各々區々の議を執て疑惑

外人を蔑視するを戒む

なき事能ハす、又或ハ漢土人の如く、自ら尊大にして外國人を禽獸の如く蔑視、終にハ彼に打負、却て驅使せられ候樣に成行き候覆轍を踐むに至るべき歟と、甚憂慮仕候。依て熟考仕候處、今日の先務ハ、上下協同一和し、宇内の形勢を辨し、

日本は從來孤立せり

皇國一大革して開業すへき所以、方向確定すへき儀第一と奉存候。是迄
皇國ハ一方に孤立し、世界の事情に不達、只偷安を以て志とし、荏苒衰微を致し、彼カ爲に制せらるへき次第ニ立至候と、各國に航行し衆善を包取、氣運日々に開け、政治文明、兵食充備、天下に縱横致し候と比較以てし候得ハ、盛衰之原由も判然相分り可申哉に奉存候。元より膺懲の重典も無くて不叶儀にハ候得共、

控御之術其方を得候へハ、遠人も懷き服し候道理ニて、尤無罪之人を膺懲致し候譯ニは無之候。中古
朝廷ニも玄蕃の官被置せたまひ、鴻臚舘を建させられ、遠人被御綏服被成候事も相見へ居、其後天正慶長の間ニハ、蠻夷共屢西國に渡來交易致し候。若し其來港不致節ハ、大將軍より書簡を以て促させ、猶遲緩に及候時ニハ、此方より大軍を發し攻撃ニ可及なども申遣し候儀も有之候處、島原の一亂以來、始て幕府より鎖國の令有之候。乍併、漢土和蘭に於てハ猶交易差許候得ハ、一切ニ外國人ハ攘ひ斥け候と申譯ニハ更に無之候處、近年攘夷之論盛に相起り、諸侯之内偶攘斥致し候者有之候得共、素より一藩の力を以て不可爲ハ論するに足らず、且先年幕府より、十年を期して成功を奏し可申抔と申上候ハ、陽ニ其名を假り、陰ニ其私を行ひ候詐術ニて、
先帝(孝明天皇)日夜　御苦慮被爲遊候御儀とハ、同年之論ニハ無之と奉存候、然れハ今日
皇國之衰運を挽回し、
皇威被海外ニ耀し候儀ハ、萬々一刀兩斷之
朝裁被以て、井蛙管見之僻論を去り、先ツ在

我國古へより外人を斥けず

幕府の所謂攘夷は詐術なり

外國と交際の道を開いて皇威を海外に耀すべし

國是を確立し公法に從ふて外國使臣の參朝を許すべし

廷樞要ニ御方々より、御豁眼ニ被爲成、上下同心して交際之道、無二念開せられ、彼カ長拔取り、我カ短を補ひ、萬世ニ大基礎相据らさ候様奉專禱候。　仰願くハ
皇上ニ　御英斷、能く天下ニ大勢を御觀察被爲遊、是迄犬羊戎狄と相唱候愚論拔去り、漢土と齊しく視させられ候
朝典を一定せらさ、萬國普通之公法ヲ以テ、參
朝をも被命候様御贊成被爲在、其旨海内へ布告して、永く億兆之人民をして、方向拔知らしめたまひ度儀と偏ニ奉懇願候。　誠恐誠惶頓首頓首

二月七日

越前宰相
土佐前少將
長門少將
薩摩少將
安藝新少將
細川右京大夫

三十　明治元年二月内國事務總督の辭表

〔一〕この辭表は、公の控書の初めに「稿具未奉」とあれば、恐く未提出に終りしものなるべし。家譜を按ずるに、是歳正月三日の條に

唯今伏見表及兵爭候趣承り候、兼る私共に盡力之儀被仰付置候處、無其詮、今日之場合ニ至候義全盡力不行屆故と重々奉恐入候。此上早速御役御免被成下候樣奉嘆願候。然る上ハ如何樣ニ御譴責被仰付候共謹る奉甘受候。

正月　越前宰相

とありて、同九日の條に

先達る方所勞ニ付、議定職辭退嘆願之儀、不被聞食、今度更ニ被仰付候間此段可被心得候。

但華城出張中御役前相勤候儀御用捨相成候事

とあれば、公は鳥羽伏見の變の時、一旦其の責任上議定職を辭任せられたりしが、勅許なく、却て其の月十七日新に太政官の職制を定められし時、議定のまま正親町三條實愛、德大寺實則、山内豐信等と共に内國事務總督にならせられ、尋いで二月三日再び職制の更定ありて、其の十九日内國事務局輔に兼補せられたり。されば此の辭表は、其の文中に「去月十七日奉蒙内國事務總督之詔勅」とあるを以て推せば、恐く二月上旬の起草に係れるものなるべし。又其の二月八日德川慶喜の側衆室賀甲斐守正容への返翰の一節に

下官正月中旬於太政官、内國事務總督之　勅命降下、如臣者昧愚にして奉職

却ゐ宗家ゝ恥辱、朝廷ゝ失態速ニ可奉固辭ゝ處、我宗家德川公謝罪ゝ道相立候迄と存じ固辭奉らず、因循本職罷在候儀ニゐ、下官ゝ微衷仰亮察候。前

(註)とあるを以て考ふれば、この辭表の提出が中止せられたる理由も、自から之を察するに難からざるべし。(奉書半切七尺八寸六分)尙後の第三十六號の文書を參看すべし。

稿具未奉

議定職

臣慶永誠恐誠惶頓首謹奉至願候。抑客冬九日、
王政御一新之大號令被爲發候節、蒙議定職之重任、臣不才頑愚之資ヲ以難當其責、ユヘニ速ニ可奉固辭与存詰候得共、却ゐ背

內國事務總督

皇命、奉恐懼候ニ付、因循其儘、乍不本意在職罷在候處、豈科(料カ)去月十七日、奉蒙內國
事務總督之
詔勅、誠以莫大之
聖恩、山海ヨリモ重ク深ク、日夜盡力奉報萬分一度ト存詰候寸衷ニテ、輕死勤仕

鄙才其の

當然ニ御座候得共、如何セン如臣鄙才庸凡、決ゐ謙遜ニアラス、益以戰汗怖懼之

稿具未奉

臣慶永誠恐誠惶頓首
謹奉至願候抑客冬
九日
王政御一新之大号令被
為發候節忝蒙議定職
之重任臣不才頑愚之
資ヲ以難當其責ニ
ヘニ速ニ可奉固辞
存詰候得共却而背
皇命奉恐懼候因
猶其儘乍不本意在職
罷在候處豈料去月十
七日奉忝蒙内國事務総
督之
詔敕誠以莫大之

任にあらず

却て御失態とならん

暗愚なれども王事に勤むるは臣の長

至、深ク思惟仕候得者、今日マテ因循在職、實ニ臣罪斧鉞ノ誅難遁、畢竟如臣寡徳劣才ノ者ヲ、御登用御撰擢被爲在候儀、乍恐王政御盛事ノ折柄ト申、皇室之御失體ト奉存候。別テ當職ハ、事務多端、各局ノ根本、萬機ノ所出ニ御坐候得者、才徳拂地、冥頑不識丁字、菽麥分別シカタク、事務未熟多々益辨ノ才略乏少、臣カコトキ者保全皇國、安宸襟、億兆蒼生ヲ泰山之安ニ置クヿ不能シテ、誤國ノ恐懼不少候。況ヤ賛翼皇室ノ御裨補ハ無覺束奉存候。仍之重疊奉恐入候得共、誓テ奉辭當職候間、幾重ニモ臣カ微衷、光明ミ御照察被成下、伏テ奉仰敕許候。且重々不堪恐懼候得共、臣暗愚只日夜存詰候所ハ、勤勞王事之心志一途ニシテ、天地ニ誓ヒテ不恥コレ臣ノ長所ト奉存候間、希クハ議

所議定職に留りて聖寵に對へん

定職不奉辭其儘勤仕罷在、忠言讜論一歩モ不讓、臣才力ノ限十分竭寸忠、以螻蟻之誠奉對答聖寵萬分一度、懇々切々泣血仰天俯地奉至願候。臣不堪感激誠恐誠惶頓首々々百拜謹言

臣　慶永

三十一　明治元年王政復古を外國使臣に告示其の他朝見の儀に關する建議

○この建議の年月は不明なれども、外國事務取調掛東久世通禧が、英佛伊米普蘭等の外國使臣と兵庫港に會合して、王政復古を報ずるの國書を授けしことは、明治元年正月十五日のことにして、其の後、外國公使朝見の儀を決せしことは、翌二月十四日のことなり。されば恐く其の頃の建議なるべし。(本書半切三尺八寸五分)

王政復古を兵庫在留の外國使臣に告示す

天皇親しく外國と和親を結ばせ給ふ

如此重大の決議は廣く天下の侯伯に諮るべし

恭惟今般
王制復古之御趣意を以、外國人江御告示被爲在、其の爲メ
勅使を兵庫港江被下、御告示文御授與可被爲在との御儀ハ、實ニ重大之御事件ハ、申迄も無御座奉存候。　臣叨ニ汚議定之職、依之不顧淺陋微衷奉言上候。　方今西洋各國、古之戎狄と異まして、條理分明、信義相交り候儀ニ御座候處、今般之儀ハ
天王自ら外國ト和親御取結被爲在候御儀、實ニ千古未曾有之御大典勿論ニ御座候得共、此頃、
勅諚之通り、縉紳武辨廣ク公議を盡し、毫も御遺憾無之御確定之上、彼ニ御告示被爲在度奉存候。
左候得共、彼又
聖慮深重、如此ヲ感戴奉り、其交際永久不拔、親睦完全なる御儀与奉存候。　然る處親王以下四五之列藩を以御決議相成候而ハ、前件之
聖旨ニ相反し申間敷哉、假令
叡慮を以被　仰出候共、天下之侯伯信服ハ仕間敷、且萬一不被爲行屆儀出來候

而ハ、啻外國之笑を招候而已ならば、長ク
皇國之御瑕瑾とも相成候得ど、臣輩之罪寸斷相成候儀ハ不苦候得共、乍恐
皇祖大神江被爲對、如何可被爲仰譯哉与戰兢之至ニ奉存候。此上ハ諸侯來會
衆議之上、御決定相成候樣奉懇願候。臣慶永淺劣汚議定之職、依之不顧萬死奉
言上候。誠恐誠惶頓首々々謹白

三十二　明治元年二月徳川慶喜伏罪謹愼により東征の軍を班し公平の處置あらんことの建議

○この建議は明治元年二月十九日の提出に係り、其の後二十一日之に對する勅答の拜受あり。即ち左の如し

慶喜謝罪之狀東征大總督を被置候上ハ、右手を經ずして言上之儀ハ、難被聞召筋ニ付、宜く其順序を以、執奏有之候ハヽ、思召之旨可被仰出候事。

とあり。尚、東征大總督は有栖川宮熾仁親王なり。後の第三十四號文書を參看すべし。

慶喜の謹慎により征東の師を停めんことを請ふ

伏罪謹慎の慶喜を代つは天下の怨を受けん

又舊幕臣

臣慶永謹而奉言上候。今般慶喜伏罪之上、東叡山へ閉居謹慎罷在、會桑始夫々所置申付、奉仰
勅裁候謝罪狀も、既ニ今朝慶永參　內、中山前大納言(忠能)へ　奏達仕候事ニ御座候。抑於慶喜ハ、實ニ謹慎之實效著然いたし、此上ハ於
朝廷、速ニ征東之進軍被爲止、
行幸も被爲止候而、以天下公議、慶喜へ之御處置、並會桑始之被　仰付、至當不可動之
朝裁、早々被爲在度奉存候。慶喜伏罪謹慎、夫々所置仕候而も、矢張　御進軍
行幸等も依然御施行被爲在候而ハ、天下之人心生疑懼候。於
朝廷被爲好事候樣ニ相當り、且爲
朝廷國々費弊を極め、怨嗟之聲滿行路、遂ニハ乍恐奉怨
朝廷候樣之形勢ニ立至り可申ハ必然と奉存候。慶喜伏罪謹慎無之候得ハ、天下困弊候とも、決而聊
朝廷之御無理とも不奉存、各藩進軍、實ニ干城勤　王之誠赤可顯候。利害を以言上仕候へハ、慶喜如此閉蟄謹慎罷在候ニ、尚　御進軍被爲在候へハ、慶喜家來

を刺激して忿怒を買はん

進軍を止めて公平の處置を仰がん

伏罪の者を伐つは萬國公法に反す

過激之者、萬一忿怒ニ堪兼候所ゟ、幾千人一心と相成、前日ゟハ必死之兵と相成
可申、乍恐　官軍ニ而ハ、諸藩入交り之兵隊ニ而、百人百心、千人千心之景況、此者
共慶喜伏罪謹愼承知仕候得て、猶以鋭氣滅却可仕、勝敗之上ニ至り候而も、乍恐
如何可有之哉、其上客戰主戰之勢も可有之て必然と奉存候。
王師實ニ萬一勝利なき時ハ、天下是限りと奉憂惱候。何分早々被爲止　御進
軍、公平之御所置奉願候。且又今般外國御交際之上ニ付而も、今度之御所置萬
一公法被爲誤候而ハ、實ニ御大事と奉存上候。兼而申上奉り候通り、外國ハ當
今條理分明、公法を以所分仕候。伏罪謹愼之上ニ而も、猶　御征討と申儀、外國
人如何論し可申哉、彼も此度之御一所置を以、今後之天下御政道可推知奉存候。
臣慶永德川支族之身を離れ、當職之任を以奉言上候。萬一矢張　御進軍
行幸之御大擧等被爲在候へハ、乍恐天下人心之向背ニ關係し、今後之御大政、先
見仕候へハ可相分候。右故公平至當之御所置ニ出候へハ、
皇德天下ニ輝き、
朝威率濱ニ光被し、億萬之生靈不啻免塗炭、諸侯も亦感戴
聖恩、治安再太平之天日を觀可申と奉謹畏候。外國人も頗　皇政一新之公法

を以、被爲　裁儀候ハヽ、海外之賞譽勿論と奉存候。臣慶永忘狂瞽僭越、干冒尊嚴、以身奉言上候。臣當死罪、謹而待斧鉞、萬一御採用被成下候得は、天下幸甚之至奉存候。臣慶永誠恐誠惶頓首々々再拜謹上

二月十九日

臣　慶　永

三十三　明治元年四月肥前浦上村耶蘇教徒處分に關する意見書

（この意見書は、明治元年四月二十二日長崎裁判所總督澤宣嘉の稟請により、肥前浦上村耶蘇教徒の處分に關し、議定參與等を會して其の意見を徴せる時の奉答書にして、提出は翌二十三日なり。）

上答意見書

浦上村洋教信向之者共ハ、断然之　御處置被爲在候儀、至當之御事と奉存候。

併先年（慶應三）舊幕府ニおゐて、處置ニ及候節、佛國ゟ彼是申立候儀有之哉ニ付、今般之

義ニ萬一、佛國ゟ嚴重申立、却而教法弘り候樣相成候而者、益以御大事之儀ニ付、別而被盡衆議、至當之處を以　御裁決奉願候事。

但閑叟(鍋島)儀ハ、兼而長崎之事情並外國之事も功者故、昨日大久保一藏言上候洋教を奉し候者、　御處置被成候と同時ニ、佛國へ、右國禁を犯し候者故、可處刑戮段可被　御遣との儀、一應御尋問被爲在、尙伊豫守並外國係りにも御申談御座候樣仕度、萬一佛國、陽ニハ公法ニ服し、陰ニ叛謀を助け候樣之儀有之候而ハ、不容易御事と杞憂奉存候間、此上篤と御評議被爲在、應接振等も、斷然御定置ニ相成候樣仕度候事。

四月　慶永

三十四　明治元年三月慶喜の謝罪狀提出のため賜暇願

○この願書は明治元年三月十八日御提出の筈なりしが、都合により之を見合せられしことゝ中根雪江が戊辰日記に見えたり。尙、前記第三十二號文書を參

看すべし

謝罪狀大總督の許に屆かず

從つて言路阻絕の觀あり

德川慶喜謝罪狀、順序を以大惣督へ及御達候樣、先達而　御沙汰ニ付、其段田安(慶賴)中納言迄申遣候處、追々關東ゟ罷歸候家來より承候得ハ、爲謝罪度々差出候使者、彼是障碍有之、于今　大惣督之御手元へ不相達、御先鋒ハ駸々江戸へ差迫り候趣ニ御座候。・左候而ハ、最早謝罪之道も絕果、加之歸降伏罪之者を　御討伐被爲遊候樣之御次第ニ相成候へハ、德川家臣共ニおゐても、窮鼠必死之覺悟ニ相成、過日も及建言候通り、

皇國之亂階必然ニ可有御座と恐悚至極奉存候。　必竟謝罪之道を御開被遊候へハ、御平治勿論ニ可有御座處、言路御阻絕ニ而、强而

錦旗を被進候樣ニ而ハ、官軍より亂を御求被遊候御姿ニ而、公平至當更始一新之

聖慮ニハ不被爲適御儀とも可有之、且後來不可爲之大害ニ立至り可申と、

皇國之御爲、

朝廷之御爲憂苦ニ不堪奉存候へハ、早速ニ御進軍御止り、謝罪之道被爲立、至仁

至當之
朝裁被爲在候樣必至奉願候。乍去德川氏之使節ニ而ハ、謝罪狀、於　御總督府
御請取難被遊御義ニも候ハヽ、臣慶永へ暫時之御暇被下置候ハヽ、先日來病氣
ニハ御座候へ共、厚保養を加へ、早々　總督府へ罷出、謝罪之儀ハ德川氏支族之
身を以歎願仕、
皇國之御安危ハ、職分を以建言仕度奉存候。此段伏而奉至願候。誠恐誠惶頓
首百拜謹言

三月十八日　臣　慶永

三十五　明治元年三月大坂行在所御警衛願

○是より先、三月廿一日車駕親征京都を發し二十三日大坂に着御、本願寺を以て行在所となさせらる。この願書は二十五日の提出に係る。尙、供奉御辭退の願書は三月十八日付にして即日其の聽許あり。左に記して參考に供す。

今般御親征行幸被仰出候ニ付、慶永蒙供奉之命、武門之冥加無此上、深畏入奉存候。然る處過日來所勞罷在、騎馬難堪、依之重疊奉恐入候得共、先陣供奉被

免度奉願候。且又御警衞人數ハ差出御親征御用相勤度、此段も奉願候也。

三月十八日　慶永

坊城頭辨殿

御親征行幸供奉依所勞理、被聞食候。

仍早々申入候也。

三月十八日　俊政

越前宰相殿

所勞を以て供奉を免せらる

慶永過日來所勞罷在、騎馬難堪に付、供奉被免度奉願候處、願之通被　仰出奉謹畏候。其節御警衞人數差出度旨、願之通被　仰出、重疊奉畏候。依之何卒少分之人數ニハ候得共、於浪華　行在中、御警衞場所、又ハ市中巡邏、何方成共御遣立被成下候樣奉願候也。

三月廿五日　慶永

解任の事情

三十六　明治元年四月兼職內國事務局補の解任願

○この解任願の事情は、中根雪江が戊辰日記四月二日の條に詳なり。卽ち左に掲げて參考に供す。

四月二日　德川公御謝罪之一條、公（○慶永公を指す）被盡御心力、御幹旋被爲在候得共、兎角御障碍多く、御貫徹無之而已ならず、御嫌疑も不少に付、御浩歎之餘り、此上は　御宗家へは御關係無之、無用に被動干戈候而は、　皇國之動亂とも可相成之條理、公議を以決候樣、議定之御職掌を以、何處迄も御十分に御主張御押詰被遊度、思召候得共、內國事務を御兼帶に而は、御不都合之御廉も被爲在候に付、先づ此御職掌を御辭退被遊、而後公明正大之御議論を可被爲發と思召被爲立、邸議も相決し、今日御認相成候御辭表如左、

とありて、其の辭表は卽ちこの解任願なり。尙、願書に「去冬蒙議定職之重任」と見ゆる「去冬」は卽ち慶應三年十二月九日に當り、次に內國事務總督の任官は明治元年正月十七日、尋いで內國事務局補にならせられたるは同年二月十九日、更に民政租稅宿驛掛のことは三月二十八日なり。第三十號の辭表の參看を要す。

慶永　去冬蒙議定職之重任、其後三職分課之折、內國事務總督及補被　仰出、天恩海山實奉謹畏。況や

風邪後痰血を吐く

租税宿驛のことは不案内なり

議定職に專任して聖寵に奉答せん

皇政一新之際、日夜奉命抛一死、雖駑鈍盡力可仕ハ勿論ニ而、其覺悟ニ御座候處、客月風邪後痰血相吐き、時々覺胸痛、一身には格別困苦とも不奉存候得共、手醫師共申候處に而は、只今之内厚加養生不申候而は、浸潤遂ニ醸大患に立至り候義と申聞候。　且其上日々之參官仕兼候より、自ら不參多ク相成、重疊奉恐入候而、日夜心配罷在候處、今般民政租税宿驛掛り等被　仰付、深ク奉畏候。　尤精誠輿病勉勵奉職之心底ニ御座候得共、素々租税宿驛等之儀ハ、實ニ是迄不心得ニ而、更ニ奉職之方向定兼申候。　且民政之儀ハ、萬民之生活ニ關係し、第一皇化　皇德ニも相管し候儀ニも候得て、前條奉申上候病症ニ而、折々參官位之事ニ而ハ決而難被行、却而皇德を傷損可仕歟と、實ニ心中不安憂勞之至ニ御座候。　當節柄奉恐入候得共民政掛被　免、議定職而已被　仰付度奉至願候。　左候得て、日々參官も不仕、只今之内病症厚加養生、全快之上ハ再各局之内職掌被　仰付度、只今より奉願置候。　其節ハ日々參官、不才凡庸之虔永乍不及盡力可仕と奉願歎居候。　且又今般　御慈恩を以、議定職而已被　仰付候共、奉報答聖寵萬分之一素願ニ御座候間、御大議等有之節ハ、何時ニ而も被爲召候へハ、參

官仕、庸劣不才を不顧、愚衷言上盡力可仕と奉存候。此邊深　御亮察被成下、總裁江御呈達奉希上候。表向辭表差出候而ハ、別而恐惶之至ニ付、多病乍不本意、不得止內々尊卿迄奉歎願候。偏ニ御許容被成下度奉存候也。恐惶謹言

四月二日　慶永

德大寺大(實則)納言殿

王政復古は神武帝以降の大業なり

三十七　明治元年四月廿九日人材を簡選して皇國政治の基礎確立に關する建言

臣慶永感慨涕泣之餘謹奉言上候。抑昨年十二月九日
王政御復古之大號令被爲發、更始　御一新、夫々　御制度相立
太政官御再興、三職並分課八局被爲定、實ニ
神武帝以降之
御大業ニテ、天下億兆者勿論西洋諸州迄モ、拭目観望罷在、萬民苛政ノ域ヲ免

太政官の景況と諸侯の情態共に浮動の觀あり

人材を簡選して之に委任すべし

レ、再昇平ノ日月ヲ仰キ、安堵ノ思ヲナシ、利用厚生ノ
聖政相行ハレ、遂ニ海外諸州ト可並立ノ
皇德、一地球中ニ冠絶タルノ
御盛業、不待歲月而可見儀ト天下欽仰罷在候。然ル處方今
太政官ノ景況相窺候ニ、庶政次第ニ繁務、追々
勅諭並　御沙汰書等被　仰出候得共、乍恐今日迄萬民安堵仕候程ノ御實行モ
不被爲在、衆人實ニ方向ヲ失ヒ、渺々タル滄海ニ無掉扁舟ノ心地ニ御座候。
其諸侯伯ノ情態、徒ニ用無クシテ在京致居候モ、畢竟
朝廷ノ譴責ヲ畏レ候ヨリ、妄リニ勤
王ヲ唱ヘ、各國邑富强ノ根本タル政務ヲ廢シ、領下民庶ノ膏血ヲ絞リ、無益ニ滯
在ノ冗費ニ供シ、東奔西馳殆無寧歲。加之藩士ヲ以徵士トシ、其人員若干ニ
至ル。況ヤ裁判所ノ如キニ至リテハ、所謂後來尾大不振、李唐藩鎭ノ殷鑒、實
ニ不堪悲嘆至候。伏テ惟レハ、往昔ノ
王政人ヲ用ヒ玉フヿ必簡易ニシテ、全國ノ官人幾拾名ニ過キス、和漢古今創業
ノ

早く皇國政治の基を立つべし

聖帝明王、其人ヲ用フルニ必然英雄ヲ選擇シ、コレニ委任シ狐疑掣肘スルヿナシ。其僚屬モ亦幾人ニ過キス。近徳川氏ノ制度、雖不得其宜、今日ノ紛擾ニ至ラス。即今

御初政ノ事ニ當ツテ、任重スル者一二人ニ過キサルヘシ。贊助之者又三五人ニ過サルヘシ。人ヲ用フルヿ妄ニ多ケレハ必支離ス。支離スレハ事ヲ誤ルニ至ルヘシ。萬一目今ノ形勢一タヒ瓦解スルトキハ、億萬ノ生靈流離顚沛、塗炭ノ苦ニ陷沒ス。コレ千載之遺憾ニシテ、臍ヲ噬ムトモ不可及ノ悔ニ

御座候。是臣慶永悚慄流涕スル所ニシテ、臣其職掌ニ當リカタク、身體實ニ相谷リ、心思錯亂不堪哀痛之至候。仰願クハ、從今

御政治條理判然タル

皇國ノ　御基礎被爲立、目的分明ニ被爲在度奉至願候。就テハ簡易ノ

御制度、御委任ノ人材、不顧恐懼愚衷以別楮奉言上候。臣慶永不堪怖懼之情、誠恐誠惶頓首々々、謹ゟ拜表シテ奉　以聞候也。

四月二十九日　臣慶永

三條大納言(實美)殿

岩倉右兵衛(具視)督殿

○書中載するところの「別楮」今見當らず

三十八　明治元年閏四月五日御垂問の奉答書

○この奉答書は、中根雪江が、戊辰日記には元年閏四月五日の末條に收められ、「一一昨日御垂問有之諸侯御取扱ひ之御封書被差出如左」と前書きして、一二三の順序にこの奉答書の全文を掲載せり。故に其の前書によりて推せば、一昨日は正に閏四月三日なり。されど、公の自筆に係れる奉答書控書きの前書きに、「一昨五日御内々御垂問ニ付」とあるを以て、今は之に從ひて題名を掲書し、本文も亦控書に依りて收錄せり。(奉書半切五尺五寸)

一昨五日御内々

御垂問ニ付左之通り

奉言上候

一

在京諸侯御暇のこと

皇上
還幸ゝ後、速ニ在京諸侯御暇被
仰出候事。

參朝勤王の御沙汰書のこと

二諸侯御暇ゝ節、參
朝拜
龍顏、其折勤
王報國ゝ志を益厚クシ、藩屛ゝ職掌を治め、永世御誓約遵奉ゝ
御沙汰書被差出度候事。

賜物酒饌拜領のこと

三出兵非常御警衞、兼て被　仰付有之候諸侯御暇ニて、賜物並酒饌拜領被　仰
付度候事。

朝覲の制度を定むること

四今般諸侯御暇被下候節を機會とし、
朝覲ゝ
御制度、急速被相定候
御沙汰有之度候事。

無役の諸

五無役ゝ諸侯御暇ゝ節、長々在京ゝ苦勞被慰候迄ゝ

一昨日御内々
御座間ニ於テ右之通
奉言上候
一自今上
還幸之後速ニ在京諸
侯御暇被
仰出候事
二諸侯御暇之節参
朝為
龍顔ヲ拝シ勤
王報國之志を益厚クシ

侯に御褒詞のこと

御褒詞、
御沙汰有之度候事。

召命あらば直ぐ上京のこと

六今後不依何時、上京可被
仰付儀も可有之、其節速ニ奉　命、遲參無之樣
御沙汰有之度候事。

出兵のことは豫め内意を傳へ置くこと

七會兵暴動等ノ憂患、全く未除候ニ付、今後出兵並先鋒等被　仰付候儀可有之、
其邊軍防局御打合せ、兼而
御廟謀被定、右出兵等被　仰付候諸侯へも、兼而御内意有之、用意ノ儀、御暇ノ節
被
仰出度候事。

議定參與の賜暇のこと

八議定參與ノ諸侯、御暇願出候ハヽ、關東平定ノ後、三十日或ハ五十日限り、其次
第柄ニより
御許容可有之候事。
九平議定ノ諸侯ハ、御暇ノ日限准第八候事。

閏四月七日　　臣　慶　永

岩倉右兵衛督殿

三十九　明治元年閏四月十日徳川處分に關し岩倉具視に建白

○明治元年閏四月十日、朝廷に於ては徳川氏の處分に關し御評議の結果、三條大納言實美を關東監察使となし、東下せしめて以て其の處置に當らしめんことを定められたり。是に於て、公は其の日會議に列席せられたれども、其の處分に關する內評により、卽日意見を岩倉右兵衛督具視にまで建白せられたるもの卽ち本書なり。

慶永以厚顏拭血淚、誠恐誠惶頓首頓首謹窃奉呈上

岩倉公閣下候。　抑今日於

小御所、　御相談被爲在候徳川家御所置之大事件、其支族慶永ニ迄被降

御下問候義、公平至當之御儀、敬服感泣之仕合ニ御座候。　別而　公之尊慮、不啻

徳川之興廢、

小御所に於ける徳川處分の議

家領百十萬石城地如舊は徳川主從最も喜ぶべし

地所を駿府に移すは不可也

皇國ノ大幸、上安
宸襟、下蒼生安堵ニ至り、干戈相休干羽兩階ニ舞スルノ御所置ニて、有苗必格り候儀ト乍憚奉感服候。乍去方今總裁局御用相勤、不包心底奉言上候筈ニ候得共、何分支族ノ身故恐懼罷在、公ノ御盛意至當ノ儀と雖申上、只胸中憂悶、涙灑臆候而已ニ御座候。扨家領百拾萬石ニて、城地如舊候得ハ、徳川主從彌飽
聖恩 天意感戴、麾下ノ沸鼎、忽鎮定可致ハ、是亦不卜して可知義ニ御座候。其上ニも萬一暴擧等有之候ハヽ、天人共ニ所悪、徳川ノ運命已ニ窮シ、其血食を被為絶、天下ノ諸侯をして討伐せしむとも、決ゐ異儀有之間敷、其節こそ大義滅親、先支族ノ諸侯をして討しむとも、必討伐可仕候。是宋祖遇越王錢俶ノ策ト同轍ニ可有之候。左ナクシテ只今家領百十萬石ノ食邑まして、地所を駿城ニ被為移候義ハ、却ゐ従
朝廷求鼎沸、兵革御招ノ姿ニ可有之、其先祖家康、駿城ニ退隱候迄ニて舊領ニも無之、墳墓ノ地とも難申、江戸ハ祖先以來ノ墓所も有之、二百有餘年ノ居城ニ候へハ、容易不忍退去情よりして、物議紛興可仕哉も難計、其上再天下ノ兵を被為動候ニ立至り可申、全國ノ困弊相極り、乍恐奉恨

鎮臺總督を以て江戸を統治するは難し

朝廷可申歟。慶永竊ニ胸中察スル處、卽今諸侯疲弊相極り、天下割據ノ形勢を孕ミ、極々　御大事ノ義と、爲
皇國ハ勿論、爲
皇帝陛下臣ノ所憂日夜こゝニ御座候。且又假令、城地駿ニ被爲移、德川主從無異儀御請申上、以　（熾仁親王）帥宮江戸ノ鎮臺とし、副總督迄被置候而も、廣大ノ江戸、四里四方ハ大凡ニして、只今ハ中々夫所ニ無之、人民幾千萬ノ衆多、是德川若干ノ家臣ニて、夫々統轄仕候而そら、容易ニ行屆兼候所、況や
帥宮副督並其參謀以下百人ニ過さるへし。如斯寡少ノ人員ニ而、管轄服王化候義、萬々無覺束、殊ニ横濱並江戸へも、外國人罷越居候事故、其制馭も難被爲出來、却而
朝廷ノ御失體と乍恐奉憂苦候。邪推申上候へハ、德川ニ於而ハ、是迄にて滅祿仕候事故、若干ノ江戸持居候よりハ、駿城ノ方遙ニ有かたく、立派ニ市尹を始、夫々ノ管轄ノ小吏を解き、
朝廷へ御引渡し申上候ハゝ、沸鼎ノ裏面ニして、今日ゟ萬民生活ノ業、いろゝ御維持被遊候哉と奉存候。只座論ノ御決定ニ而ハ、兎も角も、今後治平無覺束、何

分　公ゝ尊慮ゝ通りニ候ハヽ、會賊も有苗格ゝ古例ニ、愛度可鎮定候。　慶永兼ゟ任御懇命、不顧忌憚、　公へ奉密疏候。　諸卿御同座ゝ折て、何分可否難申上、愚意當惑奉仰御照察候。　是支族ゝ小身、決ゟ徳川ゝ最負仕ニもあらそ、徳川ゝ興廢を差置、爲
皇國且爲
皇帝陛下、　王政千古ニわたり、史冊ニ載せ不被爲恥候ゟ、
聖徳海内海外ニ光被仕候様有之度、朝暮爲
朝廷所至願ニ候。　敢犯尊嚴奉言上候。　誠恐誠惶頓首々々。　百拜死罪死罪謹言

閏四月十日　　慶　永

四十　明治元年閏四月官位辭退の上表

○是より先、公は元治元年四月十一日朝廷より公武の周旋且京都守護職勤仕

の勞を賞して參議正四位上に敍せられ、又明治元年閏四月二十二日權中納言に任じ從二位に昇敍の恩命を拜せられたり。是に於て翌二十三日感激恐懼の餘、この時共に聖寵を蒙らせられたる岩倉具視（權大納言兼右近衞權大將從一位）鍋島直正（權中納言從二位）と連署してこの上表を提出せられたるなり。而して、其の二十五日聽許ありしが、具視は即日議定兼輔相となりて議定の首班に列せられ、公は翌々六月二十七日內命ありて官位を請けさせられたり。

臣等謹奉言上候。抑今般
御一新ニ付、以格別之
叡慮、議定重職ノ
詔勅ヲ奉蒙、
聖恩隆盛重疊奉謹畏。臣等實ニ鄙才其任ニ堪カタク、恐懼之餘奉固辭候處、再
三深重之
叡旨奉相窺、感泣數行戰兢之至奉存候。臣慶永臣直正仍テ不顧前後、御請奉
申上候次第ニ御座候。然ル處豈計ヤ去ル廿二日、官位
宣下、誠以驚愕心痛之至、何共可奉申上樣モ無御座候。臣等天資駑鈍贅翼

廟謨候目的モ無之、身ヲ以當職ノ　御請ニ及ヒ候スラ、不安心底之處、臣具視慶
永直正三人ハ別テ祖先ノ官位ニモ超越シ、六十餘州ノ群牧ニモマサル海山ノ
聖寵、謹畏勿論ニ候得共、只天下後世ニ對シ候テモ、無面目心地ニテ、却テ
朝廷ノ　御失體ト奉存候而恐入候。臣等モトヨリ當職ノ　御請奉申上候末
ハ、乍不及不顧鄙才淺智、日夜鞠躬盡力精勵、奉報答
聖恩萬分之一度寸誠ニ御座候。官位辭退被
聞食候テモ、今日ノ
御用相勤候ニハ、聊モ關係不仕候事ニテ、却テ顯官高位ヲ辭退シ、從來ノ儘ニテ
被差置候方、十分ノ忠勤モ仕易ク、一身ニ取リ候テモ重疊奉畏候。臣實美臣忠
能臣經之等過日ノ
宣下至當無間然儀ト奉存候間、辭退候トモ不被
聞食候樣奉存候。將又參與ノコトキハ、モト各藩ノ微士、無位ニ候得者、今後咫
尺
天顏候　御用モ被爲在候事故、敍位
宣下御尤ト奉存候。臣等モトヨリ官位有之候故、

御前　御用モ相勤マリ候。此上强テ辭退不被
聞食候節ハ、無據當職マテモ奉固辭候寸心ニ御座候。仍テ官位御辭退申上候
モ、一旦
詔勅ノ重キ、奉恐入候間、暫時之處御請御猶豫之儀奉願候。伏テ願クハ以至仁
至大
宸斷、被爲
聞食分、
聖恕ヲ被爲垂度奉至願候。臣等實ニ恐懼無所措身、不堪激切懇悃〻至、誠恐誠
惶頓首〻〻昧死百拜謹上。

閏四月

臣 直正
臣 慶永
臣 具視

四十一　明治元年閏四月先帝の御忌日御日柄等の件に關する

奉答書

（この奉答書は家譜に「閏四月二十八日先朝御忌日及び每月御精進日ニ付意見書を指出さる、兼て勅問ありし故奉答せられしなり」とあり。今現存せる其の控書によりて之を收載す。（奉書半切一丈四尺八寸九分）

今般
御一新ニ付、
先帝
御忌日並每月
御日柄
御精進之當否
勅問之趣傳承仕、乍恐
御追孝之
叡旨、卽天下之子弟ヲシテ孝悌ニ勸ムノ
御基本ト臣實ニ感激落涙數行奉謹畏候。臣聊竭愚考、不顧恐懼謹奉言上候。

忌日は崩御の當日なるべし

伏テ惟レハ
先帝（孝明天皇）以十二月（慶應二年）二十五日登遐被爲　在、以二十九日
御發喪、コレ
宮中ノ御都合ニシテ無御據儀ト奉窺候。過去ハ不及是非、議政官決議從
輔相奉
奏聞候如ク、斷然
叡旨被爲　在候ニ付、以來
先帝
御忌日十二月廿五日ト更ニ被
仰出候樣奉存上候。如斯奉言上候ユエンハ、乍恐
朝廷中古
御衰世ノ御弊風ト奉存上候。以臣下之例上言ス、最不堪恐悚候得共、德川家康
ヨリ三代迄頃ハ、忌日ハ眞ノ忌日ニシテ、死去發喪同日ニ御座候。其砌ハ天下
侯伯亦同斷ト相考申候。乍恐
朝廷モ亦、當時ノ

御日柄は廢止然るべし

天皇

崩御御發喪御同日ニ可被爲在候。德川氏中葉太平し虛飾盛ンニ被行、吉凶都テ鄭重ノ風習ヨリ、死去發喪日ヲ同クセサルニ至ル、

朝廷モ亦鄭重ノ

御舊習、コレ元文以來ノ儀ト奉存候。且又每月

御日柄ノ儀、コレ

日本方今ノ陋習ト奉存候。和漢西洋共例ヲイマダ不聞、殊ニ

朝廷往古ハ

御忌日ノミニシテ、每月御日柄ヲ被爲用候事無之、其確證ハ、方今公卿父母ノ忌日ニハ必參

內不仕候。每月ノ日柄ハ矢張參

內仕候由。豈惟公卿ノミナランヤ。往古ノ餘風告朔ノ餼羊ヲ存シ候。如此

明白ノ確證アリシ上ハ、速ニ被廢每月之

御日柄候方、御至當ト奉存候。御精進之當否ハ不待論候。

光格

佛式を廢し神式たるべし

仁孝兩帝
御謚號而已被復候テ、
王體ハ泉涌ノ佛域ヲ以其土ニ被爲　在候故、臣子ノ痛歎スル所ナリ。以非常
聖明ノ
叡斷、
先帝ノ
玉體
東陵ニ被爲　在候上ハ、佛法ヲ不被爲用、
天照皇大神モ
先帝モ古今ノ遠隔ノミニテ、聊不被爲替、平野社ノコトキハ、
仁德帝ヲ配祭、延喜式第八卷平野祭リノ祝詞ニハ、波多能廣物・波多ノ狹物ノ言
葉アリ、當時ノ
天皇祭
仁德帝ニ被爲用魚肉、
天皇此時

魚肉調進妨げなし

御精進被爲在間敷候故、旁
先帝御忌日、魚肉調進何ソ妨ケアランヤ。 按家禮宋朱熹忌日ニハ不飲酒、不食肉
トアリ、
皇國ノ例ニナスヘカラス。 臣願クハ毎月ノ
御日柄ヲ被廢、十二月廿五日一年一度ノ事ニシテ、却テ重大ノ
御忌日トナリ、前日ヨリ
御齋戒
御沐浴、舊例ノ俗習ヲ停止シ玉ヒ、
御神事被
仰出、此日
天皇
御出輦被拜
東陵候歟、或ハ奉幣
勅使ヲ被差向候歟、右兩條ノ盛擧可然奉存候。 朱熹ノ不食肉トイヘルハ、魚肉
ノコトニモアラス、佛例ヲ用ユルニモアラス、只魚肉ノ當否ハ抑末ナリ。

御哀慕
御追思ノ
聖情ヨリシテ、諸事
御謹愼第一之御儀ト奉存候。魚肉ヲ
御獻供、或ハ
天皇被爲用候儀ニ候ハヽ、諸事夫々ニ應シ、
神祭ノ御規則被爲立度奉存候。臣慶永敢狂瞽ヲ忘レ、十分ノ愚衷待斧鉞テ奉
言上候。區々ノ鄙情伏テ光明ノ
聖意ヲ以、御取用被成下候ハヽ、臣ノ幸甚便天下ノ幸甚ナリ。誠恐誠惶頓首々
々百拜謹上。

閏四月廿八日　臣慶永

神祭の規定を立てられんことを請ふ

四十二　明治元年五月會計の儀に付建白

〕今現存の控書により收錄せり。（本書半切一丈二尺三寸五分）

課金に對する注意

先般於
小御所、
御廷議被爲在候會計ゝ儀ニ付、臣所考ゝ趣奉拜陳候處、猶又書取呈達可仕旨
ゝ
御命ニ付、大略ゝ主意左ニ記シ候。

一國計窮迫ノ時ニ當リ、課金ヲ士民ニ命スルニ、有司必其術ヲ用ユ。其術如何ヲ考フルニ、有司先上言スルニ、若干ノ金ヲ課ス、人心疑惑ヲ懷キテ葛藤ヲ生スヘシ。實ニ至重ノ事件ナルヲ以テ、
人君親ラ儉素ヲ勤メ、其盛意ヲ衆人ニ貫徹スルニ非ンバ、此擧不可被行トノ題號ヲ出ス。滿堂ノ有司蹙眉疾首共議ヲ採納シ、コレヲ
人主ニ告ク。人主モ亦奈何トモスルヿナシ、今日ノ切迫ヲ救フニ急ナルヲ以テ、無據許可シ、一時ニ細密ノ手都合ノ取調ヲ待タズシテ其古格ヲ廢却シ、儉素ヲ行ヒ、減食徹樂或ハ冗員ヲ汰シ、或ハ宮女ノ數ヲ減殺シ、妃嬪ノ奢侈ヲ

禁絶スル等ノ如キ頗盛事ナカラ實ハ有司コノ人主ノ盛意ヲ假テ、課金ヲ國中ニ命シ、士民ヲシテ辭スルアタハズ、調進ヲ充分ナサシムル駕馭ノ策ニ用ユル所以ナリ。國中日夜悲涕、心不平ヲ抱クト雖モ、有司ノ憤怒、政府ノ譴責ヲ畏レ、君命ヲ重ンシテ課金ヲ調進ス。有司上言スル所ヲキクニ、今度ノ課金前年ノ御趣意ト違ヒ、人君ノ士民ヲ愛撫セラレ候盛意ヲ體認シ奉リ候ヨリ、國中聊無不平調進スルヲ競ヒ喜フ抔ト其辭ヲ飾ル。然ルニ其國中眞實ノ情ヲ察スレハ、怨嗟痛歎ノミニシテ、其調進スルヲ競ヒ喜フモノ一人モナシ。今日得ル所ノ利、及ヒ蓄積スル物ハ、悉ク官ニ納ム。甚シキニ至リテハ其産ヲ失ヒ、妻子ノ衣服ヲ以テ償補ス。遂ニ衣食不給、流離顚沛ニ至ル。富商コレガ爲ニ融通ノ利ヲ失シ、或ハ兼併僥倖ノ姦ヲ射ル。貧民其命ニ應セサレハ、官ノ譴怒ヲ免カレズ、進退維谷リ、遂ニ一揆蓑虫ノ亂ヲ釀成スルニ至ルヘシ。其上情ヲ察スレハ、

皇室費の節約に就いて

人君ニハ節儉ヲ勤ムルコト平易ニシテ、格別ノ艱難トモ不存候得共、君側及ヒ其附屬ノ小吏ニ至リテハ、怨嗟スルモノ多シ、公然難申候得共、小給ノ身ニ至リテハ、日々蒙
君恩モノモアリ、嚴格ノ儉素一毫モ其益ナク、水清ニイタル卽魚ナシトイヘル諺ノ如ク、庖厨無聊、上情下情共ニ怨困ヲ懷キテ、是ヨリ讒邪乘其隙モノ可出來ト、實ニ慨嘆ノ至リニ非スヤ、是和漢古今ノ通例ナリ。臣故ニ從今西洋ノ規則ニ倣ヒ、課金ヲ士民ニ命スルニ、
人君儉素ヲ勤ムルニ不及、玉食ヲ奉リテ從前ノ法度ヲ被爲用、且從今

皇室費と國費とを區別すべし

皇國ニ可關係事件ハ、
朝廷ノ　御入費ニ不被加シテ、太政官ノ入用トナシ、今年ノ失費
內帑ノ多寡ヲ不論シテ、
內帑ヨリ拂フヲ禁シテコレヲ

計費を天下に布告すべし

皇國ニ課ス、今年ノ失費ヲ公然天下ニ布告スヘシ。天下コレヲ眞知ス、必課金ヲ調進スルニ疑惑ヲ生セサルヘシ、弘通流水ノ如シ。新聞紙ヲ讀ムニ、佛國去年納税不足ニ付、市人ヘ用金トシテ金高凡九千萬金ヲ課スト。コレ國

中調進スルコ、必疑惑ヲ生セスシテ官ニ納ムヘシ。其帝ノ儉素ヲ勤ムルヲキカズ、信義上下ニアル所以ナリ。因テ從今
皇國中、可納ノ金ハ國債トナシテ、返辨ノ仕法ハ有司ノ議ニ任ス。モシ又內帑有餘トキハ、コレヲ政府ノ入用ニ加入スヘシ。コレ臣ノ所考、永世ノ規則ヲ論スルモノニシテ、切迫ヲ救フニ急ナル術ニ至リテハ、臣ノ見込更ニ無之候。且又今般課金ヲ士民ニ命スルニ當リ、
皇上勤儉素ノ
聖慮、萬々所希望、乍去課金ノ爲ニ被爲對商民候テノ
御改革ハ、決シテ無之方
御至當ト奉存候。此段不顧恐懼
御親問ニ奉對答候也。

五月六日　慶永

明治元年の例

（○以下戊辰日記によりて補記す）
金百萬兩　關東軍備
同四十萬兩　鑛鐵船

同四十萬兩　横濱製鐵所

同八萬兩　貨幣器械

月々
同三萬兩　横濱外國方

同三萬兩　兵庫居留地

右當辰年御入用如此、日本國中諸侯・府縣是ヲ太政官へ納ムヘシ。高割金數ニ至リテハ、會計官ヨリ達スヘシ。　行政官

金三十萬兩　御所常御入用

同十二萬兩　四月閏月々給

同三萬兩　太政官御普請見込

同五萬兩　土州軍艦代

右　朝廷御入用、當年御物成ヲ以被補償候得共、夫迄ノ處富商へ御借金ノ事。

東北の賊徒と御東幸の件

四十三　明治元年五月御東幸に關し岩倉具視に建言

○公は五月二十九日の朝參内の節、岩倉具視の内談を聞かせられ、翌三十日この建言に及ばれたるなり。今其の控書により收錄せり。(奉書半切七尺八寸三分)

謹而奉捧一翰候。今日も晴色、乍去暑炎難堪候處、先以
皇上益御機嫌克被爲入奉恐悅候。隨而閣下愈御安寧被成御起居、別而日々御苦勞千萬奉存候。乍去爲國家、御壯健御盡力被爲在候事可賀可喜之至ニ候。扨ハ昨日從左府公(九條道孝)之御報知、實甥徳川龜之助事家祿等賜り、於臣重疊謹畏之至奉存候。右御禮　閣下迄奉申上候。抑昨朝御至密之大事件　尊話被爲在、於臣決而他言不仕、同僚中山卿始へも此儀ハ一言も不申聞次第ニ御座候。就夫、退　朝以後も篤と思慮仕、尙終霄再三之熟考ニ及申候。實ニ〳〵此度之
御出輦、
叡慮ハ先般徳川討伐之
御親征とハ被爲替、何分爲萬民　御撫恤被爲在候、御儀ニて、

東海道は未曾有の洪水

故に開通を待つべし

江戸の情況の平定を待つべし

皇國父母たる
宸念ノ臣等實ニ感激ノ至ニ御座候。然處方今宇內ノ形勢未平定ハ不及論、指向き東海道邊古今未曾有ノ大水ニ而、勢田橋も已ニ危く、大津ゟ草津迄ノ間も水湛ニ相成、夫ゟ如何ノ洪水か難計、民間ニあつてハ苗と〴〵く押流し、新ニ貰苗を植付候程ノ爲體ニ御座候。農事例年ゟハ別而繁く、とま薩摩ノ一諸侯ニ而も、道路ノ開を待ち、東行致度との御猶豫願も相成居候程ノ事、此節御出輦東海道通り被爲成候而て、却而爲夫ニ道中筋ノ農事と〴〵く廢却し、難有
叡慮も却而怨嗟ノ基と可相成哉、是一也。且又德川龜之助御所置、並家祿等被下置、一旦江戸府鎭定ノ趣ニ候得共、未た江戸府、德川家並旗本等ノ氣受等も不相分、今兩三度左府公ノ御報知ニより、
御出輦被爲定候而ハ如何。我々共ノ一諸侯スラ、先道中人足を始、道調等いたし候上ニ而、發足いたし候程ノ事ニ而候得て、況ャ被爲置
至尊候而て、猶以ノ御儀、御簡易御輕便ノ御趣意ハ難有儀ニ候得共、御輕忽被爲成候而て、却而

盛夏中の旅行を避くべし

朝憲之程も如何可有之哉と不堪案勞候、是二也。殊ニ炎暑之時分、誰ニ而も旅行仕候ハ相厭候儀ニ而、中暑下痢等之患有之、私共先年盛夏旅行之節も、實ニ困苦極り、下痢等毎々有之、晝休夜行之事ニ候。然ル處
至尊ニて日光ニも是迄も御あたり無之、風氣も御通ひ不被爲在暑中、御園御歩行も無之、
玉體を以、盛夏數日之御旅行、御苦勞ハ扨置、萬一二ツとなき
玉體御障り被爲在候而て、第一民之父母さるも疾苦被爲　救候難有
叡慮も、凡而水泡ニ屬し可申、臣等思ふ所
玉體さへ御壯强被爲在候得て、少〻之遲緩ハどふでもよろしく、吳々萬々一盛夏之
御旅行御障り被爲入候得て、跡へも先へも行かれ不申儀と存候、是三也。臣等乍不及、是迄小國ながら治民職分ニ御座候、何ニ而も一旦所置仕候而、其動靜を測知し、聊萬民平定之所向、相見へ候所ニ而布告候得て必行はれ、功を急き所置仕候而、衆人相迷ひ居、所向不定候所ニ而、金玉之政令施候而も、却而民情不受所より、跡戻り仕候よりは、遲くとも十分之美事被行候儀肝要と奉存候。不德之

江戸並に賊徒の情況平静の上決定せられたし

函根小田原賊徒に歸するとの報あり

小臣ゆへ、如斯儀ニて可有之候得共、決ゐ被爲置
至尊候ゐて、右様無之、
御出輦被爲在候得て、平定萬民難有可奉存ハ必定と存候。乍去、萬一左様無之
節ハ、誠ニ以當惑ゝ外無之、其節後悔候ゐも、駟も不及舌、ことく致方無之候間、
何分ニも今少シ江戸府御所置濟、賊徒退散後ゝ形勢、都下人心ゝ安着如何、此邊
至急左府公へ御尋問ゝ上、尚又御篤評被爲在候末　御決定被爲在候得て、却ゐ
御出輦　御著東ゝ上、至仁至聖ゝ
叡念貫徹可致哉と奉存候、是四也。昨日備前侍從(池田茂政)ゟ承候得て、函嶺ゝ關門脫走
東賊ゝ手ニ落チ、小田原も已ニ東賊ゝ指揮を受候哉ニも申聞候ゆへ、旁以右等
熟考仕候、是五也。只々婆情難止、臣涕泣ゝ餘、苦心ゝ末、心計りゝ所存例ゝ輕忽
言上　閣下仕候。尚
御出輦ゝ儀被　仰出候とも、決ゐ所存無御座、臣微衷迄ニ御座候。伏ゐ奉仰
御取捨候。誠恐誠惶頓首謹言

五月廿日　慶永

輔相岩倉公閣下

尙々正忌恐入候得共、至急不得止呈出仕候。多罪奉仰
御海恕候也。

四十四　明治元年六月民政に關する奉答書

○今現存する控書により收錄せり。(奉書半切三尺七寸六分)

六月九日の御下問

去ル九日
御下問之
勅書臣盥嗽百拜奉謹讀候處、
陛下至仁之
聖慮臣不堪感激之至候。臣常ニ聊熟思仕置候芹曝ノ微忱ヲ記シテ、以テ奉對
答

兵亂畿内より東方諸州に及ぶ

孝慈友愛を以て民政の本とすべし

救問候。臣伏テ惟レハ抑今春徳川慶喜ノ暴擧ヨリシテ、兵革頻ニ動キ、億兆日
夜苦塗炭、不啻畿内及東方諸州、
皇國之困弊次第ニ極ラントス。コレ
陛下ノ宵肝
叡慮ヲ被爲惱候所ニシテ、臣モ日夜痛歎スル所ニ御座候。臣ヲモヘラク、方今
國是未定、紀綱未振、故ニ、
陛下撫愛萬民ノ
聖念アツテ、其政イマタ擧ラス、イカントナレハ
輦下之民猶不安其居、或ハ暴客ノ暗殺アリ、或ハ竊盜アリ、或ハ倫常ヲ紊ルアリ、
京師カクノコトシ、況ヤ遐域ニ於テヲヤ、コレ民政ノ擧ラサルヲ證スルユエン
ナリ。臣又竊ニ方今ノ形勢ヲ觀察スルニ、天下自ラ殺伐ノ風ヲ爲シ、威力ヲ以
テ壓服セシメントスル勢ニテ、却テ孝慈友愛之俗ヲイヤシムルニ至ラントス。
仰願クハ、孝慈友愛ヲ本トシ、民俗淳厚ニ趣候樣被遊度儀、民政ノ御急務ト奉存
候。是太平ヲ開クノ
皇基ニシテ、民政興レハ、何ソ富强ノ足ラサルヲ患ンヤ。コレ

陛下撫愛萬民スル政治ノ根本ニシテ、錢穀ヲ以テ賑恤救助スルカ如キハ、一時ノ小惠ニシテ、常久ノ事ニアラスト云ヘシ。臣慶永不堪懇悃之至、誠恐誠惶頓首百拜謹上。

六月十日

四十五　明治元年六月二十二日越後出兵に關し一時歸國願

○建言集記に收むるところの越後出兵に關する諸文書、或は年月を缺き、或は差出人宛名並に之を逸し、讀者をして了解に苦ましむるもの少なからず。今便宜のため、慶永公が明治元年六月の歸國願を中心として之を整理し、茂昭公に係れるものは、相互の連絡を明かにして、之に附收せり。即ち福井藩に越後出兵の命のありしは明治元年五月廿二日にして、太政官日誌に其の達書を載せたり。次の如し

朝廷よりの達書

福井藩へ御達書寫

松平越前守（茂昭公）

爲會津征討、越後口へ出張被　仰付候、尤至急之軍務ニ付、從國許直ニ發途、速

茂昭公の願書

初夏以來の宿疾

先鋒隊は出張せしむ

ニ可奏成功樣　御沙汰候事、

五月

○これに對し越前守茂昭公は、其の五月廿五日、疾のため延期を請願せられたり。即ち次の如し。

私儀、今般爲會津征討、越後口に出張被　仰付、至急ミ御軍務ニ付、從國許直ニ發途、速ニ奏成功候樣、御沙汰ミ趣奉、謹承、迅速出馬可仕ミ處、初夏以來宿疾ノ脚氣瘴冷毒相加、起居不自由甚以難儀困苦仕候ニ付、精々加療養、少モ快ク候ハ、、速ニ出張精勵可仕奉存候。尤先鋒兵隊ミ儀ハ、直ニ出張爲仕候。此段御聞屆置被成下度奉存候。以上

○かくして六月二日越後總督府よりも出兵の命ありしが、この時も亦茂昭公は疾を以て其の期を緩ふせんことを請はれたるが、尋いて十三日重ねて出征の催促を受けさせらるるに及んで、この時は病未だ癒えざるを以て、老臣をして代りて其の兵を督せんことを請願せられたり。是に於て、慶永公は終に歸藩して、親しく朝旨を茂昭公に諭さんとふさせられ、其の廿二日この歸國の請願書を提出せられたるなり。○請願書は提出の後「附紙」を附して却下となりたれば今其の原本によりてこゝに收錄せり。（奉書半切六尺七寸五分）

慶永公の歸國願

國許に歸りて事情を調査し茂昭に之を説諭せん

先般爲會津征討、越後口江越前守(茂昭公)出張被仰付、其後屢數度御催促御座候ニ付、其節々直ニ以急飛申遣シ、此比ニ而ハ追々出兵之運ましも相成、越前守儀も無程出馬仕儀ニて相聞候得共、北越賊勢驕暴之報知も有之、實ニ切迫之模様とハ甚以遷延之姿、於慶永何共深ク奉恐入候次第ニ御座候。右て越前守病氣、精々加養モ仕候得共、イマダ快方ニ相運兼候趣故、其邊之處ヨリ彼是手後レも仕候哉、起居寢食片時も更ニ難安、甚以案勞不堪所ニ御座候。仍而慶永儀。早々國許江罷越、國許事情親敷見聞之上、猶又越前守並重臣共へも、至急之御趣意通リ厚ク及説諭、今後之心得方も篤と申談度奉存候間、何卒速ニ暫時之御暇給ハリ候樣、伏テ奉至願候也。誠恐誠惶頓首謹言

六月廿二日　　　　慶永

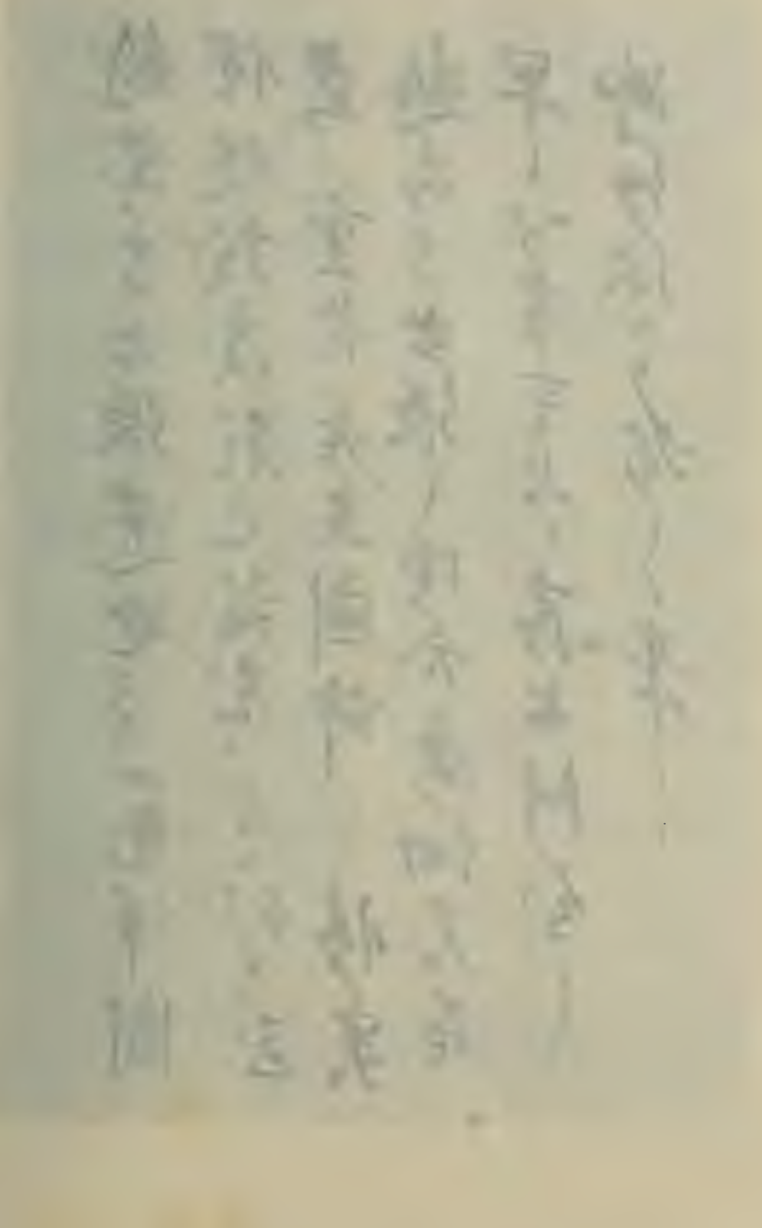
朝廷よりの附札

○「附札」の全文次の如し

越前守出張遷延ニ付、一先歸國催促致度願之趣尤ニ候得共、至急ニ重臣差立、國許之情實、越前守出張之頃合、委細見屆、早々可有言上候。其上何分之

先般爲會津
征討越後口江
越前守江出張
被仰付候處
數度
御催促御座候ニ付
其節ニ者又以急
飛申遣ニ付而も
追ニ出兵ニ運も
相成越前守殿も
無程出馬仕候ニ

御趣意通ヲ厚ク
及説諭候處
以前方ゟ寛ニ申
諸藩奉存候
乍何卒速ニ勅許
御賜給ハリ候様
伏テ奉悃願候也
誠恐誠惶頓首
謹言
六月廿二日　慶永



御沙汰可有之事。

り是に於て慶永公は附札の旨に從はせられ、翌二十三日更に次の書面を差出されたり。

附札による慶永公の返翰

越前守出張遷延ニ付、慶永儀一先歸國催促仕度、昨廿二日奉願上候處、至急ニ重臣差立、國許之情實、越前守出張之頃合、委細見届早々言上可仕、其上何分之御沙汰可被爲在旨被
仰出奉謹承候。

秋田玄蕃の報告

早速重臣可差立之處、昨夕重臣秋田玄蕃与申者上着、越前守儀者、先日來段々申上候通、病氣不宜候ニ付、領分浦方へ海水浴仕候處、不容易賊勢ニ付、追々

茂昭公の病況

御沙汰之趣も御座候故、去ル十五日福井表江罷歸候處、兎角手足麻痺甚敷、神氣幽蔽、始終平臥罷在、居間内歩行も出來兼候爲體故、至急之御軍務之所、甚奉恐入候得共、急々之出馬ハ無覺束奉存候。尤少々ニ而も快候得者、速ニ出馬可仕候。兵隊之儀者、追々繰出シ、先日御達之兵數者、來ル廿六日迄ニハ出拂候筈ニ御座候。此段奉申上候。以上

六月廿三日　慶永

叡慮一に春嶽に懸る

○而して二十五日慶永公は茂昭公の願書に添へ、再び歸國御許可の書面を提出せられたるが、この時岩倉具視よりの返書に「閑叟は病氣、宇和島は東下、容堂は病身、春嶽ならではならぬとの叡慮にて其上の御取計方無之候間、篤と御良考御歸國なくて相濟候樣、くれ／＼御賴被成候」とありて、公も歸國のことを一時思ひ止めさせられたり。茂昭公の願書次の如し

茂昭公の再願書

越後表に出馬之儀、最至急之　御用ニ御座候處、兼々奉申上候病氣、甚以難儀仕候ニ付、不得止延引仕奉恐入候次第ハ、過日以重臣奉申上候通ニ御座候。然ル處
朝廷ゟ每度之御催促ニも有之、且ハ北越之景況次第ニ切迫之趣ニ付、此場ニ當り遷延仕候而ハ、如何ニも心底不安儀ニ付、兵隊之分ハ追々爲繰出候得共御無心許奉存候ニ付、是非とも來月初旬ニハ、勉强輿病出馬之心得ニ御座候。就而者指向
朝廷近來之　御模樣等も承知仕度、次ニ國許取締之筋等迄も十分及相談、其上ニ而、無顧念出馬仕度奉存候。　右ニ付方今御多務之折柄、實以奉恐入候得共、養父宰相儀、暫時歸國
御暇被下置候樣、於私奉願上候。　以上

六月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　越前少將

越前守相願候旨趣ハ、先日國許之重役共へ爲相含、指出候事ニ御座候得共、過日於此表モ、國許之儀案勞之餘リ御暇之儀相願候事ニ御座候而、御附紙を以御指圖御座候折柄故、引續奉願候段恐入、躊躇罷在候得共、又々別段ニ申越候次第も有之、實ニ不得已事情ニ付、何卒御亮察被成下、暫時御暇之儀被爲聞食屆候樣、奉願上候。以上

六月

○以上茂昭公の請願書をも、こゝに併載し、以てこの間の事情を示し、讀者の參考に供せり。且つ以上の願書はいづれも其の宛名を逸すれども、恐らく岩倉具視に宛てたるものなるべし。尚、次に收むる第四十六號議定職の辭表を參看すべし。

四十六　明治元年七月議定の辭表

○辭表は七月七日前宇和島の藩主伊達宗城を以て輔相岩倉具視にまで提出せられたるが、具視は都合により之を奏上せざりしこと中根雪江が戊辰日記に詳なり。今現存の控書により收錄せり。（本書半切四尺五寸七分）

（宗城控書）「戊辰御辭職御願」

慶永不肖之身を以、

御一新之折柄、高官重職を辱候儀、兼々深く恐入罷在候處、方今不容易御時勢ニ押移候爲、其起原宗家徳川氏ゟ出候儀ニ御座候得て、支族之慶永猶以日夜寒心恐惶仕居候事ニ御座候。乍併徳川氏之儀て、慶喜伏罪恭順之次第被爲聞召、寛典を以社稷保存被　仰出候ニ付、聖恩感戴益恭謹罷在候趣ニ候得共、其黨類並脱走之賊徒等、今以官軍ニ抗し、鎮伏仕兼、奉惱宸襟、實以不堪恐懼之至奉存候。夫ニ付國情ニも亦不得已次第御座候。仍て此儘在

徳川氏周旋の内諭を蒙りながら今日の情勢に至れるを

廷罷在候而も、宗支之纒累、大方之嫌疑責讓も難免、
朝廷之御爲ニ茂難相成奉存候間、何卒格別之
御憐愍を以、當職御免被成下候樣奉願上候。猶委細之儀ハ、以別紙申上候通ニ
御座候間、偏ニ奉仰
恩免之御沙汰候。

七月　　　　　　慶　永

〇辭表に添へられたる別紙次の如し。
今、現存せる控書によりこゝに收錄せり。（奉書半切七尺四寸六分）

（端裏書）「戊辰御辭職御願御別紙」

抑客冬
御大政御一新之際、尾張大納言（徳川慶勝）並臣慶永徳川氏一件周旋之
御內諭を奉蒙候得共、庸才駑鈍ましにて盡力之所詮無之而已ならば、遂ニ正月三
日伏水之兵事ニ及ひ、恐多くも一旦
御親征迄立至り、其後徳川氏も降伏謝罪ニも相成候得共、其黨類並脫走之賊徒

遺憾となす

要するに慶喜の誠意貫徹せざるに由る

駿府七十萬石と定められた結果多數浮浪者の出でんことを悲しむ

在朝唯一

蜂起、爾來半年干戈未止今日之形勢、往々ハ皇國之御危殆とも可相成哉之次第も、畢竟德川氏より發起候事ニ而、支族之分ニ而て不堪恐懼之至候。況や臣ニ至候而て、全周旋鎭撫之力不行屆故之儀ニ而、奉對、朝廷候義ハ勿論、海內外並宗家祖宗へ對し、終天之遺憾涕泣恐懼此事ニ御座候。初メ德川慶喜謝罪恭順之筋ニおいてハ、慶永乍不及多少盡力仕候事ニ而、斯ク恭順を誘導仕、慶喜眞ニ悔悟謝罪之誠意貫徹仕候ハヽ、德川氏臣子末々迄も離散不仕、皇國之動亂ニも不立至、生靈も塗炭を免れ候樣可相成歟と仰望仕居候處、其秩祿被仰出候末て、德川氏臣子多數流離ニも可及體と相成、就而ハ共服事之臣子ハ不及申浮浪と相成、今日之糊口ニ窮シ候輩ニ至るて、猶更無限之失望ニ而、日夜悲歎可仕儀と、於臣も慘怛悲痛を極め、將タ賊焰も夫か爲ヨ消滅仕兼候歟と恐懼仕候。且大納言儀ハ、春末歸國致し、支族中ニ在て臣獨從舊冬至今日、立廟堂重職を辱居候事故、德川氏一條之

人の德川の支族としての苦衷あり

今や因循在職に忍びず

朝議ニ於て、臣悉く參し可申儀ハ天下之具瞻ニあたり、德川氏之御所置ニ於て、衆望違算ニ相成候向々ハ、支族たる臣而恬然在職知らさる如くなるを、憤然責怒可仕儀ハ必然之勢と奉存候。乍恐敝邑も德川氏支族之臣民ニ御座候得ハ、自ら右之氣勢を帶ひ居候故、何角ニ付於臣深く心痛仕候事ニ御座候。其上慶永在職仕なから、
朝廷宗家之爲ニ、一身を果し得不申、事之爰ニ至るを坐視し、自他之責望を受候而者、盡忠補過之道を失ひ、不信不義之罪悔ニ落入可申歟と、臣民一同安んし兼候も、
朝廷之御模樣、相辨さる邊鄙之國情ニ而恐入候得共、是又臣子忠愛之情義ニ出候事ニ而、實ニ無餘儀筋ニ御座候。右者春來德川氏一條ニ付而ハ、
朝廷祖宗之爲ニ十分肺肝を吐露し、廷爭力を極メ可申節ニも御座候處、其期を失し今日ニ到り、懵然在職仕候故、右等之罪責を得候儀と反求候得者、臣之聚怨積怒を來し候緣故も實ニ、不能免所以ニ而、心魂ニ徹し日夜戰兢蹈氷之心地ニ御座候。かゝる薄德菲才之身を以、因循在職仕居候儀ハ、奉對
朝廷不堪恐懼之至、又厚顏を拭ひ衆人ニ對候儀不堪愧赧、且國情疑懼を抱候も

官位も役儀と共に拜辭せん

不堪憂慚、右三不堪ノ情實ヶ樣ニ陳述仕候上ハ、是迄ノ面目を以、再ひ
廟堂ニ相立候儀ハ難出來奉存候得ハ、何卒此上ノ
聖恩を以て、速ニ當職被免候樣奉願上候。過日ハ歸國ノ上越前守始へ申談、右件奉願上度と奉存候得共、追々時機切迫ニモ罷成候得ハ、當御役御免被成下候得ハ、國許へハ重臣差下し、越前守申談國情慰撫仕、臣民末々迄、無顧念勤
王一途ノ御奉公、快然勉勵爲仕度儀と奉存候。旁々前書ノ次第ニ而、在職仕居候而ハ、第一御爲ニモ相成不申、大方ノ嫌疑モ不少、隨而國情モ落合兼、進退相谷り候心情深く
御憐察被成下、速ニ願ノ通
御聞屆被下置候樣偏以奉願上候。且又當官位ノ御任敍ハ、御役ニ付候義とハ乍申、祖先ニ超越仕、過分至極ノ仕合ニ付、先達而ハ御猶豫相願候處、此頃ニ至り
再
命、殊ニ別段御垂諭モ御座候故難有御請ハ仕居候得共、殆不堪恐縮、日夜安んし兼罷在候折柄ニモ御座候得ハ、御役御免相願候ニ付而ハ、此儀モ更ニ御辭退奉申上度奉存候間、是亦被爲

聞食候樣奉願上候事ニ御座候。

七月　　　　　　慶永

○辭表提出の翌日卽ち七月八日其の約文を福井に送付し、諸向に示されたるものあり。左に掲げて參考に供す。（本書半切四尺九寸三分）

藩地に送りたる辭表の約文

一亂階德川氏ニ起り、周旋不行屆まて恐縮ゝ事。

一慶喜恭順を勸メ候て行ハレ候得共、御所置ゝ末缺望流離ゝ向有之、賊焰消兼候事。

一支族ゝ內まて壹人大政參シ候故、德川氏御所置ゝ次第も、惣テ同意ニテ救援ゝ存意ハ無之歟、德川氏始天下ゝ責怒一身ニ引受困窮至極之事。

一弊國臣民迄も同情ニテ在職ヲ欲セス、忠愛ゝ情とハ乍申、國情落合兼甚心痛之事。

一春來十分

廷爭可盡節有之候得共、盡兼候儀共も有之、今更對
朝廷不相濟、衆怨ゟ來ルヘキ所以有之、重々不調法と存候事。
一難立
廟堂候事。
一何卒辭職自他ゟ情懷ヲ慰撫シ、越前守勤
王純一ニ奉行致やをき樣、庶幾イタシ候事。
一此上强テ在職候迚、御爲ニも不被爲成、嫌疑も有之、國情も如斯候得と、旁歎願
速ニ被
聞食度候事。
一御役ニ付タル過分ゟ高官位辭退ゟ事。
七月　慶永

四十七　明治元年七月詔書の詞章に就き建言

○この建言は元年七月十七日の「江戸ヲ稱シテ東京トセン」の詔書に對するものにして、岩倉具視に提出せられたるなり。今岩倉家の舊藏にして山本武太郎氏の所藏に係れる原本によりて收錄せり。尙太政官日誌により其の詔書と副書とを左に揭げて參照に供す。

詔書寫

朕今萬機ヲ親裁シ、億兆ヲ綏撫ス。江戸ハ東國第一ノ大鎭、四方輻輳ノ地、宜シク親臨以テ其政ヲ視ルベシ。因テ自今江戸ヲ稱シテ東京トセン。是朕ノ海內一家、東西同視スル所以ナリ。衆庶此意ヲ體セヨ。

辰七月

慶長年間、幕府ヲ江戸ニ開キシヨリ、府下日々繁榮ニ趣キ候ハ、全ク天下ノ勢斯ニ歸シ、貨財隨テ聚リ候事ニ候。然ルニ今度幕府ヲ被廢候ニ付テハ、府下億萬ノ人口、頓ニ活計ニ苦ミ候者モ可有之哉ト不便ニ被　思召候處、近來世界各國通信之時態ニ相成候テハ、專ラ全國ノ力ヲ平均シ、皇國御保護之御目途、不被爲立候テハ不相叶御事ニ付、屢東西　御巡幸、萬民ノ疾苦ヲモ被爲問度深キ　叡慮ヲ以テ、御詔文之旨被　仰出候。孰レモ篤ト御趣意ヲ奉戴シ、徒ニ奢靡ノ風習ニ慣レ、再ビ前日之繁榮ニ立戻リ候ヲ希望シテ、一家一身之覺悟不致候テハ、遂ニ活計ヲモ失ヒ候事ニ付、向後銘々相當之職業ヲ營ミ、諸品精巧物産盛ニ成行キ、自然永久之繁榮ヲ

漢文に近し俗文の方可然か

不失様、格段之心懸可爲肝要事。

謹承、別存無御座候得共、
御詔文乍恐漢文ニチカク、衆人ノ了解如何可有之哉、今一層俗文ノ方却テ可然
歟。
行宮ヲ置キ天下平定ノ後、
親臨ノ御文、被入可然候。
慶長年中幕府ヲ江戸ニ開ク云々。
臣案スルニ、將軍
宣下ノ後ニアラサレハ、幕府トイヒカタシ。　家康ノ江戸ニ封セラルヽヤ、天
正十八年四月小田原役、豐秀吉以家康封關東、秀吉ト相談ニテ江戸ニ城ヲ築
クヲ謀ル、文祿元年江戸城ヲ脩拓ス。　慶長八年二月
天皇以家康爲將軍職、コレヨリ以後幕府ノ名アリ。　外史ニ詳ナリ。
コレヲ以ミレハ、被
仰出書ノ最初、御不都合ノ様被存候、尚

謹承別存無御坐
候得共
御詔文作聡漢文ニ
チカク衆人ノ可解如
何可有之哉今一層
俗文ノ方却テ可然歟
行宮ヲ置キ天下平
定ノ後
親臨ノ御文可然候
慶長年中幕府
ヲ江戸ニ開クト云ヽ
臣案スルニ将軍
宣下ノ後ニアラサレハ幕
府イヒカタシ家康ノ江戸
ニ封セルヽヤ天正十八年
四月小田原役豊臣秀吉
以家康封ヽ関東秀吉ト

相談ニテ江戸ニ城ヽヲ築ケリ
ヲ謀ル文禄元年江戸城
ヲ修拓ス慶長八年二月
天皇以家康為将軍職
コレヨリ以後幕府ノ
名アリ　外史ニ詳ナリ
コレヲ以ミレハヒ
御書ノ最初聊不都
合ノ様ニ存ケ尚
諸臣卿ノ高案アルヘキ
所ナリ
東京
御親臨ハ平定ノ後可被
為在御尤然ナリ急速
ノ儀ハ変テ可然トモ不奉
存候也
七月十五日夜半八字
慶永
但辞表中認入候得共
愚衷認兼多罪
御海恕奉希候也

平定を待つて御親臨然るべし

諸賢卿ノ高案アルヘキ所ナリ。

東京

御親臨ハ、平定ノ後可被爲在御當然ナリ。急速ノ儀ハ、決テ可然ト不奉存候也。

七月十五日夜第八字

慶永㊞

但辭表中恐入候得共、愚衷認候。多罪

御海恕奉希候也。

○又この建言の日付「十五日」とあるは、詔書御發布以前に、議定に御內示のことありて、其の夜の建言に係れるが爲なり。又但書の「辭表中」とある辭表は、七月七日提出の議定の辭表（四六）を指せるなり。

四十八　明治二年正月府縣制度に就いての建言

○この建言は、前記第十九號の明治二年正月再度御東幸國是御確立に就いて

の御下問に對する奉答書に附屬すべきものなるべし。今現存の控書により收錄せり。（本書半切三尺七寸三分）

版籍奉還後の處置としての府縣

（裏端書）「府縣ゝ事御上書」

一府縣之事

臣等伏テ惟ルニ、

皇政古昔ニ復シテ以來、各府各縣御創立、其知事ヲ被置、御制度夫々御決定有之ト雖、所謂兵馬蒼皇中ノヿニシテ、イマタ永世不朽完全ノ規則トイヒカタシ、ユヘニ、

至尊

東幸、天下ノ會議ニヨツテ、

宸斷御決定可被爲在ハ勿論ナリ。方今天下牧伯、追々版籍ヲ奉還ス。是亦以

公議其適宜ヲ所置セサルヲ不得。臣等請試ニコレヲイハン、諸侯ノ版籍ヲ

朝廷ニ收ム、然則、是マテ侯伯所管轄ノ國郡ヲモツテ、府トシ縣トス、マタ知事ヲ置カサルヲ不得、方今ノ體裁實ニ靜寧ノ色ヲミス、益紊亂ヲ生スヘシ。イカン

今の府縣知事の行爲は聖意に反す

舊幕府の郡代代官の經費は一

トナレハ、府縣ノ知事モトヨリ
御委任ノ叓ニ候得共、コレヲ概見スルニ、皆銘々所管轄ノ府縣ヲ翕然富シテ、以テ兵隊ヲ編束シ、自己ノ所考ヲ以、勝手次第ニ裁決シテ、五官ノ規則ヲ不顧、況ンヤ
太政官一新公平ノ
御旨趣ヲ度外ニス、且
聖意ノ嚮フ所ヲシラサルニイタル。コレ知事私欲苞苴ノ罪ナシトイヘトモ、於政道頗妨害アリ。畏レスンバアルベカラス。某府大ナリトイヘトモ、費六十萬金、蒼鋪縣ノコトキアリ、高山縣ノコトキアリ、以此形勢六十餘州ヲ府縣トス、後世ハ勿論、現場萬民疾苦、終ニ天下ノ困弊ヲ極ムヘキカ。仰願クハ、先從前府縣ノ御制度御確定有之、各府各縣ノ知事奉戴
聖意、太政官ノ
御旨趣ニ本ツキ、以民政ヲ擧ルヲ急務トス。而六十餘州ニ府縣ヲ設ケ、知事ヲ置ク、何ノ遲キヿカコレアラン。乍恐舊幕府、國郡ニ郡代代官奉行ヲ置ク、其費今ニ比スレハ十ノ一ナリ。舊幕府五郡代五奉行ノ管轄ノ費、今ノ一府一縣ノ

今の十分の一なり

費ニアタラス、コレヲ以テミルヘキナリ。

四十九　明治二年二月國是御確立に就いての御下問に對する奉答書

○この奉答書は、明治二年四月廿日詔により、東京皇城の小御所に於て、國是確立に關する御諮詢のことあらせらるるに先ち是歳二月、内々の御下問に奉答せられたるものにして、前記建白書類所收の第十九號の答書と重複の觀あれども、前者は未定稿の如きところあるに反し、是は德大寺・中御門・鍋島等三名の連署にして、完備せるに似たり。故に建言集記に從ひこゝに收錄せり。

今般東京
御親臨、群牧ヲ被爲
召、輿論公議ヲ以テ國是ヲ可被爲定
叡旨ニ付、豫メ議參意見可言上旨

皇國の大基礎を建つべし

我國體は世界に冠絶す

徒に外國文明に眩惑すべからず

御命ニ付、臣等不顧魯鈍奉對答候。

一皇國大基礎之事

伏惟ルニ、
天祖神器ヲ
皇孫ニ傳ヘ、斯國ニ
君臨セシメ給ヒシヨリ
皇統綿々億兆仰之如日月、幾萬世ノ久シキ以テ今日ニ至ル、彼材能アルモノハ匹夫ト雖モ天子トナリ、堯ト云、舜ト云、或ハ放伐相代リ、聖賢ト稱スル如キモノニ非ス、是國體ノ最尊モノニシテ、宇内ニ冠絶スル所以ナリ。方今宇内交際日ニ開ケ、文物制度各其盛大ヲ競フ、抑物ヲ開キ、務ヲ成ス、天下ヲ經綸スル所以、我
皇國固有ノ制度、悉ク長處アルニ非レハ、人ノ長ヲ取リ、我短ヲ補フ、固ヨリナリ。然レ𪜈臣等深ク恐ル、今日交際ノ盛ナル、心醉耳食ノ徒、特ニ彼ノ盛强驕侈ノ風ニ眩シ、文物制度悉ク彼ノ體裁ニ法ランヿヲ欲シ、彼我長短ヲ分辨スルヲ知ラス。如此ニテハ、國體遂ニ併セテ失ハントス、然則今日

皇紀維新ノ際ニ遭遇シ、人々國體ノ在ル所ヲ明ニシ、彼ノ長スル所ヲ取、我短ナル所ヲ補ヒ、

皇國ノ大基礎ヲ建ンヿヲ希フ。

人材を擢用すべし

一人材擢用ノ事

臣等考ルニ、刑賞與奪ハ大權ナリ。大權ヲ持□□人ニアリ。然𪜈人材必ス大功ヲ成シ、又必ス大害ヲ成ス、治亂ノ由テ判ルヽ所ナリ。故ニ其人撰ハサルヘカラス。其任亦審ニセサルヘカラス。假令智慧人ニ異ナルモ、操行不正ハ固ヨリ論ナシ。宜シク才行純正ヲ撰ヒ、總テ温厚誠實ナルヲ擧用センヿヲ希フ。

正大の道を以て天下を治むべし

一正大ノ道ヲ以テ天下ヲ治ムル事

臣等考ルニ、昨春以來兵馬匆卒ノ際、多クハ權道ニ處スルモノ有ルニ似タリ。今後願クハ、專ラ正大ノ道ヲ以テ天下ニ臨ミ給ハンヿヲ。且是迄詔令屢出テ、屢變シ、下情相疑ヒ、物議日ニ生ス、宜ク號令一ヒ出テ復ラス、一事一令コレヲ始ニ愼ミ、天下ヲシテ由ル所ヲ知ラシムヘシ。傳曰、令重則君尊、又曰、國之安危在出令ト、庶幾ハ政令清簡ニシテ、衆庶信服センヿヲ。

一事一令之を始に愼むべし

海軍七ニ陸軍三

一軍制ノ事
兵ハ彼ノ長スル所ナレハ、各國ノ長處ヲ取リ以テ我兵制ヲ一定スヘシ。
但日本環海ノ國、故ニ七分ノ海軍ヲ置、三分ヲ陸軍ニ充ツヘシ。
內地人心軍制一定ノ上ハ、大ニ
皇威ヲ海外ニ耀シ、支那朝鮮ノ如キハ屬國タラシメ、西洋各國ヲ壓倒シ、遂ニ
宇宙間ノ
一天子トナシ奉ランヿヲ冀フノミ。臣等誠恐誠惶頓首百拜謹奏

二月

實則 大〇寺德
經之 中〇御門
慶永
直正 鍋〇島

一建言集記終

建言拾遺

五十　安政元年二月晦日國威宣揚幕政改革に就いて老中阿部正弘に建白

○この建議は、去る正月十六日米艦の再來後、幕府當局の頗る因循にして唯平穩のみを希ひ、敢て皇威の毀損せらるるに至れるを顧みざるに憤慨せられ、其の對策として提出せられたるものあり。今、現存せる草稿を以てこゝに收錄せり。（半紙判十四枚）

（表紙上書）

草　稿

墨船の渡來に對し儉約令と品川砲臺との構築とをゐ、せるいみ

更に士氣振興のことに及ぼす

覺

一正月中旬、北亞墨利加船渡來以後三十日有餘ニ相成候ヘ共、未タ退帆ノ樣子モ無之、誠以可申上樣モ無之御時態ニ差迫リ、恐懼ノ至奉存候。就夫、日夜不安寢食苦惱仕種々致熟考候儀、獻芹ノ鄙衷ニハ可有御座候ヘ共、心付ノ儘建白仕候。

一當年北亞墨利加船渡來ノ儀ハ、已ニ昨夏六月罷越候節、彼理呈書ニモ認有之事ニ而、勿論御覺悟被爲在候御儀ト奉存候處、唯々節儉ノ御觸、並品川沖三ヶ所御炮臺御築造、且大炮等御鑄造ノ御目論見而已ニ而、天下ノ士氣振興仕候樣成御仕向ケ等ハ一切不奉伺、日々痛憤憂悶罷在候儀ニ御座候處、十一月朔日重キ
上意ノ趣モ御座候ニ付、當年亞墨利加船及渡來候節ノ神算嘉謀、兼而御定被置候故、專ら亂世ノ御所置ニハ無之、萬緖ノ御治務共儘ニ被差置候儀と竊ニ奉恐悅居候處、今般亞墨利加船及渡來候より、今日迄ノ　御所置、乍恐
廟策被相定置候樣ニモ不奉存、彼ノ模樣ニより
廟議モ致變遷候事ノ樣ニ奉存候。且風說承候處ニ而ハ、夷奴ノ内死亡有之、

覚

一 当（正）月中旬亜（北）墨利加船渡来以後ニ至り日々番船八艘

未た退帆之様ニも無之、諸家以下上様ニも無之御用懸

差迫り候儀ニ付、右等之儀ニ付彼是当分及不安穏、其筋仕

様ニ付被致勘考候（儀）処、鄙衷之何分も御沙汰之趣ニ付人心

伺之儀奉建白仕候

一 当年亜（北）墨利加船御近海ニ乗寄渡来之儀ニ付

昨夏六月浦賀表へ渡来、書翰差出候ニ付而者、追々御備

諸大名等ニ至迄御備向手厚ク御取計被仰付候 沙汰

夷奴の死骸を横濱の某寺に葬れる風說

皇國の汚穢この上なし

應接の場所を鎌倉と定めながら彼の要求によりて横濱に移し貢物を受領して之に答ふるは即ち通信にあらずして何ぞや

又石炭渡し場を下田となす

忠信篤敬を以てこ

彼ノ願ニ被任候而、横濱某寺江致埋葬候由、是迄足踏も不爲致、御武威盛大ノ神國、就中御府内不遠場所江、初而夷奴ノ死骸を葬候抔ハ、公邊思召御趣意ノ儀ハ如何難計候へ共不可有此上皇國ノ汚穢を切齒憤痛ノ至、絶言語候仕合ニ御座候。 又御返翰御渡鎌倉ノ由ニ而、御固メ諸侯も被　命候處、彼申立候故ニ可有之哉、屋形浦江小屋相立、一旦及應接、又彼より波荒ノ申立ニ而、本牧横濱江御小屋相移及應接、或ハ通信交易　御許容ノ有無ハ不被仰聞候とも、彼ゟ獻貢物　御受ケ被成、又從公邊、夫々江爲御答禮被下物有之候儀ハ、畢竟通信ニ相當り、是ゟ外ニ通信と申儀も有之間敷、又異船八艘ノ内二艘下田湊迄罷越候儀ハ、被下候石炭御渡場見分と申風說も有之、是も肥前國長崎港ニ而御渡可被成と掛合ニ相成候處、不聞入候故下田港ニ極候儀ニも可有之哉と奉存候。 右樣何事も、彼ノ願ニ而已被任候而ハ、際限も無之儀ニ而、恐入候儀ニ奉存候。 勿論右ノ條々御聞屆ケ無之候ハヽ、忽可及兵端勢ニ可有御座候得共、出來候筋ハ被成遣、難相叶儀ハ忠信篤敬ノ　御決斷を以被仰聞、其上ニも彼より可及爭端勢ニ相成候ハヽ、昨冬十一月

の方の決断を示すべし

彊暴の墨を畏服せしむれば英佛魯は直に屈服せん

然るに幕府今回の措置は兵威に屈するもの皇國開闢以來の屈辱なり

姑息なる穩便の手段は後世賣國の汚

上意之通りニ、諸藩一同擧而及防戰候ハヽ、必敗衂者仕間敷、夫程之凛乎とは
皇國之御威勢相著候ハヽ、彼ゟ知不可犯、却而敬服ニ可及儀与奉存候。　亞墨
利加者全世界中ニ而彊暴之土地と承候得者、今般亞墨利加人及畏服候ハヽ、
英虜佛夷魯蠻抔先渡來致間敷哉与奉存候得共、今般之如く只管ニ爭端相開
候御掛念ニ而、平穩無事と而已御取扱御座候而者、彼之猾黠ハ益募り、我之御
措置者彌姑息ニ相流れ可申儀与奉存候。　夫故ニ交易御許容之名者無之共、
實ハ同樣ニ而、十分兵威ニ御撓屈被成、被枉
御國體、彼之願次第御許容相成候儀与奉存候。　左されハ開闢以來萬古屹立
之
皇國、今茲嘉永七年甲寅之春ニ當つて、初而夷狄之屈辱を被爲受候儀、乍恐
征夷大將軍御重任者御名而已ニ而、上ハ
天朝御代々、
神祖御始御歷世樣方江被對、下ハ諸大名萬民迄江も、御信義拂地、御申譯ハ被
爲有間敷儀と奉存候。　扨又、日夜恐惶殘念奉存候儀者、此度者只管ニ此儘ニ
御穩便而已を被　思召、兵端不相開樣ニとの　御趣意ニして、苟且姑息之御

名を遺さん

眞相を明示して世人の疑を解くべし

墨國との應接を筒井川路の兩人に命じ長崎に於ける魯と同樣にすべし

取扱而已相成

大將軍之御武威も無之、此節當路參謀之諸御役人ハ、擧而萬一賣國之賊臣抔と青史ニ書殘し、萬古ニ汚名を傳へ候而者、誠以殘念至極、無此上儀と奉存候。乍併、ケ樣ニ者申上候ものゝ、

公邊ニ被爲置候而も、此度之儀を無御貪着、　御許容相成候儀ニ而者無之、定而御血涙之御評議まて、不被得止事御場合ニ相成候儀ニ者可有御座候得共、其儀者萬人存不申、只事業ニ著者れ候所ニ而相伺居候ハ、前文申上候通りニ御座候。何分亞墨利加人及畏服致退帆候ハヽ、外々之夷狄、暫ハ渡來致間敷候。亞墨利加人江通信交易之名ハ無之とも、實ハ同樣ニ而、猖猾之願意一々御聞置ニ而及退帆候ハヽ、萬國共風を望て忽チ致來舶、魯西亞ハ江戸を願ひ、英夷ハ大坂を願ひ、佛虜ハ浦賀を願ひ、　御許容無之候得者、忽チ可及兵端抔申募り候節ハ、其通りニ而被任願意候而者、際限も無之事ニ相成、　日東速ニ可及虛耗と奉存候間、只今之處ニ而應接方御取替ニ相成、筒井肥前守川路左衞門尉於長崎近く魯西亞人對談仕候手當りニ御座候得者、是等へ被　仰付、應接之模樣一新いたし

この後は臥薪嘗膽君臣上下擧つてこの屈辱を雪ぐに努力すべきを天下に開示すべし

御國威相立候樣仕度儀と奉存候。　乍去それも當今の御時態ニ而、一旦御談濟ニ相成候儀を、再被變遷儀ハ乍恐御六ケ敷儀と奉恐察候得ハ、此度ハ十分彼に御撓屈被成候事故、此御耻辱を何分ニも御雪〆無之候而ハ、前文ニも申上候通り
天朝ハ勿論、祖宗へ被對候而も、相濟不申儀と存詰罷在候。　尤方今の御時態、邊ニ澆季ニ陷り候事故、乍恐
公邊ニ被爲置候而も、嚴敷御儉約被　仰出、諸大名江も武備嚴重、砲艦鑄造被命候位の事ニ而ハ、迚も參り候時に而も無之奉存候。　彼西土におゐても、越ノ勾踐會稽の耻辱を不忘、臥薪嘗膽の奮勵ニも、今一層の事ニ無之候半而ハ難相叶儀と奉存候得ハ、此時ニ當つてハ、今般の御所置、ケ樣〱の無御據御運ひニ而、忍んてケ樣の御取扱ニて相成候得共、畢竟
神州の御耻辱無此上事ニ候得ハ、今日よりして
君臣上下擧けて、　御耻辱を被雪候一途ニ心力を盡し、奮激勉勵可致旨明らかニ天下の諸侯江御開示有之、何年の後ニて急度夷狄を服すへき旨、血を噉つて　御誓約有之、今日治平の勤務ハ、萬端御放下の上ニ而、

然るに品川の臺場未だ完成に至らず今回の墨夷退帆すれば或は敵國外患のこと忘るるに至らん

御武德可相耀方に御力を被込候半而ハ、迚も此末御汚辱御雪〆と申儀ハ難
相成事と奉存候。
公邊ニおのせられ候而も、定而今度亞墨利加船退帆の末、早々被　仰出も有
之、追々臥薪嘗膽の御取行ニ可相成
廟算も可被爲在歟ニ候得共、方今の勢ニ而相考候得ハ、一ト通りニ而ハ迚も
御六ヶ敷事と奉推察候。　其極意ハ昨年迚も、退帆の末ハ其邊の御評議ハ御
座候事歟と奉存候得共、今日ニ至る迄、品川沖御臺場さへも、いまさま成功爲
不致爲體ニ有之候處を以申上候。　乍併、まさも昨夏ハ今年又々渡來の心得
有之候故、少々ハ一體の人氣も引立有之、武器類等も相整候得共、今度退帆相
成候ハヽ、重ねて渡來の的標無之故、天下の人心日々ま生怠惰、詰りハ敵國外
患可致忘却奉存候。　右様に相成候而ハ、
御武威の宏張ハ勿論、人心振興可仕儀、決而無之儀と奉存候得共、何分ニも昨
年ゟ當年迄のとき御爲體の儀ハ、今更致方も無之候間、彼尺蠖の屈伸と同樣
ニ而、此度墨虜の輕蔑侮慢を被爲受候儀を、前文の會稽の耻辱ニ被比、乍恐
將軍樣も旦暮ニ熊膽を被爲嘗、在廷の諸有司列國の諸大名も、同樣日夜憤慨

太平の事務は一切之を放擲し專ら高度國防のことに當るべし

を不忘、日々月々層倍して御作振被爲在候ハヽ、夫ゟして千條萬端之御措置も被爲出來候御儀必然と奉存候。　恐多き事なから、今度墨虜之凌辱を被爲受候ハ
將軍樣御一身ニ而已止候儀ニ而ハ無之、勿體なくも
天朝　東照宮御始御代々樣迄を汚し奉り候儀と存詰候得ハ、何分ニも此屈を伸へすしてハ難相濟儀と奉存候。　此末　御國威御挽回無御座候而ハ、乍恐
將軍樣を奉初、貴國之罪御遁れ難被成儀と奉存候。　是等之儀思召詰られ候ハヽ、中々以片時も不安事ニ候得ハ、讐敵眼前ニ滯帆罷在候內ニ、前條之大命令被下候ハヽ、年始ゟ歲暮迄之太平之治務、萬事萬端御擲却被爲在、御殿向銅瓦迄も剝取大炮鑄造之方へ御打込被成、後宮も御用足り候計ニ被成置、御衣食も暖飽迄ニ而、御普請等も一切御停過、雨露之御凌迄ニ被成置候樣無之候半而ハ、迚も天下之人心憤興可仕儀ハ無之と奉存候。　右樣ニ治世之粉飾ニ預り候冗費之勤務、一切御放下被成、日繼夜之　御至念を以テ、義勇發達富國强兵を御勸誘御座候ハ

幕府其の範を示さば天下皆之に倣はん

參勤の制獻上贈遺のことを廢止し以て大名の國力增進

ヽ、公邊し御勢ニ而は、倏然御成就可有之奉存候。　左樣無之候半而は、迚も御國威し挽回し道ハ有之間敷と奉存候。　扨又右樣ニ公邊ニ而御奮發被爲在候ハヽ、諸大名ハ猶更增倍勃興不仕候半而は難相成候得共、兩山其外夫々し火防を初、御手傳金等も被　仰付、治世し勤務ニ而諸候も當時甚困窮ニ相迫り居候儀ニ御座候處、當年亞墨利加船は及退帆候而も、引續萬國渡來可仕ハ指見へ候事ニ御座候。　其每度御固メ等被仰付候而は、いのまも勞役ニ堪兼候儀ニ而、失費も不容易、奔命ニ而已疲れ、國力虛耗致候而、此上ニ武備嚴重ニ仕度候とも、出來不申仕合ニ相運ひ申候ハ眼前ニ御座候間、兵端可相開御趣意ニも無之、當年し通り平穩無事し御取扱ニ御座候ハヽ、是迄し在府人數ニ而、出火し振合位ニ而固メ被仰付候ハヽ可然歟。　當時諸大名、國許在所より多人數召呼候勢ニ相成居候事故、日々し雜費不容易事ニ相成國力疲弊し損害ハ御座候得共、其益ハ無之、防禦し實用ニも相成不申、固メ人數差出候事ハ、疣贅無此上奉存候間、何卒昨秋も及建白候通り、諸大名妻女國許へ被指遣、年始ゟ歲暮迄し進獻物一切御止メ被成、御役

を計るべし
諸侯の困弊は皇國の衰弱なり

國力衰耗の極不時の變も起らん

人方へも贈物も被止、大名ハ三四年ニ一度つゝ參府ニ相成候ハゝ、却而
幕朝之御爲ニも相成、諸侯ニ而も大ニ難有可奉存候儀ニ御座候。其他諸侯
之難儀ニ相成候儀共ハ、悉ク御省被成候様致度奉存候。何分諸侯之困弊ハ、
皇國之衰弱ニ而、御大事至極之儀と奉存候。御役人方ニ而も、贈物無之候半
而ハ、格別迷惑ニ相成候筋も候ハゝ、其數に當り候程、從
公邊御手當被下候ハゝ可然奉存候。唯今之御時態ニ而、治務御放下も無之、
諸侯參府も是迄之通りニ而、蠻船及渡來候毎度、御固メ等被　仰付候様ニ而
ハ、
御國威御挽回之御道は絕而無之、益以
御厄運相迫り可申奉存候。其節ハ諸侯勞役ニ堪兼候處より、如何體之野心
相兆し申間敷とも、御受合難申上、又心力を盡し精忠を抽候諸侯も、毎々之勞
役ニ而國力虛耗之處ゟ、可奉救助事難相叶時勢ニ、相運可申ハ眼前ニ候。何
卒右等之處被
思召詰候ハゝ、一刻も早く諸侯と御盟約之上治務御擲却、専ら金革之務ニ相
成不申候半而ハ、迚も〳〵御威光御恢復御見詰無之と奉存候。古今之歴史

厄災は廢興の分界今は皇國其の岐路に立つ

早く平時の冗務を改めて戰時の體制を整ふべし

命に服せざるものは之を罰し卽ち一人を刑して萬人を振起せしめん

然らば皇國の武勇と士氣とは共に振興せん。

を見候に、厄災ハ廢興之分界ニ而、却而興起致候而天下を泰山之安キニ措候事も有之、又復興之英斷も無之夫切に滅亡ニ及候儀も多々ニ而、方今皇國之御厄運、至大至重之御時態と奉存候得ば、臥薪嘗膽其秋と從今日御覺悟を被極詰候樣致度奉存候。旲々爲太平之勤筋等一切御用捨被爲在候ハヽ、大名一同憤興、銘々之家政も乍恐公儀御同樣ニ而、今日之冗務一切放下、砲艦は勿論之儀、武備等追々嚴重ニ相整へ、只管ニ文武之道而已爲打懸候ハヽ、必然有事之節御間ニ合可申奉存候。若又公邊ニ而もヶ程御世話被爲在候をも取用不申、驕奢ニのミ罷在、必戰之覺悟相立兼安逸を貪り、因循として目前之苟安を偷之候者ハ、少も無御宥恕罰殛被爲在候ハヽ、一人を刑して萬人振起可仕儀勿論ニ而、乍恐公邊之御德威も御盛んニ可相成、左されは必皇國之御武勇慶元之往昔ニ復し、夷狄窺隙候而も、神州一寸之地も悉く磐石ニ相成可申と奉存候。其振興之士氣を以テ、彼へ敵し候へは、必勝算可有之事ニ而、彼も自ら畏服いたし、今年之撓屈を被伸、

水戸前中納言齊昭を擧げてこの改革の實行に當らん

御國威を海外ニ耀かされん事必定と奉存候。當今澆季之世ニ陷り候を、再
御盛世ニ被復候ハヽ、
天朝神祖御始へ被對候而、御忠孝も無此上御儀と奉存候。何分ニも右様ニ
治務御擲却ニ而も、方今之體ニ而者、人心分散いたし居候事故、容易ニ者御所
置御六ヶ敷奉存候間、何分ニも水戸前中納言殿惣督ニ被命、治亂之御政事天
下之御鹽梅ニ被備候ハヽ、衆人も致安堵、御評議も致固結候儀勿論と奉存候。
中納言殿ニハ、人和無之様申唱候者も可有之候得共、都督ニさに被命候ハヽ、
浮說も相止
幕朝之御爲ニも可相成奉存候。誠以開國已來未曾有之御大事、到來之時と
奉存候ニ付、御家門ニ連り候身分ニ而、御爲筋存付候儀不申上候而者、不忠不
義之至と奉存候ニ付、不忍默止候故、不避忌諱建白仕候事ニ御座候。萬死頓
首

月　日

五十一　安政四年十月十六日將軍建儲の件に就いて幕府に建言

米國總領事ハリス江戸に到着、其の登城謁見の期も迫れるを以て、急速將軍徳川家定の建儲の件に就き、阿波徳島侯と連署して之を堀田閣老に提出せられたるなり。

皇國は上古より武士道の國

然るに太平の餘弊武士道の衰ふるは遺憾なり

米使の登城許可は亦魯英に及ばん

一　皇國之御儀ハ、上古ゟ武道を被重、士風質實勇敢ニ而、御威德遠く海外ニ及ひ、諸蕃歸化奉貢仕候先蹤も不少、當時御政道被爲行屆候ハ勿論、畢竟御國本御堅固、人心一致仕居候處ゟ之御儀ニ可有御座奉存候。　太平打續、近來別而智巧藝術日ニ相開、歡喜之次第ニ御座候得共、朴魯之習怜悧ニ移換候ニより、不覺奢侈遊情之弊增長仕、士風勇氣ニ乏く、武道上古ニ遜候樣成行候ハ、甚以可懼事と奉存候。　其上洋外諸蕃、互市相願候爲、和親往來之趣願出、追々御多事之折柄と相成候儀ハ、此皆衆人之熟知罷在候事ニ御座候。　其上今般墨吏登城拜禮被仰付候上ハ、俄羅斯英吉利等も引續願出候ハヽ、墨國同樣御許容被仰付候ハ顯然之御儀と奉恐察候。　右樣相成候ニ付而ハ、治亂之御備向、從來之儘ニ而ハ御濟し被成兼候廉々も可有之候得ハ、其邊御改革御釐正を始、彌增御

今は皇國危急の秋なり

第一賢明の儲貳を立つるを要す

他日御誕生あらば御養孫となさん

紛擾之御事と奉存候。其上右樣數ヶ國互市往來仕候ハヽ、或ハ細事ゟ大害之端を引出し、小虞之警拆可生も難計、當今之時勢乍恐危急之秋と奉愚察候。就ゐて第一

上樣（將軍家定）之御一臂ニ被爲成、諸侯伯も可奉服程之御賢德被爲具候御方樣、儲貳ニ御備へ被遊、益御根本を固め、人心を御結被成候事第一之御先務ニゐ、次ニ諸端御配慮被遊、士風武道ニ復古仕候樣御措置御座候ハヽ、上古之御盛績再今日ニ現れ、

德川家之御繁榮て申迄も無く、實ニ

皇國之御威光、海外迄照耀仕、妖黠魔虜之徒、自ら邪心消滅可致候。殊更只今之處ニゐハ、未御誕生樣も不被爲在御儀ニ御座候得て、此邊ニ格別異議も無之ハ當然之御事と奉存候。若又他日御誕生被爲在候節ハ、直ニ御養孫ニ被遊候ハヽ、御基礎愈益御堅厚、宗社御萬安無此上御儀と奉存候。且儲君之儀て、國家御無事之時ニさへ、豫御備御座候方人心安着仕候事ニ御座候得て、まして當今之如き折柄ニ於て、內外之形勢情狀透觀仕、何角深勘辨仕候ヽ何分建儲之御一條早々御定議御座候樣奉願候。右て唯私共計相願候而已ニ無之、諸侯伯ハ申ニ

建儲のことは天下一統の希望なり

兼ての御により敢て愚衷を言上す

不及、芻蕘之民ニ至ル迄元より深く奉希居候事ニ御座候。今日ニも一旦儲
君御定ニ相成候ハヽ、天下一統忽慰望仕、皷腹歡聲之場合ニ至り、勇氣も常ニ倍
し、外夷防禦ニ付而も御都合宜敷事瞭然ニ御座候。呉々
皇國之御爲無比類禎祥、幾久敷海内安寧
御當家御繁榮之基無疑奉存候。私共儀ハ乍恐御一族之末ニ列し、安危休戚共
ニ同しく可仕筈ニ御座候故、當今之御時會、誠以御大切至極ニ奉存、一念爰ニ到
り候毎ニ、寢食を忘れ、何卒御當家之御爲ニ可相成儀思慮仕、御時勢を維持挽回
申上、
上樣ニも御安心被遊候樣仕度、晝夜心懸罷在候得共、不智短才共義不能、遺憾不
淺奉存候。然處兼而心附候義、申上候樣被仰聞候義も御座候故、責而國家之御
裨益ニも可相成歟と奉愚考、如此至重至大之御義、不顧嫌疑奉言上候。固より
僭踰之罪難遁、恐縮之至ニ御座候得共、唯々一途ニ御爲筋存詰候故、衆人之難申
上事柄をも、心底不包吐露仕、幾重ニも愚直之至誠御諒察被成下、御採用之儀も
御座候得ハ、獻芹之微忱果然相達難有奉存候。以上

十月十六日　松平越前守

松平阿波守　（蜂須賀齊裕）

○同日指出せる別紙次の如し

建儲の件に關する別紙

儲君の人選に就いて

本紙奉申上候建儲之一件、至重之御事柄故、一統噤口仕候處ニ御座候得共、私共儀ハ、實以深　公邊ニ御爲筋存詰居候事故、右樣之儀不顧恐懼既ニ及建白候上ハ、不顧忌諱萬緒心底を打明ケ可申上義と覺悟仕居候。偖右建儲之御評議ニ付而ハ、必定御人撰と申御場合ニ、御運可被遊ハ必然ニ奉存候。此御一條ハ、極々御大切之御事ニ而、此事之當否ニ、遂ニハ天下人心之向背も可決義ニ御座候得ハ、幾重ニも御熟評相成、畢竟御至當之處ニ而御定議ニ可相成ハ勿論ニ奉存候得共、深く御案申上候條、尚又私共ニ於て熟考仕候處、何分宗室之内、最も御賢明ニ被爲在、且御年も被爲長候而、指當り御名代御勤も御出來被成、殊ニ御人望之

賢明年長徳望ありて且將軍の名代となり得るを要す

御徳御座候御方可然奉存候就而此御大任外御人ニハ有御座間敷、是非一橋公（慶喜）ニ相限可申奉存候。

徳川の宗室中一橋公第一なり

御宗室と申候而ハ、御數も不少、且當今何も御賢明之御聞ヘハ有之、就中紀公（慶福）ニハ至而御近親ニ被爲在候得共、未タ御年も御幼弱ニ候得ハ、當時列侯を始、天下之人心を繫著仕候事ハ、必一橋公程ニハ無之御義と奉存

紀公は幼弱にして人望なし

候。且又御臺様(天璋院)御入輿後、御間も不被爲在義ニ候得者、何れ不遠御誕生様之御運も可被爲在候、其節ニ到候ハヽ、相應ニ御年長之儲君ならてハ、御養孫様与申御義ニ付而も、自然御都合不宜、却而種々異論も相立、彼足利時代之如く、列侯群臣東西ニ黨を分候様相成候而者、此亦甚御大切至極ニ奉存候。右等參考仕候得者、一橋公ならてハ御當撰之御方、別ニ有御座間布奉存候。尤も此邊之儀、私共ゟ不包申上候義者、重々恐入候得共、哭々天下人心之向背ニ關り候事故、兼々歷視傳聞之次第取集相考候而、聊御評議之一助ニ奉申上候。固より出位之過言、萬々御寬宥被下、只管爲天下生民御熟慮被下候様奉希望候。謹言

五十二　安政四年十一月二十六日米國總領事の要求せる通商の件に付幕府の諸問に對する答申書

○是より先、十一月廿一日ハリスは江戶城に入りて將軍家定に謁見せり。而して廿六日老中堀田正睦と會見し、通商の開始を迫れり。是に於て幕府はハリスの要求書を諸侯に示し、其の意見を徵したり。本書は卽ち堀田閣老に提

出せる其の答申書なり。今その控書を以て收錄せり。（某書宇切六尺二寸六分）

方今の形勢鎖國は不可なり

幸に交易を望む之を拒絶するは不可なり

强兵の基は富國富國は貿易に在り

互市の結果惰弱に流るるを戒む

（裏端書）

「慶永建白」

亞墨利加使節申立候趣、並對話書共和解二通御渡ニ相成、所存可申上旨ニ付、同席共相談致候處、稍異同も御座候故、銘々ゟ申上候。

一方今之形勢、鎖國不可致義ニ、具眼之者瞭然と奉存候。

一我ゟ航海を艱め、諸州江交易ニ出候事企望之折ニ候故、道理を以て來乞候者ニ、御拒絶無之筈ニ候得ニ、ミニストル之義も同斷ニて候。

一强兵之基ニ、富國ニ可有御座候得ニ、今後商政を釐め、貿易之學を開き、有無相通し、

皇國自有之地利ニ據り、宇内第一之富饒致度事ニ御座候。

一互市ニ、貨賂流通之根本ニ候得ニ、御趣向ニ由り、却て奢惰萎弱之因を引起し可申と奉恐懼候。

一又利害得喪之際、人心之風波險敷候上、彼我之習相違も有之、何時何樣之釁端

利害の關係より事端を開くことなかれ

就中怖るべきは魯英二國にあり

先んじて人を制すべし

我より積極的に進出して帝國の尊號を久遠に耀かすべし

内政改革の要件

一賢儲のこと

二人材擧用のこと

相啓候半も難計、支那阿片之一亂、前車可鑒候。此唯ミニストルの有無而已ニ關係致間敷奉愚考候。

一其中最も可怖は、他之諸國輻湊ニ在らすして、魯英二國之並至ニ候。兩雄不並立情實、既ニ使節舌頭ニ歴然相現申候。他日兩國之内か、必定大御危難之事件希望可申と杞憂ニ不堪候。

一人を制すると、人ニ制せらるゝと、所爭僅ニ先之一字ニ候。當今之勢、尤此ニ可止奉存候。

一左すれハ、坐なから外國之來責を俟居候かハ、我より無數之軍艦を製し、近傍之小邦を兼併し、互市之道繁盛ニ相成候ハヽ、反て歐羅巴諸國ニ超越する功業も相立、

帝國之尊號終ニ久遠ニ耀、虎狼之徒自ら畏心消沮可仕、是只管懇願之次第ニ御座候。

一右ニ付、内地之御所置、只今迄之舊套ニ而ハ難相濟候。其大綱を申候ハヽ、第一兼々申上置候賢明之御方、儲貳ニ可被立事。

一天下之人材御擧用可有之事。

三兵制の改革
四諸侯の疲弊を救ふ
五蝦夷地の所置
六民業の奬勵
七諸藝術の學校を興すこと

一太平之文飾御減省有之、兵制御改可相成事。
一大小名之疲弊を拯ひ、陋習を破るへき事。
一内地ハ勿論、蝦夷地迄山海共、種々御措置可有之事。
一四民之業を勵候事。
一諸藝術之學校を可興候事。
以上之件々、不容易重大之御事ニ御座候得共、御改革可有之御時節到來之上、亞墨利加よりも、縷々事理分明陳啓仕候義ニ候得ハ、前件御決行之御含を以て、使節ハ海外之樣子透底究訊ニ而、篤と御熟談相成、
天意御伺之上、鋭意御施行相成候ハヽ、强弱主客勢を轉し、機會全く今日ニ可有之と奉存候。尚施設之方ニ至り候而ハ、尺寸紙上ニ難申盡候。幸ニ御垂問被下候ハヽ、其時充分肺肝吐露可仕候。區々之愚衷、御亮察被下候樣偏ニ奉冀候。
以上

十一月廿六日

五十三　安政四年十二月廿七日米國の要求せる通商許可の可否に關する再度の建白書

○前記安政四年十一月廿六日の答申書(五二)の趣旨を更に項目に分けて之を敷衍し、詳細且つ具體的に意見を吐露して以て幕府當局の參考に資せんとし、再び堀田閣老に建白せられたるものなり。今控書によりこゝに收載せり。

(淺黄色雁皮卷紙一丈三尺二分)

(裏端書)
「建言寫」

ハリスの要求に對する再度の建議

去ル十五日於
營中、亞米利加使節應接幷使節差出候書面和解、外ニ御趣意御書取共御渡、今般之儀者御所置振御下問之趣御演述之廉へ對し、建議仕候儀故、殊更出位之條々不勘、恐懼之至ニ候得共、御垂問ニ任せ不顧憚、左ニ鄙衷を陳啓仕候。

目下の急務富國强兵のことは過般建白の如し

一方今之急務、富國强兵を先と仕候儀者、既先般建白中致記載置候通と奉存候。

富國は貿易にあれば三港に

一右ニ付貿易を繁盛ニ被行候儀最簡要ニ御座候得者、徒ニ舊法ニ泥ミ、三港ニ相局り而ハ、却而我之不便利と奉存候。

限るは不可なり

江戸と大坂

開港場は我より指定すべし

京都は皇居の地なれば之を避くべし

江戸は公使の居所に止め品川を開港場となすべし

一盛大之互市可被行便地者、江戸並大阪ニ可止奉存候。

一總而好埠ハ、吾ゟ御開被成候方可然、左樣無之時者、後日必定彼より強願可申出候。其節理ニ被屈、釁を御憚り彼ニ御隨順候者拙劣之下策と奉存候。

但好埠御開ヶ所の義ハ、三四場ニ止り可申奉存候事。

一京都之儀者、

皇居之地ニ御座候得者、臚腥不潔之外國人ハ、決而雜居致間布事ニ而、徒ニ

御國躰を損害仕候儀ニ御座候得者、御峻拒可然奉存候。

但元來海國ニ而も無之土地之形勢、舟車之運輸貿易ニ者不便ニ御座候得者、此儀之御斷ハ、彼レ容易ニ可致承服候事。

一江戸品川ニ聯綴致し申立候得共、江戸ハ都下之儀ニ候得者、ミニストル之居所而已御許容有之、互市場者品川丈ヶニ而、彼我之都合宜と奉存候。

但江戸品川と申せハ、隔地之樣ニも可存候得共、櫛比之人家其境界無之儀了解いたし候ハヽ、彼亦承服必定ニ御座候。

因之或者外藩之逼迫を嫌惡致、神奈川開港之議も可起候得共、此我不利と奉存候。其儀者、商法ニ於て不便可有之候。且萬一兵端相開候ハヽ、僅半

日行程位之遠近ニ而、蒼皇狼狽ハ同然ナるへく奉存候。

兵端は江戸に於て開かるべし故に常に其の準備を要す

一兵端相開候ハ、江戸ニ可限と奉存候。其譯ハ咽喉樞要之土地故ニ御座候。左すれハ平日ニ戰時之覺悟可致置儀最緊要と奉存候。第一人家之櫛比を避ケ、第二婦女子之群集を減し、第三游手之者を省き、第四城櫓隍塀之砲火ニ堪へ候樣、御手當可有御座候事。尤已來、西洋各國同樣兵備御精練可有之候事。

外國人の内地旅行は和蘭に許せる例に倣ふべし

一外國人、日本國内致旅行候儀、貿易取扱候プロマチーキアゲント並重立候役人之儀ハ、和蘭甲比丹之律ニ基き御免許可然候事。

但下官之遊行ハ、自ら取締も不行屆、不測之事故出來可申恐有之間、國内人氣折合候迄、御斷置可宜と奉存候。

大坂は皇居に近きを以て大諸侯をして護衛せしむるを要す

一大坂ハ、膏腴之地四方之中ニ候得ハ、互市繁盛可相成候。併皇居ニ隣居候故、萬々一不慮之義相發し候節、宸襟を奉驚候而ハ、臣子悔嘆之極ニ御座候。依之大諸侯之内御人撰に相成、國替又ハ御預所被　仰付、兼而引越居可然奉存候。

而して其

一右諸侯ハ、鎮撫守衛ハ勿論、貿易庶務も併監可然奉存候。

の諸侯はまた貿易をも監督すべし

江戸に於ける公使の居館地に就いて

一江戸ニ諸蕃ノミニストル居所占據致候ハ、護持院原等ノ明地可然存候。若海岸ヲ借與ヘ候時ハ、全港盡ク彼ノ有ニ相成吾ノ害不少奉存候。

但此も或ハ開港ノ地、又ハ郊外と申議も可有之候得共、萬一壘砦埠頭、彼ノ爲ニ占據被致候ハヽ、可恐懼ノ事ニ御座候。究竟御膝許ニ御引付置ノ方、常變共便利ニ可有御座、事有ニ臨んて、八方ゟ取圍ミ、其屋を火まし、其人を鏖ニすへき死地ニ御差置可然と奉存候。

教會は其居館內に設くべし

一寺觀取建ノ儀申立候ハヽ、夫々ノ館内ニ相構へ可申旨、被　仰付可然と奉存候事。

但他日宗論ノ邪正等爭不起候樣、阿片同樣ニ律を相立、御取締有之候樣仕度奉存候。

交易は必ず官府の監督に從はしむるべし

一勝手交易ノ儀申立候得共、兼ゐ商政具備不致、奸商射利ノ風盛ニ御座候得ハ、當分ノ處ハ

官府ノ監督相受不申候半ゐハ、必永久親睦ノ互市ハ連續致申間敷奉存候。

但西洋ハ、元來商律も嚴重ニ可有之候得共、當方ハ西洋諸國ノ通りニハ不行屆、此建國ノ勢然らしむるノ由、反覆御垂諭御座候ハヽ、彼亦承服可申候。

箱舘の風説を以て不當の利を貪るを戒む

貿易品は官府の檢査を要し且關稅を徵すべし

公使はハリスを以て之に任ずること便利ならん

我を印度の如く服せられんことを警めて早く富强の基を開くべし

蝦夷地を

此等之處は毫髮遺憾無之樣御推詰有之度候。

一仄ニ箱舘之風聞を承候ニ、夷人ニ物を賣り四倍之利を可取旨被命候由、此事實なるニおゐてハ、民ニ奸を教へて非義之利を貪らしむ、殆痛歎之極地と奉存候。萬一都下之貿易ニおゐて、如斯弊政有之候而ハ、禍亂之端を招くのミならす、國辱之限りと奉存候儀ニ御座候。

一諸大名豪賈共、諸品物會所へ輸り、官府之檢査を受候て、貿易致候義御許容ニ相成、闔國利潤を得候樣相成候方可然、尤租稅之義ハ何レも公邊へ可相納候事。

一阿米利加ミニストル之儀、大統領江御掛合ニ相成、今般之使節ニ同官を命し、直ま差置候樣相成候ハヽ、後日諸端之御都合可宜と奉存候事。

一今後萬國輻湊、終ニハ我を印度之如く視なし候義は昭乎たる事ニ而痛憤之至ニ御座候。左すれハ此儘座ニ撓屈いたし候半ハ、速ニ富國强兵之基を開き、吾亦四方ニ雄飛致候事は、先日建白之通りニ御座候。

一外國之互市を賴ミ、富國之基と心得候よりも、第一吾蝦夷地を開墾いたし、吾府庫と可爲事ハ、既先日其端緒申上置候。

拓いて吾府庫となすべし

蝦夷地資源開發は大諸侯になさしむべし

其の開發には魯米人を傭ふて其の長所を利用すべし

盛大の互市場は終に皇國の無盡藏とならん

日魯の和親は最も必要なり

器械の精なるは米國に之を求むべし

皇國は趙宋と異なるも近來の太平の餘

一蝦夷地ニも大諸侯數名被遣、山礦を開き、漁獵を始め、巨林を伐り、軍艦を製造し、礮臺を築立守衛を可嚴事、方今急務の一と奉存候。

但諸侯ハ御增地或ハ御添地ニ而被指置、五七年の後ニ、御換地ニ被成遣候ハヽ可然奉存候。

一右ニ就而ハ、日本人斗り被用候ハヽ、徒ニ失費多、且急ニ開兼可申ニ付、魯人墨人御傭被成、其所長爲御盡可然奉存候。

一其後壯大の互市場相開候ハヽ、儼然たる巨鎮ニ而、永く皇國の無盡藏と相成、洋夷垂涎の非望消沮可致候事。

一魯西亞ハ、世界第一等の强國ニ而、其政事も行屆候由、且吾と唇歯の勢を爲居候得ハ、難報の恩惠を以其歡心を結置候事、此又當節の一要務と奉存候事。

一亞米利加も幸彼方親昵を乞候義故、吾器械の完全ならざるを篤と御垂諭相成、武具兵仗艦車の類、一切贈輸の義御賴相成、兵制物産等の諸科ハ彼より巧手の者御借用被成候方、却而彼の心を攣の一術と奉存候事。

一趙宋ハ弱國故、金元の强悍ニ敵兼、遂ニ其貪婪ニ任せ、果ハ社稷墟と相成候ハ實ニ自然の勢ニ御座候得共、

弊あるを警む

我よりも使者並に有司學士をワシントンに遣し商館を建て條約を結んで貿易を開くを要す

廣東にも商館を開き且魯英蘭を巡視すべし

大に航海を奬勵すること

かくして約五ケ年の後には我も世界の强國とならん

皇國ノ如キハ、地靈人傑おのつから强國ノ勢有之候得共、近來太平柔惰ノ弱政ニ依リ、併而强勢を失ひ候儀誠ニ痛嘆無限奉存候事。

一左あらは强勢を何等ノ儀と申ニ、既ニ先般申上候通リ、我ゟ航海を賴め候事第一ニ而、此度使節へ御賴ニ相成、此方ノ御使並有司學士商賈輩に至るまて、話聖東府迄同伴致貰、彼地江一區ノ商舘相立、條約取定貿易相創申度、ケ樣相成候得ハ、彼我ノ條約雙方ノ都合、適宜ノ處ニ而出來いたし、久遠堅守ノ規範ニ可相成候事。

一次ニ廣東江も一場相構可申事、其次ハ魯西亞・英吉利・和蘭等へも人を遣し、其國內ノ風俗等爲觀度候事。

一右航海ニ就而を、船具水夫抔ハ當分亞米利加等ゟ多少借用致度、航海ノ義、諸大名も願出候ハヽ、御免許相成可然奉存候事。

一右を御手初めニ而、大方五年程ノ內ニ、國內ノ御處置も御施行被成、諸藩ノ陋習も御透破被成候ハヽ、彼ノ千八百七十二年を不待して、我も亦世界中ノ强國と被仰、千歲ノ御績と可被爲成御儀と奉存候事。

右件々何爲至重ノ儀ニ御座候得共、既ニ過日被　仰出候通リ、日夜被勞

巷說俗論に迷はず我が國體の本義に基き萬務を更張すべし

凡應接の事は諸國一樣にして區別あるべからず

御心思、中興の御大業被爲立度ニ付、
御政道大御變革も可被爲在との御趣意ニ候得て、何卒里巷の說或て俗論ニ御
拘泥不被爲在、所要
御國體の御維持ニ被爲基、萬務御更張の程奉企望候。　且今般使節御應接の儀
ニ於而ハ、後來洋外の諸國陸續致渡來强願申立候共、萬口一舌ニ歸着不致候半
而て、畢人の不服て不申及、萬國擧而不信不義の國柄と相心得、輕侮蔑視の所行
可相生ハ差見え候事ニ候得て、今般て嘗墨國而已の事ニハ止り不申、其關係實
以至重至大の義と存詰候。　何分ニも此上厚被遂御熟議、他日の悔恨無之樣所
希ニ御座候。　將又彼へ對し折衝辨駁の機ハ、畢竟問答應酬の間ニ有之儀に御
座候得て、唯今使節申立の書面ニ依り、一々難詰以多し申上候とも所詮無之、殊
ニ一應接每ニ論機他端ニ相移り、此節ニ而て已ニ追々別議相立、前條の儀共ハ
惣而迂濶の次第と相成居可申候得共、
御惱慮被爲在候難有御切情ニ奉感、忠愛の至心難抑、固陋の愚見建白仕候條、尙
廟堂高明の御諒裁奉萬冀候。　頓首
十二月廿七日

五十四　安政五年五月廿二日水戸徳川齊昭に遣はされたる直書と書取

○是より先、二月九日老中堀田正睦參内して米國との通商條約調印の勅許を奏請せるが、其の御許可なく、正睦は四月五日京を發して廿日歸府したり。尋いで廿三日幕府は井伊直弼を以て大老の職に補したるを以て、こゝに形勢は一變せり。而して五月二日幕府は條約調印の期を七月廿七日と定め、又三日には紀伊慶福を以て將軍の養嗣子となすことに内決せるとの風聞さへ傳はりければ、公は益々其の危殆に迫れる時局を憂慮せられ、卽ちこの直書と書取とを水戸齊昭に遣はし以て其の善處策を請はれたるなり。書取とは直書に添へられたる覺書なり。今其の控書によりてこゝに收載せり。直書は昨夢紀事によれり。

公の御直書

陳ハ、過日以(安島)彌次郎奉申上候方今　廟堂之御景況ニ付、又々愚衷相認汚　尊覽候。尚尊考之義無御遠慮可被仰下候。扨又、彌次郎其後屋敷へ罷越、尊意之趣も篤と拜承仕候事御座候。委曲家來へ口上申置候而、彌次郎方迄差出候間、彌

次郎ゟ御聞取奉願候。右之段申上度如此御座候。頓首九拜
　五月廿二日
尙々時下御自重、爲天下奉拜祈候。差出候愚衷、昨夜於燈下認、亂筆誤字落文多く、御判讀御海量奉希候。別紙申上候書中、宗室英望と認候て、他人を奉斥こて無御座候間、此段御亮察可被下候。已上

書取

書取

第一

幕府言路を壅塞し忠良を擯斥す

過日彌次郎召呼申上候通り、方今之御時勢實ニ危殆相迫り、御同事恐入候儀ニ奉存候。畢竟方今　廟堂之御所置、言路被塞き、忠良を擯斥いたし候よ相違無之、其子細て、土岐丹波守(頼旨)ハ過日隊帥と相成、鵜殿民部少輔(長鋭)ニも昨日駿府市令被命候事、何とも痛嘆之至ニゐ、是等之輩て才識ハさとひ劣少ニ候とも、何分直情徑行ニゐ、屢諫爭仕候者共ニ御座候。右兩人擯斥ニ相成候ゐて、其外之有志迄も追々無餘類被退候歟、又て從銘々御役御免可相願と奉存候。小子も兼ゐ海防掛りへて登

公と堀田閣老との對話

有志朋黨の名を以て斥けらる而して備中を其の巨魁とせり

城ミ砌抔、時々面會密話仕候處、何レも上ミ御爲深く存詰罷在、戴星出入仕候位ニゟ、品々遠圖ゟ有之事、常々感服いさし居候義ニ御座候。當今廟政ミ御多事ハ勿論、追々内外ミ御所置無之候半ゟて難相成御時節ミ處、かゝる排斥等被爲在候ゟて、畜ニ德川氏ミ舊甌を保ち難きのミまゐらす、天下ミ安危まも係り候事と苦心仕申候。頃日備中へ逢ま罷越候節、今後ミ御所置振等舊知己ミ廉を以、折入承候處、殊ミ外嘆息ミ次第而已ニゟ、有志ミ者擯斥ニ至りし𛂦、畢竟朋黨論盛ニ相成居、聊ニゟゟ擧公論候者は、悉く黨類ミ名を爲負候由。則備中を以テ其巨魁と斥し、夫よりして土岐丹波・同攝津(朝昌)・岩瀬肥後(忠震)・鵜殿民部・永井玄蕃(尚志)・津田半三郎(正路)（半三郎儀ハ先）（川堪ハ筆重大ミ事件諫爭申候よ𛀁黨名拔蒙候よし）列侯ニてハ、越前・上州・伊達・薩摩等一切建淸議候者ハ、黨名拔免られ𛂞、且奥向御小姓有志ミ者二人有之、卽諏訪安房・權太遠江ニて此等ゟ近々ミ内、外轉可申哉と申事ニゟ候。依て小子尙又備中へ申述候て、畢竟備中ゟ閣老として是を座視傍觀し、他人ミ成を仰候理ハ萬々無之筈、討論說破充分ミ上、

來る七月條約調印の由
諸大名も條約許可に賛成なり
復々叡慮を勞し奉るか・

君前へ被出肺肝吐露致し候ても、御聞入無之候ハヽ、切腹を以
京師之不出來を始、首座之罪抔償ひ候義至當ニ可有之段申聞候處、中々左樣ニ
ハ參り不申、此節者
御前江罷出候事者度々者難相成、さとひ罷出候ても、大老(井伊)上田(松平伊賀)之內一人ハ差添
罷出候樣之事ニ而、存分ニ申上も出來兼候仕合ニ有之、已ニ備中も其內ニハ遞
職可相成哉之口氣ニ御座候。(是等一切上田俑に出申事に候)之役右ニ就て愚考仕候ふ、右之次第
ニてハ大御變革所ニ者無之、却而今日よりも層倍之因循ニ相成可申ハ、不待識
者事ニ御座候。　然ル處　廟堂ニ於てハ、七月限之約束抔以而亞米利加使節へ
調印之事御許御座候よし、既ニ過日來諸大名之申上も大概條約御結可然と申
事ニ候へ者、不遠又ゝ
京師へ之　御答も可被爲在候と奉推察候。　併し前文之爲體ニてハ、中々被安
宸襟候處ニてハ無之のミならす、列侯も一同失望可仕、左すれハ又候
叡慮抔も被爲勞、速ニ伺濟ニも難運奉存候。　自然右樣京師相縺候內、期限指迫
り候ハヽ、　廟堂ニてハ是非不待
勅許假條約調印御執行可被成候、其節ニ至り外藩抔ゟ、違

違勅の問題起らん

これに對する公の對策

齊昭に宗家の爲善處を依頼す

勅之廉責付候ハヽ、以之外なる御大事と奉存候。是等程能鎮定候ニハ、第一賢明之建儲有之、關東之威權等嚴まし、續て京師之宿衞等壯ニし、衆望等爲厭候事等、種々施設無之候半而ハ不叶事ニ御座候。此策被行候上ならハ、從京師ハ從來大政御委任之　征夷府故、或ハ一時之權宜等以而、一々不應叡慮とも、行末之見詰ニ基き、外國御處置抔有之候ても不苦儀歟と奉愚考候。乍去、萬々一只今之姿而已ニ而御違勅と相成候てハ、臣子之者痛懣無限ハ不及申、御同事ニ親藩ニ乍在、是等座視傍觀仕候而も、全く閣老同罪と奉存候。右様御違勅ニ相成候而も、和戰共ま定見無之事ニて、爲國家萬々恐入申候。尊君ニハ碩德重望、親藩之御長者ニも候へハ、此時世ニ當り回天之御建策御座候而德川家之社稷等太山之安ニ御措可被下候。最私儀も幺麼微弱ニハ候へ共、益々爲　御家寸忠心掛居候義故、如何底之儀ニても隨驥尾精勤可申上奉存候。抑東照宮之三親藩を被立置候義、深く後世等御憂痛被爲在候御儀ニして、卽今日之御爲ニ御座候へハ、此邊ハ尾公へも篤と被仰談可然奉存候。但紀藩ハ御幼

皇國は世界無比の國なるに却て文化は西洋諸國に劣る

我が內政の狀況

故に和議も亦一策なり

而して英明の元帥

少ノ上、御承知ノ譯合も有之事故、御見合せノ方と奉存候。

第二

皇國ノ御儀者、全世界無比ノ御國體ニ而、知勇共卓絶ニ有之、王化隆盛ノ頃者皇威も海外江耀候事、御承知被爲在候通一々不及贅說候。然處近年西洋諸國者、開國ノ勢ニ而兵力財用日ニ相增し、皇國者夫ニ反し、何共嘆ヶ敷事ニ相運候。實ニ切齒ノ次第ニ御座候。依而熟方今ノ形勢相考候ニ、諸侯ノ疲弊も不救、兵士ノ訓練も不熟、沿海ノ警備も不整、財用ノ本も乏しく、人心も游惰ニ成居、殊ニ　上ニ凛然さる英明ノ大元帥も不被爲在、下ニ哲輔も無之内ニ、卒然我ゟ兵端を啓候ハ無謀ノ儀ニ而、萬一及敗衂候ハ無論ノ事、自然塵戰取勝利候而も、此上益疲弊を加可申ハ必然ニ候。其際ニ饑饉流寇叛賊一揆等群り起り、西洋同盟ノ族其隙ニ乘し入換り〳〵侵襲候ハヽ、黎庶不聊生ノ患可不免、此甚可憂ノ至ニ奉存候。左すれハ當今外夷御所置ノ儀者、內政調ひ守禦十全相成候迄ハ、暫和候も又一策ニ而、彼貿易も仕組より御國益ノ廉も可相立、且上ニ英明ノ大元帥被爲在候得ハ、叨りニ因循ニ流レ、夷風ニ化候憂ハ萬々無之儀ニして、其間ニ彼長を取て我短を足し、彼虛を覻て

を立て貿易を興し武を練り以て外夷に備ふべし

奸兇を除いて權を宗室に歸し國是を定るが目下の急なり

除奸のことは難事なれども未人事の盡さざる所あり

重ねて齊昭に善處の策を請ふ

我實を補、財用を饒まし、疲弊を救、船艦を造、操練を演し、今日ゟ專ら武事講習を專務と致し候ハヽ、他日夷警有之候とも、今日卒爾ニ戰をハ難易大ニ相違可仕奉存候。

第三

右和而戰の方略有之なから、其策不被行、益因循ニ陷り、今日太平の安きを偷ミ、明日不測の變あるを不知も、畢竟智識の開さるニ出候得共、如斯姦人握權、忠直擯斥ニ逢候ハ、切齒憤懣難堪次第ニ御座候。仍之方今の急務ハ、先ツ奸兇を除て威權を宗室ニ歸し、宇内渇望の國是を定候儀、大肝要の儀と奉存候。

第四

前條奸兇を除き宗室江權を與へ候義ハ、實ニ古今至難至危の事ニ而、劉漢の末抔ニも種々忠憤ニ堪兼、勃然決策盡死力候者有之候得共、何レ茂事の不成ハ、或ハ屬天運候義も可有之候得共、全く人事未盡の故と奉存候。方今の如く宗室の御内ニ、碩德重望尊君の如き御方被爲在候上ハ、右除姦の策必行ハれ可申事、天運人事兩全と可申と奉存候。則過日彌次郎以て御內々被仰下候御直御逢の義、最喫緊の御策ニ可有の御座候得共、其間ニ二十分の御思慮被爲在候而ハ、

區々たる上田の一奸を除く敢て難からず

實以御大事至極と奉存候。乍併右之御策程能被行候ハヽ、區々上田之一奸を打倒候位ハ勿論ニ而、引續天下之公論ニ隨、宗室中英望之御方御追薦ニ而、追々良法善政御施行御座候ハヽ、斯民始而望霓之情を慰し、外夷亦自ら跳梁を止ミ可申、

至尊も大君も眞誠ニ御降意被遊、洶々之衆議も忽鎭定仕候而、四海靜謐

徳川家之社稷血食ハ不及申

皇國萬古不朽之御事業も相建可申儀ニ而、是實ニ千歳一時之會、轉禍爲福候機、括目今ニ止り候義ニも可有之哉、天生大英雄も不啻義と奉存、苦悶境界却而一喜を爲し居候義ニ御座候。乍併此御施策萬一顚躓仕候時ハ乍恐尊體之御安危のミならす、天下之事終ニ不可如何ニ陷り可申候間小子ゟも精々碎肝膽不顧失敬蛇足之論可奉申上候。尊君ゟも尚又右等除姦之御策御施設之御次第、分明ニ御諭し被下、杞人之愚御啓發被下候樣、爲　宗家奉懇願候。右等之義共も已ニ時機迫り居候間、何卒早々貴答被仰下候樣仕度奉存候。

五十五　文久二年六月九日參向の勅使に對し幕府當局に建言

○是より先、六月七日勅使大原左衛門督重德江戸に到着し、明十日登城勅諚を將軍家茂に傳へらるゝことになりたり。この時島津三郎久光も亦出府し、且つ松平肥後守家來よりの京都に於ける情報などによりて、幕府當局の間に今回の勅使下向に關し種々の風說もありたれば、公は之を憂耿せられ乃ちこの建言に及びたるなり。今公の直筆に係れる控書を以て、こゝに收載せり。尚前掲文久二年十月十三日政事總裁職御辭職願(十)を參看すべし。

(裏端書)
「文久二年戌六月九日御用番板倉周防守へ差出候扣」

口上

今度

勅使參向ニ就ゐて、第一　御尊崇之道不相立候半ゐて難相成段ハ卽天理まして、衆人之具瞻此所ニ有之候。內實は

勅諚三ケ條之儀も相分り居、且又眞

叡慮ニ無之、三郎(島津久光)姦計ニ出候事ハ明々白々さる事まて有之候故、自らお

廟堂は、御尊崇之道も薄く可相成哉と、實ニ杞天之憂ニ御さ候。依之相考候

朝廷を尊崇するは天理なり

叡慮は徳川家を愛憐し給ふに在り

將軍も尊祟の誠を表はすべし

得て、何分於
幕府て眞
叡慮と被　思召、徳川御家を於
朝廷御愛憐被遊候
主上ゝ
叡念を難有被
思召候御事、御忠孝ゝ第一と存候。英明ゝ將軍家ニ被爲在候得ハ、必右ゝ　台
慮と奉存居候得共、萬一御尊祟ゝ道ニ於ゐ、聊ニゐも御行屆無之事被爲出來候
ゐて、實ニ至重至大ゝ事件ニ御さ候。明日ハ御對顏
勅諚も被爲聞取候事故、御心實難有被　思召、御尊祟ゝ御至情被爲溢、左衛門(大原重徳)
督も實ニ敬服本懷と奉存候樣有之度、此義ハ形跡を以論し、御丁寧ゝ御取扱と
申ニゐて無之、台慮ゝ誠不誠、乍恐　御方寸ゝ中ゝ義と奉存候。今日ハ各樣
も　御前へ召出し可有之と奉存候ゆへ、私御案し申上候。區々ゝ愚衷、何卒被
仰上可被下候。出仕いたし居候得ハ、犯　虎威可申上と奉存候所、折惡敷不參
ニ付、各樣迄奉申上候。不惡御亮察何分陳奏奉希候。恐々惶々ゝ至、不顧萬死

申述候段ハ、御海量伏而奉祈候。 頓首百拜

松平春岳

文久二年戌
六月九日

松平肥後守様（容保）
脇坂中務大輔様（安宅）
松平豊前守様（信義）
水野和泉守様（忠精）
板倉周防守様（勝静）

尚々御覽後御投火可被下候以上

五十六 慶應元年二月十四日兵庫開港に關し山階宮晃親王に建言

二月六日乚

二老中の上洛

斷然慶喜の東歸を停めらるべし

今や兵庫

御染筆奉謹讀候。先以
皇上萬安奉恐悦候。隨而
宮にも益御安全奉恐賀候。扨て御垂示之
御旨趣一々相伺難有奉存候。乍恐拜答可奉申上之處、最早事濟候儀は不贅、緊
要之一大事件左ニ奉密奏候。
一此度從關東、伯耆守(松平宗秀)豐後守(阿部正外)登　京風聞之趣爲御伺被成下難有奉存候。一橋(慶喜)
歸府之事、兵庫開港之事、彌實事ニ候ハヽ、一橋歸府之儀は
朝議品々可被爲在、且
殿下御始
高慮も可被爲在候得共、第一乍恐
聖慮御動搖無之、斷然歸府如何體申上候而も、御採用さへ不被爲在候へは兩閣
老も致方有之間敷、十分ニ申上候へは、一橋歸府之儀は
聖慮ニ不被爲叶候間、
御指留之
勅書大樹に降下せられ候而は如何可有御座哉。兵庫開港之儀は、方今御許容

開港の可否を論ずべからず

ノ可否を被仰出候而、即御一和ニ關係、天下ノ形勢變動無疑と奉存候。右故只今ハ可否し給ハすて、開港ノ儀ハ天下ノ人心ニ關係し皇朝ノ興衰ニ相成候故、何分ニも大樹早々上坂、夫ゟ登　京候上、直ニ宸衷相伺、其節御相談も可有之、且て殿下御始ゟ御熟議被成度候間、早々上坂ノ降勅被爲在度御議ト奉存候。右ノ天意を以、兩閣老東下速ニ被命候ハヽ可然哉と乍恐奉存候。只今兩閣ノ申上候御對答被議重事を乍恐下策と奉存候。慶永今日出遊歸宅ノ上、御染筆拜見一驚一愕寢食難安ニ付、不顧恐惶例ノ鄙意奉密奏候。決而慶永ゟ言上御他言不被成下候樣奉至願候。尤と被思召候ハヽ、以高慮　殿下御始へ御相談奉希上候。失敬多罪ノ極、伏而奉仰御涵恕候。恐惶謹言頓首百拜

二月十四日　慶永

山（晃親王）階宮

下執事

二白春寒爲　天下御自愛奉專念候已上

五十七　慶應元年三月二十七日長州問題に關し一橋慶喜に獻策

○元治元年の暮以來幕府は長州處分の件に關し議論一致を缺き、終には此等の責を一橋慶喜に負はしめ以て慶喜を東歸せしめんとせり。而して再征の企てあるに及んで慶喜は三月十八日書を裁して公に致し其の苦衷を愬へて對策を請へり。本書はその返翰なり。

三月十八日附之

尊章、廿五日午上刻相達、忙手盥嗽奉謹誦候。錦地如何御座候哉、此表ハ兎角不常之氣候ニ御座候。先以

皇上萬安　大樹（家茂）公益御機嫌能被爲入御同意重疊奉恐悅候。隨而　尊卿彌御清泰被爲渡降意之至奉恭賀候。次ニ老生瓦全罷在候條、乍恐御投念奉希候。

防長割據持久の形勢あり

幕府の處置は至當ならず

毛利父子の召喚は不可能にして天下の紛亂を招かん

松平伯耆守阿部豐後守の上京

參覲制と長州問題

陳者、防長國內之模樣、爾後如何聞込候哉とし御尋問被成下、別段何等之儀も不
承候。被仰下候趣ニあて、過激輩益盛ンニ相成、政府も一致ニあ專ら深溝高壘
之計、彌割據之形迹を顯候風聞、誠ニ以恐縮之次第ニ御座候。何分幕廷今般之
御處置、不出至當候節者、政府激徒一同同力一心奉拒候心算之樣子ニ、先般征長
歸國之家臣共ゟ承申候。幕廷ニあて大膳(毛利敬親・廣封)父子御呼寄之儀、再三之
御沙汰ニあ、大小監察既ニ長國江赴候都合、三條(實美)以下も同斷之よし。尊諭之通
り今後之見留於老生も無之、只々日夜御案し申上候外無御座候。大膳父子並
三條以下御呼寄せ之儀ハ迚も六ヶ敷、彌激徒之激を煽動して、遂ニ天下之紛亂
を此上ニ釀成し、　天幕之御不都合顯然、
皇威　幕權ニも差響可申哉と不堪杞憂候。尾張前君(德川慶勝)之建議至當ニ可有之と
奉存候。先般伯(松平宗秀)豐(阿部正外)兩閣老上　京後、
朝廷御憤發一層相增、豐州無程東上、伯州一旦下坂之處、再上　京被命、諸藩參勤
割並大膳父子之儀ニ付、從
朝廷　御沙汰被爲在候。伯州爲直ニ東歸以ゟし候得共、右兩事件此上
幕廷御遵奉ニ相成候哉如何、其邊

禁裏御守護總督の責任に同情す

會津は東下に決す

目今の幕

御見据無之、如尊命
公武之御間柄、一事相生候度ニ、一事之御不都合相生し、所詮終ニ御一和と申處御懸念之至、乍恐御同意千萬ニ奉存上候。嘸々日々夜々無限御苦腦之御儀を奉遙察候。段々之尊慮相伺候得て、誠ニ以落涙御胸中染々奉恐察候。此模様ニゐて御當職ニ被爲入候ゐも、實ニ其御甲斐なき事恐入被思召候御次第、且會桑右邊大切迫まて、會て自發東下之決着、當今强ゐ御留被置候由、左候迚束手のミ候ゐて、幕廷御挽回之期有間敷、最早結局之御見据を以御進退之外御手段無之、就夫傍觀之者之見込も候ハヽ、呈寸芹候様預御尋問奉拜承候。別ゐ方今諸藩之風說も不承、其上
天幕之御様子柄も親敷見聞不仕候故、更ニ愚慮も付兼候事故、見据も相立不申候。右之仕合ニ候得て、建言仕度奉存候得共、前文之次第故恐入候得共難申上奉存候。乍去方今
幕廷之御模様、深くて心得不申詳悉不仕候なりにも、第一
尊公御後見職中、老生汚重任候時分とハ諸事御舊套ニ被復、御改革等も有之、何

政は天下を紛飾するに過ぎず

分太平を紛飾する
廟議歟と奉拜察候。右樣打變り候事ニ相成候故、乍恐傍觀之工夫も更ニ盡果
候義ニ御座候。只今之趣ニて徒ニ相過候ハヽ、如何成珍事出來可申歟夫而已
杞憂罷在候而已ニ御座候。會侯東下ニ而も、迚も

會津の東下にて幕議は統制しがたし

幕廷ニ大議論相起り候て、乍恐
台慮之御決斷も御六ヶ敷可有之歟、一人之會侯衆多之　幕吏ニ應接ハ如何可
有之哉、加之會侯温順恭謙之生稟ニも候へと、乍失禮行屆キ候周旋ハ被案申候。

禁裏守護總督の任は重大なり其の惧を辭む

同しくハ會侯在京之方
尊公之御相談相手ニも被爲成、一人ニ而も御同志之人在京御都合可宜奉存候。
且又　尊公只今御東下之　思召被爲在候歟、或ハ　御當職御恐縮之餘り御退
避之　尊慮等萬一被爲在候而ハ、夫社天下ハ是切と奉存候。
朝廷ニ而も深重　御依賴、
殿下御始も御依賴、諸藩亦奉依賴候事故、
幕府方今御不都合之品々有之、昨春
御上洛御參內之節、於

參覲制の復舊は御一和の障となるらん

慶喜の在京は天下太平の命脈を繫ぐものなり

天前　大樹公御始列侯へ、以
宸翰の　御告諭中ニも
叡感被　思召候參勤割諸家妻子歸國歸邑の義抔も、再舊例ニ復し候抔も　其他不遑枚擧
御一和の障りと相成居候得共、矢張
幕廷を　御憐愛の
天慮まて、御上坂　御催促抔も、畢竟
尊公御在京被爲在候故ニ、まさも
朝廷の御中隔絶ニて至兼、天下太平の命脈斷截ニ不至候義と奉存候。萬々一
尊公御進退被爲在候御念慮、一毫まても有之候ゐて、列國割據ハ勿論、土崩瓦壞
大事去り可申、是眞ニ憂國者の大憂こゝ歸し申候。仰願ハ
幕府ハ方今の勢如斯ニ候とも、　尊公　會侯桑公等長く御滯京まて、御施術御
周旋無之候ゐもよろしく、此儘御腰を御据へ
天意を被奉被爲入候へて、天下の人心崩壞も致不申、今後紛亂等有之候ゐも、御
鎮壓出來、

天幕ゝ御一和再ひ整ひ候期も可有之歟。是より外ニ別慮も無御座、救時ゝ良算を勘辨仕候而も、迚も淺陋ゝ老生式ゝ工夫ニ不能、大洋失揖ゝ世態と被仰下、いつまても其通りまて御同意不堪痛恨候。呉々　尊公御苦勞千萬奉察上候得共、太平ゝ命脈を維持し、再好機會ゝ期を待チ申候まゝ、

尊公御進退ゝ上ニ歸し申候。段々ゝ御懇問御心やさきこまつを、不顧出位ゝ罪失敬惶恐奉捧野人ゝ芹候。激切屏營ゝ至ニ堪へす、伏而奉仰　海山ゝ如量候。先ま右尊答旁如斯ニ御座候。誠恐誠惶頓首々々謹言百拜

三月二十七日　　慶永

謹答　一橋黄門公玉案下

二白御端書難有奉存候。尚又異常ゝ氣候諸事御保護奉萬祈候。過日ま越前守歸國、右御歡被仰下、殊ニ在京中ま諸事御世話ニ相成難有奉存候。御傳言ゝ趣申聞候處、厚難有猶又宜申上呉候樣申聞候。此段も奉申上候。以上

〇是歳四月晦日茂昭公の長州再征の非を論ぜられたる建白書あり、左に附收して参考に供す。

茂昭公の建白書

長州再征の理由解しがたし

長州をして死守の勢をなさしむるは却て不可なり

今般毛利大膳父子御征伐として、
御進發被仰出候に付、私(茂昭公)儀大阪表にて御待受仕度奉願候處、願之通被仰出難有仕合奉存候。右に付昨秋以來之景況を以及愚考候處、大膳父子降伏謝罪之次第は、尾張前大納言(徳川慶勝)殿より委細被及言上候通りにて、此上大膳父子を始二州之御仕置夫々御裁決迄之御儀と相心得居候處、今般之被仰出にては大膳父子悔悟の體にも無之、其上不容易企達
台聽候趣にて、亦復御征伐として
御進發被仰出候儀、如何之御次第に被爲在候哉難奉計御座候。元來父子之譴責を始、々末嚴重に過き、一同死守之勢と相成候ては、實に不容易事柄にて、天下之御爲不可然に付、父子重疊服罪之所を以降命相待罷在候條々は、前大納言殿より具に被申上置候事に御座候。然る處夫等の筋は一切御取揚も無之、再發之趣を以
御進發被爲及候御儀、必御定算可被爲在御儀とは奉存候得共、昨年之處二百年來未曾有之御大義も
御威光を以不及干戈鎭靜にも可相成姿にて、

又又天下の亂階となり萬民の怒を買はん

長州問題は公武合議を以て決すべし

朝野とも漸安堵ニ歸候處、又ゝ大兵を被動候儀は、必天下ゝ亂階ニ而、諸大名ゝ困窮萬民ゝ怨嗟誠ニ以不一方事共ニ而、此上如何成不測ゝ變を可生哉も難計、乍恐
御家ゝ御爲ニも相成間敷歟と不堪恐懼奉存候。夫ニ付尚又種々盡愚考候處、畢竟
御上坂ゝ上速ニ
御上洛、大膳父子を始二州ゝ
御處置
叡慮御伺
公武御合體ゝ御裁決ニ相成候得は不費干戈、大膳始二州ゝ士民ニ至る迄如何樣ゝ御譴責を而も無異議甘受可仕は勿論ニ而、天下ゝ人心も靖定ニ至可申ハ必然ゝ儀と奉存候。昨年ゝ御機會ニ候得は、如何ニも迅速
御征伐　御成功ゝ上、
御上洛ニも御至當ニ奉存候得共、當時勢ニ而は
朝廷よりも先達而已來每々御上洛ゝ御沙汰も被爲　在候哉ニ奉拜承候得は、

直ニ大坂ゟ御進發被爲在候而は、御都合如何と奉存候。何御事も
叡慮御伺ゝ上ならては
朝廷ゝ思召は素ゟ、天下ゝ矚と申、防長鎭壓ゝ御運びも如何ニ相成哉ニ奉存候。
呉ゝも御輕擧ゝ儀不被爲　在、尚又再度叛狀ゝ事實御糺彈ゝ上、
朝命を被奉天下に聲言して共に
御征伐被爲　在候ハヽ、御成功ゝ程も萬ゝ無疑可爲御儀奉存候。實ニ此度ゝ
儀は
御名義ゝ正否
御家ゝ興廢ニも關係仕候至重至大ゝ御儀と奉存候ニ付、冒萬死奉言上候。尚
厚　御廟議被成下候樣伏而奉至願候。誠恐誠惶頓首謹言

四月晦日　松平越前守(茂昭公)

この後は總て朝命を以て事を行ふべし

五十八　慶應元年十月九日條約勅許後の措置に就き一橋慶喜

に愚衷

○是より先、九月十六日英佛米蘭の艦隊は相率ゐて攝海に入り、兵庫沖に碇泊して兵庫の開港と條約の勅許とを强請せり。是に於て朝幕議を重ねて十月五日漸く條約の件のみ御聽許の勅を拜するに至れり。公はこの時福井に在城中なりしが、この報に接し、乃ち其の後の措置に就き、當時の禁裏御守衛總督兼攝海防禦指揮の重任に當れる一橋慶喜にまで鄙衷を陳べられたるもの卽ち本書なり。今其の控書によりて收載せり。

條約の勅許に就いて

條項に改

密翰奉拜啓候。寒冷逐日增加之處、先以
皇上萬安、隨而
公方樣益御機嫌能被爲入、御同意重疊奉恐悅候。尊卿愈御淸安被成御盛務奉
恭賀候。扨て此度條約之儀
勅許被　仰出、先々無恙之生靈保存之
御仁惠も相立、無此上難有次第と奉存候。右ニ付而も萬般之御周旋御苦心實ニ奉遠察候。就而者今後之御手續如何之御次第ニ可相成哉、御達之趣ニ而も、條約面不都合之廉者、幕府ニ而御取調替　御窺ニ相成候得者、從

正の點あらば朝廷に窺ふべし

諸藩と會議するは却て纏らず

寧ろ委員を選んで幕議に加ふべし

幕府の私利を捨て天下の正議に從ふべし

秘密の外交は不可なり

朝廷諸藩へ御衆評之上、御取極可相成哉之
御主意と相見へ候。右不都合之廉と申者追々
幕ゟ御窺ニ相成、其上ニて御取調替ニ相成可申儀と奉存候。
幕御手切之御取調ハ、爲指御支まも有御座間敷哉ニ候得共、其上を
朝廷ゟ諸藩へ御のけまて彼是衆論と相成候而者、喧囂而已ニて容易ニ御片付
ハ六ヶ敷可有御座歟。又ハ面從後言之運ひニも可相成歟と愚察仕候。右ニ
付而ハ先ッ諸藩江云々ニ付其任ニ堪候者を指出候樣被命、其者共を
幕議中ニ被加、御取調ニ相成候ハヽ、諸藩事情委曲盡御手返りも致間敷哉ニ奉
存候。何分方今と相成候而ハ、是迄之幕私幕利ハ御脱却ニ而、天下合同
純一之正議ニ不相成候而ハ、一旦之處ハ事鎭り候而も、再度之惑亂眼前之儀と
奉存候。畢竟丑年以來外國事務ハ、
幕之御秘事と相成有之候故、乍恐
宸襟も不被爲安、諸藩初も安心不仕儀者御承知之通り之事ニ候へハ、何卒此度
之機會よりして、上下ニ達し公明正大、
皇國萬安之御處置、御條約相成候樣仰天俯地神祇ニ默禱罷在候。尊卿も是迄

大公至正を以て朝幕の和親を計るを要す

ハ御嫌疑云々之御次第も有之哉ニ候得共、當時と相成候而は、朝幕之御間ニ被爲立、天下之屬望御一身ニ歸候形勢ニ候得は、此時ニ當つて乍憚毫髮之御私心無之、内外御擔當ニ而、大公至正表裏貫徹し候朝幕之御眞和、 神州之安全を御計議御座候樣仕度儀と奉存候。 先年來、毎々一時御安危之分界と相見へ候大艱難ニ、御遭遇被成候御儀ニ候得共此度之如く朝幕之御離合天下之安危、萬世ニ亙つて定るへきの機會ハ無御座と奉存候。例之愚見ハ不外御懇親にまのを默止仕兼、不顧赫威陳啓仕候。 私儀も先頃御參 内も被爲濟、追々御進發ニも可被爲及哉之御運ひニ付、爲伺御機嫌西上之積ニ而、當月朔日致發途候處、折惡敷前日ゟ風雪甚敷候故、途中風邪ニ感冒、二日ゟ今庄驛ニ逗留罷在候處へ、在京家來共之内罷歸り、錦地之御模樣以之外御混雜と申、且私儀ニ付嫌疑之雜說も有之由承知仕候故、いらさる隱居之身として御多事中へ參向仕候而、却而御邪魔ニ相成候而は恐入候ニ付、不快旁三日ニハ直樣歸城仕候。 爾後追々之御樣子傳承候處、何分ニも不容易御

次第共ニ而恐懼之外ハ無之、乍然前書公然
勅許等之御運ひニも相成候得ハ、是迄ゟハ御安心之御場合も可有御座と奉存
候。開鎖之儀者數年之大難大議之處、時至つて一朝ニ御決斷相成候義。
皇神へ達候
神慮にも可有御座、
日本國之幸福無此上、北邊罷在候而も不堪歡抃之至奉存候。不相替失敬失位
之多罪ハ伏而奉仰御海涵候。偏ニ區々之寸衷
御照察被成下度不堪翹望候。先ハ右之段奉密啓度如斯ニ御座候。書外期後
音候。恐惶謹言。

十月九日　慶永

一橋中納言様
玉几下

二白順時御自愛奉專祈候。扨ハ條約七ヶ國と申內、最初亞國ゟ定候事ニ而、
右ハ公使ハルリスも大ニ丹精、永主(永井)岩肥(岩瀨)抔ハ反覆討論之上、萬國ニ比例無之
適宜之章程故、其後渡來之英佛等も夫ニ準候ニ付、敢而非望之議等不申出事

この副裏を閣老へも示されたし

し由、私在職し折も共向〻毎ニ承込候事ニ御座候得て、此度御調替ニ付而も、

縦令

朝議ニ於而御好無之、又御指支有之ヶ條ニ而茂、一度御拔指相始候ハヽ、彼よりも亦身勝手之ヶ條無止候半抔と、却而彼是情慾を動し候端と可相成と考察仕候。今暫し處、時節を御待可被遊御時體ろとも奉存候。唯今と相成候而て、

朝廷も大眼孔を被爲開候樣、御解釋被爲在度御儀と奉存候。萬々御遺算ハ被成御座間敷とて奉存候得共、存付候儘餘白へ拜陳仕候。已上

○別箋

奉謹啓候、本文區々し鄙衷、御一覽御勘辨し上、尚又閣老へも御見を御相談被成下候ハヽ、別而幸甚し至奉存候。謹言

十月九日　　慶永

五十九　慶應二年正月五日山陵修補の件に就き内大臣近衛忠房に密啓

乍恐極内々奉言上候。今般
山陵御修補　御成功ニ相成候ニ付、其砌厚評議之上致指圖候故、
叡念一時ニ被爲遂、　御追孝相立候段、
御滿足被　思食、爲　御賞御狩衣一領　天賜實ニ以驚愕恐入候外無御坐、慶永一生ハ勿論、萬世ニ傳へ奉畏候。就夫極御内々　御懇命ニ任せ奉申上候。第一戸田大和守(忠至)等ハ素々骨折候儀ニ而、幕府尊奉相成候も、畢竟大和守心配之一誠意貫徹いさし候事と奉存候間、大和守江
叡賞之上　恩賜被爲在度、且又大樹尊奉ニ就ては、今度何卒大樹へも厚重之
宸賞被爲在、　天賜等無之候而ハ實ニ奉恐入候。其上慶永在勤中(文久二年)評議差圖仕候と申御事ニ候得共、決而一人之評議指圖ニ而ハ無之、第一大樹遵奉之志を相繼、老中江も申談候事ニ而、別而此砌
山陵御修補ニ付、心配骨折候者ハ、水野(忠精)和泉守板倉(勝靜)伊賀守ニ而、右　御用取扱候

狩衣の天賜を謝す
戸田忠至
將軍家茂
水野忠精
板倉勝靜

将軍以下三人にも天賜あらんことを願ふ

功ハ、慶永ゟも兩人之方倍し有之候間、何卒此兩人へも慶永同様宸賞　恩賜被爲在度伏而奉至願候間、御内々傳議等へ御相談之上、可然御所置奉希候。　大樹並老中二人大和守へ
御褒美　天賜被爲在候ハヽ、慶永益以深重奉畏候。　左様無御座候得ハ、慶永一人ニ限り候様ニ而ハ、誠ニ以乍荷無窮之
盛寵迷惑之至奉存候。　兼而甘　御懇命、不顧僭越多罪奉密奏候。　區々之愚衷伏而奉仰　高明之亮察候。　誠恐誠惶頓首百拜謹言

正月五日　　慶永

内府公
御座下

此書付外々へハ不申上候間、何卒常陸宮正三卿等へハ御内々御覧ニ被入候様奉願候。　以上

六十　慶應二年八月二日長防再征に就き一橋慶喜に建言

り是より先、七月廿日將軍大坂城に薨去せるが、幕府は其の喪を秘し、一橋慶喜をして代りて長防を追討せしめんとするに至りしを以て、乃ち其の不可を論し、この建言に及びたるなり。今公の自筆に係れる覺書「登坂心覺」より抄出してこゝに收載せり。

一翰奉謹啓候。秋冷相催候砌ニ御座候處、先以尊卿愈御安泰被成御座珍重之御義奉存候。扨ハ昨夜被仰下候ニ付、午後登館其節萬縷可相伺候。扨又過日來忘寢食苦心仕昨夜認置候書付、先差上申候間御覽被成下置度奉希候。書餘後刻拜顔之時ニ讓り候。恐惶謹言

八月二日　松平大藏大輔

一橋中納言樣

二白、云々一昨日願置候雲州之一件、定而御厚評之上御指圖被成下候儀と奉存候得共、實ニ危急切迫仕居候間、一刻も早く一藩之兵氣不挫、安心出來候樣偏ニ御鼎力奉希候。

○別紙

一昨夕登館之上、尊話を初段々御樣子致拜聽候處、今般

慶喜將軍家茂に代りて長防追討の件

出陣は天下の人望に背き不測の擾亂を生せん

之を中止して更に諸侯に圖るへし

有名諸侯の心を收攬するは方今の急務なり

公方樣御違例之處、長防御追討至急切迫ニ付、爲御名代尊卿近々御出陣被爲在候趣、即其段者

御奏聞ニも被爲及候程之御事ニて、天下之安危御家之御存亡此秋ニ可被爲在と銘肝憂痛無此上奉存候ニ付、過日來も愚衷之趣申上、一昨日も乍不及心底丈ケハ充分吐露仕候。尙歸宅之上今日迄も再三再四熟考ニ重熟考候得共、只々忘寢食御案申上候心底無止時奉存候餘り、再冒虎威奉謹啓候。實ニ今般之御出陣者、吳々も御浮沈之境界ニて、御勝利ニも可被爲至候へ共、畢竟尊卿御手始之御事ニ被爲當、天下之人望ニ相背候儀被爲在候而ハ、最早御挽回不可爲ハ勿論、忽地天下不測之擾亂を可生ハ眼前と奉存候間、仰希くハ吳々も指迫り候長防事件も暫御閣、先征長を始、都而天下之大事件ハ一々有名之諸侯ニ被議候上、御發令相成候樣仕度奉存候。乍併征長之義者夫も御手間取相成候義ニ候はゝ、早々有異議諸侯へハ御使被指立御相談相成、其上ニ而如何樣共御處置被爲在候而不遲義と奉存候。吳々も有名諸侯之心を被爲攬候義、方今之御急務と奉存候。此段犯萬死不憚忌諱奉申上候。伏希くハ區々之鄙懷奉仰高明之照察候。

長防再征討の不成功却て諸侯に疑を抱かしむ

要するに幕府の失敗は私政を去りて公議に從はざるに因る

諸侯の異議は之を推問し初めて國是定るべし

頓首謹言

八月二日

昨夏長防御再討被仰出候砌、如何之御次第ニ候哉驚嘆之餘り不取敢奉窺候處、再發之趣有之由ニ而、遂ニ天下ニ大兵を被動御糺問之處、其實なく、隨而御處置被仰渡ニ相成候得共、大兵境ニ臨之御武威ヲ以令承服候樣之御仕向ニ而、紛議相起り、諸侯も御名義之正否彼是疑惑を抱候樣相成、遂ニ今日ニ立至り候義ニ而奉恐入候。倩熟慮仕候ニ、外夷之事起候ゟ以來、乍恐公邊ニ而も彼是御失體之儀も被爲在、人心不平之事情、遂ニ長防御征伐之可否と相成來り候事ニ候へと、廣く天下之侯伯ニ御議し、私政を去り、公義ニ御從ひ被成候義、大御急務と奉存候。就中異義ある諸侯へハ早々御推問有之、御平心を以御聽納、御反正ニ相成候樣願敷、左候へハ自然公共之理明ニ寛猛至當之御處置相定り、

御國是爰ニ立可申と奉存候。近來英佛二國各共好ミスル處へ益親睦を結ひ、我國をして分崩離析せしめんとするの勢も有之、鷸蚌之利を納むるの術

諸侯の心志を合せ皇國一致たることを要す

兵力を以てせずして正大の理を以て征すへし

に陷候事も難計哉に被存、尤可懼の至に候。此等を以相考候へハ、外國の侮を禦くハ、
皇國を一致に被成候儀御根本に有之、長防の事件ハ諸侯の異義、御推問御講究被爲在、心志を御合せ被成候義御先務と奉存候。本末先後の分、暸然と御辨別被爲在候ハヽ、假令　御征伐中と雖モ、順序を追ひ候ても御處置ハ、如何程も可有之義と奉存候。只今の姿にても、奉
勅とハ乍申、何處迄も兵力を以屈服致候樣被成候義にて、正大の理に非レハ、諸侯も各隱然と一趣向を立候樣相成、假令一長ハ亡候共、又一長を生し可申、且士民の困窮ゟ禍蕭墻の內に起候義等ハ、先日申上候通に御座候間、何分御反正大御襟懷を被爲開、御政令御一新、上奉安
宸襟、下蒼生の苦を被爲救候樣必至奉仰願候。菲才淺見の私、殊に隱居の身として妄に大政を議候義、重々奉恐入候得共、國家危急に迫候義、奉對
照祖祖先の　神靈候ても不忍沈默、敢て冒萬死及建言候。幾重にも御採用被成下候樣伏て奉冀候。誠恐誠惶謹言

血統の故を以て将軍職を繼ぐよりも將軍職にありて任にあらずとして他に讓る方却て德川家の中興なり

家茂の薨去により將軍職は空位となり

六十一　慶應二年八月五日一橋慶喜に將軍職繼承の可否に就き建言

謹而奉捧密簡候。秋涼之候ニ御座候處、先以尊卿愈御清安被成御座奉恐賀候。扨者去月廿六日上京、直ニ參殿拜話之序御意有之趣、乍恐徳川家迚も滅亡之時と被　思召候へとも、御血統之御事故、無御據御繼統被遊御了簡ニ被決候得共、　將軍職之義者、御覺不被爲在候故御受不被成、其任ニ勝候者へ御讓被遊候御心得之段御意を拜聽仕、誠ニ以難有次第、是返而徳川家御中興之御威徳、且大好機會と感佩之餘り、實ニ舞踏之處を不知、唯今ニ於て銘肝仕居候。　其後も毎々蒙御垂問、愚衷も申上候事ニ御座候。　昨日も又愚考仕候者、畢竟征長之御一擧ハ、兵權幕府へ御委任之廉を以、悉皆幕議に依りて之御處置ニ有之候處、其御委任を被爲受候將軍家、御下世ニて御職掌空位と相成候處ニ而、〇附箋に「御下世御内實之義、當時と相成候而者誰知らぬ者も無之候處、表向計御病中之御姿ニて、兵革を長せられ候而へ、長人之縁而口實とをる處之朝命台旨ニも無之、中間浮雲之所爲さるる事現然著明故、益長人

れり從つて征長の勅許も亦自ら解消の筈なり

名代の出陣は改めて朝裁を仰ぐを要す

ゝ得策ニ落候而已ならす、諸藩も猶更不服を増進可仕候。又御發表之上あれハ、專らの御私事、無名之軍ニて大義ニおゐて不被爲濟候御義と奉存候事ニ」とあり

是迄之如く征討を恣ニせられ候ゟハ、德川家之御私讐を被復候も御同樣ニゟ、天下諸侯彌以不服ニ歸し、益御困難ニ被爲運候ハ必然之道理と奉存候。何分方今討伐を被議候御議ハ、更ニ御尤とハ不奉存候。乍恐當時之御大義と申ハ、過日御所ゟ被　仰出之御名代之　御出陣之義ハ一旦御受ニゟ直ニ大樹公御下世ニ付、　德川之御家ハ橋公御相續ニ相成候段、朝廷江御奏上、御在世御職掌中御委任之征長一件ハ如此々々之御次第と申事御役上ケニ相成、朝命を以攻手之方ハ當分休兵被命置候間、賊兵ゟ妄動仕間敷旨、被仰出被下度段被仰上候へハ、夫ニゟ天下ニ將軍職無之事分明ニ相成候。　此時依舊　德川家へ宣下ニ相成歟、又ハ他家へ被宣下候歟、夫ハ

朝命あらば諸侯の會議に附すべし

とにかく朝憲奉戴公平無私の政治を天下に示すべし

將軍職を天下に投げ出さずんば泰平は期しかたし

叡慮次第と申ものニ而候。徳川家へ强而被命候ハヽ、諸侯會議之上御決定被成度候間、朝命を以群牧を被會候樣御願、（蒸氣船へ傳奏衆閣老方乗組命を傳へ候程成神速なるべし）召會衆集議之上、公論愈徳川家ニ決候ハヽ御請有之、（御委任之儀は當分御辭退可被遊事歟）今後之御國是並長防之義も寛大之御所置ニ可相成哉否を被議候而、是亦公論之所決を以朝裁御伺之上、兎も角も御施行被遊如斯朝憲御奉戴ニ而、公平無私之御政道さる事を、新將軍御親政之御手初に明々白々天下へ御開示有之、億兆之疑惑を被爲釋候御義當然之御條理ニ可有御座と奉存候。唯今此御順序ニ御失錯と相成候而え、御政治之御障碍必定可有御座義と奉存候。何分此度こそ無御遺念、將軍職を天下へ御投出し不被遊候半而ハ、再ひ泰平ニ歸スル所以之條理無之事と可相成御義と奉存候事ニ御座候。例之失位僭越之罪を不顧、泣血奉謹白候。伏而希くは御採納御亮察奉仰候。恐惶謹言

八月五日　慶永

一橋中納言様

六十二　慶應二年八月十三日九州解體の件に就き一橋慶喜に建言

○慶喜は公よりの再三の建言に拘らず、將軍家茂の喪を秘して防長追討に出陣せんとし、已に朝廷より御暇も賜はりたれば、八月八日參內御禮を言上し、其の十二日を以て大坂出發に決定せり。然るに十一日に至り豐前小倉口方面の戰況不利に陷り、小倉の落城に次いで熊本・柳河・久留米等の藩兵は兵を撤していづれも其の國に引き揚げたりとの急報に接したり。是に於て慶喜の企圖全く崩れ、俄に出發を中止することとなれり。公乃ちこの建言に及びたるなり。

一翰奉謹啓候。秋冷增加之處、先以倍御安泰被成御座奉恭賀候。然ハ一昨日ハ御用人ゟ手紙、昨日ハ態々御使を以御用談御座候ニ付、不快押而登館仕

下關口の敗報

今は幕政改革の好機會なり

九州の解體は自然の理勢なり

早く家茂の喪を發すべし

將軍職は之を辭退すべし

朝命を以て諸侯を

候樣被仰下、何分押而も罷出、乍不及御談端ニも相加度候所、過日來之賤恙兎
角ニ不快罷在失敬奉恐入候得共難罷出奉存候。扨下之關口意外之儀、嘸々
不容易御苦慮可被爲在と千々萬々奉恐察候。先日來も每々奉申上候通、今
度
御繼統可被爲在折柄、是迄之幕府之御非政御一洗被遊候ニハ、誠ニ大好機會
と奉存候所、未タ
上樣御他界御弘メ不相成以前誰知らぬ者も無之。
將軍職闕候へハ、隨而命令を受る所なきと申心ニ候哉、九州解體之姿ニ相成
候而、大勢一變仕候。是諸侯ニ而奪候而も無之、自然之理勢不得止義ニ御座
候。ケ樣相成候上ハ、大權不失墜樣ニと申場合ハ最早過去り候事故、此上ハ
速ニ　大喪御發表相成
將軍職ハ兼而御決心之通固く御辭し被成、是迄幕府御失體之義多々有之、
御先代御奉　命も不被爲遂、時世變革ニ相成候次第、委く
朝廷江被　仰上、御詫御申上之上、何卒
朝命を以廣く群牧ニ御諮謀被爲在、　御國是御定ニ相成候樣、御至誠を以御願

會し國是を定むべし

職掌なくして天下の軍勢を統括すべからず

被成候へハ、自然
皇國萬安之道も相立、
德川家之御盛名も千載ニ傳り可申候。然ルを此上ニも宇内悉知之　大喪
を被祕、御職掌なくして天下之軍勢を御統括被成候而ハ、第一
朝廷を御欺罔被遊候ニ相當り、天下へ被對候而ハ大御不信義、大御不德ニ相成、
億兆人心之不免所ニて、却而滅亡を御招被成候義と奉存候。呉々も前文之
通御反正相成候へハ、乍恐
照祖以來三百年之御餘德、如何そ一朝ニ消滅可致哉、必堂々さる
御繼統之御家名を相傳候事と奉存候。是等飽迄御承知ハ可被爲在候へと
も、區々之鄙衷不忍默止、又々犯虎威奉拜陳候。僣越之多罪ハ伏而奉仰御涵
容候。恐惶頓首再拜

八月十三日　大藏大輔

一橋中納言樣

研北

六十三　慶應二年八月一橋慶喜に勸告せる國是見込書

（一）この國是見込書の「唐閣瓊浦行一件」とあるのは、卽ち長州征伐の時幕府の督軍老中肥前唐津の藩主小笠原壹岐守長行が、慶應二年七月廿九日豐前小倉口の戰に大敗して、長崎に遁走せしことを指せるものなり。而して、この報告の公に傳はりしは翌八月の十一日なり。故にこの見込書は、其の直後の起草にして、恐く八月十二・三日の間なるべし。されど前揭十三日の建言（六二）に、この見込書の趣旨と大略同樣なることを已に載せられたるを以て見れば、この見込書は其の建言の後更に再考せられ、而して斯の如く判然了解し易くせられたるものなることは是明かなり。察するに公は當時足痛にて外出御困難なりとの由なれば、その頃の使者伊藤友四郎が口上に代へて如斯執筆せられたるものならんか。續再夢紀事には、之を「一橋殿ニ勸告セラルベキ條項草案」の見出にて八月十二日の條に載せ、且つ其の字句にも多少の異同あり。されど之を十三日の建言以前と見るは妥當ならざるべし。尙續再夢紀事所載の草案を左に揭げて參照に供す。

一速に大樹公ゝ喪を被發候事。
一一橋公繼統相成候事。
一一橋公繼統ありても、幕府へ今日より無之事故、江戶へ御歸城、又其儘滯坂、滯京、都而何　叡慮可被取計候事。

国是

今般於外国諸處[illegible]
開港通行被許候[illegible]
手始目的ニ[illegible]
大樹公速ニ上京
大衆ニ[illegible]
権ヲ御返上[illegible]
幕府今日ヨリ[illegible]
江戸ハ諸侯[illegible]
帰京都ニ付
叡慮ヲ[illegible]
是迄之幕府之[illegible]
諸侯[illegible]
尾張[illegible]
将軍職ヲ御辞[illegible]
下ニ衆議[illegible]
右ニテ大樹職[illegible]
[illegible]

今後天下ノ[illegible]
幕府ヨリ[illegible]
可復職[illegible]
三藩[illegible]
相成[illegible]都ニ付
叡慮ヲ[illegible]
合併[illegible]
便行[illegible]金銀[illegible]
之條[illegible]
朝廷ヘ御[illegible]
朝廷[illegible]



一德川家從來之制度を改め、諸侯へ命令等被停、尾紀兩藩之如く可被成事。

一幕府より被建置候所司代、守護職、町奉行等ハ、一切被廢候歟、又ハ其儘据置相成候歟、都る伺　叡慮可被取計事。

一兵庫開港、外國交際、諸侯統轄、金銀貨幣其餘天下之大政一切、　朝廷へ御返上相成候事。

一若天下之衆議ニ依り、將軍職を是迄之如くにと願ひ、其職を御受相成候とも、諸侯へ命令等之書を舊套に被復候迄にて、其他之御制度ハ尚御改正之廉可有之事。

り今ここには現存せる公の自筆に係れる控書を以て收載せり。(本書半切二尺八寸一分)尚控公の控の字は獨木橋の義にして即ち一橋なり

(裏端書押紙)
「老公幕末國是御見込書

國是

一今般於九州諸藩解兵、唐閣(小笠原長行)瓊浦行一件之報あり、故ニ予前之目的如何と考候得共、

速に將軍

大樹(家茂)公速被發

の喪を發すべし
慶喜は徳川家を相續すべし
歸府滯京滯坂等すべて朝命に從ふべし
幕府從來の制度を改め徳川家も一大名となるべし
將軍職のことは天下の衆議によるべし
所司代守護職町奉行等の存否は朝命によるべし
天下の大政は一切朝廷に返上すべし

大喪候事。
權公繼統相成候事。
幕府今日より無之ニ就而ハ、江戸へ御歸城又其儘滯坂滯京、都而伺
叡慮可及取計候事。
是迄幕府之御制度被相改、諸侯へ命令等被停、尾紀兩藩之如く可被成事。
將軍職ハ御固辭之上天下之衆議ニ被任、天下是迄之如く相願候ハヽ、大樹職掌
御受相成候へハ、御改正等ハ有之候とも、命令等ハ被復舊套候事。
幕府より被建置候所司代・守護職・町奉行等ハ一切被廢候歟、又ハ其儘据置相成
候歟、都而伺
叡慮可及取計事。
兵庫開港、外國交際、諸侯統轄、金銀貨幣其餘天下之大政、一切
朝廷へ御役上ケ相成候事。
朝廷ゟ改而諸事可被仰出候事。

六十四　慶應二年八月十七日諸侯召集の件に就き一橋慶喜に建言

（一）幕府は長防再征失敗の結果、時局善處の策として諸侯を召集して會議を開催することに決したり。是も亦公の建言に基けるものなり。前掲（六十）の文書を參看すべし。

諸侯の召集は須く朝命を仰ぐべし

奉謹啓候。過刻ハ登舘拜晤難有奉存候。爾來愈御安泰奉恭賀候。扨今般諸藩被爲召候儀、以
朝命被爲召候ニて無之、
朝廷御聞濟ニ廉を以從幕府被爲召候事ニ由、只今市（原）之進より申越承知仕候。
僕愚見ニて過刻尊卿御咄ニ通り、何分
朝命を幕府御取次ニ而御達ニ不相成候而て、御筋合不宜、諸侯ニ御請も如何も奉存候。此段心付候故奉申上候。恐惶謹言

八月十七日　　大藏大輔

一橋中納言様
玉案下

有志の諸侯なりとも先づ朝命を傳ふへし

この際私使直書は不可なり

別啓

愚衷尚又奉拜陳候。過刻御垂示被爲在候薩州初有志之諸侯へ、兼々御懇意之廉を以、御直書を以梅澤孫太郎被遣候義御尤ニ奉存候。尚又再三相考候處、有志之諸侯へも先始ニ以

朝命被爲召、引續き御直書孫太郎持參被遣候方御順序も宜、其上矢張尊卿ゟ被

仰立ニて、

朝命出候樣先方へも自ら相響き、必奉　命も可致哉奉存候。甚以難申上儀ニて恐入候得共、尊卿ゟ御使被差立、異儀なく有志之諸侯速ニ上京可仕、急度御定算被爲在候得て宜候得共、萬一孫太郎御使被差立候而も、矢張不快等申立御斷申上候樣相成候而て、實以御大事之御義と心付候故奉申上候。何分方今之所ハ御辭職之御決着ニも被爲在候事故、御懇意有志之諸侯といへとも、御私事之御使並御直書ニて御呼被成候ゟて、嚴然さる

朝命を先ニ被立候事自然御至當之儀と奉存候。例之贅言驚高聽候。多罪御海涵奉希候。已上

八月十七日夜　大藏大輔

り斯くして慶喜は公の建言を納れ朝命を奏請したりしが、翌九月八日其の御沙汰を蒙りたれば、公はまた左の建言書を慶喜に遣はされたり。

今般彌諸侯上京、衆議被
聞召候
朝命被爲有ニ付而者、乍恐天下今日之形勢ニ立至候も、畢竟幕政之御失體より起り候義迄、上奏惱
宸襟、下士民を困究ニ爲陷候者、全く幕府之御失策迄、今度
徳川之
御繼統御承續被爲遊候ニ付而者、何角も既往之罪者　上樣御一身ニ御引請、追而如何樣とも御嚴責御甘受可被遊候間、差向
皇國を維持スル基本只管相立候樣被遊度、諸侯無隔意御相談之義、御賴被遊候事第一義と奉存候。就夫而者、諸侯各既往を論候樣相成候而者、今日ニ差縺候儀紛起いたし可申、依之諸侯此既往を不論、

今の形勢に至る皆幕府失政の罪なり

されば徳川氏を繼統して既往の責を負ふべし

國是の基本を議して徳川の既往を論ずべからず

有司を選用し會議に先ちて幕政改革の實を示すべし

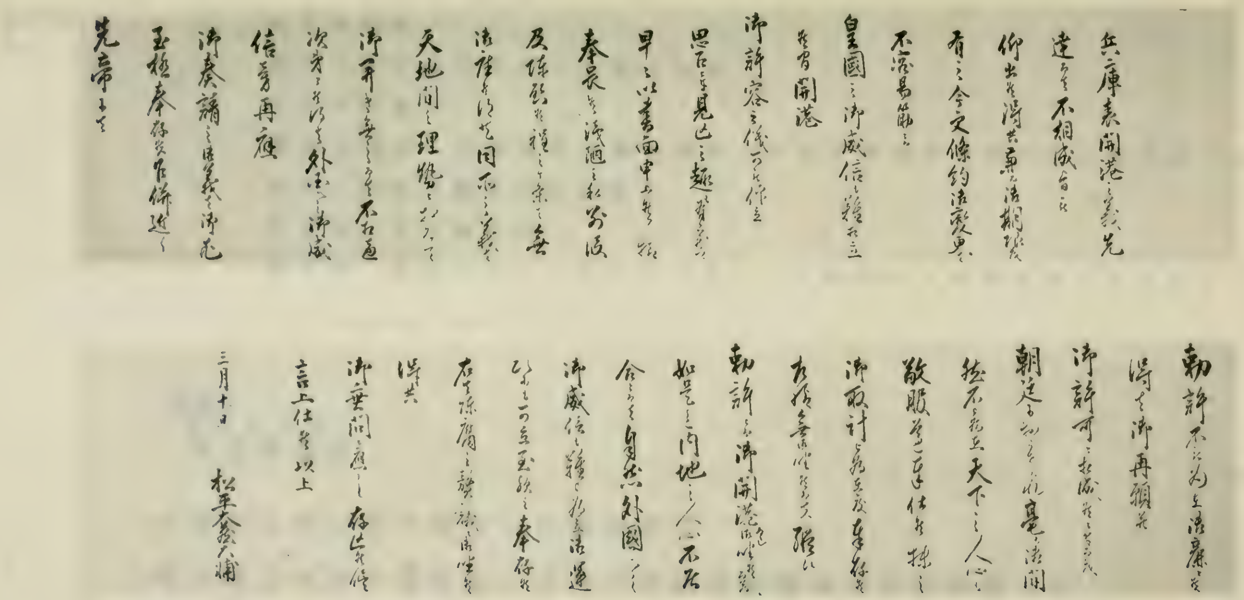
諸藩有志の言論も聽くべし

御國是相立候衆議ニ盡力仕候樣之御所置、自今被成置度、右之義ハ別義ニも無之名望有之有司早々御精撰御登用、職掌正敷相成、先以從來之御失政、惣而諸藩上京ニ先つて御更始被成置候義大御急務と奉存候。且諸侯段々御相談御聽受可被遊ハ勿論ニ御座候得共、素々家臣有志之議論より、紛擾ニ至候義も多々有之候儀ハ、是迄之形勢を以可察知奉存候間、家臣有志議論も申上候樣被仰出度、其節ハ大小監察邊まて應答仕候樣有之度奉存候。右ニ付而ハ、前文申上候通り、有司之御撰用御速ニ被命候樣奉願候。此度之衆議人心之向背、事之成否、御國是之立不立此御一擧ニ御座あるへく奉存候。此段不顧恐奉申上候。以上

九月十四日　松平大藏大輔

六十五　慶應三年三月十日兵庫開港に關する建議

○是より先、慶應元年十月五日英佛米蘭の請求により條約のみは締結せられ


兵庫表開港之義ハ先
達而不相成旨ニ
仰出候得共其後諸期限(?)
有之今又條約之義変更(?)
不容易節ニ
皇國之御威信ニ難相立
差当開港
御許容之儀ニ付而ハ
思召之見込之趣ニ而(?)
早ニ以書面申上候
奉畏候得共[illegible]
及候得共猶又案も無
流行ニ付同不之義ニ(?)
天地間之理勢ニ而
御開ニ相成不相適(?)
次第ニ付外国ニ御威
信旁再應
御奏請之義ハ御尤
至極奉存候何卒
先帝ニも
勅許不被為在候得共
得と御再顧被
御許可ニ相成候ハハ
朝廷ニ於て毫も御開
然不被成天下之人心ニ
敬服可仕候様ニ
御取計被為在度奉存候
右様之儀ニ而[illegible]
勅許ニ而御開港之儀
如是之内地之人心不居(?)
今日之自然外國ニ
御威信ニ難相立候
御座候一日も早く奉存候
右之段[illegible]
得共
御垂聞之程奉存候
言上仕候以上
三月十日
松平大蔵大輔

幕府下問書

たりしが、是に至りて兵庫開港御許容の御沙汰を拜したれば幕府は乃ち公に其の意見を徴したり。この建議は即ちその答申書なり。今公の自筆に係れる控書を以て、こゝに收載せり。尚幕府の下問書を左に掲げて參考に供す。

先達而條約
勅許之節、兵庫表開港ハ不相成旨被
仰出、其後篤と
御熟考被爲　在候處、右ハ兼而期限も有之今更條約御變更ハ不容易筋ニ而、
皇國之御威信難相立候間、開港
御許容之儀可被仰立
思召候。就而ハ見込之趣も有之候ハヽ、以書面早々申聞候樣可被致候事。

（裏端書）「卯年御自筆
開港御建議」

兵庫表開港之義、先達而ハ不相成旨被
仰出候得共、兼而御期限も有之、今更條約御變更ハ不容易筋ニ而、
皇國之御威信も難相立候間、開港

御許容の儀可被仰立
思召ニ付、見込の趣も有之候ハヽ、早々以書面申上候様奉畏候。 淺陋の私別段及陳啓候程のヶ條ハ無御座候得共、同所の義ハ天地間の理勢ニおゐて御開き無之而ハ不相適次第ニ候得ハ、外國への御威信旁再應御奏請の御義ハ御尤至極奉存候。 乍併近く
先帝にハ
勅許不被爲在御廉ニ候得ハ、御再願並
御許可ニ相成候ニ付而ハ、
朝廷におかせられ毫も御間然不被爲在、天下の人心も敬服遵奉仕候様の御取計被爲在度奉存候。 左様無御座候而ハ、縱ひ
勅許ニ而御開港而已御座候而ハ、如是迄内地の人心不居合ニ而ハ、自然外國への御威信も難被爲立御運ひにも可立至歟と奉存候。 右ハ陳腐の贅議ニ御座候得共、
御垂問ニ應し存込候儘言上仕候。 以上

三月十日

松平大藏大輔

六十六　明治元年三月晦日曆法に關し岩倉具視に建議

（岩倉具視の添狀）

「三月廿八日

春嶽ヨリ被差出候。宜取調可有之候事。

制度局江　　具　視」

曆法ﾉ儀ﾊ、誠ニ以日用不可闕ﾉ物ましく、別ゐ民政ﾉ第一と奉存候。是迄德川ニ於テ、淺草天文臺取立製曆仕來り申候、然ル處王政御一新ニ付ゐﾊ、曆法製造所並天文臺早々御取建相成、來年ﾊ從朝廷天下へ被爲頒賜候樣仕度候。以上

三月晦日　　　　　　　　　　慶　永

製暦は從來薩藩に於て之をなせり

年號改元は勅意によるべし

覺

一製暦之儀は、是迄於徳川家致來候得共、素々鎌倉時代より只今に至る迄も薩藩まて製暦仕候。尚大久保一藏御尋問可被成下候。依之、愚考仕候處、今般王政御一新に付、於　朝廷夫々製暦等被仰付候御儀まも候ハヽ、早々薩藩暦家之者幾人に而も御雇まて、早々暦法之義御取建相成候様仕度候。

一慶永暦法之義最不案内に候得共、是迄承り及候所に而て、來暦者已に前年四五月頃ゟ取掛り候哉に御座候得者、當秋冬俄に御取立相成候而も間に合申間敷と奉存候。

一年號改元等之義て、何レ　勅意可被爲在、別段不奉言上候也。

四月二日　慶永

〇以上の二通岩倉具視關係文書の所收に係る

六十七　明治元年四月二日度量衡に關し岩倉具視に建議

秤升共に朝廷に於て定めらるへし

尺度も亦朝廷に於て定めらるへし

（岩倉具視の添状）

「制度局可否御返答可有之候

越前建白」

覺

一秤之事

一升之事

右是迄於徳川取極有之、天下相用來り候。今般御一新ニ付、於　朝廷御定、兩座京師ニ御呼寄、於諸國妄ニ製造被禁度候事。

一尺度之事

是迄鯨并カネ共寸尺區々ニ相成、以後以公法於　朝廷被定、天下一般ノ規則被相立度候事。

四月　慶永

（一）右岩倉具視關係文書並に法規大全に據る

六十八　明治元年閏四月廿四日歌道に關し岩倉具視に建議

(一)この文書は岩倉家の舊藏にして今は山本武太郎氏の所藏に係る。

三條西中納言

右御歌御師範之事。

植松少將

右御歌御相手之事。

薩摩少將家來
八田喜左衛門

右徵士被　仰付、賜從五位下、御歌御相手之事。

八田知紀

右ヽ往古

天智帝御宇前後ノ歌萬葉ニシテ、尤如斯風體自ラ質朴ニシテ文飾ナシ、近來冷泉二條ノコトキ、浮薄華奢ニシテ實意ヲ失フナリ。

三條中納言
右御歌御師範
之事
植松少将
右御歌御相手之
事
薩摩小松家来
八田喜左衛門
右徴士ト仰付賜従五
位下御歌御相手之
事
右大注古
天智帝浄宇前後
ノ歌萬葉ニシテ見如
新風誹自ラ覧拆ニテ

天篤ナル近来浩気二
條ノコトキ深ク萬葉
ニシテ古学ヲ奥ノナリ
王政一新ノ御旧物亦
一洗ト復注古之體
二條浩家両家ノ家
学被成於奏蓋ノ處
春於子年
八田知紀歌学ヲ古今
之歌一名人故御撰
举可然歟
閏四月廿四日慶永

王政一新ノ砌、舊習御一洗被復往古之體、二條冷泉兩家ノ家學被廢候義至當ト
奉存候事。
八田知紀、歌學當今之第一名人故、御撰擧可然歟。

閏四月廿四日　　　慶永

六十九　明治元年八月六日御東幸に關し東京の米穀に就き岩倉具視に建言

東京の米穀は多く仙臺より輸入せらる

一翰令拜啓候。冷雨鬱陶之候、先以閣下愈御清安珍重存候。陳ハ下官所勞追々快方ニ付、昨五日ゟ參　朝仕候間御安意希入候。北野御神事中ニ付、閣下御參不被爲在、不得拜晤候間殘情不少候。何レ明日ハ必御參可被爲在拜顏可仕ト相樂申候。扨又例之愚衷恐入候へ共奉言上候。是迄傳承候所ニテハ、東京之人口幾十萬可難計候得共、東京之米穀ハ半バ仙臺米多ニテ、奥羽之米穀多分ニ入津、其半ハ諸國より運輸之趣ニ御座候。然ル處仙

臺始奥羽多分賊徒ㇾ事故、
東京ㇾ人民米穀ㇾ運送乏少可有之哉ト奉存候。是迄江戸ㇾ豊年凶歳モ、奥羽の豊凶を以可知と申事ᴴ有之候義ニ御座候間、何卒
東幸被爲在候而ᴴ、此邊ㇾ御仁政第一ニ被爲行、奥羽ㇾ米を仰カズトモ、以御仁惠米穀差支無之樣相成候ハヽ、東京人民ㇾ安堵不過之と奉存候。又云
東京ㇾ諸產モ米穀を始渾而海運ㇾ便利を以繁盛いさし候事ニ候。海運ハ御承知ㇾ通り浦賀港へ實ニ要路ニ御さ候。東幸被爲在候事故、第一ㇾ御警衞浦賀口ト奉存候。萬一賊軍艦等浦賀口内外入碇候ハヽ、東京ㇾ困難不過之と奉存候間、至急ニ　梨堂（三條實美）右府公へ被仰進、浦賀口へ
御軍艦等投錨不虞ㇾ御備被爲在、
御警衞ᴹᴴ相成、第一海運截切りㇾ事無之樣致度候。仙官位被召上候事ニ付、考出し申候。此上ハ　閣下ㇾ賢考を以御取捨奉願候也。

浦賀港の警戒

八月六日　慶永

輔相岩公閣下

二白昨夜ᴴ一昨夜ᴴ北方ニアタリ炮聲每度聞へ候、方角ハ土邸（白川）ニアタ

リ申候、尚賢考可被爲在候也。

七十　明治元年十二月二十九日皇后の御稱呼の儀に就き岩倉具視に建議

〔明治史要によれば「明治元年十二月二十八日從三位一條美子〔一條忠香ノ女、時二年十九〕ヲ以テ女御ト爲シ即日册シテ皇后ト爲ス」とありて、公の建議は事後に屬するの觀あり。但し公の建議は一旦「女御」とせられたる點に意見を存し、直に皇后と御稱呼相成り度旨の建議なり。今岩倉具視關係文書よりこゝに收載せり。

（上包）
「慈涌建白
皇后稱呼之儀　一紙
議定送迎之儀　一紙」

是迄之御規則、立后之後被稱　中宮候得共、
御一新別て衆人能知り易くして、格別　尊崇し、且萬國にても尊稱を極むる號

中宮の稱呼を止めて皇后と稱へられたし

は　皇后にしくはなし。以來　中宮の　御稱呼を被爲止　皇后の御稱呼相成度儀御至當と奉存候事。

慶　永

議定迄迎の假規則

當分假規則

一輔相議定參仕之節、御玄關番一人御敷臺に拜伏、給仕二人御出迎、御跡より相隨ひ、議參詰之給仕江案內可致事。

但御退出之節右同樣相送可申事。

一參與以下在官之公卿諸侯參仕之節、不及送迎候事。

一諸侯參上之節、家來之者出迎、且用聞として猥に　御玄關江罷出、或は御廊下向通行可爲禁止事。

但十五歲以下不得止向は、重臣之者一人休息所前廊下迄附添、直に重臣詰所江退居用辨候儀不苦候事。

公の添書

奉拜呈候。昨日は於　宮中得拜顏大慶、爾後御安全珍重奉存候。抑昨日は女御入　內誠に以御同意、臣子之安堵恐悅は申迄もなくうれしく奉存候。此

上は　皇胤　御繁榮と日夜拜祈候。乍愚只々　先帝　在御にて　叡覽被爲在候はヽ、嘸　御喜色之御事と奉存候。却說此頃嵯峨龜石八十之老人作り候竹鶴を到來候。餘り如何敷物にて奉恐入候得共、御內々差上度候間、閣下迄差出候。不苦候はヽ　御傳獻奉希候。扨又於東京別紙之通被　仰出候由故、此宮中に於ても假なりとも　御規則被相立、御布令有之度候。又云、別紙愚存一通差上申候間、何卒御賢考希上候。書外面上ニ讓り貴答奉辭候也。頓首

竹鶴を獻上

十二月廿九日　　慶永

岩倉公閣下

酒井・毛受の書取

演說之概略書取を以而申上候樣被仰付候ニ付、申上候。

昨日被仰下候趣大藏大輔(慶永)奉謹承候。外夷を見る尙古之漢土之如しとの　叡覽乍恐奉感佩候。　不肖之大藏大輔　乏を議定に承候ニ付、外夷へ之御布告に御諱　御璽を被爲載候末へ、加判仕候樣蒙命恐汗之至り奉存候。萬世皇國之基礎を被爲建候御大事、愚衷可默止儀に無御座に付、差向奉申上候。今般大政更始之折柄、外夷も刮目罷在候處、諸侯列名纔に五藩而已にて、夫も多くは隱居

又は世子等に候得は、只今に至ては外夷も國情通知之事故、全く天下之會議を聞召候ては　御處置とは不奉伺、　御國體も乍恐御手薄に可奉存哉、深憂に不堪奉存候。

御告文之內、列藩會議之上と被爲在候通、追々列藩も上京可仕候間、仰願くは會議を被爲待、篤と公議之上御布告相成候共敢て不遲哉に奉存候。夫迄之處、追て外夷より不伺出樣には如何共被成方可有御座哉、何分　勅使御下向一度降命有之候上は、直に世界之通法を以て都下にミニストル指置候儀可奉願、且是より應接は誰人に可仕哉、參　朝も仕度、　天顏も奉拜度抔申出候はゝ、甚御煩布儀と奉存候。呉々當分之處は兎も角も御諭し置相成、尙厚天下之議を被爲盡候樣幾重にも奉願度、今日此處に御遺憾無之樣御盡し無御座候ては、後日之大害難測至重至大之儀、恐懼之餘り不憚忌諱議定之廉を以て、右之趣賤臣兩人を以て奉申上候。

酒井十之丞

毛受鹿之介

七十一　明治二年五月二十四日版籍返上知藩事任命の儀に關する御下問に奉答書

○左に御下問書を附收して參照に供す。尙この御下問は五月二十一日にして皇道興隆、蝦夷地開拓の二件と同時なり。皇道興隆のことは前揭(二四)を參看すべし。

版籍返上之儀、追々衆議被
聞食候處、全ク政令一途ニ出ルノ外無之、依而府藩縣三治ノ制ヲ以テ、海內統
一可被遊
御旨趣ニ付、改而知藩事ニ被任候
思食ニ候間、所存無忌憚可申出候事。
五月

版籍返上、改而知藩事ニ被任
思食ニ候間、所存無忌憚可申出旨謹畏奉リ候。誠以時勢

御斟酌

御至當之

御所置、毫モ間然無御座候。臣別ニ所存無之、仍言上不奉候。只此上ハ府藩縣一致同心戮力、保護

皇國終ニ

皇威海外ニ輝キ、富强之實效擧リ候樣奉至願候。誠恐誠惶頓首百拜謹テ

奏對。

民部官知事

五月廿四日　臣慶永

別に所存なし

七十二　明治二年五月二十四日蝦夷地開拓の勅問に對する奉答書

○勅問は五月廿一日なり。左に勅問書を附收して參看に供す。

蝦夷地之儀ハ、
皇國ノ北門、直ニ山丹滿洲ニ接シ、經界粗定トイヘトモ、北部ニ至テハ中外雜居致候處、是迄官吏之士人ヲ使役スル甚苛酷ヲ極メ、外國人ハ頗ル愛恤ヲ施シ候ヨリ、土人往々我邦人ヲ怨離シ、彼ヲ尊信スルニ至ル。一旦民苦ヲ救フヲ名トシ、土人ヲ煽動スル者有之時ハ、其禍忽チ箱館松前ニ延及スルハ必然ニテ、禍ヲ未然ニ防クハ方今ノ要務ニ候間、箱館平定之上ハ、速ニ開拓教導等之方法ヲ施設シ、人民繁殖ノ域トナサシメラルヘキ儀ニ付、利害得失各意見無忌憚可申出候事。

五月

徳川氏已に開拓の端を開けり

蝦夷地之儀ニ付、
御下問之
御旨趣謹畏奉リ候。臣伏テ惟レハ、徳川氏已ニ嘆此時勢、夫々開拓ノ所置ヲ施設シ、奥羽之候伯ニ其土地ヲ授付シ、業ヲ剏ムルヲ命ストイヘトモ、半途ニシテ廢ス。反テ彼ノ得策トナリテ、其術中ニ陷沒ス。今ヲ以テミレハ、徳川氏ノ失策トイフヘシ。實ニ蝦夷ノ所置ニ至テハ、方今
皇國第一重大事件タリ。再其前轍ヲ蹈ムヘカラス。故ニ眞ニ忠厚確實大器

開拓には奥羽諸藩を當らしむべし

晩成ノ人ヲ採撰シ、風霜ニ不撓、現場奔走利害ヲ考ヘ緩急ヲ察スル者ヲ撰ンデ、附屬トシテ先彼地ニ巡察セシメ、奥羽諸藩ノウチヲ以開拓セシムヘシ。胡越同舟ノ譬諭ノゴトシ。況ヤ去年叛逆終ニ降伏スル藩トイヘ圧、モトヨリ王土王民ニシテ、今ハ蒙

聖化前日ノ非ヲ以テ今日ニ視ルヘカラズ。

陛下ノ

聖意亦コヽニアリ。宜ク盡衆議奥羽ノ侯伯ニ委任シ、十分盡力勉勵ヲナサシムベシ。臣オモヘラク衆諸侯モトヨリ常ニ

聖恩ノ隆盛ニ感激スル勿論タリ。然レ圧奥羽ノ藩ニ至テハ恐ラクハ眞ニ

聖恩ノ深重ヲ感戴スヘシ。ユヘニコノ輩ヲ採用ス、實ニ勉勵スヘシ。且常ニ風霜ノ寒力ニ慣習ス、其成功ヲ擧ルニ至ツテハ、封土舊ニ復ストモ、秩祿如元トモ、又開拓スル土地ヲ賜フトモ可ナリ。

皇國中戰爭勝敗ハ小ナリ。

皇國ノ存亡地球ノ亂階ニ管ス、燃眉ノ急務タルヲ天下眞ニ注目シ、同心戮力禍胎ヲ未形ニ防カサルヲ不得、モトヨリ其開拓之費ハ上

開拓の費用は萬民に課し諸侯は知行割となすべし

政府ヨリハジマリテ萬民ニ課シ、諸侯ハ知行割ヲ以テ金穀ヲ納ム、タヽ奥羽ノ藩々ヲ疲勞セシムルヲ傍觀スヘカラス。臣ベツニ建言スルナシ。平生ノ所考ヲ以テ謹奉

奏對、臣愚魯不知憚忌諱誠恐誠惶頓首謹上。

五月廿四日　　民部官知事

臣慶永

七十三　明治二年六月十四日度量衡改制に對する奉答書

○明治元年四月二日の建言(六七)を參看すべし。

度量衡

御改制ニ付、議案御下ケ

御下問之趣謹承仕候。臣伏テ考フルニ、夫度量衡ハ天下億兆ノ身ニ關セサルモノ一人モナシ、今般

御改制被爲在候義、實ニ

天下の衆議を定めて改制すべし

御至當無間然候得共、數百年用來候度量衡一時ニ御改正相成候テハ、天下億兆今日之所用ニ差支迷惑ノ者モ多ク可有之歟、且ハ自古升量ノ事ニ就テハ、下民一揆ヲ起シ候例モ不少哉ニ付、何分天下億兆ノ身ニ關スル實ニ大事件ニ御座候得者、仰願クハ朝廷在職ノ人員ノミニ無之、府藩縣江被命、天下在町豪商豪農邊迄モ廣ク御改正被爲在候御趣意ヲ以御垂示被爲在、衆議一定之末御改制被仰出候義御當然ト奉存上候。臣別ニ議案ニ就キ所存曾無御座候。仍不顧恐懼愚衷之趣旨奉對答候。誠恐誠惶頓首百拜謹上。

庚午六月十四日　臣慶永

建言拾遺終


合同船入相秘記　一
松平慶永
所蔵



合同船入相秘記序

星移物換古今之常態也而綢繆牖戶不知其機則患及禍至禦之甚難也蓋夫駒隙駸駸歲華不駐荏苒光陰悔悟不及既而斗柄建東青春復來則

瑞靄繞

城闕衆人稱萬年松竹鳴枝韶風協律千門賀客輻湊視之實昇平之風習而抃賀罔極矣雖然今年暮春黑船將復到泊屈指期近以此見之

合同舶入相秘記序 [印]

星移物換、古今之常態也、而綢繆牖戶不知其機、則患及禍至、禦之甚難也、蓋夫駒隙駸々、歳華不駐、荏苒光陰、悔悟不及、既而斗柄建東、青春復來、則瑞靄繞城闕、衆人稱萬年、松竹鳴枝、韶風協律、千門賀客輻湊、視之實昇平之風習、而抃賀罔極矣、雖然今年暮春、墨舶將復到泊、屈指期近、以此見之、則大平之風習不亦弊風乎、卒然起發、孰能禦之、然則擲却常例舊貫、而竭心豫防、豫防完全堅固、則雖百夷船渡來、詎足患哉、余於此記、所以起於春王第一日也矣、

于時嘉永七年龍集閼逢攝提格春王正月元旦

越前中將源朝臣慶永撰併書

印 印 印

合同舶入相秘記巻之一

嘉永七年元旦

嘉永七年甲寅春王正月元旦、即西暦一千八百五十四年、第正月第廿九日、北亜美利駕合同國（則共和政治）獨立建國以來七十九年、

歌を齊昭に贈る

はる比はしめまをめる

とふ多のをせくる春を立そめて、心つのらやゆさの奈らさる。

とふ多のよしをせるとも君のさめ、まさきふをてんまの命のも。

此二首、御祝詞帖まそへて水戸前黄門公へ奉けれハ、御返しふ

以さゝら婆我か波間まこ幾以てゝ、あめりのふ多を打やは羅は舞

正月五日

市川齋宮の報告

○五日　西暦二月二日

風說承候處、何の世上不穩樣子、其子細は、兼而公邊蠻書和解御用蒙居候醫師高松氏、（俗名某侯不知藩臣）常ニ天臺へも罷出候由、右同人ニ血留氣付等仕立、早速差出候樣被命候由、又部代屋敷へも、本月四日迄ニ三萬

筒井・川路の魯と長崎に於ける對談
遠山三右衛門
正月七日異船大島沖に見はる
正月十一日具足開の儀
江川太郎左衛門の注進大島沖の異船のこと

人兵粮米焼出、取調差出候様被命候由、市川齋宮承り中根靭負へ相咄候由。

長崎碇泊之魯西亞も、彌平穏之趣ニて、筒井肥前守・川路左衛門尉兩人十八日廿一二日頃及對談、至極都合宜趣、過半兩人之所存通りニも相運ひ可申哉之趣、筒井肥前守ゟ林大學頭方江手紙ニ而申來候由、於林家承候由、細川家賴遠山三右衛門罷出候序、靭負江及物語。三右衛門も七右衛門伯父之。林家ニて學問いたし當時隨分宜由。

○七日　洋暦二月四日。

登城いたし候處、異國船大島沖へ見へ候由、於殿中風說有之斗り、其後取沙汰無之。

○十一日　洋暦二月八日

例年之通り魚鱗具足著用、馬上銃タスともニ付、馬上ニて試候處、至極便用之。

今朝如嘉例具足餅遣ス。

夕方大道寺七右衛門ゟ承る。今日於殿中御城使承候由、伊豆國大島沖三十里斗りと處へ、異國船七八艘又ハ六艘とも見へ候由、一昨日夕江川太郎左衛門より注進有之候由、尤虚妄說ニても無之趣。

其日之御沙汰書左、

浦賀奉行　伊澤美作守（政義）

差向御用之筋も有之候ニ付御役所へ御暇被下之、

右於新番所前溜、和泉守申渡之。

○十二日　泰西二月九日

正月十二日大島沖の風説を調査す

今朝之風説ニてハ、大嶋（三宅島とも申三崎とも申）之間へ異國船七八艘碇泊之趣、依之細川長州夫々內調申付候處、何レもさとのならさる説と申事。又辰ノ口（阿部）之方へも内調いたさせ候處、矢張同様之事ゆへ、阿部ゟ本月海防之月番松平和泉守（乗全）方へ爲承候處、誠丸（川越侯）ゟ右之趣注進有之斗りと由。

浦賀橋本清右衛門の報告

兼々用達深川邊居住橋本清右衛門より、（清右衛門ハ浦賀會所問屋ト親類ニて、此方ゟ申來候由。）奉行下役迄申越候ハ、浦賀より三里斗りと處へ、異國船六七艘碇泊と申事、巷説ハ區々ニ候得共、何分異船出沒にハ、相違無之趣ニ付、指圖頭其余役人靈邸へ罷越、夫々取調申付ル。夜六ッ半時歸り、只今人數出張被仰付候とも、指支無之趣。

立退の準備

後宮及定府家內共立退場所、及墨田川舟の心配申付ル。

風説區々にし實情不明なり

夕方之風聞ニあてハ、異船七艘之內、四艘ハ退帆し、三艘三崎內迄乗入とも、浦賀港外迄も乗入とも申、又一説ニハ、三艘ハ退帆し、三艘到泊とも、右等風聞如湧出、是非更不辨。

正月十三日

佐々木權六辻淺之助

米穀と備金との準備

異船退帆の風說あり

於公邊は、誠ニ御穩便ニて、寸分も漏泄無之、實正更不相分。

到泊し蠻船、何國とも申事不相分、「アメリカ」トモ申、「ロシヤ」とも申、「エンゲリヤ」とも申。

水戸前黄門公へ文通し折から、世上之巷說にあて

とあるかとなきあてさらねとも、と國船のよせふと聞く。

とふ年のよせるときゝ、事敷島の、大和さましひいよゝいさめは。

○十三日　遠西二月十日

風說ニあて、浦港外へ乘入候儀ハ無之、遠洋ニ帆影見ゆるとも申。　浦賀邊形勢爲斥候、佐々木權六辻淺之助差遣候ハヽ宜旨、家老より相伺指圖いたし。

家老召呼、法令之事、後宮之事、其余とも用事申付。

米五千五百俵斗り有之、備金壹萬五千兩斗り有之候由、奉行共申達。　米は兼て備置、備金は臨時心配之。

於殿中、御城使、細川家賴へ逢承候處、浦賀御出入之役人より、內々細川之方へ申參候趣は、異國船最早退帆と見候て、遠洋まも帆影相見え不申候由。　右は風說ニ付、公邊へも未ダ御屆不相成候由。　右ニ付權六淺之助浦賀へ遣候儀、暫ク及

老中よりの達書｜滯船中調練其他停止のこと

延引可然段靱負申達之。

松平和泉守（乘全）殿御渡候御書付一通、相達候間被得其意、答之儀は、堀伊豆守（利堅）方へ可申聞旨、大目付より觸達有之。

異國船萬一、浦賀表へ渡來も有之候節は、人心動搖不致ため、滯船中は諸家調練、幷大森・角筈都而大筒稽古ハ見合候樣可致候。此段可被達置候事。

異國船遠州路に退帆の確報

夜ニ入大道寺七右衛門罷出、内々本多十郎兵衛迄申聞候は、今日何となく辰ノ口へ罷出、公用人へ及逢對候處、異國船遠州路をさして、昨日未刻及退帆候由。且又誠丸殿より、和泉守殿へ御届寫、辰ノ口へ出候を、七右衛門見候處、右之趣にて下田より三十五里程沖へ異船見へ候處、昨日未刻遠州路ノ申西方をさして及退帆候由云々。前條ニ認候のは、江川太郎左衛門より御達之趣のよし。浦賀邊之沙汰ニは、昨夏到泊之亞美利駕舟とは違候よし、夫に付、多分亞美利駕ニてハ無之哉と申候。是ハ何も不知說ゆへ、信用ニ不足、尤下田沖より二三里ゆへ、舟印等詳悉不相分候趣。尤遠州路をさして退帆ニも候ハヽ、多分右舟再渡之掛念は有之間敷歟と公用人申候由。

長崎方面の風說

鍋島加賀守家來罷出居候故、七右衛門長崎之事承候處、慥なる事ハ本家之事ゆ

正月十五日
村垣與三郎
鳥取侯の話
米艦浦賀に來る
水戸齊昭の直書

へ不存候へ共、御返翰御渡以後、何ころ願候趣も有之哉、御手縺れニ相成居、御役人方御諭告中と申事と承候由。

○十四日　無別條　遠西二月十一日

○十五日　西暦二月十二日

昨日御沙汰書之内

海防掛松前蝦夷地之御用取扱　御勘定吟味役　村垣與三郎

右於新番所前溜、伊勢守申渡之。

今朝早天登城いたし候處、松平相模守(池田慶徳)より相噺候ニ、昨日辰ノ中刻(又上刻とも)北亞米利堅國合衆國より、蒸氣船四艘、軍船六艘浦賀港外迄入津之趣、御番所をも乘越可申體之由。　昨夜五ツ時浦賀ゟ早飛脚到來、右夷船舟印迄も寫差出候由。

水戸中納言殿(慶篤)、我等へ被逢度旨石井永菴を以被申候ニ付、逢候處、中納言殿被申候ニ、實父ゟ左之趣申傳候樣被申付候ニ付云々の書付被相渡、

前中納言殿直筆

伊豆之方ニ、帆影も見え不申よしニ候處、只今早飛脚ニて、浦賀ゟ申來候ニ、昨十四日辰ノ上刻浦賀へ來り、御番所をも乘越可申體之由。　軍艦十艘之中、火

輪船四艘と申事。やはり去年六月の船乃樣子之よし。御禮申上之。中納言殿被申候ハ、いつゝ相成候哉、我等申上候ハ、不容易御一大事之御儀と奉存候。又被申候ハ、其許抔人數被差出候樣之儀も可有之哉。我等申候、只今被命候而も、何も差支無之、人數出張出來申候。是非次第柄ニ至り、被仰付候ハんと奉存候。中納言殿、兼而之御手筈出來居候儀と感心いたし候段被申。我等又申候。兼而手筈定置、無差支人數出張ハあさりまへの御儀ニて、乍不及共位の心懸ハいたし置候へ共、肝心之御奉公出來不申、奉恐入候段申上候へハ、肝心之御奉公といつゝ哉之段被申。先祖以來二百有餘年之　盛恩ニ沐浴仕、殊追々結構被　仰出、御厚恩之儀ハ海山も不及位ニて、筆頭筆尖ニ盡し候所ニも無之、又外諸大名と違、私儀ハ御家門之名を汚し候家柄ニ候へハ、此秋ニ至り候而ハ、

幕府御一重太事之御儀、天下安危ニ關係仕候御時節と奉存候へハ、乍不及、御爲ニ相成候儀ニ候ハヽ、神計妙謀をも奉獻呈、共ニ浮沈する儀勿論と奉存候得共、此御時節ニ差向ひ候て、神算嘉策も無之儀、只碌々然として人數位心配之儀、何とも不忠之至極と奉存候。乍憚

貴所樣も御同然ニ可被爲在、數百年之蒼恩を御報ひ被成候秋ニて、碌々然として御家內位ニ御心配有之候而ハ、不被爲濟儀と奉存候。何卒日夜御心思御惱慮被爲在候て、御計謀等も被爲在候ハヽ、御直々なりとも被仰上、國家とともニ休戚を同するとの申所、最第一と奉存候段申上候處、至極尤之旨被仰聞。

柳河侯の話

立花左近將監（鑒寛）ニ逢承候處、相模之口と同樣ニて、海防掛り御目付鵜殿民部少輔へ用事有之承候處、昨朝之入港まて、三艘ハ必度見詰候よし、跡七艘之分ハ、未た見分付兼候趣、其子細ハ、烟霧冥々濛々ゆへ之。又一艘へ乘付ケ、及應接候處、應接ふ參ニ無之候ゆへ、取合不申、其上言舌不相分候由。浦賀へ入港之舟艦へ、及應接候樣被申候由、民部少輔咄之。

小出善隱の報告

四ツ時前小出善隱咄候ハ、只今浦賀會所ゟ早舟之注進有之、右ハ一艘乘込、金澤ゟ二里斗り江戶方へ懸り居候段申參候由。（全小柴村前之事那らん）其餘雜說紛々まて記載ニ不足候也。

魯使と應接の日取

前田久盛ゟ左之書付見せる、

丑十二月十日、御役人衆長崎表へ着、

筒井肥前守
川路左衛門尉
古賀謹一郎
荒尾土佐守

魯使の獻上品

田安邸に參賀

水戸齊昭に呈書

十四日初對話

十七日本船へ入（松平肥前守茂入）

十八日御返翰御渡

廿二日御役所へ使節罷出候節獻上物

一置時計　壹ツ　一切子花瓶　貳ツ

一金銀織物　六端　一（四間四方）大丹通　壹ツ

一（四尺六尺）丹通　壹ツ　一（六尺七尺）硝子鏡　壹ツ

一（四尺七尺）同斷　壹ツ

一廿日廿二日廿四日　應接有之

今朝相模守方亞米利堅合同國軍船入港承候儀に付、右之趣共（相模守方之噺也）爲心得、側用人中根靭負迄以封物申遣之。右封物を留守居有賀清右衛門へ相渡之。今日之御禮御急きまて早々相濟。夫方爲年頭祝詞、田安へ罷越、中納言殿御簾中へも御對面、種々之饗應能見物。中納言殿方八丈島織一反到來。御簾中方を盃一臺到來。青松院殿方盃一臺被贈。歸り六ツ時少々過。右田安へ罷越居能見物中、今朝異舶渡來之儀氣にかゝり候に付、紙墨筆を借用して、水戸前黃

門公へ呈書。右趣意ハ、今朝於營中、尊公御傳言之趣中納言樣ゟ相伺、依舊御懇情之段、先以難有奉感謝候。右御禮も申上度、且又例之御平穩〳〵と申内に、無測之大患可相發哉も難相斗、實ニ此度ハ天下之重大之御儀、天下安危存亡之秋と奉存候。ともあれ、早々御固メ場、夫々諸侯へ被命候て可宜、只管ニ平穩のミを御好遊ハし、蒼卒ニ被命候て、出張迄之内に事有之候てハ、彌益恐入候儀ニ奉存候へハ、何卒早々夫々被仰付候方、却て可然哉ニ奉存候。此段任心付申上候。此上之御容捨ハ、英明之思召と奉存候。右樣ニ相認申上候。其序に、なふハ刑部(慶喜)尚書君も入らせられ、ともゝ申樂拔見て、

とふ多の浦賀の沖にふさせるをも、志らてそ見らく今の俳優

御城御沙汰書之内

時服四 羽織 林 大學頭

時服三 羽織 町奉行 井戸對馬守

時服二ツ、羽織 御目付 鵜殿民部少輔

儒者 松崎滿太郎

浦賀表へ爲御用、罷越候ニ付被下之、御序無之ニ付、御目見不被　仰付候。

述懐の七言古詩

浦賀表の情況

金澤沖

右於芙蓉之間、老中列座伊勢守、申渡之、若年寄中侍座（大目付井戸石見守え御指留と申事之）

述懐　七言古詩

由來　日域勇兼武、士氣一振愈猛虎、傳聞戎船到相溟、頻年出沒無今古、礮艦不具莫古今、今也闔州悉腦苦、普天率土不安心、希發　官家一激怒、何畏遠西猖猾虜、粉韲腥羶清　帝土、君不見、世人往々祈神助、僥倖惟特度會風、如此所爲誠昏庸、貴賤報恩在此中、如今世上雖冥黑、盍窮日夜奉精忠、

源慶永艸

田安ゟ六ッ時歸り、直ニ家老共へ逢談判、

先刻申上候、相州浦賀沖合にて異國船渡來候ニ付、人數警衛罷在候處、昨十四日未中刻、丹後守領分、武州金澤乙艫濱より壹里半程沖合へ、異國船壹艘乘込碇をおろし罷在候由、只今注進申越候。　丹後守在坂中ニ付、此段御屆申上候。

以上

正月十四日　　米倉丹後守

右ハ書付前田久盛より差出、

一伊澤美作守內浦賀在勤與力高林丈左衛門ゟ留守居へハ手紙如左、

浦賀よりの報告

然ゟ、此程中異國船七艘程、伊豆國長津呂邊へ相見ゑ罷在候處、右之内三艘ゟ、

松輪沖

昨十四日晝八ツ時頃相州松輪沖へ乘入、壹艘ハ金澤附夏嶋(近脱カ)ゟ申所へ船掛致候趣、浦賀表ゟ之注進、今五時過頃到着、届出候間、今般共御屋敷ニゐも、内海御警衞向之儀、兼ゐ御心得之趣内々承及候間、前文之通り内々御含迄爲御知申上置候。右得御意度、如此ニ御坐候。以上

正月十五日

川越侯よりの報告―浦賀の情況

松平誠丸方ゟ、御届寫相廻り、左之通り、

今卯中刻、異國船壹艘松輪沖へ乘入候樣、漁師共注進申出候段、浦賀奉行ゟ達有之、其後辰刻比、右船ニも可有之候哉、アシカ嶋へ相見へ候段、烏ヶ崎御臺場

アシカ島

當番之者ゟり注進申出候。右ニ付、一ノ先人數大筒方之ゐの繰出し、御臺場向無油斷警衞罷在候段、大津陣屋詰家來之者ゟり申越候、此段致御届候、以上

正月十四日　　松平誠丸

昨十四日、亞米利加船拾艘、内四艘ゟ蒸氣船ニ有之候段、浦賀奉行ゟ達有之候ニ付、惣人數繰出し申候。右拾艘ハ何方ニ漂居候哉難相分、内壹艘ゟ觀音崎乘越、小柴村沖合江船掛致居候段、大津陣屋詰家來之者より申越候。此段致

御届候。以上

正月十五日　　　松平誠丸

今朝右御屆之節、浦賀與力ゟ咄之趣口達ニ而御屆有之寫、口達御屆

一壹艘江浦賀應接掛之衆乘出、及談判候へ共、一向取合不申、浦賀へ乘入可申旨申聞候由、

一壹艘千代ヶ崎御臺場見通し江乘來、船號「コルヘット」之由、

一二艘城ヶ嶋ゟ一里半程沖へ見請候由、

一浦賀江入津之上、否可申由ニ而一向取合不申候由、

一亞墨利加之驗建來候由

阿部伊勢守、松平和泉守相渡書付寫壹通ッヽ、大目付觸達來る

伊勢守殿御渡

袖ら　大目付江

去夏、浦賀表へ亞墨利加船渡來以後、領分知行江過分之人馬觸當置候面々茂有之哉ニ相聞候。畢竟防禦守備等之爲ニ而、用意申付候儀ニ可有之候へ共、左候而ハ、渡來之節一時ニ在方人少ニ相成、取締不宜、自然惡黨共立廻、村々難儀

致し候樣可相成間、勘辨致し、村方不相應ニ人馬呼寄候儀致さす、右體ニ八州ニ領分知行有之面々へ可被相觸候。

正月

大目付江　袖ら

此度亞墨利加船浦賀表へ渡來致候得共、穩ニ趣ニも有之候間、諸向動搖不致、火ニ元等別而入念候樣、向々江可被達候事。

正月

浦賀表斥候佐々木權六辻淺之助大音仙助

今日、先日申付置候佐々木權六・辻淺之助、相州浦賀表、異國船形勢爲斥候遣之。狛山城家來大音仙助も差添相立候由、中根靭負ゟ下曾根金三郎へ添手紙、留守居ゟ誠丸家來小笠原源次方へも添手紙遣之、萬端三人差越候ニ付賴之事之。

正月十六日大道寺七右衛門の報告

○十六日　洋曆二月十三日

今朝本多十郎兵衛申聞候ハ、昨夜大道寺七右衛門罷歸候處、異船ニ光景別段無別條趣、未ニ細川侯長州侯等御人數出不申候由。

午後中根靭負申聞候ハ、彌異國船小柴沖へ到泊。今一艘ハ城ヶ嶋邊、今一隻ハ永井村邊ニ到泊ニ處、昨日朝ニ風雪にて、右洲上へ乘込、舟も損破、人も大分怪我

江戸芝邊の警備を命ぜらる

正月十七日固メの場所を見分す

有之趣。未ゞ十隻ハ揃ひ不申、且使節ゝ舟艦到來無之。使節ヘルリさへ參候ハゝ、夫々可及應接ゝ由、大道寺七右衛門ゟ承り及言上。

御城御沙汰書

御徒目付
(平山鎌三郎
(中臺信太郎

金十兩ッヽ

浦賀表へ爲御用、罷越候ニ付被下之、

右於燒火ゝ間若年寄中出座本庄安藝守申渡之。

家老共へ逢談判、陣中諸法度請書差出ス、

黄昏松平和泉守ゟ呼出、留守居罷出候處、左ゝ御書付御渡、

芝邊　松平越前守

内海御備ゝ爲メ、人數差出候儀ハ、其節ニ到り可相達候得共、場所ゝ儀ハ、書面ゝ通り相心得候樣、相達置候事。

右云々ゝ被仰出ニ付、中根靭負始夫々召呼、江戸繪圖ひろけ及相談。

大道寺七右衛門召呼、尚又承ル。靭負申達候と同前。

○十七日　洋曆二月十四日

右御場所芝邊ヶ被　仰出ニ付、其邊爲見分六ツ半時頃、中根靭負・平本平學・酒井

鈴木主稅

十之亟・平本但見・鈴木主稅等見分罷出、歸り追々申達、歸宅黃昏前。

諸藩の固メ場所

昨日御固メ場所被仰出候ケ所

品川御殿山　松平加賀守（○金澤）
高輪邊　松平越後守（○津山）
芝邊　松平越前守（○福井）
羽田邊　松平阿波守（○德島）
生麥鶴見ヽ邊　松平兵部大輔（○明石）
大森町打場　松平隱岐守（○松山）
遊軍　松平讚岐守（○高松）
鐵炮洲佃　酒井雅樂頭（○姬路）
未相分　堀田備中守（○佐倉）
深川洲崎　松平越中守（○桑名）

町火消固ヽ場所

（壹番組二番組）　呉服橋御門外　三番組　芝金杉橋南詰
五番組　增上寺表門通　（六番組九番組）　常磐橋御門外

八番組　日本橋南詰　　十番組　江戸橋南詰

本所深川　永代橋南詰

右ハ異國船浦賀表へ渡來ニ付、寄場ヶ所町奉行ゟ達有之、尤拍子木を合圖ニいたし候旨、町觸有之候由。

勝木十藏米と金子の準備

今朝勝木十藏召呼承候處、彌米五千五百俵御有米有之候而、此御臺所へも百俵斗白米積置。　尤金子手元貯金を不見込、心配ニ而壹萬五千兩計り之所ハ御差支無之趣。

軍艦坐礁の風說

風說ニ而ハ、蒸氣軍艦永井村洲へ乘込候云々ハ、素より實說ニ而、舟底及損破候段も承候と、これハ少し不分明之。　何分從近國之諸侯、助舟出て共舟へ夷人を乘致介抱候趣。　夷人甚悅喜致居候由。　右ハ善立院辰ノ口ゟ歸りて、勢州咄之由善立院申之。

ペルリ使節到着應接は栗濱の由

今日使節舶來り候よし、林大學頭を始、明日出立と承ル。

應接及書翰ハ、鎌倉建長寺と承候へ共、あたり手遠まて、海岸ゟ半里斗り有之候由ゆへ、矢張於栗濱有之候由。　就夫栗濱小屋等出來候趣。

水戸・宇

昨日水戸前中納言殿ゟ返書有之、右返書秘藏箱ニ入ル。

和島の返翰

伊達伊豫入道へ返翰遣し候處、返書有之。

老中への伺書

今朝、留守居を以、松平和泉守へ差出ス伺書。

固メ場所の地點

内海御備之爲め、越前守人數差出候樣御達御座候節、場所之儀ハ、芝邊と相心得可申旨被　仰出奉畏候。右芝邊ト申爲、場廣之儀ニも有之、且市中も多く、其上諸家方御屋敷等爲有之候事ニ御座候得ハ、何之所を相固メ候儀ト心得可申哉、此段奉伺候。　已上

松平越前守内

夕方留守居御呼出ニ而、和泉守殿へ留守居罷出候處、左之通り御書付御渡有之。

幕府よりの指令

袖ら

松平越前守

異國船近海へ渡來之節、其樣子ニ寄、人數屋敷内ニ用意致し置、先不及登　城、老中より案内次第登　城可被致候。其節ハ可成丈ケ輕輩ハ相省キ、士分之者重ニ小勢ニ召連、若人數出張之儀相違候ハヽ、出火之節之振合を以、先一手ツヽ樣子を見合可被差出候。其餘ハ臨機之事ニ候得ハ、其心得ニ可有之、場所等ハ其節相達ニ而可有之候。

別紙差添

増上寺大門邊に人數を出すべし
固メ場に關する御評議

別紙之趣者、此度渡來之異國船ニ限り候儀ニ者無之候間、其旨相心得可申事。

今朝差出置候伺書、御差圖左之通り

増上寺大門邊江、人數差出置、其上者指圖次第之積相心得可申候事。

右増上寺大門邊御指圖ニ付而者、昨日主税・靱負等罷出見分いたし候場所ハ、魚揚場杯ニ而も無之云々之所ニ而者、戰爭出來候場所ニも無之、且又大門邊へ人數指圖候而已ニ而者、第一其邊御場所蒙居なから、洋面異船出沒之形勢も相分兼、甚以不本意之至ニ付、我等願書草稿相認、鈴木主税中根靱負へ見せ候處、家老共へ見せ申談候方可然段兩人申候ニ付、家老兩人召呼、右書付爲致一見相談ニ及ひ、我ら存寄まて、明日松平和泉守へ罷越逢對いたし、願書進達いたし候ハヽ可然段申之。尚又和泉守へ罷越逢對進達之可否、尚又何レも相談いたし、明朝可申上旨大道寺七右衛門奥御右筆某へ罷越、歸り申聞候者、今日御指圖之大門邊者、定而越前守殿ニ者御氣ニ入申間敷候へ共、又御伺等有之候而者不相濟ニ付、先々御ざはりの方可然段某被申候由之處、七右衛門申候者、迚も越前守ニハ戰場之御場所被相望候儀まて、大門邊者迚も承服有之間敷段申候處、左様ナラハ決而口外致候様ニ而ハ甚不相濟候へ共、御家門御出張無之候而者、他之大名

幕府の内方針—戰爭に至らずとなす

落着不宜候ニ付、先右樣ニ被仰出候由、内實ハ先々大門邊へ御人數御差出候而、異變ニ臨ミ候へハ、御城内御固メ被命候御評議有之趣、右樣ニ御評議も有之、旁もつて先何ニも被仰立無之方可然存候。乍去、今般ハ迚も御人數被差出候樣ト儀ハ無之、十ニ九分九厘ハ戰爭ニ相成候樣ト儀ハ無之、老中方ト御評議ニ而

幕府の越前に對する内方針

ハ、加州を始越後等ハ、人數出張並場所等被仰付候へ共、何ニも申立等ゟ無之、兎角越前ニゟ壯年ト事ゆへ、氣かゝり嚴敷申立候抔と申事も有之候故、先々御平穩ニ被成候方可然哉ト段某被申。家老共右ト趣も申候へ共、是ハ内々ト事ニて、表向へ出し候儀も相成兼候故、於我等方、今日ト御指圖を以テ、何んとても申立不申候半而ハ、道理ニ置一向不相濟候段申之。

佐々木權六・大音仙助の報告

此間浦賀へ遣し候佐々木權六ゟ相歸、山城家來大音仙助暮合比歸著、中根靱負ゟ權六ゟ遣し候手紙、靱負入披見、仙助申候ニハ、浦賀へ最早入港と申風說有之候處、山上ゟ高ク帆柱相見へ候ニ付、道も無之平山上へ權六始かけ〳〵かかり見候處、六艘入港、跡ト一艘ハ、殊ニ重大ニ而、八九拾間も有之哉と申事、蒸氣軍船四拾間のよし、倍ゟ少し大キクと申事、別段ハツテーラ抔おろし測量ト樣子も無之

趣。

川越侯の屆書

誠丸ゟ屆寫

昨十六日、午刻頃異國船六艘、洲之崎城ヶ嶋之方ゟ追々乗込候處、蒸氣船三艘ニ而軍艦三艘を引、觀音崎を乗越、夏嶋ゟ小柴村沖合迄之內ニ致船掛、兼而致御屆候異國船共都合七艘滯船罷在候段、大津陣屋詰家來之者ゟ申越候。此段致御屆候。　已上

正月十七日　　松平誠丸

橋本清右衛門の書狀

勝手役迄橋本清右衛門ゟ來ル書御內覽

又々飛札奉申上候。然ハ、今朝辰ノ刻ゟ當午刻認とも、兩度御注進、奉申上候得共、順着御聞達被下候半と、難有奉存候。扨壹艘當湊江掛り居候船、御番所ゟ御乗付被遊候而茂、一向爲乗込不申、次第ニ走込、昨年船掛り仕候本牧下手、金澤之夏嶋沖江碇をおろし、船懸り仕、直ニ御番所之御船御乗付被遊候處、心能爲乗込、御聞糺之處、昨年罷越候へルリ將官ニ而、都合拾艘到著仕候趣、付而ハ浦賀近々江乗戻し、船懸り仕候間、大將船著之上、差圖無之候而ハ、乗戻し兼候處申候由、六拾艘順々到著之上、上將官江御對面無之內ハ、何事も譯り兼候

一艘長井村の沖に坐礁す

屋野浦應接所

事ニ承り申候。扨三崎沖貮艘御注進申上候船ニ内、壹艘如何いたし候哉、三浦郡之内、三崎より少々下手長井村沖合カメキと申磯根へ乗上ケ候趣、幕方ニ御注進有之、當所ゟ近藤良次様御通辭堀達之助様御兩人、夜中御出張被遊候。且此度ハ、鎌倉ニて御對めん御座候由ニ承候處、今夕刻、俄ニ被　仰付、當湊口屋野浦と申所江御對面所出來候趣ニて、御假家幕方ゟ取懸り、今夜中出來上ケ御手配之趣、御用意ニも御拵置被遊候事哉、當所大工不殘御引上ケニて、今夜拵居申候。六拾艘着揃迄ハ、此姿と奉存候。猶替儀も御座候ハヽ、追々御注進可奉申上候。先ハ承り候丈、内々右奉申上候。以上

正月十五日夜

書落し、前文ニ申候與右大道寺七へ咄候内ニ、彼そ素情願有之候ゆへ、渡來もいたし候事之、願ケ條二三も其通りま相成候へハ、無子細及退帆候半と被申候由。

鳥取藩出兵

因州一番手昨日出候由

九ツ半時寢ル

正月十八日

林大學頭等浦賀に出張

○十八日　洋暦二月十五日

今日、林大學頭・井戸對馬守・鵜殿民部少輔・松崎滿太郎浦賀へ出立。

徳島藩出兵

阿州一番手羽田邊へ出候由。

老中松平和泉守を訪問

五ッ半時供揃にて、松平和泉守へ逢對罷越。

小書院へ通り、公用人呼出候處、中川善右衛門罷出候。依之申聞候ハ、昨日御場所御差圖有之候に付、相願候儀も有之候故、今朝致伺公候。何分御逢被下候ハゝ忝奉存候段申之。善右衛門、主人へ篤と可申聞旨まて相下り、無程罷出、今日ハ差掛り無據御用向取調居、且登　城前致混雜候に付、御逢之儀ハ御斷被申上候旨。

書取を差出さる

依之、又々申聞候ハ、左樣に候へハ致方無之候間、幸書取も致持參居候故、差出候而ハ不苦候哉、善右衛門尚又主人へ可申聞旨申之相下り、又々罷出、御指出有之候樣申候に付、封物一差出候處、善右衛門受取相下り、又々罷りいて、主人へ申達候處、被致落手候旨承り、直に歸殿。

書取

書付

松平越前守

書面左之通り、中奉書平本平學代筆、

合同納入相穢記

從來不如意防禦器械も不調なり

小人數場廣の固メは困難なり

芝濱魚揚場又ハ濱御庭の警固に當らん

異國船近海へ渡來之節、內海御備之爲め、人數差出候儀ハ、其節ニ至り御達可有之候へ共、場所之儀ハ、芝邊ニ相心得候樣被仰出候ニ付、猶亦何れの場所相固候ゟ宜候哉、相伺候處、增上寺大門邊へ人數差出置、其上ハ御指圖次第、相心得可申旨御書下ケ之趣承知仕候。右ニ付ゟハ、如何樣ニも御指圖通り、隨順可仕儀ニ御座候得共、既ニ芝邊ニ御場所相蒙那がら、海岸相離れ候場所へ、人數差出置候ゟも何とやら心外之儀ニも奉存、且ハ右大門邊ニてハ、洋面異船出沒之形勢も、相知レ兼、甚不安心之儀ニも有之、其上拙者勝手向、從來不如意ニゟ、則昨年も不容易儀及歎願候體之次第ニ付、諸事不任心底、防禦之器械も甚不調之儀ニ申、高ニ應し候ゟハ、小人數之事ニも御座候故、場廣之地所、手厚ニ持固候儀ハ、難出來爲體ニ御座候へハ、臨機之御指圖を以、急卒之防禦手配り、民屋櫛比之場所柄、別ゟ行屆申間敷と甚以恐入當惑仕候。依之自由ケ間敷儀ニ申、要地ニも無御座候得共、外ニ人數取賦り可申場所も無御座候へハ、芝濱魚揚場邊、防禦ニ相障り候町家御取拂之上、持場ニ被仰付候歟、又ハ濱御庭之內ニて、御警衞被仰付被下候ハヽ、擡上ケ炮臺等、ゟ之ニ取補理、萬一異變等御座候節、精々之御奉公仕度奉存候。吳々御指圖ゟ御座候上、勝手儘之事共

相願候儀、恐縮不少候得共、御大事之御時節柄ニも御座候故、可成儀ハ前以用意も仕置、變ニ臨ミ、一廉之忠勤も仕度と奉存候ニ付、不殘心底申上候事ニ御座候間、此段御亮察御評議之上、右兩樣之內、御聞濟被成下候樣相願申候。以上

正月十八日　　松平越前守

幕府への伺書

今日清右衛門相殘、公用人江差出候書付。

一異國船近海へ渡來之節、樣子ニ寄り、人數屋敷內ニ致用意置候儀ハ、其節御指圖可有御坐儀ニ御坐候哉。

一人數一手宛、樣子を見合、指出候儀、其節御指圖御坐候事ニ可有御坐哉。

一登　城之節、輕輩ハ相省キ、士分之者ハ平日召連、御定之人數ニ不拘、召連候而不苦儀ニ御座候哉。

一同斷之節、越前守幷供廻り著服之儀、如何相心得可申哉。

老中より觸達

松平和泉守ゟ相渡候書付寫三通、幷覺書寫一通大目付ゟ觸達有之

袖ち
大目付江

悪黨取締の件

異國船近海へ渡來之節、近國ニ領分知行有之面々、在町取締筋之儀ハ、銘々心

内海警衛の件

嘉永六年の達に準ず

老中若年寄の見廻りあるべし

得も可有之候へ共、萬一惡黨共立廻り可申も難斗候間、召捕方等、別而嚴重可被申付置候。若捕押兼候儀も有之候ハヽ、切捨又ハ打殺候而も不苦候。

正月十八日

袖ちら

大目付へ

浦賀表へ渡來之異國船、若内海へ乘入候節、臨時爲御警衛出張いたし候向ハ、去ル丑年六月中相達候通り、火事具相用、武器用意可致候。且又萬一異變ニも可及場合ニ至り、諸手爲指圖、老中若年寄之内致出馬候節ハ、小具足陣羽織着用之筈ニ候。諸向之儀ハ、銘々存寄次第勝手之品相用可申候。

但異變之場合ニハ無之候共、時宜ニ寄、老中若年寄之内見廻等被相越候儀も可有之候。其節ハ火事具相用可申候。諸向之儀ハ、是又銘々存寄次第、火事具ニ而も、野服ニ而も、勝手之品相用可申候。

右之趣、爲心得向々江可被相達候。

正月十八日

登城供連の件　輕輩を省きて士分のみたること

門番火の番は直に持場に詰めること　大手組と櫻田組とのこと

覺

別紙之趣ハ、今度渡來之異國船ニ限り候儀ニハ無之候間、其旨相心得候様、口上添可被達候事。

袖ら
大目付
在府手明之大・廣間席

異國船近海へ渡來之節、其樣子ニ寄、人數屋敷內ニ用意致し置、先不及　登城、老中ゟ案內次第登　城可被致候。其節ハ可成丈、輕輩ハ相省キ、士分之者重ニ小勢ニ召連、若人數出張之儀相違候へハ、出火之節之振合を以、先一手ッヽ樣子を見合可被差出候。其餘ハ臨機之事ニ候へハ、其心得ニ可有之、場所等ハ、其節相達候ゟ可有之候。

一御門番、火之番等被相勤候面々ハ、不及登　城、持場〳〵へ可被相詰候。

一大手組ハ、山下御門內外、又ハ幸橋御門內外、櫻田組ハ、虎之御門邊へ一旦相詰、日數相懸るへき樣子ニ候ハヽ、其邊ニ假小屋補理、人數屯致し置、當番非番を相立、順番ニ二手ッヽ可被相詰候。

増上寺の固メ

一増上寺御固之儀ハ同所火之番被相勤候衆相固、時宜ニ寄、詰衆等之内より

一二手可被差遣候。其節ハ寺社奉行も一人被遣候而可有之候。

固メ場所の定まれる面々のこと

一御備場御用被相勤面々、且差定候持場有之候向而、何れも登　城ニ不及、別段人數出候儀も被仰付間敷候。

右之趣向々へ可被相達候。

正月十八日

水戸齊昭への密書

水戸前中納言殿へ密書之趣意

然者、竊ニ當路之向ゟ承候處ニ而、今般渡來之異國人而、素々願意通りも有之候事ゆへ云々、渡來何んの素願、二三ヶ條共通りニさへ相成候ハヽ、必定平穩まて戰闘之場合ニ至り候儀、十ニ八九も有之間敷云々、深考仕候へハ、已ニ

魯人のこと

去年七月ゟ、長崎へ到泊之ヲロシヤ人、十一月比一旦及退帆候へ共、再渡以來今ニ退帆もいさし不申押平均七月ゟ半年も相立候儀、且又魯夷へ御返翰、信僞素慥ニ不相分候へ共、世上まて流布仕候のを致一見候處ニ而、御代替抔被仰立候而、四五年之時日を御延緩被成候御趣向と奉存候。委細而不存候得共、魯夷それまて心服いさし候哉不存候へ共、心服いさし候ハヽ、猶以此度

魯墨二ヶ國に對する許可の方法と先後のこと

正月十九日

ハ御重事ニ御儀と奉存候。趣意ハ遠隔ニ魯夷へハ、云々御所置、眼前ニ墨狄へハ、萬一云々の御許免等有之候而ハ、第一いろはもオロシヤへニ御信義ハ、甚相立兼候儀と奉存候。先魯夷御許免有之候末、墨奴へ御許容相成候ハヽ、同し御國禁を被破候御所置ニ而も宜候へ共、日本ニ御國法を守り長崎へ到來ニ魯と、別而猖黠ニ墨奴と鉤合相違候而ハ、甚以御一大事、魯西亞必然含怒激、浦賀へ入港强願いたし候哉、又直ニ打入開兵端候而の二ッ一ッニ御座候。今ヤ浦賀へ墨舶迫り候とて、魯ゟ初ニ御免恕有之候てハ、不相濟儀と奉存候。素より於小生ハ、機密深重ニ御趣意不存、當路某ニ噺ゝ流布御返翰とを比較申上候事ニ御坐候間、御亮察被下度候。何も又々不顧憚犯虎威、早々頓首謹言。

〇十九日　西國暦二月十六日

中根靭負ゟ承候、昨夕黑澤へ七右衞門參承候處、昨日和泉守殿へ被差出候御願書、扱々御尤ニ御儀と奉存候。何レ今夕何トカ御差圖有之候半と被申候由。又小柴沖へ七艘到泊、浦賀奉行ゟ引戻し候樣申聞候へ共、浦賀沖合汐早く、到泊成兼候由申出候。尤卒忽ニ儀等ハ、いたし不申由夷人共申出候由。黑澤相咄

候由、扨又将官彼理少々不快
旁未た應接無之趣、

誠丸ゟ左之通り届寫來る

今十六日渡來之異國船六艘、夏嶋邊ゟ、最前渡來之異船滯留罷在候邊ニ掛り居候ニ付、浦賀之方へ引戻候儀申諭候得共、今日ハ不行屆、猶明日も應接爲致候筈、尤別ゟ穩之樣子ニ候得共、四家申合猶心付ケ、例之通り附添之番船、異國船掛り場ゟ江戸之方へ御取出し、且自然諸家樣ゟ御固メ船被差出候儀も有之候ハヽ、至ゟ穩之船ニ付、物靜ニいたし居候樣御達シ可申旨、浦賀奉行所ゟり御達有之候趣、申通候樣御達有之候事。

川越侯ゟの情報

今日佐々木權六幷辻淺之助兩人罷歸、委細以覺書申達、右覺書後ニ記之。

佐々木權六辻淺之助の報告書

松平裕之進ゟ爲知

然ル、今夕御用番阿部伊勢守樣ゟ、家來之者被召呼、此度異國船渡來ニ付、本家江被差加、本牧江人數被差出ニ付、大手組防御免被成、難有被奉存候。右爲御知被申述度旨。

松平裕之進の報告

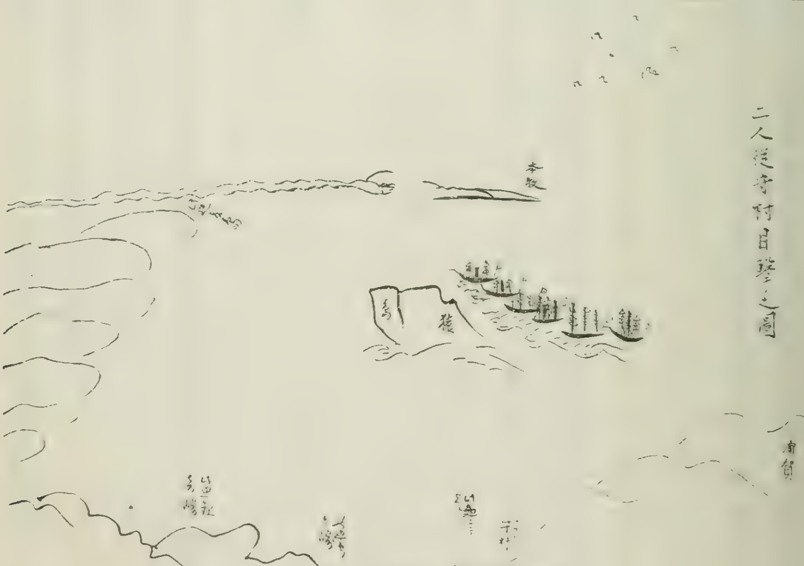
今夜五ッ時頃、和泉守ゟ呼出、留守居罷出候處、左之書付被相渡。

松平越前守

二人從小柴村遠眺之圖



二人從李村目擊之圖



品川御殿山の固メを命ぜらる

異國船渡來之節、芝邊江人數出張可被仰付旨、最前相達置候處、右場所江ハ、人數被差出候ニ不及、品川御殿山邊持場と可被相心得候事。

幕府へ伺書の指令

昨日以留守居差出置候書付、御指圖左之通り、
書面二ヶ條目、人數一手ツヽ差出候儀ハ、其節差圖可及候。　其外之儀ハ、觸面之通り相心得候樣、可仕候事。

佐々木權六等の報告書

佐々木權六辻淺之助罷歸差出候書面

十五日

川崎宿

夜五ツ時川崎宿へ著、風說種々有之、不分明不記。

十六日

小柴沖

今曉九ツ時、川崎宿出立、五ツ時野嶋近邊ニ小柴と申處へ罷越、此沖半里斗之處ニ、軍艦壹艘罷在、幅四拾間斗り、一昨十四日ゟ其所ニ留り、依然とし而不動候由之。

大津御陣屋

晝九ツ時過、大津御陣屋へ罷越、小笠氏在宅不被致候ニ付、矢頭庄右衞門方へ罷越、風說承る。　先十四日午之刻、蒸氣船三艘、軍艦四艘渡來、內壹艘小柴沖ニ罷在、右之軍艦浦賀罷通候節掛合ニ及候處、此度都合拾艘斗罷越候間、各船集り相談之上ニ無之候半而ハ、委細ハ御返答難致旨申出し候由。　又

壹艘ハ、彦根御領分荒井村荒崎カメキと申岩へ乗掛ケ、散々難儀いたし候處、十五日夕蒸氣船貳艘ニ而漸く引出し候由。右ニ付、今日ニも風模様次第、小柴沖江不殘乗り入、相集り候上ニ而、浦賀表御役人中と掛合可申旨申出し候。右之趣、浦賀ゟ大津へ注進有之候旨也。夕方八ツ時、守村と申所ニ而、蒸氣船三艘、軍艦四艘都合六(マヽ)艘追々乗入候趣遠見致し候處、盡く夏嶋指向ひ申候。七時過、下曾根殿相尋罷越候處、留守ニ付、若黨之者江風説承る。昨年十一月リシントン出帆、夫ゟ唐國江罷越、十二月十六日出帆、夫ゟ直ニ日本海江渡來之由也。

十七日

朝五時、下曾根先生江對面、種々承る、此度ハ異人至而殷懃ニ而、何分御返翰頂戴仕候へハ宜義ニ候へハ、小船等乗出し、測量致し候儀も必致申間敷、成丈各様へ御苦勞を掛ケ不申様仕候旨申出し候。毎度罷出、各様ニも定而御苦勞可被成、私共も申迄も無之難儀罷在候、御推察可被下候旨申出し候由。扨又異船永井村ニ而難儀いたし候節、浦賀ゟ小柴之軍艦江、早船を以て右之段爲知有之候處、殊更喜ひ、御丁寧之儀共難有旨申出し候。早速罷越度候而も、大

墨艦日本の好意を喜ぶ

墨艦は七艘にて他の三艘は謀計ならん

川越侯警固場の狀況

正月廿日浦賀へ三艘入津の

將ゟ之命ニ而、此所江罷越候儀ニ候へハ、致方無之儀ニて、小船乘出し、右難澁仕候船見廻として遣し候由。　右之船江、浦賀ゟも爲見廻小船被遣候處、是又大悅仕り、浦賀近邊水勢早く、甚滯留難致處ニ候へハ、無據早々小柴沖へ罷越居候間、何卒貴邊此船江被召、御案内被下候儀ハ相成間敷哉と申出シ、譬小柴沖へ乘入候とも、決而卒忽之儀ハ致間敷旨申出し候也。　先生被考候所ニ而ハ、異人拾艘罷越候旨申候へとも、跡三艘ハ何所へ掛り居候哉、相見へ不申候へハ、是ハ彼等之謀計ニ而、實ハ最早此余ハ有間敷候。　扨又、此度ハ　公邊御返答受取儀ニ候得ハ、何を當月中ハ退帆致間敷哉と申聞候。

尙々、小柴沖江乘込候六艘ハ、夕八ッ時比ゟ七ッ時過之儀、其以前ハ鎌倉沖邊ニ留り罷在候由、風說承る。

權六之咄候由、川越樣御失費不容易儀まて、御氣之毒、先御陣所へ入り候へハ、米を舂候音、恰好も雷聲ニ聞え、且其邊法被著之者幾人といふ事を不知、法被斗りも幾千なる哉。

○廿日　西洋曆二月十七日

下總守（松平忠國）殿ゟ留守居下役咄候由、又々浦賀へ三艘入津之趣。

風說
家老狛山城以下の御殿山見分

昨夜品川御殿山邊持場所被仰出候ニ付、家老狛山城・中根靭負・佐野式部・平本平學・同但見・鈴木主税・勝木十藏・杉浦幸右衛門・佐々木權六・村田己三郎・村田理右衛門爲見分右場所へ罷越、六ツ半時比歸ル。

浦賀へ三艘ノ入港ハ虚說ノ由、

過般老中への呈書頗る好評なり

今朝大道寺七右衛門召呼承候處、一昨日ノ御願達、甚於御老中方も被致感心候由ニ而、衆評ニ相成候處、何れも御尤ノ被　仰立ニ而、天下不殘ヶ樣ニさへ相成候ハヽ、勿論ノ事、誰一人黙の打候事不相成、依之、加州侯と御振替相成候由、

老中阿部正弘の批評

伊勢守殿被申候ハ、常盤橋ハ、實用を專らと常ニ被心懸候事故、芝邊大門云々の差圖ニ而ハ承服致兼候儀ハ尤ノ事ニ、於我等も、右樣ノ御場所被仰付候ハヽ、同前申立候半而ハ相叶不申、全體大門邊と申指圖ろ不宜、其儘致指圖候處、果し而常盤橋方申立候と一笑被致候由。

房州沖合に異艦見ゆ

其夜、七右衛門罷出候故承候處、今朝房州沖合へ異船相見へ候趣注進有之候由。應接ハ今四五日も手間取可申哉、又云應接ニかヽり候ハヽ、魯西亞方ハ早く相濟可申と申事。

魯西亞艦退帆の說

魯西亞ハ、本月八日彌退帆ノ趣、明日御觸出候由。多分此度ハ十ニ八九ハ無事

在長崎の細川留守居よりの報告

魯墨對談の風說

幕府にて定めたる諸藩の固メ場所

故、相濟候半と被存候由、七右衞門方申候ハ、此方ニ而ハ左樣ニ而も、彼底意分り兼候由、如何之御趣意ニ候哉と申し候處、被申候ハ、長崎ニ而ハ筒井肥前守川路左衞門尉兩人へ御任せ之事まて、逐一ハ不申來、此度ハ井戸對馬守林大學頭兩人色々申立、餘程所意有之趣、依之兩人へ御任セニ相成候故、一々ハ浦賀ゟ不申來、大凡之見積り相分り候上可申參、ヲロシヤ承服ニて及退帆候事故、アメリカも多分ハ平穩まて退帆いたし候半と被申。何レも奧右共掛り之人之嗤之由。

在崎細川留守居ゟ申越候由、細川留守居下役嗤之由、アメリカ昨年六月、日本退帆之末直ニ唐國定海縣へ罷越、魯西亞と對談いたし候ゟ、又當春直ニ浦賀へ入港いたし候半と申事まて、昨年より本國へハ未た不歸候由、長崎風說之由。

アメリカ船本牧へ乘入候へハ、品川御殿山人數被仰付候御評議之由。

尙又場所左之通り。

神奈川	松平兵部大輔　石○明
羽田大森	松平阿波守　島○德
いりやらず 不入斗村邊ゟ 大井村邊迄	松平隱岐守　山○松
品川御殿山邊	松平越前守　井○福

高輪邊　　　　　　　　　　　　松平越後守 ○津山
芝邊　　　　　　　　　　　　　松平加賀守 ○金澤
佃嶋邊　　　　　　　　　　　　酒井雅樂頭 ○姫路
深川洲崎邊　　　　　　　　　　松平越中守 ○桑名

越前守の固メは御城内と内定とのこと

當家へハ御殿山ヘ被仰出候へ共、内實ハ、事ニ臨之候ハヽ臨機應變まて、御家門之事ニも候ゆへ、御城内御固メ被仰出候由。左もれハ、御殿山へ差出置候人數ハ引上ケ、不殘御城内へ相詰候趣、内々於黒澤之咄之由。

於公邊ハ、將軍樣御始、我らを御膝元へ御引付置被遊候御内趣向之由。

下曾根の話

中根靱負申候ハ、品川まて下曾根金三郎悴次郎助及相弟子杉浦幸右衛門逢候處、次郎助申候ハ、只今浦賀ゟ歸候由、彼地之樣子將官「ヘルリ」兎角江戸の湊へ參度由申候由。

浦賀内にてハ、碇泊之場所、小柴沖と申所第一番宜場所、夫ゆへ、彼等夫を承知いたし相掛り居候由。ゐなにくしゐなにくき事之と金三郎被申。

又云、浦賀御備ハ、跡之祭りと申塩梅ニて、已ニ小柴沖へ掛船いたし居候ゆへ、無致方と申事。

應接掛香山榮左衛門との説

又云、此度も應接掛りも香山榮左衛門の由、此者夷人掛合上手之趣、於夷人も請宜故之。

昨年六月、榮左衛門暇乞として夷船へ參候處、ヘルリが榮左の手を押へ、來年も急度罷越、其節も別而懇切ニいたし、祝盃を取交し候ハん、と申候由。右手を押候譯ハ、於彼方も、必度約束之節も云々致候之由。

墨船又測量を始む

一昨日頃より、又々以拔的刺、折々測量いさし候趣、此程小柴磯際二間斗りの所迄參候故、日本人若ヤ上陸を驚惶いたし候所、彼等一笑いたし、又引戻し本船へ歸候趣。

松山藩の出兵

今日隱岐守人數、出張いさし候由。

或老中の妄説 舟筏のこと

今朝、七右衛門咄ヲ、御老中方ニ而も氣のもつれ候御方有之、芝邊大門云々の指圖申立候ハ、甚以尤之儀ニも候間、舟筏を爲作候樣、常磐橋へ申聞候ハヽ、被致安心候と申候。黑澤被申候も、猶以失費相かゝり可申、失費かゝり候迚、有益ニ候ハヽ可仕候へ共、それて格別被致安心候樣ニも不被存段、黑澤申上候處、舟筏と被申候御老中も、いか樣と斗り被申、其御評議相止候趣。

○廿一日　歐曆二月十八日

大目付へ提出の意見書

品川海邊は手廣に付目黑川以北に限られたし

御殿山の取り崩の件

獵師町方面の防備の件

臺場用の上砂の使用の件

以留守居、御目付大久保市郎兵衛方へ差出書付二通

品川驛海邊之儀ハ、遠淺ニ而、下ヶ潮ニ相成候節ハ、小舟も出入出來兼候程之儀ニ候得ハ、多分此邊より上陸之氣支ハ有之間敷哉ニ候得共、上ヶ潮之節ハ、油斷も難仕可有御座哉、左候得ハ、品川驛一圓ニ而ハ、場廣ニ申、家込之上、小人數之事故、如何ニも手配り仕兼候間、目黑川ゟ北之方御殿山邊、專ら警固人數差置申度心得ニ御座候。

一當時沖御臺場御築立御用として、御殿山土取崩し、是迄とハ地形相替り、守衛ニ就てハ不便之儀も御坐候得ハ、異國滯帆中ハ、取崩方越前守手より差圖仕候樣被　仰付被下候歟、又ハ何レ之御筋へなりとも、及御談、其御筋より取崩方御指圖被成下へく哉、兩樣之內相願度奉存候。

一右御殿山ゟり御臺場へ持運候土、獵師町ゟ持出候故、餘程之築地出來申候。此所ハ小舟之通行差支も無御坐故、上陸之儀ハ油斷不相成哉ニ奉存候。依之此地へ防禦人數差出申度候間、當時持出し候土砂、事ニ臨ミ炮臺ニ相成、又ハ人數配り差支不申樣取斗置度奉存候。此義ハ前條同樣、越前守手より差圖被　仰付被下候歟、又ハ御談申上次第、其御筋ゟり御指圖被成下

候樣仕度奉存候。

臺場土運人借用の件

一越前守人數差出候時宜ニ相成候ハヽ、御臺場御築之儀者、御見合ニ相成へく御儀ニも可有御座哉。左候ても、右土運人足共御引取ニ相成候節、一日越前守手へ拜借被　仰付被下候樣、仕度奉存候。

御殿山人足小屋借用の件

一右同斷御殿山ニ御取建ニ相成候人數小屋之分、出張中小屋場ニ拜借仕度奉存候。

異人上陸の際取扱の件

一萬一異人上陸之節、戰鬪之仕組ニ有之候へハ、防戰勿論ニ御座候得共、左樣ニも無御座、薪水所望ニ事寄セ、見物旁上陸仕候體ニも御座候ハヽ、差押へ方之儀ハ帶刀仕居候者より者、宿方之者ニ而取扱候方、氣立不申可然哉ニ奉存候。其節之取斗方者、越前守手より宿方へ指圖仕へく候間、此段兼而宿方へ被　仰付置被下候樣仕度候。

品川驛の人足使用の件

一出張中人夫遣ひ方之儀ハ、精誠越前守手まて取斗候心得ニ御座候得共、自然差支等御座候節者、品川驛有合之人足共、差遣ひなく遣ひ方出來候樣、兼而御指圖被成置被下候樣仕度奉存候。

大炮廻送の件

一大炮之儀、廻し方彼是手間取候も相成候間、追々不目立樣相廻置申度奉存

候。

名　内

△沖御臺場之儀ハ、未タ御成就之様ニも不奉存候得共、御固メ人數差出され、大炮等も御配りニ相成候御儀ニも御座候哉、左候得ハ、越前守手ニて、御臺場内之御固メニ候へハ、乍無數有合の大炮相配り候心得ニ御さ候。若又御臺場江御人數被差出候御義ニ候ハヽ、別紙獵師町臺場へ、精々沖合へ相達候大炮相備へ申度、左候へハ、有合之筒ニ而ハ行足不申候ニ付、御有餘之大炮十八斤以上ニ而八挺、玉藥共拜借被仰付被下候様仕度奉存候。尤右大炮相備候ニ就てハ、臺場築方之儀も不容易ニ付、手前人夫ニ而ハ行屆不申候間、別紙土取人足ニ而造築被仰付被下候様仕度奉存候。

獵師町臺場に使用の大炮借用の件

家老申候ハ、彌御本陣ハ品川東海寺之中ニ相定置候。昨日十藏を以本陣東海寺〆(締)り役高橋門彌へ調候處、則加州侯方も御賴有之候得共、寺内法要等有之御斷り申上候由。依之於御屋敷も相斷り候趣本陣申達候ニ付、十藏直ニ門彌へ逢談候義ハ、左様ニ候へハ無致方候間、寺社奉行頭へ申達、御寺内御借受申候様可致旨申候處、左様ニ候ハヽ暫御待被下候様申之、談相濟、彌東海寺々中ニ相極

品川東海寺を以て本陣と定む　勝木十藏

り申候由。

アメリカへの贈物

本多八十郎罷出申候ニ、アメリカへ被遣物、國王へニ綸子三十反、紗綾三十反、羽二重三十反「ヘルリ」へハ五反ッヽ被下候旨、其外被下物可有之候へ共、八十郎役所ヽ事ニ無之候故、存不申候趣。

同返翰

アメリカへ御返翰紙、本月十五日差出、今度ニ住吉内記金箔を置候由相咄之。

御老中方ヽ内、浦賀へ御見廻り有之趣、御城風說ヽ由。

昨日松平和泉守ゟ御渡ヽ書付寫壹通、大目付ゟ觸達左ヽ通。

袖ら
大目付江

老中より觸

異國船渡來ニ付、海岸屋敷有之面々ハ、武器等相廻し置、万一非常ヽ節混雜無之樣可致候。尤成丈ヶ不事立樣、穩便ニ取斗可申候。右ヽ趣可被相達候。

正月

今夕同樣大目付ゟ觸達來る

袖ら
大目付江

萬一異變

異國船渡來ヽ節、万一異變ニも可及樣子ニ候ハヽ、於火消屋敷、早盤木打候間、

万石以上櫓有之面々ゟも同樣盤木を以場末迄打繼候樣可致候。右を承り候ハヽ、非常之場合と相心得、火之元等取締致し置、詰場々へ可罷出候。

一右之通相成候ニ付而ハ、異國船渡來中出火之節ハ諸向共盤木ハ不相用、是迄盤木相用候向ハ、太皷ニ而も、半鐘ニ而も相用可申候。

の時の警報の件

右之通り可被相觸候。

正月

昨夕御目付迄差出候名内書付、尙又老中へ相伺候樣ことの、廿二日指圖之、卽夜右願書付以留守居和泉守殿へ出ス。

〇廿二日　西洋曆二月十九日

正月廿二日老中阿部伊勢守よりの觸

阿部伊勢守ゟ、相渡書付寫大目付ゟ觸達、

袖ら
大目付江

魯船退帆の件

長崎表渡來之魯西亞船、去ル八日平穩ニ退帆いたし候旨注進有之候。此段爲心得向々へ可被達候事。

正月

武州金澤米倉よりの報告　異國船本牧沖に碇舶の件

米倉丹後守

追々御屆申上候、領分武州金澤乙艫濱ゟ壹里程沖合ニ、異國船七艘乘込、今以滯船罷在候處、昨廿一日申ノ刻、異國船壹艘本牧邊へ乘出候ニ付、見留船差出候處、同所へ碇下候樣子ニ相見申候趣、在所家來共より注進申越候ニ付、御屆御用番並御掛り御月番江差出申候段、今朝申越候。

正月廿二日

海底測量

世上之風聞ニゐて、異船より拔的刺數艘出し候て、海底深淺測量いたし候跡へを小桶へウキヲ付ケ投候趣、右小桶中へ色旗相立候由ハ、目印ニいたし候ハんとの風聞。

又浦賀へ引戻し候樣、何レも應接ニ及ひ候へ共、中々以不聞入、江戸之方ニ候ハヽ、どこ迄も乘入可申段夷人共申立候由之。

本牧勤番船の報告

御船手ゟ之通達

昨夕七ツ半時頃、相州夏嶋沖ニ滯船仕罷在候異國船七艘之內、一艘出帆仕、上總之方江走り出し、三四里半程罷越乘戻り、尙又夏嶋邊手前之方へ夕刻罷越候。其後船懸り候哉、其段ハ夜ニ入難見請候。右之段本牧沖勤番船ゟ申越

候ニ付、此段御注進申上候。以上

正月廿二日

寅上刻

櫻井藤四郎御預ケ
川口御番所附
澤田繁藏

野村勝次郎

老中より觸達

松平和泉守ゟ相渡書付寫一通、大目付ゟ觸達有之、

袖ら
大目付江

警報と共に各持場に詰ること
動搖混雜せざる樣注意のこと

異國船渡來之節、萬一異變ニも可及場合ニ至り、早盤木打候節ハ、早速銘々持場江出張可致ハ勿論ニ候得共、下々等麁忽ニ動搖いたし、無益之雜人等屋敷內外立騷、及混雜候樣ニ而ハ、不慮之過失も可有之、以之外之儀ニ候間、兼々嚴重ニ申付置、出張等之節、不法之儀無之樣急度向々へ可被達候事。

正月

御城御沙汰書之內

御目付 堀織部

堀織部蝦夷地御用のこと

松前蝦夷地之御用被 仰付、彼地へ差遣候儀も可有之候。

山縣三郎兵衛の見分

正月二十三日老中よりの觸

鐵炮武器持參御門通行の件

右於新番所前溜伊勢守申渡之、遠藤但馬守侍坐、

海防掛り
大久保市郎兵衛代り　同　永井岩之丞

右於同席本多越中守申渡之、

今日山縣三郎兵衛始場所見分罷越

○廿三日　歐羅巴暦二月二十日

松平和泉守相渡書付寫壹通井戸石見守ゟ觸達來ル

袖うら　大目付江

異國船渡來之節、盤木之合圖まて、出張幷爲御警衛寄場屯所等江相詰候節ハ、御門々鉄炮其外武器出入之儀、右員數書付万石以上之面々ハ家來印紙差出し、万石以下之分ハ自分印紙書付、御門々江相達、通行可致候。尤後日共段最寄御目付江相屆候樣、可被致候。

一御城内御警衛之面々ハ、鉄炮武器類下馬所江相殘置、當番御目付ゟ相達次第、前文同樣之振合を以、繰入候樣可被致候。

右之通り可被相觸候。

正月

松平和泉守方呼出、六ツ時過留守居罷出候處、六ツ半時頃歸御渡書付、（老中より命令）

松平越前守

異國船渡來ニ付、兼ゐ相達置候場所江、先壹番手之人數差出候樣可被致候。（一番手人數出場すべし）

外ニ御書付

別紙之通り人數指出候樣相達候得共、不事立樣穩便ニ取斗可申事。

昨日差出置候名內願書御下ケ、且御附紙（附紙ニゐゑなし 御書取ニゐ出つし）書面御殿山土取之儀、人數出張中ハ指支候ニ付、手引爲致候。右地形直方並海岸土出場手入之儀、手限ニ取計、小屋並人足遣方之儀ゑ、宿役人共江相對可被致候。其外伺之通相心得候。尤其筋江も相達置候間、可得其意候事。（名內願書の指令）（御殿山土取、小屋、人足等の作許可せらる）

沖御臺場之儀ゑ云々之願書之方、未ゟ御指圖無之、右被仰出ニ付、壹番手出張之分申付候、何レも火事具着用之事ニ。

去夏之節ゑ、早太皷早柏子木を以揃候得共、今晩之ハ穩便之被　仰出ニ付、太皷ヲ靜ニ「デン」「デン」と打、拍子木を「カチ」「カチ」と打候て爲知候也。左ナクシテゑ、先日之法令反古ニ相成候故也。（出陣の狀況）

山縣三郎兵衞・平本但見・鈴木主税不出、出淵傳之丞・有賀淸右衞門・勝木十藏目見（山縣平本鈴木出場なし）

出洲有賀勝木等出場

何レもへ申聞候て退去
常磐橋屋敷出拂五ッ半時過
靈岸嶋屋敷出拂四ッ半時
品川着到九ッ半時頃

出場に就いての理由

何レも用人雨森傳左衛門申達之。
今日ハ被仰出え、風聞ニあえ、とかく應接か奈川ニていたし度趣、夷人共申立、且
又本牧邊測量いたし、又一昨夜品川沖迄も夷船罷越候ゆへハ、餘り御固メ無之
候も、不宜候ニ付、被仰出候と申事之。

幕府への屆書

只今品川御殿山江、御警衛人數壹番手繰出申候。此段御屆申候。以上

正月廿三日　　　御名

古詩

俄船已退長崎海、　墨艦測量淺與深、
官家苦脳無萬古、　海岸守衛成千林、

右一卷畢

合同船（フルエーニグデスターテン）入相秘記巻之二

世上入春猶未新　金澤洋面吹沙塵海濱防禦幾萬卒　紅燈簇々照九旻　黒狄猖黠允不虞浦港徒守頗似愚何恃　神風殲彼船由來士氣當萬夫我主彼客勢順逆彼無炮艦劣巾幗日天幸有振人心此則
神州膺懲策

潜思閣主人春岳賦詩代序

［印］

合同舶入相（フルエーニゲテスターテン）秘記巻之二

世上入春猶未新、金澤洋面吹沙塵、海濱防禦幾萬卒、紅燈簇々照九旻、墨狄猖黠允不虞、浦港徒守頗似愚、何恃　神風殲彼舶、由來士氣當萬夫、我主彼客勢順逆、彼無炮艦劣巾幗、昊天幸有振人心、此則
神州膺懲策、

潜思閣主人春岳賦詩代序［印］［印］

正月廿四日

嘉永七年甲寅春王正月二十四日、卽泰西暦一千八百五十四年第二月第二十一日、北米利幹共和政治獨立建國以來七十九年、

江川太郎左衛門に指令

伊豆國韮山御代官
江川太郎左衛門

亞墨利加船、萬一江戸近く乘入候も難計、其方早速出船いたし、精一を以申諭し、爲乘戻候樣可被致候。

中根靱負御殿山に赴く

中根靱負、今日用事有之、御殿山へ差越。

今日本牧へ乘入候沙汰有之、

川越侯の報告

墨使節と應接

誠丸ゟ爲知

此度渡來之亞墨利加船江、今廿四日九ッ時頃、於浦賀屋形浦ニ、亞墨利加船使節之者へ應接有之候ニ付、番船拾五六艘差出候樣、昨廿三日浦賀奉行ゟ達有之候段、大津陳屋詰家來之者ゟ申越候。此段致御屆候。以上

正月廿四日　　　松平誠丸

福井へ早飛脚

今日夕、五日振ニ而中早飛脚差立、右ハ昨夕人數被命候ニ就而之事ニ、

狛山城よ

狛山城ニ逢承候處、今朝荒井甚之丞へ七右衛門罷越及逢對承候處ニ而ハ、中々

りの情報

今度ハ長く相懸り可申、ともそれハ、加奈川ニ而及應接候歟も不知と被申。又彌六ヶ敷相成候ハヽ、彼情願少しハ相立可申、左ナクシテハ、使節ハ甲斐も無之、使節も承服いたし申間敷、甚之丞ハ掛りニ無之候ゆへ、委細之儀ハ不存候趣之。

加奈川に於て應接の説

黒澤へ參り候處、御用多ニ而逢不申候由。

老中松平和泉守よりの申渡

保養交代の件

今晩、松平和泉守ゟ呼出留守居罷出候處、御勝手ニ而公用人申聞候ハ、今度ハ差出され候御人數、餘程長陣可相成、疲勞ニ及候て、萬一之節御間ニ合不申候而ハ、所詮無之ニ付、保養いたし罷在候樣、就夫交代等いたし候而も不苦候趣、内々和泉守被申候旨申聞。又公用人書付相渡。

墨船祝砲のこと

渡來之異國船平穩ニ候得共、明廿五日彼國祝日ニ付、船中ニ而祝炮數發打放候旨申立候段、浦賀奉行ゟ注進申越候。右炮聲承り候共、家來下々迄動搖致間敷、併彼方事情も難計事ニ付、其心得ニ而油斷無之樣可致候。尤右之趣浦賀奉行より浦觸差出候由ニ候得共、爲心得御固場所江早々可申越候。

右之趣、傳左衞門申達之、家老へ傳左衞門申達、山城ゟ三郎兵衞迄以馬方申越。

夜分海岸の挑灯を禁ず

尚又公用人申候由、夜分海岸へ挑灯等差出候義も、無用可致由、彼萬一品川邊乘込候ハヽ、見當ニ相成候ゆへ之御趣意之よし、公用人申聞候由。七右衞門申達

傳左衛門ゟ承ル。

中根の報告

今日阿州、水戸殿公前へ手紙指出も、

人足小屋拜借

中根靱負黄昏罷歸承候處、御殿山も何も相替候事無之、昨夜九ツ半時頃著到ニて、未さ御締りも不相整、人足小屋場御拜借御引渡無之、色々及掛合候處、漸七ツ半時過比、御引渡ニて相成候得共、未さ人足出拂不申、明曉迄ニ引拂候樣嚴ク及掛合候趣。

獵師町の臺場

獵師町臺場ゝ儀、御拜借人足ニゐても中々餘計ニて、却ゐ果敢敷義も無之候ゆへ、今日も御人數大ニ疲レ居候間、明朝ゟ取掛り尤手人之晝頃迄ニて仕上ケいさし度趣。

品川邊の風說

此邊ゝ飛說にゐて、本牧へ乘入候趣沙汰有之。

一个夕坊主ゟ井戸石見守方へ相調へ候處、應接未さ不相分、且此度も長陣可相成、來月中退帆相成候へも、重疊恐悅と被申候由。

正月廿五日

○二十五日　洋曆二月二十二日

中根と土屋十郎右衛門

靱負、目付上屋十郎右衛門品川持場へ差越。

昨日和泉守ゟり達有之候墨船祝炮射放、九ツ時比ゟ相始マリ、無程炮聲相止、多

墨船の祝炮
ワシンクトンのこと
江戸にては筒井・川路の歸るを待つとの說
鈴木主稅浦賀の情報を傳ふ
野村淵藏
應接の大意
應接場所の件

分百發計りも有之候哉。

右墨舶祝熕射發ゝ儀ハ、今日話聖頓(ワスヒンクトン)生誕の日ニ付、祝有之趣風說有之。

坤輿圖識補をふて見れハ、華盛頓(ワスヒンクトン)生誕ハ、我享保十九年と記載ハ、西曆千七百三十四年也。ヒルギニアノ部內「ファイルファキスノ」地ニ生ル、寛政十二年彼十二月十四日卒、彼千八百年也。

於御城ゝ風說ハ、筒井肥前守川路左衛門尉等長崎ゟゝ歸著を御待被成候由。

用事有之、用人雨森傳左衛門品川持場へ指越。

浦賀奉行伊澤美作守支配組頭黒川嘉兵衛ゟ、內應秘密ゝ書付竊鈴木主稅ゟ指出（稻葉務家來野村淵藏、遊學罷越候由、右浦賀へ來り、內々水府傳をもつて、嘉兵衛ゟ承ル所を記スㇾ。又々淵藏浦賀へ罷越、內々嘉兵衛宅ニおゐるとし。）

正月十七日（組頭黒川嘉兵衛並與力四人彼舟へ罷越候アハタムス對面ゝ由）

應接大意

我云、近日夫々長官罷越、鎌倉光明寺ニおゐて返翰被相渡候ニ付、近々出張有之候間、彼處迄舟を廻置候樣種々申聞候處、一向承知不致候ニ付、左候ハヽ浦賀まて相渡候間、夫迄引戻候樣申聞候處、是又承知不致候。彼云、江戸ゝ方ニてハ、何方ニても宜候得共、跡へと申てハ戻兼候由申張候。若日本ニゐ應接

場無之、六ヶ敷候ハヽ、亞米利加ゟ方ニゐ、諸道具かりあほめ候ゐも宜趣申張候。談中度々加奈川ハとふや〳〵申候由。暮時頃迄も決定不致候ニ付、蘭文字ニ認メ候ゐ、何故ニ江戸ゟ方ニてハ何方迄も參り候得共、浦賀ゟ方へそ引戻兼候義、其譯合ヲ書附ニ相認相渡吳候樣申候處、夫ニそ大きに込入候樣子ニて、彼是と申候得共、其儘指置歸候由。

彼か舟を引出兼候言譯ハ、大將「ヘルリ」の不快ニて相談いさし兼候と申立候由。

談中

一我云、我ゟ國ニてハ、一段定り候事ハ俄ニ難改、其上、他ノ國とハ違ひ、掟も有之候事故、何分ニも浦賀外へ引戻候樣申候を、彼是申立候ゐ不引戻候ハヽ、其方より兵端を初候勢ニ相成候段抔、種々申責候得そ、まろらぬ躰して繰言をのミ申居候。たとへハ愚女ゟ我意ノまヽ計申立候ゐ、人ゟいふ事を聞入さるさゐゟ由。

一彼云、初鎌倉と云、後ニ浦賀といひて、言葉を變し候そ何故ヤ抔と言質を取候由。我云、鎌倉ハ處もよく、且旅館も廣く候故、末々迄も緩々休息出來候故、馳

走のため此方ゟ丁寧ニ取扱候へ共、却て共方ゟ彼是申候故、左候ハヽ浦賀へと申参りと答候由。少しこても我ゝ方ニ落而有之候時そ、直ニ言葉質を取、彼ヵ言葉のはまり候へハ、よからぬ躰をいさし候由。誠ニ不屈至極ゝ躰ニ。

一我云、若浦賀邊ハ臺場も多く候故、懸念ニおもひ候ならそ、我等乗居候間、此儘引戻候様申候へハ、ヘルリか不快ニ而、今そ懸合も六ヶ敷抔申立候而承知不致候。

「フランス」未參すや

一彼云、「フランス」ハ未た参らず候ヤと申候由。

一我云、舟ハ幾艘ニ候哉と問ひ候へハ、九艘ヵ十艘ろとよろらぬ答を致し候由。

墨船の行動

一異船「アメリカ」ゟ、我國ノ丑十月廿日出帆香港江著、又香港ゟ十二月十六日出帆琉球へ著、又琉球ゟ正月九日十日ニ出帆ゝ由彼申候。

〆

墨船水を陸地に汲む

一十八日朝川越侯御臺場より浦賀へ御屆、異船「バッテーラ」にて陸地へ寄セ、水を汲取候躰ニ相見へ候段、御屆有之候由。

右ニ付、與力近藤良次ヲ指向ケ、兼而申聞候掟ニ相背候義、如何ゝ譯合ニ候哉と相正し候處、彼答ニハ、薪水ニ至迄指支無之候間、其儀ハ間違ニも有之候哉

我が女を所望す

と申候而、腹立候躰も見へ不申候由。　我云、薪水を初用向有之候節ハ、番船を招き候得ハ、直に打より候間、用向相賴可申段申聞候處、彼言、薪水食糧ハ指支無之候へ共、若指支候節ハ、水ハ所望申度候、食糧な儀ハ代料をもつて所望申度候段申候に付、夫にては彼是不申共儘に指置申候由。　彼又云、女を船見物旁遣呉候樣申候に付、我云、如何に致候哉と相尋候へハ、彼云、日本の女ハおどりの上手な由に付、船中のつれ〴〵に見物に致度候段ねらひ顔にて申候由。

右水を汲候船ハ間違まて、我番船な水を汲に上り候を見違にて、御届有之候由。　右番船二艘ハ、我神風丸にて、三本帆を掛候舟な由。　其船ハ彼ら「ハッテーラ」に似たる舟な由也。

神風丸の歌

此處を認候折から、慶永ふと一首よめる。　たふは風たけしたれハ、とふ多もさそこまりつらんなとおもひて戲多

神風の伊勢の御稜威そとふせしなと國ふ多拔ふきやかへさん

伊勢の御稜威(みいつ)とよむ也、神風(かみ)は伊勢の枕詞也、たゝ舟の名もおなしく、且たふの風たけしきまもりて、かさ〳〵かくたミさるふなん有けれ。

合原伊三郎との問答

一十九日、與力合原伊三郎、彼な舟へ罷越候節、彼云、此舟を浦賀外へ引出し候而

も宜候哉、若いよ〳〵引出候節は、御調へ申度候事有之候と尋懸候ニ付、我云、共事ハ我等指圖致兼候、併七艘共引出候事ならハ、随分只今指圖致候と答へ歸り候由。

右之儀は、此間書取を以テ返答いたし候様申聞候に、餘程込入候様子、我方にて七艘共引出度存念有之候故、此頃ハ色々論中之由。 此一ヶ條ハ、彼カ方手を下ヶ候勢相見へ申候。

大慶〳〵。

右之段、少々ツヽ間違も難計候へ共、承知仕候まヽ相記し奉入貴覧候。 頓首

一廿一日、彼「ハッテーラ」ニテ夏島ゟほし島へ三艘乗り候由。

加奈川に入る

一廿日、か奈川沖迄「ハッテーラ」乗入候由。

本牧沖に入る

一廿一日夕方、初入候軍船本牧沖迄入候由。

品川沖に入る説

一同日夜「ハッテーラ」品川沖迄乗入候沙汰有之候。 併此義ハ不詳候也。

〆

十九日、去ル十七日ニ我舟頭へ彼ノ古キフサノ如キ物を投あたひ候を、舟頭竊取置候を吟味いたし候處、直ニ彼舟へ指戻候由。

小柴沖を乘り廻す

一同日、小柴沖へ「ハッテーラ」三十五六艘ニテ處々ニ乘廻り候由。

一同日、房州ヨリ、異船一艘相見へ候由注進有之。

一廿日問答無之。

一同日、房州沖ノ舟見へ不申候由注進有之。

一廿一日、異船朝夕空炮を放候定之處、今日ハ晝時頃も相放候由。

〆

黒川嘉兵衛の意見

一昨年ハ、與力ニハ彼大將ハ逢ひ不申候へ共、此度ハ大將ナラテハ懸合不致候由、彼へ申聞候ニ付、大將逢候由。

一黒川咄ニ、只今之處へ、我より大義を立候て打拂候ナラハ、十分勝ハ取候へ共、何分ニも御備ひ不相立候故、誠ニ殘念之事ニ候へとも、まらひ顏をして見せたり、又ハ無禮を見ながら默々の事も有之、此上ハ一日も早く、御備相立候樣祈居候と、殘念顏まて咄有之候。併此等之事ハ、水藩初御家門閣老邊之心中ニ有之候事とて、我等之あつかる處ニハあらほといひぬけ有之候由。

〆

傳左衞門七ツ半時前歸る

今日承る。正月廿四日

本多越中守殿御渡
御目付江

寄合

五千石　酒井仁之助
三千石（松平甲次郎

同
七千石　本多寛司
三千石（堀金十郎

同
四千五百石　大森勇三郎
三千石（龜井勇之助

同
四千石　宮城甚右衞門
三千俵（土屋求馬

板橋宿

千住宿

內藤宿

岩淵宿

異國船渡來中、右ゝ場所ニて勤番被仰付候間、早盤木ゝ合圖承り候ハヽ、家來差出、相固御取締嚴重心得候樣可被致候。勤方委細ゝ儀ハ、御目付へ可被承合候。

右ゝ趣申渡候間、得其意御取締筋行屆候樣、夫々勘辨いたし相談候樣可被致候。

川越侯よりの報告

誠丸より爲知四ッ時比來ル

昨廿四日、浦賀於屋形浦、亜墨利加船使節江應接有之ニ付、番船指出候處、昨日ハ大風荒波ニ而、夷船浦賀湊江難罷越、元掛り場ゟ夏嶋ゝ方江碇を下候ニ付、猶又今廿五日於屋形浦應接有之候間、昨日ゝ通り相心得候樣、浦賀奉行ゟ達有之候段、大津陣屋詰家來ゝ者より申越候ニ付、此段致御屆候。以上

正月廿五日　　松平誠丸

大道寺の報告

大道寺七右衛門六ッ半過罷歸申聞候ハ、此度ゝ夷船到泊、定而長引候半と被存候由、黑澤咄之。

多分ロシヤ致承服及退帆候事故、アメリカも同樣致承服退帆ニ及へく候へ共、何分來月一杯と存候へハそつれ候事ハ無之由。又黑澤申候、昨日ハ應接可有

應接は金澤との說

之筈ニ候へ共、多分使節ヘルリ屋形浦へ上陸いさし及應接候義ニてハ無之、下官の內ニ被存申候。尤應接いさし候所か、久々ニて御逢申、遠方御苦勞ニ候半と、双方挨拶位ニて相濟候半、明日明後日と應接有之筈。昨日應接ニ付、何そ事替り候義も候へ共、評議御下ケ我ら承知可致候へ共、不存候ハ爲指事無之と見へさり。且兎角彼方、江戸近邊まて及應接度由所念ミ趣。多分金澤ニて、使節ミ應接ニ相成候半と被存候由申聞候。

黑澤の話す閣老の見込

乍內々黑澤申候、魯西亞を先、諸事三五年相考置可申位ミ事ニて相濟候由、「オロシヤ」「アメリカ」「インキリス」「フランス」等ハ、當今、朝旭之勢まて、日本ハ打續候大平ミ事故、申さそ落陣ミ姿ニ相成居候ゆへ、戰爭ニ及候ハヽ、必定敗衂ハ眼前ミ事ニ候故、先此度を平穩まて、是ゟ幾夷船到來候とも、御備ミ出來候迄ハ、當今御平穩ミ御姿ニて、星羅棊布ミ萬國ニ御應し被成、三五年ミ末、彼と同様朝曦之勢ニ被成候てミ事ニ被成度、閣老衆思召ミ由內々黑澤咄之。

會津留守居の話 墨船中に日本人居るとの說

松平肥後守留守居ゟ承候か、彼船中日本人居候趣、無相違にくき事之、引揺上ケ度事ニ申候。其譯そ墨船通辭ハ和蘭醫師ミ由、其者凡る掛合候由なから、實ハ和蘭醫師そ虛器を持する鹽梅とミ事、我よりいふ事そ、醫師の手を不待して、彼

中根より御殿山防備の終了を報告す

祝炮品川に聞ゆ

西尾五右衛門

正月廿六日

佐野・平本御殿山視察

川越侯の報告

能々分り相辨し候由。又彼我へいふ時ハ、醫師をもつて之、尤日本人は應接之場へハ出不申、蔭ニおり候由。會津家來之内ニ而ハ、内々見候ものも有之候趣。少々取調へ候處、多分相違無之趣之。七右衛門申候、昨晩和泉守殿へ罷出候節、會津頭役ニ逢候處、右云々之趣、咄有之候由。中根靱負五ツ時頃歸る、承候處、御殿山御〆りも十分宜相成、獵師町臺場（バッテレイ）之儀ハ、全備相成候。ウスホレニハ無之候へ共、活眼有之候人ニ見セ候ハヽ、嘸感心いたし候義と申之。今日之祝熕、誠ニ順能射發、五十發も打候哉と申之。品川ニてハ裏に聞へ、加之餘程轟候趣。西尾五右衛門始着之節、品川ニて相咄候趣、昨日、加奈川邊より異國船見申候由。々ふハ少々本牧ゟ浦賀之方へ碇泊いたし居候趣之。

〇廿六日　洋暦二月廿三日

佐野式部・平本平學相願御殿山品川持場へ罷越。

六ツ時誠丸ゟ爲知

昨廿五日、浦賀於屋形浦、亞墨利加使節江應接無滯相濟候ニ付、番船引取候様、

應接相濟む

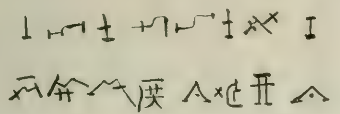
浦賀奉行ゟ達有之候間、番船引拂候段、大津陣屋詰家來ゝ者ゟ申越候。此段致御屆候。以上

正月廿六日　　松平誠丸

御城使ゝ者ゟ差出候因州ゟ御屆有之趣。

異人本牧の岩に白書す

去ル廿三日、晝時頃「ハッテーラ」船に異人凡十五人程乘組、本牧邊乘廻し、同所岩江白ク如斯書記置候由、



慶永云 傳寫ノ誤リモ多ミアラン

狛山城の報告 御殿山の防備は完了す

狛山城七ツ半時歸ル、承候處、今日ニ而ハ御殿山〆りも宜、且御臺場ゝ儀も至極宜敷出來仕申候。昨日風說ニ而承候へも、品川邊迄も異船乘込候趣云々有之候へ共、夫ぞ全く虛說ゝ由。且品川御殿山ゝ風說（品川天龍寺咄候由）彼船金澤ゟ本牧ゝ間ニ掛り候由、（先日一艘房總ゝ方へ漂出し候舟ニても候半哉と申候。）鷗抔へ餌を遣し、「ヒストン」ニて舟中ゟ異人打候趣、百發百中ゝ由、

船中に女

船中女居り候よし、洗濯物いさし居候由。見候人有之趣。

あり
人足小屋は惡臭のため人數は東海寺中に入れたり

人足小屋御拜借ニ而相成候へ共、臭氣甚敷、迚も御人數入レ兼候由。入候ハヽ、忽チ病人出來候半と傳之亟申候由。就夫矢張東海寺中借受候て這入居候由之。其外何も相替候事無之。

佐野式部・平本平學黄昏歸宅。

正月廿七日

○廿七日　西暦二月二十四日

十九日立飛脚道中常振、草野川二日逗留、今巳ノ上刻到著、何も相替候事無之。

狛山城の報告
廿五日應接のことペルリ不快は事實なり

狛山城罷出申聞候ハ、廿五日應接ニて下官の由。七艘之内一艘乘戻り、應接將官彼理（ペルリ）ニて矢張不快之由ニ而、兎角浦賀方へ船引戻候事相厭ひ候由。又實ニヘルリ不快ニ相違も無之趣之。右之儀甚之亟内々相咄候由、七右衞門ゟ承る。此度ニて長引くと申。

昨日水戸前公及相模守ゟ直書來ル。（水戸前公御返書、相州仕懸）

相模守共和政治人物及浦賀巨細之圖借受度旨申越、返書ニ兩樣借遣ス。

品川持場の宿所

品川持場宿陣左之通り

士大將　目付有賀滿右衞門　東海寺々中　定惠院

青組大炮方　同　長松院

赤組 日比彦之丞　　東海寺々中 高源院
小筒方　　同 雲龍院
兵粮方　　天龍寺

飛脚よりの情報

猶山城申聞候ハ、先達而之内、飛脚之者、於薩陀邊異船到泊之模様致遠望候て、夫ゟ國許へ参り候由。只今頃ハ浦賀へ罷越居候抔申候由。大谷孫太夫咄候由、又申聞之。

薄皮餅を遣す

今日、士大將始ゟ末々迄ニ、薄皮餅十ツヽ遣之。（餅五千八百斗り此代金三兩三分位）土屋十郎右衛門を使として遣之。何レモ難有奉存候段十郎右衛門及言上。

品川問屋よりの注進異船三艘神奈川浦に入る

十郎右衛門申候ハ、只今七ツ時頃、品川問屋ゟ左之趣注進有之。

異船之内三艘神奈川浦江乘入候趣、同宿ゟ御奉行所江御注進申上候ニ付、不取敢此段申上候。以上

正月廿七日未中刻　植木利兵衛

異船本牧に入る

只今、因州樣御飛脚御下りニ付承り候處、本牧御陣屋前江異船壹艘乘込候由。

右御注進之御飛脚と申義ニ御座候間、此段不取敢申上候。以上

正月廿七日　　　　宿　役　人

異船羽田に入る

只今、川崎宿ゟ御支配御役所江御注進之趣、異船之内三艘羽田村ゟ貳三拾丁沖之方江乗入候趣、此段早々奉申上候。以上

正月廿七日　　　　宿　役　人

上屋十郎右衛門の大森方面視察

右段々之注進ニ付、御固メ場尚又嚴重御〆り致居候由。且又、十郎右衛門大森邊迄馳馬、途中ニ而承候處、此ゟ壹里程御入被成候て、小社（弁天ゟと被存候）の山へ御上り被成、望遠鏡をもつて御覽被成候へハ、遙ニ波心ニ相見へ候趣。日已ニ西沒之光景故、夫ゟ引戻し罷歸候由。

大道寺七右衛門、福山勝手へ罷出候へハ、右云々之注進ニ而御勝手甚混雜いたし居候由。

老中松平和泉守邸の評議

追々異船乗込候義ニ付、今晩和泉守殿御宅へ老中方被寄合、其外役々罷出御評議有之趣。

外何も相替候義も無之。

正月廿八日

御登城中に於ける情報

九條殿等の詠歌

○廿八日　遠西二月廿五日。

中根靱負、品川持場へ用向有之罷越。

六ッ半時供揃にて月次登　城例之通り。

殿中噺合概略

一ーきりふりかゝりさるあめりかふ、てる日の本乃なにさハるへき　九條殿

皆人の心のかきりつくーてし、後まろふのめ伊勢此神風　千種有功

ゑミーふ多ゝらそよりまよ日の本乃、大和まゝ魂を思ひまらせん　松平阿波守

とーや身そ浦賀の波ふーつむとも、くたのてやましゑみー黒船　立花飛驒守

ちりの身そよしやすつともと國ふ、君の御稜威をいのて傳示さん　同

阿波守飛驒守方承る

慶永公の返歌

飛驒守へかへしのおゝ謌にてよめる。

よしやよしすつる命のかひなくも、せんすへなしとおもひつるかな

また

君むとり浦賀の波ましつむとも、くたきゑられぬゑみし黒ふね

とそんし申候。

市川齋宮

今朝中根靱負へ齋宮申候ハ、昨日鶴見生麥村邊ゟ見候處、何分一艘ハ蒸氣船も、昨夏罷越候のと一所ニ存候段申候由。尙又阿州もなしふ、異船ゟ夷人小柴邊へ上陸、民家ハ娘一人奪取候趣。慶永考、夷人云々ニ託し密通候て掛落かも不知。

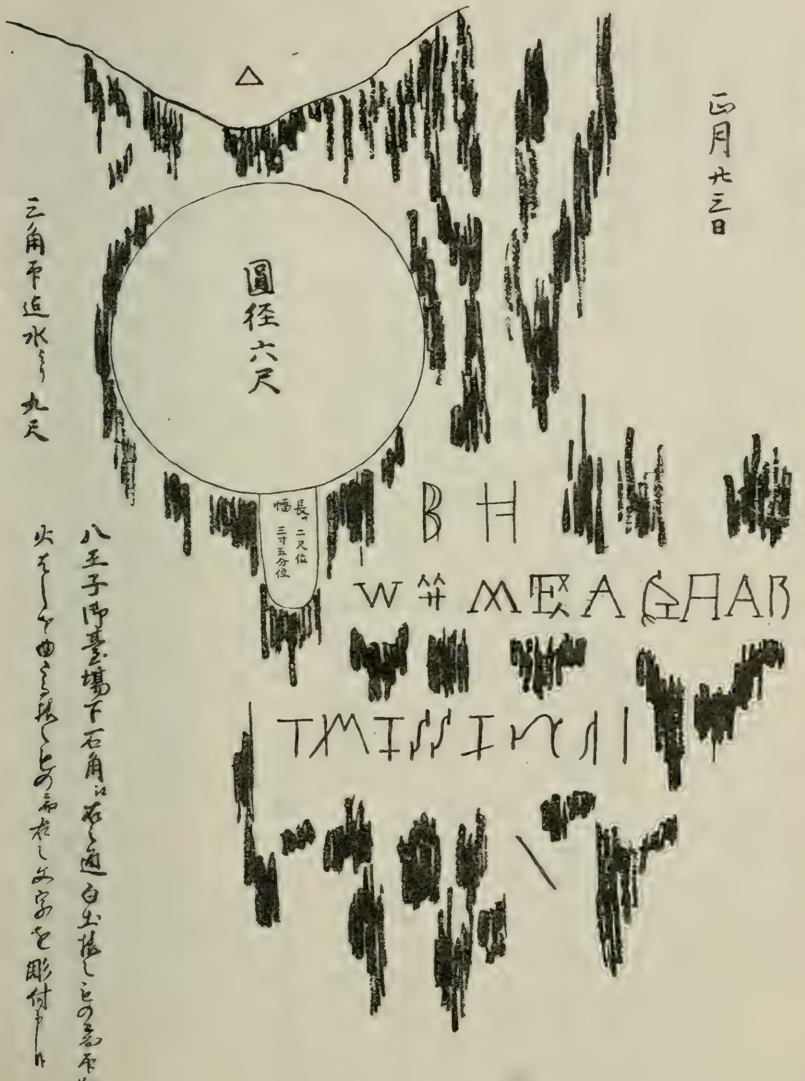
夷人土民の娘を奪ふ

又飛驒守咄まさ、加奈川邊へ夷人上陸いたし候て、井を見、そこらニ女童居り候へも、手眞似をもつてのめといふやうなる指圖いたし候由。女童さへ候處、夷も悦ひ候て、船ゟ道具を持出し汲候趣。夫ゟ跡ニ白粉藥を井へ投し、尙又右女童へせんへい如きものを遣し候由。右粉藥、毒ニて候哉と衆人畏懼ハ趣取沙汰有之。

白粉藥を井戸に投す

四ッ時前羽田邊へ乘込候由沙汰有之。

此外雜說不足記。


正月廿三日
三角下迄水より九尺
圓径六尺
長サ 二尺位
幅 三寸五分位

鳥取藩より報告
小柴沖の異船本牧沖に移動す

本牧八王寺臺場を測量す

因州より借用の書付

因州ゟ到來

小柴村沖ニ懸居候異國船之内壹艘、今廿一日申刻過本牧沖ニ帆を懸颿寄候段、持場家來共ゟ注進申越候。此段御屆申達候。以上

正月廿一日

松平相模守内

今巳刻頃、富岡沖ニ罷在候異船ゟハツテーラニ而拾三四人程本牧八王子臺場下ニ乘附、同所岨高下を量り、猶目印ニ仕候心得ニも候歟、白土を塗り、其儘碇を卸罷在候間、持場家來共ゟ只今注進申越候。此段御屆申達候。以上

正月廿三日

松平相模守内

昨廿三日不取敢申達置候、本牧八王子山臺場下ニ、亞墨利加國之印を立漕寄候バツテーラゟ、同所岨ニ白きものを塗、脇ニ文字之様成形を附候後、白キ幟を立候由、其合圖ニも候歟、富岡沖ニ罷在候異船ゟ五發程大炮之音いたし候旨、其外無別條。巳ノ下刻元船之方ニ漕戻り、根岸沖之方ニ而測量いたし居

候段、持場詰家來之者ゟ申越候。猶又此段御届申達候。以上

正月二十四日　　松平相模守内

富岡沖江罷在候異船一艘、今巳下刻本牧沖乘廻し候而、八王子臺場向三拾町目程之所江滯船仕候段、持場詰家來之者ゟ申越候。此段御届申達候。以上

正月二十四日　　松平相模守内

追々御届申達候、異船七艘之内一艘、一昨日猿島邊を乘廻し居、風雨強く、碇ヲ見留兼候處、昨巳上刻浦賀之方江差向致出帆候樣見届候段、持場詰家來之者ゟ申越候。此段御届申達候。以上

正月廿六日　　松平相模守内

一昨廿五日、異船空炮打放以前ゟハッテーラニ而、本牧沖十二天山之方迄も乘廻し、測量いたし候哉ニ相見へ申候。且同所荒洲沖凡三十丁目程ニも可相成所へ、白幟立有之旨、一昨日ハ烈風ニ而見改メ行届兼、昨夕見届候段、持場

詰家來共ゟ注進申越候。此段御屆申達候。以上

正月廿七日

松平相模守內

今辰之中刻過、小柴村沖ニ罷在候蒸氣船壹艘、本牧荒洲鼻貳拾丁目餘之所迄乘込、其儘船掛リ可仕候哉、模樣見定次第猶可申越旨、只今持場詰家來之者よ り不取敢注進申越候。此段御屆申達候。以上

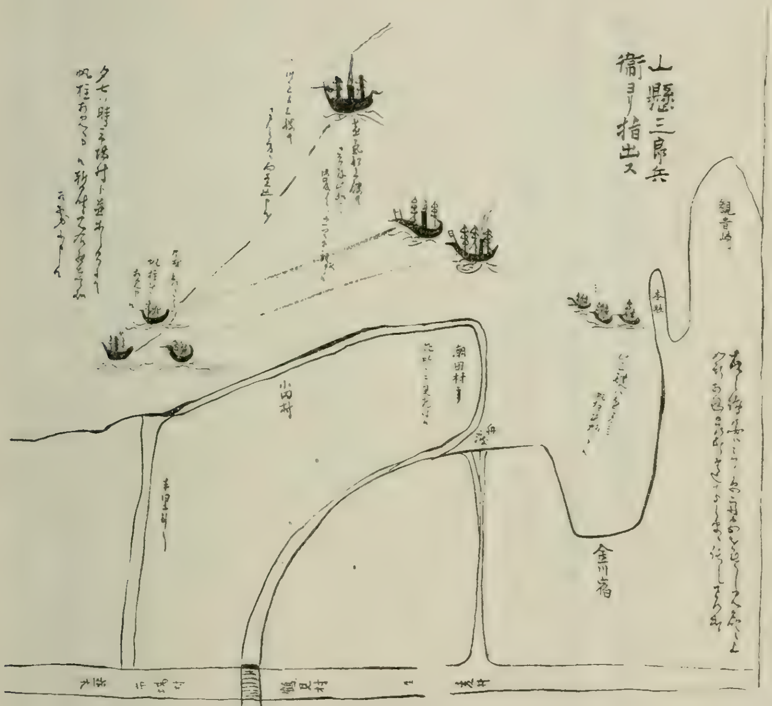
正月廿七日

松平相模守內

先刻御屆申達し置候、本牧荒洲鼻貳拾丁目餘之所へ罷在候蒸氣船壹艘、午ノ刻同所ゟ羽根田之方へ向乘入候旨、且小柴沖罷在候蒸氣船貳艘ニ而、同所漕出し、持場沖を越へ羽根田之方へ乘入候段、只今持場家來之者ゟ不取敢注進申越候。此段御屆申達候。以上

正月廿七日

松平相模守內



（左之繪圖ハ三郎兵衛齋宮を遣し見屆候上如斯相認差出候由之十郎兵衛へ託し差出候）

（蒸氣船三艘共晝後此處ニテ海岸より小一里相離居申候）

（八ツ過ゟ三艘共江戸之方へ向走込申候）

（夕七ツ時市場村ト並木之間にて帆柱相見へ申候暫時見合罷在候處相動不申候）

誠丸ゟ為知
追々致御屆候、夏嶋小柴村沖合ニ滯留罷在候異國船之內、今午刻頃より蒸氣船三艘傳馬船を先ニ立、追々內海之方江乘入、羽根田沖合ニ船懸り致候旨、付添罷在候番船之者ゟ不取敢注進申候越。此段致御屆候。以上

正月廿七日　　松平誠丸

今巳上刻、大森沖迄バツテイラ船壹艘江人數十四五人程ツヽも乘込、七艘罷越測量いさし居候。追々品川江も右船乘寄セ候樣子ニ御座候。此段御注進申上候。以上

正月廿八日　　櫻井藤四郎御預り
川口御番所詰

夏嶋沖ニ滯船罷在候異船六艘之內一艘、今朝四時頃本牧邊江乘寄セ碇を卸汐懸仕候。跡五艘も追々乘寄候樣子ニ御座候。富岡沖ニ罷在候一艘も、同所滯船罷在候。此段御注進申上候。以上

正月廿七日　櫻井藤四郎御預り　川口御番所詰合

夏嶋沖ニ罷在候異船六艘之内一艘、本牧邊へ乗寄碇を卸候段、先刻御注進申上候。一艘外貳艘都合三艘、午上刻頃神奈川沖ゟ船掛り仕候。然ル處、右異船よりハツテイラ船五艘乗出し、内四艘ハ生麥邊迄澪通測量致し罷在候。一艘ハ取戻夏嶋沖ゟ罷越候。此段御注進申上候。以上

正月廿七日　右同断

先刻御注進申上候神奈川沖ゟ乗込候異船三艘共、生麥沖迄乗入、少々之内船掛り仕、右之内一艘本牧沖迄引下ケ船掛り罷在候。貳艘ハ神奈川沖ゟ乗戻滞船罷在候。此段御注進申上候。以上

正月廿七日　右同断

異船本牧沖ゟ乗入候三艘之内、一艘本牧沖、貳艘神奈川沖ニ罷在候段、昨夜御

但唐船壱艘相残有之候外弐艘者今三艘住吉沖迄罷出夕七時頃乗入申候、右之
外壱艘者牧沖ニ乗居申候、此段御注進申上候、以上

正月廿八日　　　　　右　同　断

異人共陸路致し又ハ所々上陸致し民家へ入候を取鎮ニ参り候を打払候、之
へ立寄候ニ付其場所へ罷越候ニ付委細記録ニ而其旨御注進申上候由
御可被成候

正月廿八日　　　　　堀　織　部　正
　　　　　　　　　　永井主水正
　　　　　　　　　　井　関　[illegible]

異船ニ相成ニ付[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

一同斷羽田沖迄御船手乘出し、風波ニも罷成候節ハ、羽田江乘寄、御船手ゟ同所陣所江可申達候ニ付、前文同樣松平越後守へ可申繼候。
但二騎ニ而申繼候樣可致候事。
右之趣和泉守殿江伺之上申達候事。
正月廿八日　堀　織部
永井岩之亟
岩瀨修理
右阿州樣へ達有之由
正月廿八日御城御沙汰書之內
金二枚
時服二　御勘定評定所留役　水野正左衛門
金廿兩　支配勘定　上川傳一郎
松前幷蝦夷地へ爲御用罷越候ニ付被下之
右於御右筆部屋緣頰、伊勢守申渡之、遠藤但馬守侍坐。

川越藩より情報

一正月廿八日松平誠丸樣ゟ左之通
昨夜致御屆候通、蒸氣船三艘羽田沖合迄乘入候後、猶又小柴村沖合ニ殘居候、

異船羽田沖に來る

異船ノ義も、三艘共追々内海ノ方江乘入、最前乘入候蒸氣船共都合六艘羽田沖合ニ致船掛候樣子ニ有之、且又浦賀湊江戾居候壹艘ノ儀も、昨廿七日猶又内海ノ方江乘入、小柴村沖合ニ船掛り致段爲注進罷越候。水主ノ者夜中ニて候得共、見屆罷越候旨申出候。此段致御屆候。以上

正月廿八日　松平誠丸

幕府より出場の命令

一御當番御目付方御達書來ル

海岸屋敷有之面々、人數差出可申候。尤不事立樣穩便ニ取計候ノ樣可相達旨、和泉守殿ノ仰渡ニ候。依之申達候。以上

正月廿八日

岩瀨修理
永井岩之亟
堀織部
井戸石見守

御名（松平肥前守）殿
留守居

異國船並に夷人に對する取扱に關し鳥取藩よりの通牒

此度渡來之異國船內海江乘込、或ハハッテイラニ乘測量致候共、厚御趣意之儀も有之事ニ付、穩便ニ取扱、且滯船中永キ內ニ者退屈も可仕儀ニ付、揚陸等可仕哉難計候得共、嚴重ニ警衛而已罷在、必取合申間敷旨、於持場家來之者江御達之趣一同奉畏居候。乍去萬一臺場等江罷越備置候筒江手出し等致、亦ハ固メ人數之內江理不盡ニ人込候樣之節ハ、無據搦捕置可然候哉。

一異船渡來中、萬一異變之模樣有之節ハ、此度御達之趣も御座候ニ付、不奉伺御機嫌直ニ持場江出馬仕候心得を以、御內慮相伺候處、登　城ニ不及、出馬之儀ハ共節御差圖可被成下旨被　仰渡奉畏居、猶申上候ニ自由ケ間敷候得共、御差圖ハ無之候共、持場家來共ゟ注進之次第ニ寄候而ハ、臨機之儀ニ付直ニ出馬仕度奉存候。

右之段猶御內慮相伺度、各樣迄申上候樣相模守申付候。　以上

正月廿四日　　松平相模守內　永見鎌吉

（幕府よりの指令）
翌廿五日御書取

伺之通相心得可申候事

昨日御注進申上候通異船五艘生麥江掛り、壹艘ハ本牧沖を乘通候段申上候處、此壹艘も御持場沖乘越申候間、浦賀奉行江左之通御屆、

昨日御屆申上候通異國船五艘、相模守持場乘越し生麥沖江滯船仕、跡貳艘之内、壹艘沖江相見へ候處、是ゟ持場乘越申候。此段御屆申達候。以上

正月廿八日　松平相模守内
岡部善右衞門

今夕水戶前中納言殿俄ニ御登　城被有之候樣被仰出候由、御役人溜詰も今夕登　城被仰出。

老中方溜詰夜四ツ時退出と申事。

異國船乘入早盤木之節心得方伺書

異國船渡來ニ付、萬一異變ニも可及樣子ニゐ早盤木打候とも、越前守登　城幷出馬等之儀、別段御達御坐候儀ニ相心得候得共、爲念此段奉伺候。以上

正月廿八日　松平越前守内
大道寺七右衞門

(付箋)
此度ハ不及登城候。出馬之儀ハ其節及指圖候。

正月廿九日

池田慶德浦賀圖を返却す

小姓堀・小栗をして川崎邊を視察せしめる

○廿九日　西洋二月廿六日

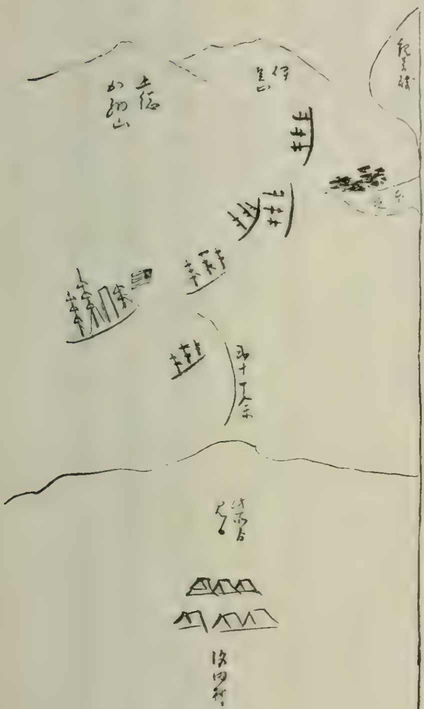
今夕相模守ゟ返書中

前略、先日拜借仕候浦港圖返納仕候。御落手可被下候。將又何ゟ事騷々敷只ならぬ様子ニ相成候哉ニ被察候。後略

別紙中

水戸前中様ゟ昨日夜中退出仕候云々と有之、

以存異船爲見屆、小姓頭取堀連之助小姓小栗五郎太夫兩人川崎邊まて差越、六



老中公用人の話

木更津の水主仁右衛門の見聞談

品川沖三番臺場附近の水深を測る

夷人品川臺場を冷笑す

鈴木主稅よりの報告

ツ時過歸ル、指出圖左之通、

三郎兵衛ゟ山城迄申越、以留守居七右衛門、和泉守公用人迄物語之書付

昨夜五ツ時頃、上總國キサラスと申所之者之由ニ而、水主仁右衛門と申者薪を舟ニ積當宿御本陣鶴岡市郎右衛門方江參り相咄候ニ付、三番御臺場邊ニ、傳馬船ニ似寄候船五艘、一艘ニ五六人計も乘込居候樣子ニ而、玉を水中へ投入糸ニ而深淺之尺を取候樣ニ見受候と相咄し、右仁右衛門直ニ上總國江立歸り申候。尤仁右衛門住所之儀ハ上總國と斗り承知致、何郡何村と申儀相譯り不申候旨、市郎右衛門申聞候。

正月廿九日

品川宿

下役　繁　次　郎

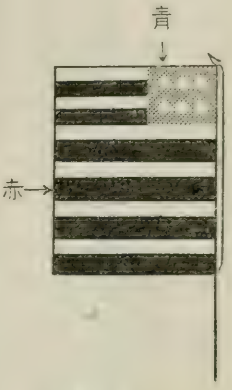
右品川之風說ニ而ハ、夷人共三番御臺場之上へ登り致一笑候由。

鈴木主稅ゟ指出

一小柴浦北岸巖あり、其いまをに白き粉ニ而  と認有之候、此ハ廿一日アメリカ人の書候由。又ゑほし嶋へ白き小旗をまほれ殘し置候。及「ハッテーラ」ニテ内海を乘り廻り候事ハ日々之由。

一廿七日蒸氣船三艘本牧内乘入候注進、追々浦賀へ來り候沙汰。

一同日晝後我舟、彼ノ浦賀へカヽリ居候軍艦へ罷越、應接有之、畢て引取候へハ、直ニ彼ノ舟仕度いさし内海へ乘込申候。七時前



アメリカ船印

浦賀沖隠れ申候。

一右之儀ニ付、浦賀表も此間ニなくそふ〳〵敷御さ候。何之處へ運ひ候哉相分り不申候。

一廿七日七ッ時過か、なしなくり船ニて追々與力抔内海へ罷越申候。

廿七日晩認

此間入貴覧候書取後

一廿三日、組頭黒川幷與力、彼ノ舟へ罷越懸合有之、明廿四日やのた浦應接場へ異人罷越、諸役人と對面有之候様約定有之候由。

一廿四日、與力彼舟へ罷越、彼ノ舟ニ乘りなろら浦賀やのさ浦迄罷越候筈之處、風雨强く相成候ニ付、觀音崎沖迄出し候處、出し兼候ニ付、又々猿嶋北沖迄

正月廿五日屋形浦に於ける應接の樣子

應接人

返翰の受領には江戸表を要求するとの態

戻し帆を下し居候由。

一廿五日四ッ時過、軍船浦賀沖迄出し、夫ゟバッテーラ二艘ニ而、異人上官之者十人餘、水夫三十人計ニ而屋かた浦應接場へ上り候而、諸役人ト應接有之候由。其上種々之饗應ニ而、九ッ時前より七ッ半時比迄上陸いたし居候。歸りし節は、上官之者ハ我舟ニ乘セ歸候由。何も酒ニ醉候而亂雜いたし候。水夫之者抔ハイタキ候程之者も有之候由。

我應接人

林大學頭(一)井戸對馬守(覺弘)浦賀兩奉行組頭兩人松崎滿太郎

一右應接之沙汰

屋かた浦ニ而御返翰御渡ニ可相成之段彼へ申聞候處。彼云、何之國ニても書翰を受取候節ハ、城下ニ而受取候間、何分ニも江戸表ニ而受取度候段申張り候而、決定不致候由。

但此說實非不詳候

一同日、異人開祖ワシントン誕生日ニ付、空炮百斗も放候由。浦賀沖之舟ニ而も九時前十七はなし以為し候。右之趣昨廿四日彼ゟり達し有之候由。

公品川御殿山の固場を視察せんとし幕府に内請す

小姓近習番の品川持場の視察

浦賀の情報

一廿七日、又々異人屋ゟ〻浦へ罷越應接有之候由。

廿七日朝認

此度浦賀表へ異國船渡來ニ付、品川御殿山邊御警衛被　仰付、人數差出候儀ニ御座候。右ニ付場所幷備向〻様子致見分置度奉存候間、供連極省略仕、野服ニ而相越、猶又取締方嚴重申付度奉存候。不苦儀ニ可有御座哉、御内慮奉伺候様越前守申付候間、此段奉伺候。以上

正月廿九日　　名内　大道寺七右衛門

明日小姓雨森藤四郎・大谷孫太夫、近習番猪子善十郎、品川持場幷異船爲見屆差出候段以十郎兵衞内意申渡之。十郎兵衞ゟ相願萩原金兵衞も罷越度段願之通りと申付之。

大道寺七右衛門申候、遠山三右衛門浦賀へ罷越懇意〻由、與力中島三郎助噺左〻通り

此程夷人上陸應接〻節、上官アハタムスへ〻井戸對馬守・鵜殿民部少輔上にゐる

夷人の應接に有平糖と九年甫と酒

下官夷人の醜態

すを始對面、中官へハ與力、下官へハ同心、先有平糖ニ茶差出候後、九年甫一鉢ニ酒出し候趣。上官ハ眼の淵赤く成ネと給へ候由。下官隨分給へ候ゆへ銚子を取上候處、下官ハ夷人堪へ兼候而、臺所まて參り酒々と申賴候ゆへ十分ニ相渡し候處、餘程澤山ニ給へ候由。舟中ニ而も分量有之趣まて、不被呑候ゆへ、ハメをそつし相傾候よし。歸りハ節抔ハ中々へロツキ、四五拾間ハ所歩兼、ハツテーラ江我方の者乘せ遣し候處、漕兼候ゆへ我方ハ者漕遣し候趣。舟中へ歸申候所直ニ喧嘩をそしめ、五六人ニて取押へ候由。我方何、猿コトキものと被察候趣。中々兵端聞きそふなるものニ而も無之由、咄し候由。

二月朔日

小姓等の視察

幕府役人本牧に出張

○二月朔日　洋暦二月廿七日

中根靱負御殿山へ罷越。

雨森藤四郎・大谷孫太夫・猪子善十郎昨日申付候通り今朝指越、荻原金兵衛ゟ願ニより今朝罷越。

午刻勘定奉行松平河內守（近直）・江川太郎左衛門、御馬役一人早馬騎三本牧迄罷越候由、被仰含候、御用と申事之。

御殿山視察の內願許可

夕方昨日差出候持場巡見願書付下り、御指圖左之通り、
內意之趣不苦候事

老中阿部正弘に呈書

翌日阿部伊勢守江指越

米艦の江戸灣內測量等に關し臨機の處置あらんことを建言す

態々一翰陳述、兎角寒暖不揃之候、先々愈御清安被成、御勤務珍重之至存候。然ハ、異船追々內海江乘入、或ハ小船を以品川邊迄罷越、海底淺深致測量候抔、實ニ　御國法を輕蔑仕候儀ニ而、日夜苦腦切齒之至奉存候。右測量仕候事故、追々品川內迄も乘入候所存ニも可有御座、右樣之形勢ニ至り候儀ハ、實ニ狡猾不屆之次第ニ御座候。是非此處ニ而何とぞ御所置筋無之候半而ハ、實ニ恐入候外無之奉存候。殊ニ當時平穩と申奥儀之深慮計兼候へ共、此內彼ゟ兵端を開き候と申ニも無之候共、不法ニ上陸いたし候ろ、又ハ空炮等打懸候ハヽ、如何之互忠相發し可申とも更ニ難相斗奉存候。其上品川備場江往來仕候家臣共ゟ承候而も、都下平々繁華之趣、右ハ全ク御鎮撫之御趣意ニ而重疊之儀と奉存候得共、所謂寢耳ニ水之譬諭之通り、彼より脱兎之勢を示し候て、一時ニ擾亂可仕、大廈之覆一木之支る所ニあらさる勢ニ可相成奉存候

土屋十郎右衛門の報告

林町の固場

濱川の臺場

大森の固場

得ハ、今一際海岸御嚴重ニ被成置、都下江も何とそ覺悟御示し之上、異船へも嚴重御諭告御座候様仕度儀と奉存候。只平穏と申内ニ一異變等出來いたし候様ニ可相成哉と、實ニ横胸御案し申上候餘り相認候。定而於公邊ハ、深重之御趣意可被爲在候得共、傍觀いたし候て相考候得ハ、片時も不安御儀、尚又深御勘考被下候様奉存候。只々御大事之御儀何共絶言語候。要用而已草々申縮候。不悉

土屋十郎右衛門ゟ指出ス書面

一御林町間部(鯖江)下總守殿下屋敷門前江固メ場所幕張出來、屋敷内出見張番所二ヶ所出來有之候。

一濱川町松平(高知)土佐守殿下屋敷前ニ臺場九ヶ所出來有之候。

大森松平隱岐守(伊豫松山)殿固メ場所左ノ通り

一持場左右ニ幕番所出來、銕炮飾り足輕二人宛上役一人つゝ相詰居候。

一同斷左右ニ松平隱岐守固メ場所と相認立札有之候。

一大筒九挺、臺場三ヶ所相ニ半丁ニ一ツヽ陰レ、土手八ヶ所高サ壹間長サ

五間幅壹間ニ出來有之候。
一物頭以上陣屋自分幕張有之候、高挑灯右同斷。
一御持場左右番所内ニ留守居方役所出來有之候。
一人數之儀ハ一番手斗五百十五人斗之趣。

羽根田固場

羽根田大森松平(備前)阿波守様御固メ場所左之通り
一大筒　公儀拜借共九挺、外ニ野戰二挺有之候。
一人數之儀ハ二番手共八百五拾人斗之趣。
一陣屋之儀ハ、大森御角場内ニ長屋出來有之候。
〆

異船の動静

一異船之儀ハ、晝九ツ時前猿島邊ゟ本牧を越し、江戸方へ三里程乘入申候。
一生麥迄罷越候處、神奈川沖江異船乘入候ニ付注進之者數多見受、其上潮田村沖ニ相見江申ニ付、直樣罷越度候得共、渡シ場有之少シ手間取漸ク爲越、右潮田村江駈付海岸ニ而見分いたし居候內、異船三艘相動キ無程羽根田之方へ乘入候ニ付、不容易儀故早速御注進可申上と、急き小田村を越江市場村と川崎宿境江罷越、異船如何と見返申候處、三艘共最初乘入候所ニ相止り居申

候。

右之通ニ御座候。以上

正月廿七日

岩屋源兵衛

出淵傳之亟組
林勘太夫

村田巳三郎の品川沖測量の報告

村田巳三郎昨夜差出候書付

六半時比、洲崎出船仕り、初め之見積り先大船江戸内海へ之通路相尋、夫ゟ次第ニ處々海底淺深相測り、旁若々異船相通り候儀も可有之哉見屆申度、先一ノ御臺場迄著。夫ゟ二ノ御臺場近く迄乘候處、其時分次第ニ干潮ニ相成居止り難く旨水主之者申聞候ニ付、又々一ノ御臺場へ乘戻り候處、北風强く相成沖合へ乘出し難き旨水主申聞候ニ付、海岸之方へ着申度處、着不被申ニ付、近く之洲へ乘付居申候。八ツ時前迄其所ニ繋り居候處、そろ〳〵滿潮ニ相成、風も靜ニ成候ニ付、又々漕出し近邊壹里内外之所處々測量仕候。

一ノ御臺場内深サ四尋計、大船ハ惣して此所を通船仕候。二ノ御臺場之間ハ小船斗通行、大船ハ通行相成不申由。尤滿潮之時の事也。三ノ御臺

場ニてハ愈以て水淺く、中々大船ㇾ通行抔ハ思ひも寄らぬ事と申聞候。

洲ノ崎邊　一尋半。

濱賀沖　二尋斗。此邊ハ随分近邊ニてハ深き所ㇾ由。

但右御臺場ゟ一里内外ㇾ所ハ、十分滿潮ニても三尋ゟ深キ所ハ無之由ニ御座候。

右水主ㇾ者昨年

公邊御役人同船ニて、江戸近海より外側ㇾ所委細ニ測量致し候者ㇾ由ニて、委敷物語仕候。羽田ゟ内ニてハ十分滿潮ニて七尋斗ㇾ處ろ至て深き所ㇾ由。大森内ニてハ五尋斗ㇾ所深き所と申聞候。

野村淵藏ゟ差出候書面

一廿七日異船神奈川沖へ乘込候ニ付、與力近藤良次を江戸表江指越、松平和泉守樣・石河土佐守殿江懸合可致儀ニ付、七時過押送船ニて罷越候。

一同日與力香山榮左衞門異船江懸合可致儀ニ付、七時過押送船ニて罷越候。

一同日因州侯より浦賀奉行江御屆有之候。右御屆ㇾ儀ハ御預ㇾ御固め場

所ニおゐて、異人無禮を致候節ハ、打拂候間此段御屆申置候。 江戸御伺濟し上し由。

右實否不詳候。

一廿八日押送船ニ而、今朝ゟ追々四艘番船乘出し、大森沖異船爲固出張ス。

御番船乘組員名

與力 樋田多太郎　同心 土屋縫左衛門
同心 山崎金兵衛　同心 山本增五郎
〆
與力 堀芳次郎　同心 岩田源十郎
中田佐太郎　込山新五郎
〆
與力 岡田增太郎　同心 吉村弘右衛門
青山鑛平　土屋又助
〆
與力 元木甲四郎　同心 福西道助
山本金大夫　土屋喜久助

ペルリ等乗組員の様子

廿七日朝浦賀出帆之船ニ而申聞候ハ、其日ハ浦賀口ニ異船壹艘、本牧沖ニ異船六艘懸り居申候。浦賀ニ而ハ異船ニ貳艘之御番船付居申候。本牧近邊ニハ處々ニ御番船附居申候。ハッテーラ抔ニ而乗廻り候様子ハ少も見受不申旨申聞候。

廿八日七時本牧ゟ這入候船之者申聞候て、本牧ニ異船一艘、生麥ニ六艘繋り居申候。内三艘ハ車付の船なり。壹里斗沖合を所々小船ニ而（但ハッテーラの事なり）乗廻り候を見受申候。其跡より浦賀御番船つきあるき候由。夫ゟ江戸表之方ニハ處々ニ御用船相見へ候旨申聞候。

一亞墨利加蒸氣船三艘、各乗込六百人程、惣將官ヘルリ、人至而宜敷、日本左大臣ニ當り候由、腕ニ金の輪三ッ。右船上之段ニ大筒コルヘット四挺、下ノ段ニ二十四挺、船（シユスケハンナ）長サ三十七八間、將官之舟印赤白タンタラ筋、〇コルヘット三艘、長サ廿七八間、船大將一人ツヽ、ブカナン〇アーダンス〇コンチー各金輪二ッツヽ、腕ニ附け、メキシコ言葉の由。日本通詞一人、紅毛人之由。醫師體之者外ニ紅毛通詞澤山居り候由。

支那人は犬の如く扱はる

一十四日ニ乗込候異船六十人乘、内三十人斗清人之由。此人ハ犬之様ニ取扱候由。

夷船へ食料を贈る

一廿三日黒川彼船へ罷越候節、彼へ贈り物左之通、

丸　子　五千　鷄　五十羽

九年母　五十箱　青　菜　四百把

葱　三百　大　根

まんしん　柿

右船二艘ニ而乗贈り候由

廿五日應接の狀況

一廿五日屋形浦應接場ニ而應接有之、種々饗應有之候由。

我云、御返翰も追而此所ニ而御渡可有之段彼へ申聞候處、彼云、何之國ニ而も書翰請取渡ハ城下ニ而可致候。其上浦賀沖ハ船懸りも惡敷、且此所ハ場所も狹く麁末ニも候間、何分にも江戸之方にて受取度段申張候而不聞入候故、

返翰の受取場所に就いて

又々廿七日ニ應接可致旨申聞候而、其日ハ相濟候由。

一彼云、御返翰御渡之上ヘ、船中ニ而開封いさし、時宜ニより御懸合可致候。

此段國主方申付置候と申候由。

米艦大森沖に進入す

一廿七日再ひ應接場ニ而應接可致約定之所、彼より俄ニ斷候而、彼之船を悉く大森沖へ乘込候由。

米人將軍に面謁を希望す

異人本意ハ、

上樣ニも致御對面存意可申心底之由ニ候間、何レ閣老中御對面ニならてハ承知致間敷勢之由。

米人の觀る日本人

一彼云、日本國ハ國ハ小サく候へ共、所ハ宜敷且義もかさく、一段約定いさし候へハ其事を長く守る國まて、アシャ洲第一之國なり。只惜むらくは固陋偏固にして他國ニ通信せず、交易をなさぬ、是全く固陋ノ僻なり。夫故我より其儀をさとし、日本よりも諸國と交易通信致候樣教訓之積りと由申候。全く交易を願抔之意ニハ無之候由。

一我より、浦賀より內ハ國禁ニ候間外へ戾し候樣抔申候へハ、彼云、國禁とハ何之事ヤ抔申候而却て內へ乘込候勢之由。

幕府浦賀役人の眞意

一浦賀諸役人存意ハ、何分ニも此度ハ通信なり、交易なり、彼ら存意ニ隨ひ候而無事ニ歸し、其上ニて折角軍艦大炮等出來いたし、出來上り候上ニて斷不致候而ハ致方無之、然るを我より義理をのミ申張候而ハ、却而我より害を取

野村渕蔵の私案

出候事ニ而、無益之事と申候由。

一我より彼是申候而、彼か存意ニ叶ハす候時ハ、彼云兵端を好ニハ無之候へ共、彼是申候而己か意よ随ハさる時ハ、兵端ニ及ふ抔申候由。

一右之勢ニ候間、此度ハ如何之所江運ひ候哉難斗候。彼か存意に随ふ時は無事ニハ候へ共、左様ニも難成、我か義理通りにいたし候時者兵端ニ及ひ候も難斗、併此義ハ我か方ニおゐて至て禁物之勢と奉恐察候。

愚按ニハ、應接場ハ其儘屋形浦ニ而幾重ニも取扱致候而、内海ニ而ハ浦賀役人ハ取扱難致段彼江申聞せ候而、其儘ニ一月ニ而も十月ニ而も捨置候而、彼より無禮抔致し候へハ、夫者夫々之御警衛より御國躰抔辱かしめす候様いたし候へハ、我方ニハ武威も強く相成、且約定も不違候故、取扱いたし易く、彼か方ニ而ハ空く月日か立、其上應接も不致候而ハ無益之事故、必屋形浦江戻り候事は必定と奉存候。然れ共、是非もなき勢ニ相成申候。此末琉球の如く、御城内へも入候勢に相成候も難斗と奉恐憂候。廿九日朝認

幕府老中よりの達

海岸御用番松平伊賀守ニ而左ノ書付被相渡

袖ら　松平越前守

應接場を横濱に變更す

此度渡來ノ亞墨利加船浦賀表ニおゐて應接可致筈ノ處、浦賀沖ハ波荒ニ而船繋難致旨申立候ニ付、本牧横濱邊ニて應接有之候間、被得其意御備向彌油斷無之樣可被致候事。

香西等の視察

明日香西敬左衞門・川村藤一郎・眞田五郎兵衞・今村重太郎・稻生忠之助異船爲見屆遣之。内意以十郎兵衞申渡之。

大道寺の報告

七右衞門黑澤ニ而承り候由。異船何も相替候義も無之、應接場彌本牧小名横濱邊と申所ニ有之、右小屋是より相建候ゆへ、四五日過不申候半而ハ應接ニ相成申間敷由。且又昨日水戸前中納言樣溜詰始登　城ハ應接場ノ事ノ由。

情報により慶永公の批判

永考、(鈴木主稅)鑾城ゟ指出兵端開候事、交易通信御免許等ノ事なるへし。ワさと黑澤如斯申。矢張平穩を祈るなるへし。黑澤又機密を漏泄そる筈無之。

生麥の邊上陸米人の行動に就いて

風說ニ而ハ生麥邊上陸いたし麥をとり候てひたし物ニいたし、或ハ百姓ノ江戸腹掛を無理ニ所望いたし貰受、又ハ火ノ用心と有之候たば粉入を是又無理

に貰候由。上陸等いたし不法自儘に致擧動候趣。

雨森藤四郎始三人五ツ半時前歸る、萩原金兵衛同斷。

公の發句

發句　仰ミてそありしられぬ雲之上　　慶永

二月二日

○二日　遠西二月廿八日

今朝俄に淺井權十郎小姓へ申付、小姓香西敬左衛門始昨夕申付候通り異船爲見屆指越。

昨日之由今夕承る之。

川口番所よりの注進

異國船五艘生麥沖に罷在候處、今夕七ツ時過神奈川沖江乘戻船掛り仕候。夏嶋沖に罷在候異國船壹艘、本牧沖江同刻頃船掛り仕候。右之段御注進申上候。以上

二月朔日　　櫻井藤四郎御預り　川口御番所詰

今日品川御殿山邊警衛場爲巡見罷越可申筈之處、雨天相成候に付延引、明日と申付、雨天に相成候ハヽ猶日押之積に候也。

猶山城品川に赴く

今朝家老猶山城品川持場へ用向有之罷越。

一風說にてハ、異船六艘之內壹艘甚敷臭氣有之由。右ハ食糧等積置候にても

有之候哉と申事。

毛受鹿之助出府

番頭毛受傳三郎悴鹿之助、一昨日夕到着。昨日目見申付、直ニ持場へ罷越ス。傳三郎を大炮隊番頭、鹿之助ハ白備平本平學と替ル。平學を免し、役前相勤候様申付候ゆへ、黄備之中ニ入る。

此外別段相替候義無之趣。

御用飛脚よりの傳聞

狛山城五ツ時過歸ル、直ニ逢フ。

集懸竹ニ挟候御用飛脚三人ニ逢候故爲尋候處、中ノ一人咄候趣、浦賀沖へ十二艘程異國船相見え候由。

狛山城の報告

歸り之節、右之御用飛脚一人ニ逢候處承候へて、浦賀へ一艘乘込候様子、多分アメリカニ候哉と申由、山城申之。

山城馬ニ而生麥迄參り候處、權十郎、敬左衛門抔ニ逢候由。

異國船六艘、昨日ゟて餘程沖合へ出候由。右て昨日餘り干汐ニ相成候八丁斗りゆへ、是迄懸り居候所迄も干汐ニ相成候へハ、迷惑いさし候由ゆへ、俄ニ打驚き六艘とも餘程沖合へ出候由。矢張見通しハ昨日之通り之由。矢張離れ懸り居候由。山城共邊之漁師共へ承候處、右漁師小舟ニ乘り異船近く參候處、彼ら手

福井藩人數に對する風說

狛山城に命じて之を取締らしむ

東海寺陣所の門限を定む

招いたし候ゆへ、ざん／＼と參候處、漁師ニ食物所望申候由。斷り候所彼より
パン樣ミ物出し遣候由。漁師舟中持合ミ食物遣し候處、夷人悅喜いたし候由。
右漁師持歸湯へ入レ候處、キラ浮候、多分アブラニて製し候品と存候段相咄候
由、山城申聞之。

夷人海岸ニ臺場或ハ幕張有之所を甚掛念いたし、前へも到泊不致、矢張鐵炮を
畏懼をるなるへしとミ事。　昨日横川吉十郎罷出、靭負へ相咄候由ハ、御家ミ御
人數近頃ガサツニて、品川宿ニて買物いたし候あも代料拂不申由、御カツ引抔
な調へ候由。　阿部樣右内々御承知被成御氣ミ毒思召、尤越前守樣御始上役ニ
あハ承知不致候とも、自然表向ニ相成候ハヽ落度相成候事故、御内々申上候樣
吉十郎伊勢守殿側へ被召呼被仰聞候旨。　依之、今日幸山城罷越候ゆへ、御殿山
へ申遣し候處、何レも申談、若押乞或ハ買物代料拂不申向も有之候ハヽ、御家御
人數ミ印有之候者ニあも、又左ふき者ニあも留置、品川東海寺目付方迄申達候
樣宿役人呼寄申聞候由ミ處、宿役人も殊ミ外悅ひ候由。　爲心得右ミ趣猶又下
々迄申渡〆り相付候由。　且又上屋敷ミ通り東海寺表裏門共六ツ時限りニ門
限いたし候由。　山城申達之。

三の臺場に上陸は虚說なり

先日三ノ御臺場邊異船ハツテーラをもつて乘廻し、或ハ三ノ御臺場へ上陸いたし候抔ハ多分虚說ニ可有之。其子細ハ其邊中々淺くしてハツテーラも參兼候由。夫ゆへろ昨日ゟハ品川沖邊へ番船數艘出、守衞いたし居候由山城申聞之。

金川應接場

本牧横濱應接場と被仰出候へ共、實ハ金川横濱ㇾ由。金川ゟ横濱迄一り餘、本牧ゟハ二里斗りㇾ由。右ハ可成丈浦賀近くの應接と申御趣意ゟ、本牧と相成候ニ而も可有之哉ㇾ沙汰ㇾ由。山城申之。

幕府の巡視

正月廿九日見廻り

御使番

稻垣金之丞
大久保彌七
本多彌一郎

二月朔日夜見廻り

御使番

大久保外記
細井惣左衞門
酒井織部

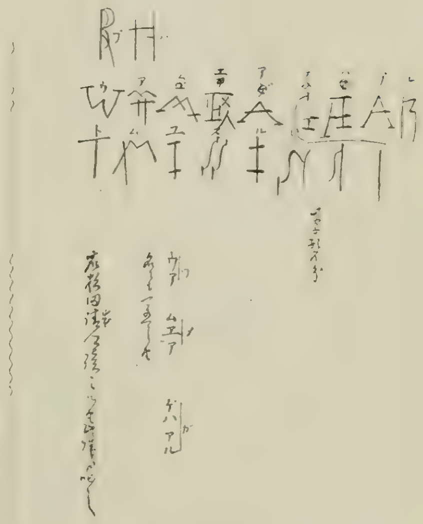
御徒目付　太田子之助
御小人目付　芦山鍬五郎

正月廿九日見廻り御使番ニ、御殿山迄罷越、臺場へは不參候由、致逢對候て引取。
朔日夜見廻りニ委ク穿鑿いたし、臺場へ罷越致見分候處、殊ㇾ外致感心恐入候と申聞之。其節出張ㇾ人數役名尋ニ付、其場にて淸右衞門指出候由。

松平越前守家來
一番手
士大將
山縣三郞兵衞
番頭
平本但見
大番士貳拾人
鈴木主稅
大番士貳拾人
物頭

兵粮奉行兼
勝木十藏
目付兼
出淵傳之丞
留守居兼
有賀清右衛門
日比彦之丞
銕炮足輕百貳拾人
銕炮頭
堤七太夫
眞杉所左衛門
山品政八郎
前波與八郎
福田甚三郎
川村半左衛門

尾高治部之助
上坂平八郎
銕炮足輕貳百四十人
大炮方
番頭
毛受傳三郎
同諸士以上
八拾人
大炮方
足輕百七拾三人
〆
外ニ倍臣士以上三拾八人



ワ　メ　ガ
ウア　ムヱア　ゲハアル
名ニも可有之候由
右杉田成卿讀ゝ候由山城方咄之

阿部方御內移有之候。猶又相調候處、此程日雇方ゝ者泉湯ニ參り、湯錢拂不申、且荒子ゝ內ニも少々心得違ゝ向も有之哉ゝ由ニ候。山城咄之。

本牧橫濱へ應接場相極り候ニ付、其節ゝ爲御固メ小笠原侯(小倉)被仰付候由、於途中承候段山城咄之。

佐々木權六の報告

昨夜佐々木權六罷出候由ニ而逹ゝ書付

一蒸氣船三艘軍艦四艘、川崎沖へ滯船罷在り、廿九日同樣少も場所相替不申

二月三日

先月廿一日幕府へ請願の件許可せらる

鐵炮拜借のこと

候由。

一朔日夜四ッ時過何處之船とも不知注進船壹艘乘來り候ニ付、承り候處神奈川之方へ少々近寄候趣申候。併急度慥ニ者不申聞候。

一私船初め一ノ御臺場ゟ二ノ御臺場へ近寄、夫ゟ壹里半計漕出し、大森沖迄乘廻り候、何お怪敷船見受不申候。

佐々木權六

雨森藤四郎、大谷孫太夫圖差出左之通り

○二日　西暦第三月第一日

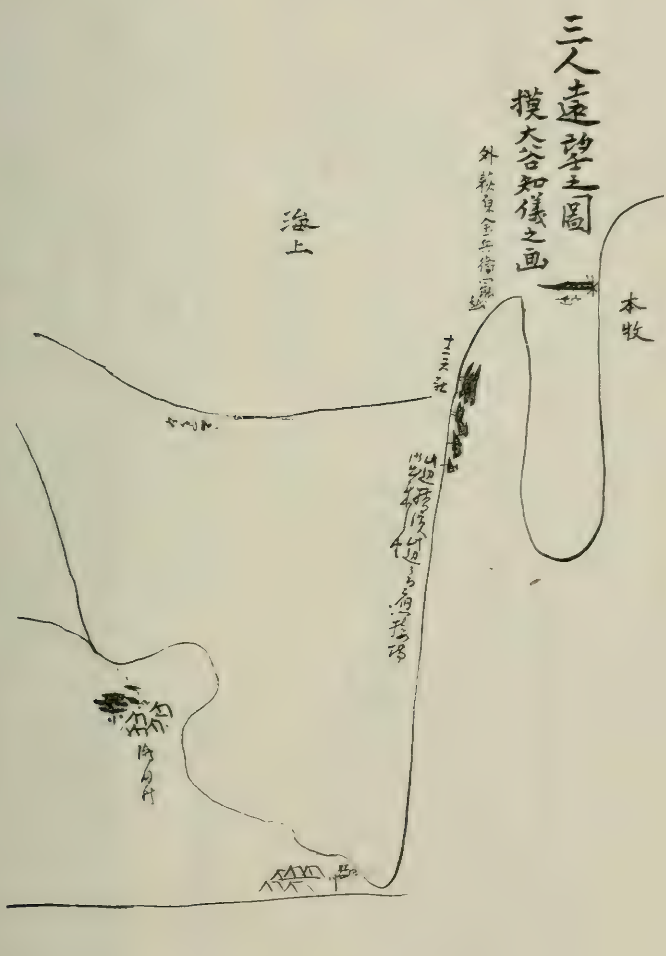
先月廿一日松平和泉守へ差出候△之願書、昨夜御指圖有之、右御指圖左之通り、

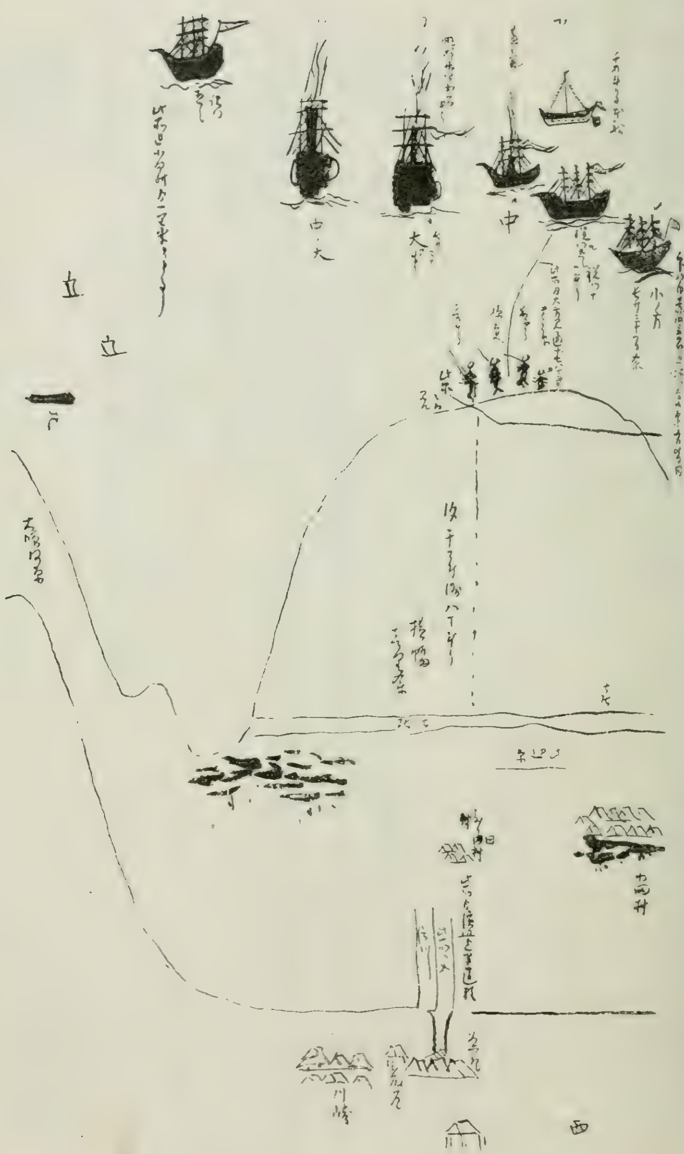
尤△之御書付も相下る　御書取

品川獵師町江假臺場取建、土取人足相對を以遣方いたし候儀者、可爲勝手次第候。　且又八寸徑御筒壹挺、五寸徑御筒二挺、壹貫目御筒五挺玉藥共拜借被仰付候間、請取方之儀者御留守居相談候樣可仕候事。

右ニ付竹橋御鐵炮藏迄杉浦幸右衛門及市川齋宮指越。

横濱沖遠望の圖




中
川崎
西

松榮院様の立退場所に就いて

御住居御附御用人ゟ指出書取、
異國船渡來ニ付、萬一異變之場合ニ相成候節ハ、
松榮院様
御本丸江御立退之積相心得其段申上置候處、
右　御立退之儀、猶又
御本丸へ奥通し問合御坐候處、
松榮院様ニも、松平越前守本所中ノ郷屋敷江御立退被遊候様、大奥ゟ申出候
旨女中申聞候。依之御道書相添、此段申上置候。以上
寅二月
河合與左衛門
舊井宇兵衛

御立退道筋書

非常之節
松榮院様御立退被遊候御道筋
御住居御門ゟ、神田橋御門外御勘定奉行本多加賀守御役宅前通り、筋違橋御
門外右へ、佐久間町通り藤堂和泉守屋敷前醫學館前脇七曲り、御藏前通り駒

形ゟ右へ大川橋御渡り、左へ本所中之郷松平越前守屋敷へ被爲入候。

右之通りニ御座候

二月

異國船渡來ニ付、万一異變之場合ニ相成候得ハ、

松榮院樣中之郷御屋敷へ御立退被遊候樣、

御本丸大奥ゟ御差圖ニ付、別紙之通り御掛り本庄安藝守殿へ申上候。右ニ付而ハ中之郷御屋敷御坐所ニ可相成、御場所初夫々御差支無之樣可被成候。

一體ニ御損所も可有之義故、御〆り場所等之義も厚御手當可有之義ニ候。

且又万一

御立退ニも相成候はゝ、御固メ等之義如何御心得有之哉。右御屋敷之義ハ、

一體淺間ニ而御〆り等之義も御手薄ニ有之、

松榮院樣　御立退被爲在候内、御附幷御表ゟ之御附人斗りニ而ハ、御手薄ニ而安心不致候間、御表ゟ御固メ人數御指出有之儀と存候へ共、甚心配いたし候ニ付、前以此段及御掛合候。　否御答有之候樣存候。

二月　御附　御用人

波々伯部熊藏殿

今日土屋十郎右衛門持場へ指越。

松榮院樣御立退場所に就いての異論

右御住居一件ニ付、山城始とも夫々致評議候處、右樣ニ御住居ゟ申出候義ハ甚不審ゝ至、其子細ハ先日與左衛門も是非異變ゝ場合ニ相成候へハ、御城へ被爲入候御積ゝ由申候。　又中ノ郷抔と甚不得其意譯柄、迚も御坐所ニ取補理候義も相叶不申、又此中ニ而御手入等有之候而ハ、混亂中ゝ御普請、其上御人も不足いさし、迚も御固メ人數抔と申義ハ存もよらぬ御事ニも候。　且又御曲輪內さへも御立退と申候ニ、大川を隔御固メ等無之中ノ郷へ、被爲入候ハ第一不審ゝ至、御途中さへも御危難ゝ至ニ候間、是非御城へ被爲入候樣致度、乍去外ニ致樣も無之ニ付、磯岡ヲ辰ノ口へ遣し、伊勢殿へ內談ゝ方可然と申評義ニ相成候ニ付、右ゝ事狀逐一磯岡罷出申上候樣靱負ゟ磯岡へ申達之。

磯岡をして幕府と交渉せしむ

磯岡支度いさし辰ノ口へ罷出。

杉浦等市

一杉浦幸右衛門・市川齋宮罷歸り、竹橋御藏へ罷越引合候處、明日御筒御渡可相

川齋宮と共に幕府より拜借の大炮を調査す

成由。右何レも水戸樣ゟ御獻上ミ御銕炮ミ由。八寸徑を陰陽御筒、五寸徑ハ八封ノうちミ趣。跡壹貫目を迚も御用ニ相成兼候由。尙又御土藏ミ内御銕炮拜見いたし候處、何レも古流ニ而、中ニて千貫目餘ミ目方乃御銕炮有之、玉目壹貫目位、何も田付カ井ノ上ニ而候哉と申之、其御筒細工至而宜敷、且奇麗ミ由、誠ニ夥敷有之由。二十寸ランゲ忽炮一挺有之、玉藥無之、其外附屬車臺共仝備相成居候由。玉無之ゟ殘念と申事之。

磯岡交渉の結果

中根靭負申達候て、只今磯岡辰ノ口ゟ罷歸り承候處、磯岡段々勢州侯へ右ミ趣申上候處、ソレハ存外ミ儀ニ候。さとひ御固人數御仝備候とも、御嚴重ミ御曲輪内御立退と申程ミ場合ニ至り候を、御固も無之中ノ鄕抔とハ餘りつ遠らぬ御事ニ候。則於　公邊て神田橋御住居ミ儀て、御本丸と申御積ニ候。仝く女中ヲ始御附御用人おしらへ、中ノ鄕といたし候ニ間違有之間敷存候。委細含居候間、明日此方表迄御願書出候而不苦候。明日御附御用人以下見分ミ積ニ候由、夫も斷り候而宜候間、左樣相心得罷歸、御役人へ申達候樣御願書（願書草稿磯岡持參）入披見　是ニ而宜候旨、御沙汰ミ由。

タス出來

今日タス出來、靭負ゟ指出、精工可驚〳〵。

翔負喘ニ而も、明日御住居御附見分。何となく熊藏へ申候ハ、菓子酒等出し候方可然哉と旨申候由。彌つまらぬ御事ニ候。

公の狂詩

狂詩

非常異變未覺悟、　桑田碧海在斯中、
兒童女輩不足道、　男子到此慕弊風、

二月四日

○四日　泰西三月二日

今晩六日振ニ而國許へ飛脚指立。

幕府への大炮借用書

請取申大筒幷附屬御道具之事

一八寸徑御筒一挺 陰
但車臺附陰陽之内
附込矢一本、手木棒貳本、細引壹筋

一五寸徑御筒二挺 巽震
但車臺附八卦之内
附込矢貳本、手木棒四本、細引貳筋

一八寸徑銕□丸 貳拾粒

一五寸徑同斷　四拾粒

右ハ此度拜借被　仰付候ニ付、松平伊賀守殿御斷を以請取申處實正也。追ゐ御留守居衆御裏判證文ト引替可申候。仍之如件。

嘉永七寅二月　松平越前守家來

狛　山城㊞

永田帶刀殿

今川要作殿

異船動靜の情報

中根靭負今日持場へ差越

竹橋御藏へ證文持參ニ幸右衛門、千駄ヶ谷玉藥御藏へニ市川齋宮罷越候由。

七右衛門申候ニ、ロシヤへニ米三千俵被下候由。（一俵一斗三升ゝ由三斗俵ニゐ千俵ニ相成）

靭負申候ニ、只今横川吉十郎罷出申候ハ、藤田與一兵衛咄候由、洲ノ崎沖へ異船三艘相見へ候由。多分アンケリヤニゐ可有之（則英咭唎）七右衛門へ承候處、今日松平伊賀守殿へ罷出候節公用人咄ニ、壹艘伊豆沖ニ見へ候由御屆有之、三艘ハ虛說なるへし、夕方承候處ニゐハ豆州沖ニ壹艘見へ候處帆影最早見え不申趣。

慶永公巡見の土産の饅頭

明日巡見ニ付家老始下々へ土産物遣之、（まんちう十ツヽ）大凡積五千五百計（代金四兩餘まんちう一五匣ツヽ）

中の郷御立退取止の願書

昨日井上彌一郎・長谷川源之亟・波々伯部彌六・河合左太夫・河合五右衛門品川持場並異船爲見屆遣之、五ッ時前歸る。

留守居大道寺七右衛門、阿部伊勢守勝手へ罷出左之書付進達

異國船渡來ニ付萬一異變之場合ニ相成候節ハ、

松榮院様御儀ハ、

御本丸江可被爲入御儀と兼々相心得罷在、御附御用人ゟ茂其段申上ニ相成候處、右様之節ハ本所中ノ郷下屋敷江

御立退被遊候様、大奥ゟ申出候旨女中申聞候ニ付、其段御附御用人ゟ、御掛り若年寄中江及御達候趣申達、且又右ニ付別紙之通家來之者迄掛合有之、當惑至極仕候。元來中ノ郷屋敷之儀ハ、御遊慰而已之御場所故、惣而淺間成事共ニ而、假初ニ茂

御坐所等ニ可相成體ニ而ハ無御座、其上平生と違非常之折柄、猶以御締り向茂嚴重ニ無御座候半而ハ難相適譯ニ候處、兼而申上候通り勝手向不如意ニ御座候故少人數ニ罷在候上、此度御固場所茂被仰付、彌以無人罷成候ニ付、非常混雑之折柄御途中計之警固茂難出來仕合ニ御座候處、況而中ノ郷

御座所ニ相成候而ハ御警衛等ハ猶更行屆可申様も無御座、其上右屋敷建物向
御座所ニ取補理候ニ付而ハ、不容易儀ニ候處、此節普請方作事方等の役人共惣而御固場江出張罷在、右様の儀共差配仕者も無御座、如何様指繰候而も取計方無之而已ならす、御門々夫々御嚴重之御固有之候御曲輪内さへ、御立退の御場合ニ相成候而ハ、御府内の諸萬人一統千住板橋の筋江立退可申と、上を下へと騒動の折柄、其只中を御通行ニ而御曲輪も遠く、剩大川を隔候淺間成御場所江
御座所を被遷候儀ハ、たとひ御警衛行屆候ニもいさき、甚以御危難の御儀御座候故、於拙者不安心至極の譯ニ候處、前文の通り無人ニも御坐候ニ付、旁以逆爲
御坐所ニも難相成儀ニ御坐候間、此儀ハ何分ニも御容捨被成下、萬々一の事ニも相成候ハヽ、出火の節同様是迄の御振合ニ而、
御本丸江御披ニ相成候様仕度奉存候。　左候へハ跡々の義も安心仕、防禦御用向も無二念出精可仕儀ハ難有奉存候。　此段宜御沙汰被成下候様奉願候。

以上

二月四日　松平越前守

合薬請取書

請取申調合薬之事

一調合薬七拾貫目

右者此度拝借被仰付候ニ付、松平伊賀守殿御斷を以請取申候處實正也。追而御留守居衆御裏判證文与引替可申候。仍之如件

嘉永七寅二月　狛山城㊞

永田帯刀殿

今川要作殿

芳野金陵よりの情報

磯岡より指出三ノ間毛瀬親芳野立藏より指出候書面（立藏ハ儒者也）

扨昨夜門生壹人浦賀より罷歸候口述左之通り、

廿五日應接の様子

一廿五日應對場下見分として、物頭體之者拾人歩卒貳拾四人兼而小屋掛有之候御船倉邊へ上陸、此方ゟハ與力通事抔罷出候哉、其儀未審、江戸出役之人ハ不參候由。薄茶濃茶抔出候後、酒出候由。歩卒類ハ餘程酔候由。或ハ走

或ハ躍候者抔有之、船へ歸候節壹人帽（子の落字あ）を水へ落し、拾候得共取兼候ニ付、今壹人助て取候處、是も帽を落見物人大笑を發候由。

水兵と煙草

竹内門人昨日浦賀ゟ歸候者ハ話ニハ、茶ハ大ニ喜ひ喫し、酒ハ大醉ニ而吐候者も有之趣ニ御坐候。扨船へハ土産として味りん酒貳樽、味ゟん二箱被遣候由。みづさけたんぜこ抔ハ申分候得共、たんぜこハ世界通用ハ語候得共、中ニ而ハ却而分り悪く候由。尤奇成事ハ、バッテイラニ居殘候者、此方送迎船ハ船方江、たぜこを望候故、一握遣候處、手ニ承候と共儘一口ニ喫候由、不斷きゑそり煙を喫し、煙管ハ至て短く、帽上ニ收候樣子ニ御座候。

一應接場所未極候由。沖へ見へ候船ハ、一說ニふらんす又ハいきりすとも申候由。孰も憾成儀ニ而ハ無之、相見え候。

印の旗に就いて

一小柴前海中ニ立候印御承知可有之候。專ら淺瀨ハ印と存居候處、同樣ハ旗猿島夏島烏帽子島ニも立候由。旗ハ幅貳尺長三尺位ニ相見候得共、少々隔候故巾長とも延可有之、文字等ハ無之由ニ御坐候。

諸藩の固場

一金川ハ明石、羽根田大森ハ阿州、鈴ヶ森手前ハ松山、鮫洲ハ福井、高輪ハ津山ニ而相固候由申候。

米倉六浦藩の固場

一野島東南ニ米倉侯固場有之、人數少々屯候處、墨夷上陸幕を引はけ見物致候由、其外女を追掛候事抔も御坐候由。

一先日御話御坐候水餅を盗候場所ハ、服部又一郎知行所松本と申村之由、同村里正服部へ罷出委細ニ申述候。實ハ水を汲候とて上陸、女抔見物參候處、銃を擬候故逃候處、銃を地ニ捨候而、笑なから頭を横ニふり、兩手を下より上ニはけ、掌を己ニ向候様ニ致候而拾候由。此方之手招と正ニ相反候。其餘ハ大略、御話同様ニ御坐候。右有用之儀て無御座候得共、好話柄御坐候間御しらせ申上候。不一

念九　衛

金陵詞伯侍史　井〇安

再考前文旌ハ地勢ニ而推候得て、跡船之掛り場目當ニ無御坐候や、他日御高見承度。又拜

幕府徒に

昨日松平伊賀守被相渡書付大目付ゟ觸達來る

亜墨利(加)船此節近海へ碇泊致し候處、當地ゟ追々見物船指出異船江近寄候義

異船の見物を禁す

も有之、陸地ゟも見物人も多分之趣ニ相聞候。異船渡來中ニて假令外用向ニゟ最寄迄相越候義有之候とも、海陸とも都ゟ見物ヶ間敷義ニて無用ニ候間、其段向々へ早々可被相達候。尤御備場御用相心得候面々等より、見留船指出候義有之候とも、異船江ニて乘寄不申、浦賀奉行組番船江引合候様取計可申旨、是又可被達候。

二月三日

川越侯の報告

昨日誠丸ゟ左之爲知有之

一昨朔日申ノ刻頃、羽田沖合ニ掛り居候異國船六艘、神奈川沖合江乘戻り碇を卸シ申候。且亦小柴村沖合ニ掛居候異船壹艘も、同刻頃本牧之方江乘出、昨二日巳刻頃神奈川沖合ニ船掛り致、都合七艘滯船罷在候段、同所出張家來之者より注進申越候。此段致御屆候。以上

二月三日　松平誠丸

又川越侯の報告

今夜誠丸ゟ爲知左之通り

昨三日申中刻城ヶ島沖合ニ異國船壹艘相見候段、三崎詰ゟ注進有之候旨、浦賀奉行ゟ達有之候ニ付、早速物見船差出爲見屆候處、一向帆影も不相見趣、大

津陣屋詰家來之者ゟ申越候。此段致御屆候。以上

二月四日　松平誠丸

二月五日

慶永公の品川御殿山御持場を巡視せらる

○五日　西暦三月三日

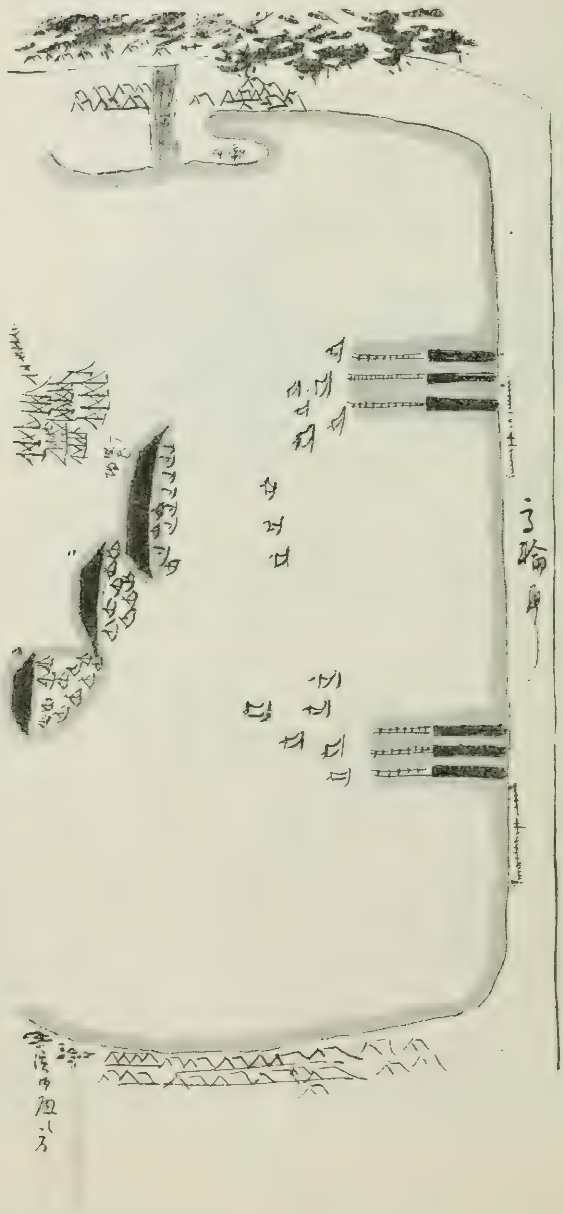
新霽

今朝五ツ時供揃ニ而品川御殿山邊持場爲巡見罷越。我等裝束、淺黃野羽織、木綿紋付、野袴無之へり供之面々何レも野服股引半天乘馬松風

道筋

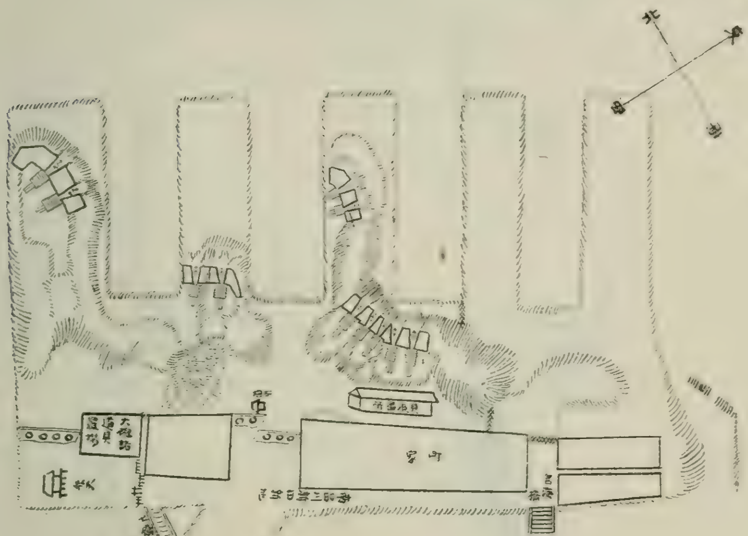
表門ゟ、錢瓶橋渡、吳服橋御門吳服町本通、京橋芝口橋渡、神明前通り、金杉橋渡、本芝橋渡り、田町高繩通り、品川新宿左へ臺場一覽。跡へ東海寺表門ゟ通拔、御殿山一見。跡ニ品川町天龍寺ニて小休。歸り天龍寺脇東海寺々内通拔、再御殿山へ參り、夫ゟ東海寺横野道通り、二本榎通り、白銀臺町、伊皿子臺町聖坂右へ三田三町目、左へ赤羽根橋渡、飯倉丁通西久保朽木彌一郎屋敷脇前天德寺定道通り西門へ歸る之。

從高輪觀洋面砲臺之略圖



目付出淵傳之亟案内す

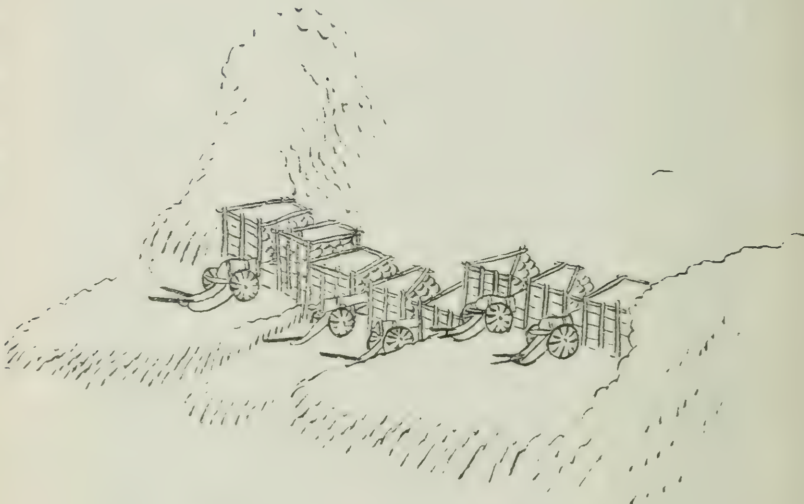
鈴木主税等說明せり



細線ヲ以テ地ノ高低ヲ見ハス

品川高輪境木の邊目付出淵傳之亟出迎罷出傳之亟案内致し北品川宿左へ參り候へば直に臺場ミ所也。三郎兵衞始番頭物頭諸士幷以下とも出迎出門山城靭負十之亟平學十郎右衞門十郎兵衞茂大夫先番小姓近習番も同樣罷出ツ。京方臺場ゟ江戸方臺場迄都合八ケ所巡見いたし夫ゟ直に何レも打方いたし候を一見いたし候。三郎兵衞主税等一々相噺す也。

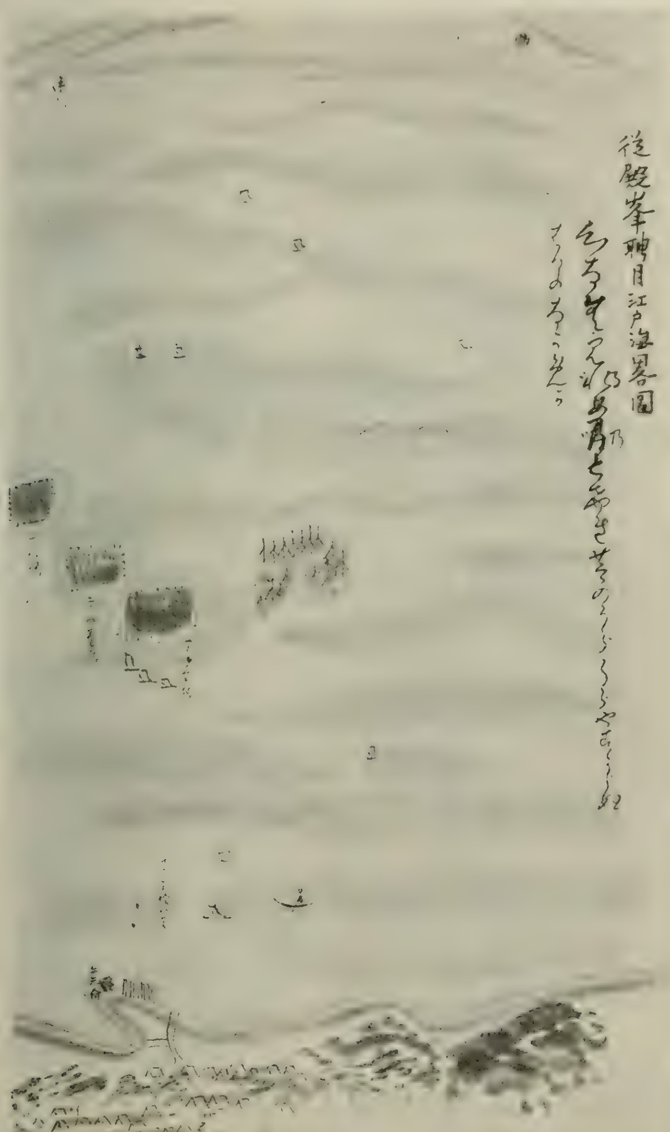
獵師町拔的剌鹿略圖如左

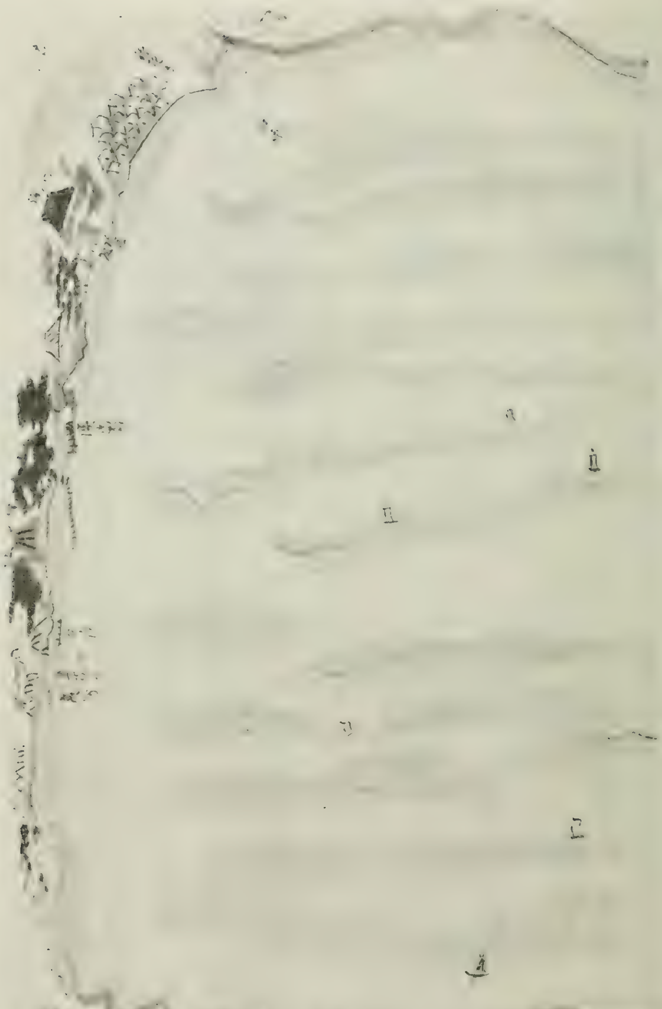


右ノ御臺場ヲ後面ヨリ見ル圖



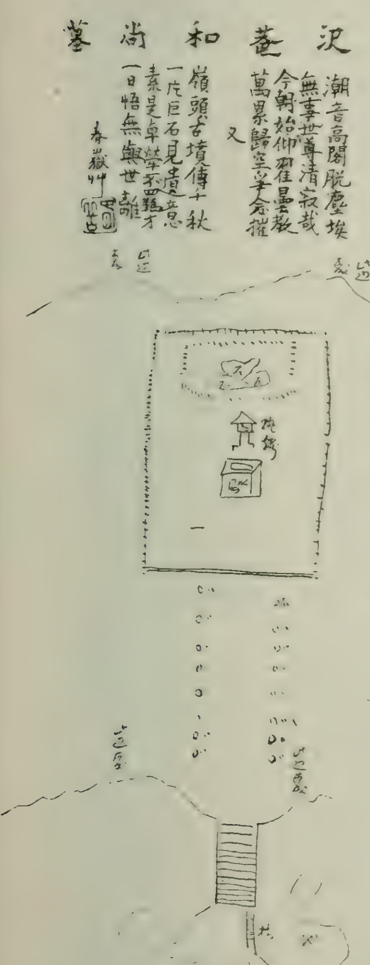
左ノ御臺場ヲ前面ヨリ見ル圖





天龍寺にて小休
勝木十藏の案内
澤庵の墓に詣す

夫より歩行ニて品川宿往來へ出ル、右東海寺總門へ入り、中門抜左ニ見て御殿山へ登り、（此節夷人空炮放ツ放砲ニきこゆ）其邊所々一覽、海上ゟ遠望いたし、又元ゟ總門をいて、往來通り北品川・南品川橋（境之）を渡り、右へ天龍寺へ小休。午飯相喫（午飯人數燒出しミ内をきへ候也又味噌同斷）天龍寺方丈へ逢、まんちう一臺遣之。山城始一同兵粮相濟、夫ゟ又天龍寺燒出場一覽、其節勝木十藏案内いたし候事。天龍寺門ヲ出て、右附近ゟ野道をいて東海寺裏門へ入り、左右寺中之。橋（目黒川）を渡り、長松院青組大炮方宿陣一覽いたし、尤内へ不入、門中外ゟ様子見ル、高源院赤組宿陣右同斷。夫ゟ裏門迄一覽立歸り、澤菴和尚廟所序ニ付一見。



親しく饅頭を賜ふ

鈴木主稅野村淵藏の報告書を上呈す

軍艦の大さ

應接の大要

夫ゟ定惠院士大將宿陣一見、前文ニ同斷、夫ゟ表門拔いつ、山門潮音閣額あり。本殿世尊殿額あり。中門を出再ひ御殿山へ參り、此時士大將を始一同罷出居、士大將ゟ物頭迄手自まんちう十ツヽ遣之。餘て番頭へ托し番頭ゟ共所ニゐ人數相渡し、目付へも番頭同斷、何レも禮ヲ申上、夫ゟ又江戸海を聘目す。圖前ニあり。相濟何レもへ暇乞いさし、東海寺脇ゟ道書ゝ通り歸館、七ツ半時過。

今日寫ニ鈴木主稅より指出ス稻葉務家來野村淵藏來書、次第不同

午年參り候異船

軍艦四十二間

右高サ水上四間、水入一丈二尺ゝ由

一蒸氣船

水一丈有之候へハ走り候由

一此度ゝ軍艦蒸氣船共相分り不申候由

〆

此間ゟ井戸對馬守初應接掛りゝ者なり、江戸表江度々伺相立候趣意て、通信交易ゝ御ゆるし無之候ゐて、應接難致候段追々申上置候處、三日晝後早

馬ニて某御使ニ罷越、早速井戸林へ江戸表へ可罷出旨申來候由ニ而、四日朝神奈川宿八ツ時立ニ而江戸表へ罷越候由。

一御廟策ハ、兼而御定之御返翰之趣幾重ニも取扱致候而、異人を江戸之方へハ何分ニも不參候樣取計可致旨、應接方へ被仰出候由。

一應接方ニてハ、通信交易を御ゆるし無之候而ハ取扱方無之候。且有無を不申聞候而三四年を延し候工夫ハ、只今之勢ニ而ハ取計方無之候由。異人只今之處ハ、通信交易ハ御ゆるし有之候事と存居候由。我よりハ未タ御返翰之趣不申聞候由。

一異人ハ彼の意ニ叶はさる候時ハ返答も不致、直ニ江戸之方へ乘込候勢之由。

一四日　御城ニおゐて御評定有之候由

右御評定之趣意ハ、通信交易御ゆるしニ相成候へハ、此方よりまて異人退帆いたし候勢、御ゆるし無之候時ハ異人直ニ江戸表江罷出、御老中へ對面いたし存意申度候由。　御老中御對面有之候而も、通信交易御ゆるし無之候時ハ、兵端ニ及ひ候勢之由。

彼云此迄何之國へ參り候而も、取次ニて物事相分り候事ハ無之、執政と

對談いたし候へハ直ニ決定いたし、夫故日本國ニ而も御取次ニてハ相分り候事無之候もの故、何分ニも江戸へ罷越し可申と申張候由。一ニハ江戸之繁花を見度候意も有之候由。

右御決評之趣神奈川ニおゐても精々早く相しらへ候へ共、何れ明六日ならてハ六ヶ敷勢ニ御坐候間、此義ハ江戸表ニて御しらへ有之候方早く相分り候事と奉存候。

一右異人共江戸表へ上陸いたし候節は、何レ「バッテーラ」ニテ乘込候。其節御指留舟ハ何レ御家ゟも御指出可有之と奉存候へ共、異人不聞入候事ハ必定と奉存候。夫を其なりに被成置候而は、御警衛之廉も立兼、其上御國體を辱しめ候勢ニ相成候と奉存候。張而御指留ニ相成候へハ、兵端を開き候勢ニ相成候と奉存候間、乍恐只今之内能々御勘考可然と奉存候。

二月五日朝認

一二日此間ゟ與力度々彼之舟へ罷越、種々相諭し候處、漸く承知いたし船を神奈川之方へ引戻申候。

一橫濱應接場四日切出來いたし候由。今五日ニは見分も有之候樣子ニ御

座候。

横濱應接場出來す

一此間神奈川へ異船ゟ實丸を打候て、土藏へ入候由。併此義ハ極密ニ致あり候由。

此義ハ懸りし者ゟ承り候ニハあらす

〆

彥根落より通報

今卯中刻、相州松輪沖へ異國船壹艘相見、追々乘入候樣子し趣、遠見番し者ゟ申出候ニ付、早速乘留船差出夫々御備向尙嚴重手當罷在候段、相州陣屋詰家來し者ゟ申越候。此段御屆申達候。以上

二月四日　　井伊掃部頭

昨日御屆申達候相州松輪村沖ニ相見候異國船壹艘、同村壹里程沖合碇卸罷在候。出船し浦賀與力へ乘留し者ゟ樣子相尋候處、亞墨利加船し樣子ニ相見候得共、何分元船へ寄付不申候故、碇与難相分旨申聞候趣。何し御備筋し義ハ彌嚴重罷在候段、彼地陣屋詰家來し者ゟ申越候。此段御屆申達候。以

上

二月五日　　井伊掃部頭

誠丸ゟ爲知左ゝ通り

昨四日卯中刻比、異國船壹艘松輪沖ニ相見、追々乘入候樣子ニ有之候旨、井伊掃部頭家來ゟ通達有之候段、大津陣屋詰家來ゝ者ゟ不取敢注進申越候。此段致御屆候。以上

二月五日　　松平誠丸

川越侯よりの通報

今朝致御屆候相州松輪沖ニ相見候異國船壹艘碇泊致、尤亞墨利加類船ゝ趣ニ而、大筒二拾二挺据有之、風模樣次第早速江戸表へ罷越候段手眞似致候趣、浦賀表ゟ申越候旨、神奈川出張ゝ浦賀奉行ゟ達有之候段同所出張ゝ家來ゝ者ゟ申越候。此段致御屆候。以上

二月五日　　松平誠丸

〇六日　洋曆三月四日

二月六日

今朝留守居大道寺七右衛門罷出、松平伊賀守公用人迄進達

今度渡來之異國船、万々一次第ニ內海江乘込、自然越前守持場前一之御臺場內乘通候儀御坐候節ハ、如何相心得可申哉、此段奉伺候。以上

二月六日

松平越前守內
大道寺七右衞門

小笠原左京大夫ゟ爲知左之通り

昨夕松平伊賀守樣ゟ家來之者被召呼、亞墨利加人へ本牧橫濱邊ニ而應接有之候ニ付、前斷御達被置候右御場所へ、家來之者相固候樣被仰渡候由。

二月三日

川越侯よりの通報

誠丸ゟ爲知左之通

相州松輪沖ゟ相見候異國船壹艘、昨五日朝ゟ追々帆を卸し間切居、昨夕方迄ゟ內海之方へ乘入、觀音崎ゟ壹里程沖合ニ碇を卸候樣子ニ相見候段、大津陣屋詰家來之者ゟ申越候。此段致御屆候。以上

二月六日

松平誠丸

今日用事有之中根靱負持場へ罷越。

紀伊殿江參り書面寫

亞墨利加船六艘、潮田沖江乘込候ニ付、浦賀與力香山榮左衞門江樣子承申候

應接場變更に就いての詳報

處、江戶へ上陸仕、御返翰請取度旨申候ニ付、浦賀奉行衆ゟ色々御申聞之上、一昨廿八日異國船引留、香山榮左衞門異國人同道ニ而本牧近邊一覽爲致候處、本牧十八九町程神奈川之方橫濱と申處見定、同所江上陸應接可仕旨異國人申候ニ付、西浦賀之內屋形浦ニ御出來之小屋同所江引取、普請出來次第日限相定、上陸いたし候筈ニ對談相濟候旨、香山榮左衞門申聞候事ニ御座候。右ニ付浦賀江被相詰候井戶對馬守・伊澤美作守・鵜殿民部少輔・林大學頭・松崎滿太郞・浦賀與力中島三郞助・香山榮左衞門廿九日神奈川江被引移、同所へ止宿被致候。前顯御普請御出來之上、橫濱江被爲出張候筈之由ニ御坐候。依之御達申候。以上

二月朔日　　　御七里
川崎泰次郞

今夕大道寺七右衞門、黑澤庄助へ參り內々承候趣ニ而、多分兵端ニハ相成不申、御老中方御始彼を甚敷御畏れ有之候而、何分ニも江戶へも不參候樣ニとの御趣意ニ候。我々とも相考候處ニ而ハ此方餘りおそれ居候ゆへに、彼よりも益江戶へ乘込可申と申立候事ニ候へハ、浦賀奉行始井戶等居り候て應接ニ候間、假令大王執政之命を受候而之事故、我々（井戶林を云ふ）ともの申方大王執政同樣ニ

候。夫を狐疑し而江戸表へ參り度候ハヽ、勝手次第可致と言放候ハヽ、彼却而參り申間敷よし。參候とも、江戸中何方へてもまとめ置候て、執政被逢候て井戸始申通り被及諭告候ハヽ、彼も屈服可仕ハ必然、何分江戸方へ參り候義ハ閣老衆弱く候而、兵端を開候ても防戰之具なしと申事ゆへ、黒澤抔之手關ニ及兼、組頭始一同甚激怒歎息致居候事。何分江戸方へハ乘込不申、精々諭告之上彼何分ニも江戸方へ乘込候と申立候ハヽ、又江戸伺ニいたし、左やうならハ一評義可致段申聞候積ニ候。深重之御評議ハ御人拂故何分分り兼候と、黒澤申候由、七右衛門申候。先達而中前中納言様浦賀邊へ被爲入候由。御目付方ニ而も承知之趣ニ候由。米三千俵被下候由ロシヤ同前壹俵壹斗ツ由

御空さにくもりうちなる此頃そ、心うきたつ春よしもなし

朝夕ふねきりヽいのる敷嶋の、大和さましひいや勇るを

堀連之助ゟ差出同人相認



合同舶入相秘記卷之二　終

共和政治州軍艦碇泊東武海面記事巻之三

墨船碇泊近三旬
覇府英謀恐未眞堪慕
唐山宋叡準澶淵盟約
照千春

印

共和政治州(フルエーニクテスターテン)軍艦碇泊東武海面記事巻之三

墨船碇泊近三旬

覇府英謀恐未眞堪慕

唐山宋冠準澶淵盟約

照千春　印　印

二月七日

嘉永七年甲寅春二月七日卽西國曆一千八百五十四年第三月第五日北亞美利駕共和政治州獨立建國以來七十九年

今日用事有之持場へ土屋十郎右衞門指越。

米艦內海に乘入し時の心得に就いて

昨日伊賀守へ留守居罷越、內海乘入候節ゟ心得方相伺置候處、未タ御指圖無之、且又品川持場若き者共ハ、何分壹ノ御臺場內異船乘通候ハヽ、何分ニも押留、夫まて不聞入候時ハ、決雌雄指殺可申抔甚意氣込强く、佐々木權六抔ハ、壹ノ御臺場へ上り候而も其儘ニハ不致置由申立候由。且又昨日七右衞門伊賀守公用人へ引合、此方ニ而ハ筏を數十組立流し置、彼ノ妨ニ相成候樣可致抔申居候由申候へハ、公用人甚不可然儀ニて、是非共內ニハ御指圖も可有之、夫迄ゟ處ハ假令洋面乘込候とても、御見逃し被成候而も、於

佐々木權六の强硬意見

公邊ハ御無調法ニハ不相成と申事。右等ゟ義を持場へ申越候へハ、彌落着不申事ゆへ、今朝ゟ種々山城始一同致評義居候事ニ候。依之我等申候ハ、未タ御指圖も無之儀ニ候へハ、何分明朝伊賀守へ罷越候て催促いたし、迚も其儘ニ夷奴乘込候を見過しニ相成候義ハ難相成、若々右樣ゟ御指圖ニ而も、私ニ置、御請も可仕心體無之、よし、私義ハ承服仕候事まもせよ、持場詰家來ゟ者へ申渡候義

幕府の軟弱意見

ハ不相成候間、如何相心得可申哉、將又洋面乘入候を、取押候も平穩ニ可成丈可仕心體ニハ有之候へとも、彼不聞入候時ハ、砲煩を以て相制し候ゟ外他算無之、左それハ、とりもなをさは兵端相開候道理ニ相成候間、甚以當惑心痛可仕段申立候ハヽ如何いたし可然哉。山城靭負申候ハ、至極御尤ㄑ御儀ニ候へ共、左様ナラハ、御殿山へ罷越心得不爲致候半而ハ難相成、右ㄑ趣共打明ヶ申談候ハヽ、可然段々評義相極り候て、直ニ乘馬まて爲使靭負持場へ指越。

中根雪江調停に赴く

黄昏土屋十郎右衛門罷歸る、逢候へ共、中靭對話ㄑ所へ讓る。

靭負六ッ半時前歸る、書面指出。右ハ神奈川ニ滯留ㄑ稻葉務家來野村淵藏ゟ鈴木主税迄指出之。次第不同。

野村淵藏の報告

昨六日晝時頃御人着致候得共、御廟策幷異船乘込候義ニあり兼候故、今期迄逗留爲致候間、左樣御承知可被下候。頓首

二月七日

一朔日御勘定奉行松平河内守殿早馬まて神奈川驛へ被罷越、一夜御評議有之候處、決評不致候ニ付被罷歸候由。右ニ付井戸林を被爲召候て、御評議

有之候由。
右之義ハ御廟策と應接方と御評議落合不申候故と奉存候。幾重にも通信交易之方ニハ御決評無之樣、乍恐偏ニ奉祈上候。恐多く候へ共、此義を御周旋御手後れ無之候樣偏奉祈上候。

〆

神奈川に於ける應接の模樣

一六日夜四ツ時前井戸林神奈川驛へ出張有之候。夫ゟ伊澤宿ニ而御評議有之候由。

一御廟策井戸林ハ應接事御任ニ相成候由。其趣意ハ何分ニも平穩ニ取扱候樣被仰出候由。井戸初應接方ニ而ハ、御任せ無之候而ハ取計方六ヶ敷、御仕せ無之候事なら婆、應接之義御免被下候樣と申上候故之由。

一彼へ之取扱ハ諸藩へ被仰達候趣意ニ而、精々彼へ申諭候上ニ而、其上之事ハ彼打付𥫪候勢ニ候得ハ、少シハ彼の存意も御取上ケ被成候而、穩ニ退帆爲致度心底之樣子ニ御坐候。夫故此上ハ應接致候後ニ而、何とか相定り候趣意ニ御座候。猶又委細之義ハ追而申上候。

通詞守山

一通詞之者守山榮之助とゟ申者、長崎ゟ昨六日神奈川驛へ着致、此仁をアメ

栄之助長崎より来る

異船浦賀に着與力郷原伊三郎との問答

リカ語も少シ通候様子故、應接事も少しハ早く辨し候と申沙汰ニ御坐候。

一昨六日乗込候軍艦、今朝ニ而も神奈川沖迄懸り居候。都合八艘共入居候へ共、至て穏ニ御座候。

一彼と應接之義、未た幾日とも不定候へ共、一兩日ハ延ひ候様子ニ御座候。左候へハ、別ニ相變候事も無之と奉存候間、御人被遣候事も一兩日ハ御延引被下候も可然と奉存候。

二月七日朝認

一五日與力中島三郎助彼之船へ罷越候處、彼申候ニハ、我共船ハ未た參り不申候哉と尋ね候ニ付、沖ニ見へ候段申聞候へハ、此書状を御渡し被下候と申而三通出候由。三郎助持參ニ而、六日朝神奈川出立浦賀へ罷越候。

一同日浦賀沖へ異船軍艦又一艘著いたし候ニ付、浦賀ゟ與力郷原伊三郎押送船ニ而乗つけ候處、彼之舟へ者乗せ不申候ニ付、竹ニ附ケ異條なき意を書取、彼之舟へ入レ候得ハ、承知いたし、夫ゟ舟ニ乗り候。彼申候ニハ、我共舟ハ何之處迄居り候哉と尋ね候故、神奈川沖ニ居候由申候へハ、左候ハヽ

此を御渡被下候樣ニと賴候ゟ、三寸四方程ヽ封物ニ上ニ横文字ニ書さる物を出シ渡候由。其節何角御世話と申候ゟ、髮剃ヽ如き物を出しくれ候。鄉原申候ニハ、此ハかり參り、奉行ゟ相談いさし候上ニゟもらひ候と答候へハ、御尤と申候由。鄉原彼ヽ書狀と髮剃ヽ如き物とを持參ニゟ、夜四時過神奈川へ着いゑし候由。

一同日伊豆沖へ異船一艘見へ候由。

此舟ハ二日頃ゟ見へ候船ヽ由

一同日夕方潮田沖ニ懸りあり候軍艦壹艘、神奈川沖へ乘込候。

一六日神奈川沖ニ懸りあり候蒸氣船一艘、煙を出し候を七ッ時迄見附申候。

此ハ他船へいゑし候時用ひ候由。

一同日浦賀沖ニ懸りあり候軍艦、內海へ乘込候。

暮時本牧沖合ニ見へ申候。定ゟ蒸氣船より烟を出し候ハ此舟を呼よせ候案內と奉存候。

右ヽ趣少しハ間違も可有之と奉存候得共、承り候まゝ相認メ奉入貴覽候。

二月六日晚認

一廿五日屋ゟ之浦ニおゐて應接有之候義ハ、彼初より神奈川邊まて致呉候と申張候ゟ、浦賀外へ出候事を承知不致候故、左様ニ候ハヽ先見分として參り候様申聞候處、漸く承知致、見分旁應接有之候由。其節彼申候ニハ、此處ハ場所ゟ狹く候ゟ、獻上物陳ね候處も無之候間、何分ニも處を替呉候様申候。我方ニゟハ、何分ニも此處まて致度義ニ付、いろ／＼申諭候處、廿七日ニハ何とも不申潮田沖迄乘込候由。

右之趣ハ先便も申上候へ共、少し違も御坐候故、又々申上候。

一右應接之節、漢文ニゟ書取指出候文意ハ、未た不審候へ共、使節ゟ御返翰受取ニ參り候趣を認め候様子ニ御坐候。文も相應ニ出來、認ハ余程見事ニ出來候ゟ、清朝人も乘居候様子ニ御坐候。

一此間川越侯ゟ御伺有之候意ハ、異人固メ場所ニおゐて上陸且無禮等いたし候節ハ、召取候哉如何いたし候と御伺有之候處、召取候ゟも宜段被仰出候由。

一朔日浦賀組頭黑川嘉兵衞神奈川へ出張有之候。

通詞堀達之助名村五八郎

一通し者堀達之助、名村五八郎神奈川へ出張有之候。右達之助ハ、隨分通詞し處宜敷、內々候へ共、異船し通詞蘭人ニハ相違無之候へ共、和蘭陀ニ而も、處ろ大分違ひ候故而、十ニ半分も通兼候樣子ニて、應接者而ノ＼敷御座なく御沙汰。

一井戶林去ル四日晚ニ神奈川へ直ニ出張可有之筈し處、今六日夜ニ候へ共出張無之候。此義者江戶表御廟策御決評御六ヶ敷候事故と奉存候。夫故今以御決評し處相分り不申候。

二月六日晚認

中根雪江調停の模樣

緻負申達候ハ、今朝思召し趣早速三郎兵衞へ申聞、番頭始夫々へ申談候處、壹ノ御臺場外ニ候ハヽ御持分ニ無之候ニ付、御構被成す。內ニ候へ者彼軍船指留候義者、あさり前に候へ共、必度喰留候所甚六ヶ敷、且又御指圖無之內萬一血氣ニ者やり候て、兵端を開候而も不相濟、甚六ヶ敷事ゆへ、先御指圖有之候迄ハ御待被遊、明日被爲入候義ハ御延引被遊候方御尤まて、御指圖之上と被遊候樣一統相願候段申達。就夫明日し逢對者相止ム。衆同意ニ付、何も子細無之由緻負申聞之。

二月八日
船固メの舟を命せらる

○八日　癸酉三月六日

明九日於横濱亞墨利加人へ應接有之候間、拾貳艘程船固指出候樣、尤至ゟ穩ニ取扱ニゟ、船中へ鐵炮等積入候義ハ不致、野服相用候樣、昨夜伊澤美作守より神奈川表出張家來之者へ相達候ニ付、夫々手配用意致候旨申越候。此段御屆申達候。以上

二月八日　　　　井伊掃部頭

御沙汰書之內

御目付　堀織部

御勘定吟味役　村垣與三郎

幕府より

松前幷蝦夷地へ爲御用可被差遣候條、可致用意候。

右於御右筆部屋緣頰伊勢守申渡之。若年寄中侍座。

異國船持場前一之御臺場內乘通候節心得方之儀、伊賀守へ伺書指出置候處、今夕同所ニゟ書取を以差圖有之。左之通り

當時應接中之義ニ付、持場內乘通り候共、平和ニ候ハヽ穩便ニ取斗候樣可仕

候事。

の指令

七右衛門穩便と申趣意公用人へ相尋候處、公用人答出來兼候由ニ而、内へ入り又々罷出申聞候ハ、此穩便と申所ニハ、主人伊賀守も甚被込候義ニて、先番船抔ヲ出し置、手招を以て彼へ申諭し、ソレても承知不致乘込候ハヽ、番船跡ゟ付參候様ニとの事ニ候。尤御持場前乘込候を其儘ニ被成置候而も、決て御無調法ニハ不相成候段、陸固メニ而も宜趣、内々伊賀守被申候。

川越侯よりの報告

誠丸ゟ爲知左之通り

明九日四ッ時本牧於横濱、亞墨利加人江應接有之ニ付、固船差出候様神奈川出張之浦賀奉行ゟ達有之候段、同所出張之家來之者より申越候。此段致御屆候。以上

二月八日　　松平誠丸

昨日誠丸ゟ爲知左之通り

昨六日申之刻頃、亞墨利加船七艘之跡船壹艘、本牧沖江乘入碇泊致候旨、組之者見屆注進申出候旨、神奈川出張之浦賀奉行ゟ達有之候段、同所出張之家來之者ゟ申越候。此段致御屆候。以上

二月七日　松平誠丸

鳥取池田侯より直書

相模守ゟ以直書投與

追々御届申達候。異船小柴村沖へ掛り居候內、昨廿七日御届申達候。其後浦賀之方へ參り居候壹艘、幷小柴村沖江掛り居候異船共都合三艘、昨申ノ刻より追々帆を掛ヶ羽根田之方江向て乘入候段、只今持場詰家來共ゟ注進申越候。此段御届申達候。以上

正月廿八日　松平相模守內　誰

小柴村沖に殘り居候壹艘、昨巳刻頃ゟ漕出し本牧沖之方江乘廻し、且生麥沖に乘込居候異船六艘も、神奈川沖江乘廻し候樣相見へ候段、持場詰家來之者ゟ昨夜注進申越候。此段御届申達候。以上

二月二日　松平相模守內　誰

昨朝申達置候本牧沖之方江乘廻し居候異船、昨巳刻頃ゟ帆を揚、拙者持場乘

越神奈川沖江乘入、都合七艘とも一所ニ滯船仕候樣相見へ候段、持場詰家來ゟ者ゟ昨夜注進申越候。此段御屆申達候。以上

二月三日　松平相模守内　誰

阿部伊勢守被相渡候書付寫壹通、大目付柳生播摩守ゟ夜半頃觸達來ル。留守居ゟ指出。披見翌九日朝ニ相成。

幕府警戒上の注意を指令す

大目付江　袖うち

亞墨利加船渡來ニ付、心得方之儀去丑十一月中重キ上意之趣被　仰出有之候儀ニ付、諸向共聊油斷も有之間敷候處、此節數艘近海江碇泊致候ニ付ゐも、此上應接之模樣ニ寄、萬一彼より兵端を開き候儀無之とも難申、其節一同奮發いたし候儀ハ申迄も無之事ニ候得共、異船滯留中御備向之儀、外見而已ニ拘り、夜中も海岸江提灯等數多付並候向も有之趣ニ相聞、左候ゐも却ゐ彼之的ニ相成、且も疲弊も不少儀ニ付、固人數指出候面々、番小屋等之要所も格別、其外も要害之土地見計ひ、山蔭木蔭等江屯いたし置、可成丈外より不見樣ニ相心得、行列を正し晝夜時々海岸を見廻り可申、且又

鈴木主税薩州の鮫島庄助肥後の津田山三郎と面談のことを報告す

宿驛人馬遣方之儀も、可成丈勘辨いたし相減候樣可致候。尤銘々屋敷々々手勢用意致し置候分ハ、右ニ準し外見之虛飾ハ一切相止、士卒之鋭氣を養ひ候而取鎭り居、大小之筒配り方之儀ハ勿論、劔鎗手詰之勝負等實地之接戰專一ニ心懸候樣、精々厚可申付候。但大艦を始、諸般之御備向相整候上ハ、猶改而被　仰出之品も有之儀ニ候得共、方今差向候場合を以、右之通り被　仰出候事ニ付、必死之覺悟を盡し、實用之工夫可致候。尤彌彼より兵端を開候節ニ至り候ハヽ、小船を以神速之勝負ニ及候儀も可有之候。

右之通萬石以上以下不洩樣早々可被相觸候。

二月

今日八ツ時頃、用事有之品川持場ゟ鈴木主税罷出候ニ付直ニ逢承候處、昨夜薩州浪人鮫島庄助（横井平四郎門弟浪人ニして薩侯の内命を受け所々周旋奔走いたし居候由）細川越中守家來津田山三郎東海寺へ罷越、水戸御家來藤田誠之進ゟ傳言之趣も有之、主税へ面會致度段申込候由ニ付、於細川菩提所妙解院（東海寺寺内）主税兩人へ逢候由。尤主税ともま三人一間まて密話之趣。其主意ハ、今般異國船之義ニて、井戸林を始應接方ニ而ハ、何分通信交易御許し無之候半而ハ迚も兵端相開候場合ニ相至り、加之江

戸内海へも乘込可申勢之由嚴く申立候由ニ付、兼而も平穩と御主意とて更ニ掛隔ミ事ゆへ、御老中方始メ一同甚心配ニ而、當月四日ニハ、無致方已ニ通信交易御許しと申事ニ相成、廟議甚機窮ニ相迫り候ニ付、水前公て素ゟ通信交易ハ弗ニ御斷絶ミ事ゆへ、被稱御病氣御引込ニ相成、御免も御願被成候御樣子、是又閣老衆始一同被致心配候て、何分ニも五日ニて御病氣御押被成候而も、御登　城有之候樣被仰出候ニ付、不得止事御登　城被遊候處、先ニ右通信交易御免ミ災厄ハ御評議相止候趣ニて、應接方ニ而も承服いさし候樣子ニハ候へ共、橫濱應接ミ節少し六ヶ敷相成、彼ゟ兵端をも相開候カ、又江戸海へ乘込候勢ニも相成候ハヽ、又候右通交二條ミ御免しミ災厄再發起致間敷ものニもあらほ、何分天下一大事ミ秋と誠之進も申聞、此上ハ貴藩ゟ外御恃申候事不相成由。越前公何そ御工夫も被爲在　公邊へ被仰上候樣致度、又貴尊藩ゟ御建白等出候へて、水前公夫を力ニ被仰立候義も有之候由。越公御建白等被爲在候ハヽ、私共手筋有之候ニ付、主△人（山三郎中　細川之）長△州立花△等へも幾重ニも申て、共ニ建白ま相成候樣致度積ミ由申聞候。依之山城・靱負・十郎右衞門等夫々呼集致評議候。何分右通交之二件發起いさし候而て、夫こそ　御國躰失墜ミ上、譯もなき事ゆへ、

鈴木主稅藤田東湖を訪問

藤田東湖の談話

何分明朝伊賀守へ罷越、及說破候方可然段、種々利解得失申試候得共、何分にも庄助山三郎申口にゐて、狐疑いさし候筈には無之候へ共、不詰りし事を申立候ても如何に付、又々色々申談、山城申候ハ、誠之進主稅と對談し上ろ又は書通位に候ハヽ宜候へ共、庄助山三郎御家を遣ひ爲致建白候樣に相成候ゐて、事輕々敷事に付、先只今より主稅を誠之進方へ遣し候ゟ、歸り次第し事に相成候ハヽ可然段申候に付、何も同意に付、乍大儀主稅罷越候樣申付、主稅直に誠之進方へ馬まて罷越候也。　五ッ半時前主稅歸り承り候處、素より庄助山三郎申口と格別違も無之候へ共、少々ゐて趣意違し事も有之趣、夫ゟ本月四日にハ、應接方井戸を始、逆も通信交易御免許ならてハ私共應接に相成兼候段申立候事、餘程嚴く有之、彌右し通りし御趣意に候ハヽ、應接方御斷り申上候段强く申立、並江戸入海へ乘込候と、兵端相開候とハ、尤禁物まて夫ハ不相成と申事之。　右如斯申立候に付、何も無致方と申鹽梅に相成、閣老衆始何れも交易通信應接相極り候末、御免許と申事に相成、廟議甚危迫如絲、又如髮相成候處、水府前公御聞被成、尤通交二件し義ゐて、御素意御斷絕し事故、左樣に候ハヽ遮莫と申意味まて被稱病氣候て御登　營御斷、且御免御願にも至り候半と申程に相成候。　共節水前公一

幕府强硬の意見に決したる事情

人ニ相成候由、立付候勢之由。　右ニ付五日御登　城無之處、御病氣ニ而も推而御登　營有之候樣被仰遣候ニ付、不得止事御登　營相成候處、昨日通交一件、已ニ御免許と申窮迫之御決評更ニ變遷いたし候て、閣老衆も大ニ覺悟相付き、何分通交二件ハ御免許相成不申、精々應接方まて諭告之上、聞入不申候時者、此方よりハ指圖致兼候得共、彼より江戸海へ乘入候義ハ存次第可致、將軍並執政之命を受けて此許へ參り及應接候事まて、江戸へ參り執政へ對話候而も、同意之事、夫をも不聞入狐疑いたし候て云々と申放し候積。　左らハ彼共江戸内海へハ多分乘込申間敷、且又端船を以テ乘入候ハヽ、濱御殿へ兼而相詰居候江川太郎左衛門罷出及應接候由。　江川應接をも不聞入候而、執政ニ對話と申事ニ候ハヽ、老中方被罷出被及對面、井戸始申口と不相變申諭し候。　老中方ニて覺悟相極り候趣。　右ニ付應接方ニ而も致承服、昨日井戸出立と申事。　右樣老中方覺悟相極り候事故、多分應接ニ及ひ事六ヶ敷相成候ても、遷轉之憂患之有之間敷哉ニ被存候由。　右等之事ハ委細庄助山三郎へ申兼候ゆへ、荒增相咄置候處、二人甚致患惱如何いたし可然哉と申聞候ゆへ、越藩ニ候ハヽ建白も上書も出來可申候得共、其他之君ニ而て六ヶ敷可有之段申立候ゆへ、山三郎庄助△△△

し心持も有之候事ゆへ、主税へ罷越相咄候と相見え候由誠之進申聞候。依之多分ハ通交し二件窮迫し御評議再ひ起發も仕間敷、右樣し事ゆへ先伊賀守へ罷越及説破候段ハ相止候。

誠之進申候ハ、ロシヤにハ證文迄被遣、外國方通交申入候とも、ロシヤ方先に御免許無之段被仰遣候。夫々方今し御評議ハ苦々敷事ニ候。

二月九日

〇九日　遠西三月七日

幕府の觸達

伊賀守被相渡候書付寫壹通、大目付柳生播磨守觸達來ル。如左

袖ら
大目付に

亞墨利加人に明十日應接有之候ニ付、船中ニ而祝炮打放候旨申立候ニ付、右炮聲承り候共、動搖致ハ間敷候。併彼方事情ハ難斗ニ付、其心得ニ而油斷ハ無之候樣可被致候事。

右之趣向々に早々可被相達候事。

二月

右之趣御目付岩瀬修理堀織部永井岩之亟方も同樣留守居へ申來る。同文ニ付略之。

川越侯より通知

誠丸ゟ爲知左之通り

昨八日致御屆候通り、今九日亞墨利加人江應接有之候筈之處、差支之儀有之ニ付、相延明十日九時應接有之、尤上陸前空炮廿發宛も打放候趣ニ付、動搖不致樣末々迄可申聞置旨、伊澤美作守ゟ達有之候段、松平下總守家來ゟ通達有之候旨、神奈川出張之者ゟ申越候。此段致御屆候。以上

二月九日　松平誠丸

松榮院樣に對する指令

阿部伊勢守ゟ留守居呼出七右衞門罷出候處、御指圖有之、如左

萬一御立退之場合ニ至り候節ハ、

御本丸江　御披被遊候樣被　仰出候。其段御附御用人江ハ若年寄より相達候事。

應接方の悲壯なる決心

山城相咄候ハ、四日頃井戸對馬守殿御城ニて色々及說破候處、（井戸始之見込前文ニ詳之）然ル處左やうならハ應接相極り候所ニ而、彼理（ペルリ）と指違可申、其他之將官達ハ又林始指違候か、宜跡々御備之義ハ如何ニも嚴重ニ無之候半而ハ相濟（不叶カ）申、後日之大擧も可有之段申立候由。跡ハ老中方ニて御引受有之候樣被申候處、一同顏と顏を見合せ、ソンナラハ應接方へ御任せ被成候と申事ニ相成候由。

國元より

飛脚到着

二日晩立飛脚六日振逗留有之今巳ノ刻到着。何も相替候事無之、於國許も存外騒動致不申候由。

二月十日

〇十日　洋暦三月八日

今夕中根靭負用向有之持場へ越ス。

黄昏歸る持場別段相替候義も無之由申達、且左之書付指出ス。

野村淵藏の報告

淵藏ゟ主税迄之書面

一八日朝應接方井戸初横濱應接場見分有之候、晝後異人アハタムス（永云則副將之）外ニ士分二人水夫十人ハツテーラ一艘ニ而見分として參り、場所圖寫取歸り候由

一明十日應接場ニおゐて應接有之候由。

附り彼之願意ト、我取扱候意と喰違事之故、何レ一度ヤ二度テハ趣意相分り申間敷と奉存候。若右十日應接之趣意御承知被成度候ハヽ、十一日晩迄ニハあちらへ申候間、左樣御承知可被下候。

諸役人方、何レも朝五時頃ゟ夜五ツ四ツ、或は夜中も掛り、引取おそく相成候ニ付、一向尋候間無御坐候。

一六日與力中島三郎助、異人之書狀持參ニて浦賀へ罷越候筈之處、浦賀へ着以前、浦賀沖ニ懸りあり候異船内海へ乘込候ニ付、書狀異人江不相渡、又神奈川へ持歸り申候。

九日朝認

淵藏手寄承候仁ハ

浦賀奉行與力　中島三郎助

林大學頭家來　河田八之助

以上

幕府の評定

極密

一四日五日六日御評議之大意

御廟策（閣老始有司方）異人之江戸表へ參り候事と、兵端ニ及ひ候事とハ何分ニも禁物、又御國威をおとし候處も懸念ニて、御評議御決定不致候由。又　御老公ニも、只今之處へ兵端開き候ては、如何と被　思召候故哉、被　仰出候事或ハ強く或ハ弱く相成候て、御詞御一體ニ不相成候御樣子。又應接方

ニ而も、井戸初決心致候ゟ御評議ニ加り候故、問答余程强く申立候様子。

夫故ろ何分ニも應接之事ハ御任せニ相成候様子。

或問曰、應接何レ之處へ落付候哉

答曰、御國威之處精々ハ落さる様取扱候へ共、先只今之勢ニ而ハ、試として三五年も通信交易之分ゆるさは候而ハ、落付不申と奉存候。

又問曰、兵端ニ及ひ候事ヲ懸念ニ思ひ候事は、彼を恐れ候故か、味方を懸念ニ思ひ候故ろ。

答曰、彼之强弱練不練も如何と懸念ニ思ひ候へとも、味方執柄之御方ニ被引受候仁なく候故、若兵端ニ及ひ候へハ、其時ハ必交易なり、通信なり、彼ゟ指圖ニ隨ふ勢ゟ相見へ候故之。若左様ニ相成候へハ、我よりゆるはニハなくて彼ゟ下知ニ隨ふ了相成、却ゟ御國威を損し候事故、是非なく右様之取扱ニ相成候。

又問曰、老公ハ御任せニ相成候ゟ而如何ニ候哉。

答曰、老公ハ何分ハも御人和なき御方故、諸侯ニハ隨分被服候御方も有之候へ共、有司方ニハ半分も服居候者無之、御老公之思召と申せは、又ゟと申不

との勢、まさも閣老之命ニハ服し候勢有之候。其閣老ハ、かくいふさら人之氣ニ入ふの、かくなしさら悪まれふのといふ心ニて、互ニゆつり合ふて、一人として被引受候御方無之候。

又問云昨年諸藩初一統へ、異人へ御取扱之趣被仰達候事ニ相違いさし候而も、却て憂の蕭牆之内に起り候事ハ有之間敷哉。

答曰、實ニ此處ハ懸念ニ候。乍併此事ハまさも國内之事故、制し易き事も有之候と存候。

又問曰、通信交易御ゆるしニ相成候而ハ、オロシヤ初諸國より參り不申候哉。

答曰、何れ參り候ハヽ、此ニも右樣ニ不致候而も承知致間敷と存候。

又問曰、左候ハヽ　皇國ハいよ〳〵衰弱ニ相成候。たとへハ人之癆症を受たるの如し。實ニ國家の大難病ニ存候。何れ太平ニ居候事ハ、最暫くと存歎息之至ニ候。此上ハ一日も早く、上さる御方ニ御大任を御引受相成候方無之候而も、徳川家之御運ハおれきりのと恐なから奉恐憂候。以上

極密追啓

或曰、此度ハ何れ穩ニ而相濟候哉。

答曰、此度ハ何分ニも平穏ニ取扱候樣被　仰出候へハ、先兵端ニ及ひ候事ハ有間敷と存候へ共、又
御國威を落さる樣ニと被仰出も有之事ニ候へハ、又兵端ニ不及とも難計と存候。

又問曰、通信交易御ゆるしニ相成候てハ、其弊何之處ニ及ひ候哉。

答曰、彼ろ心を、不奪不飽之利國ニ候へハ、通信交易をゆるし候ハヽ、二三年之處ハ必我ニ利をあたへ、夫ゟ追々彼か意ヲふるひ、終ニハ日本を屬國ニも致、貢を取候迄ニ及候ても、不飽之心底と存候。實ニ利を以テ道とせぬの國と存候。誠ニ惡々敷事と存候。併なから誤ハ彼ニあるにハ非す候て我ニある事と存候へハ、只我國の義氣を振ハさぬか、なけかはしき事と存候。

兵端ニ及ひ候迄之事、問ひもらし申候。

〆

此兩密書兩人ニ相尋申候。其人ニより問答表裏ニ相成申候。左候ハヽ、執柄之御方并應接方、餘程大切之事と奉存候。今一兩度應接迄之處、大機會と

中島三郎助と香山榮左衛門とを訐す

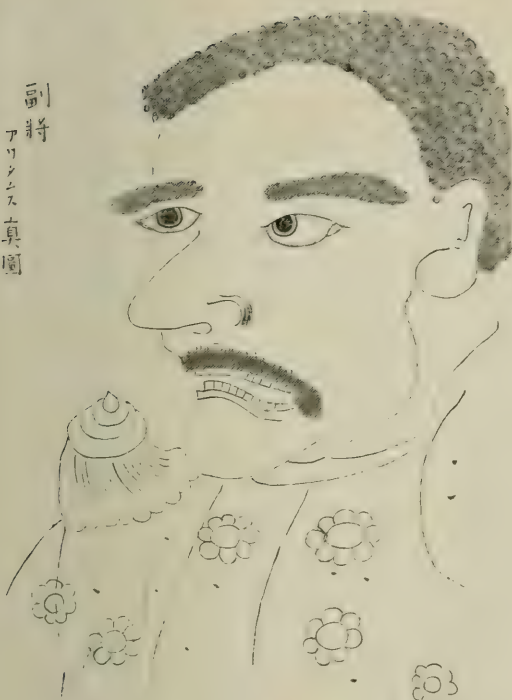
奉存候。乍恐㒵々も御後悔無之樣、御周旋之程奉祈上候。

野村淵藏 拜上

九日朝認

鑾城鈴木君御手許へ

不苦候ハヽ、其御筋へ御指出可被下候。頓首



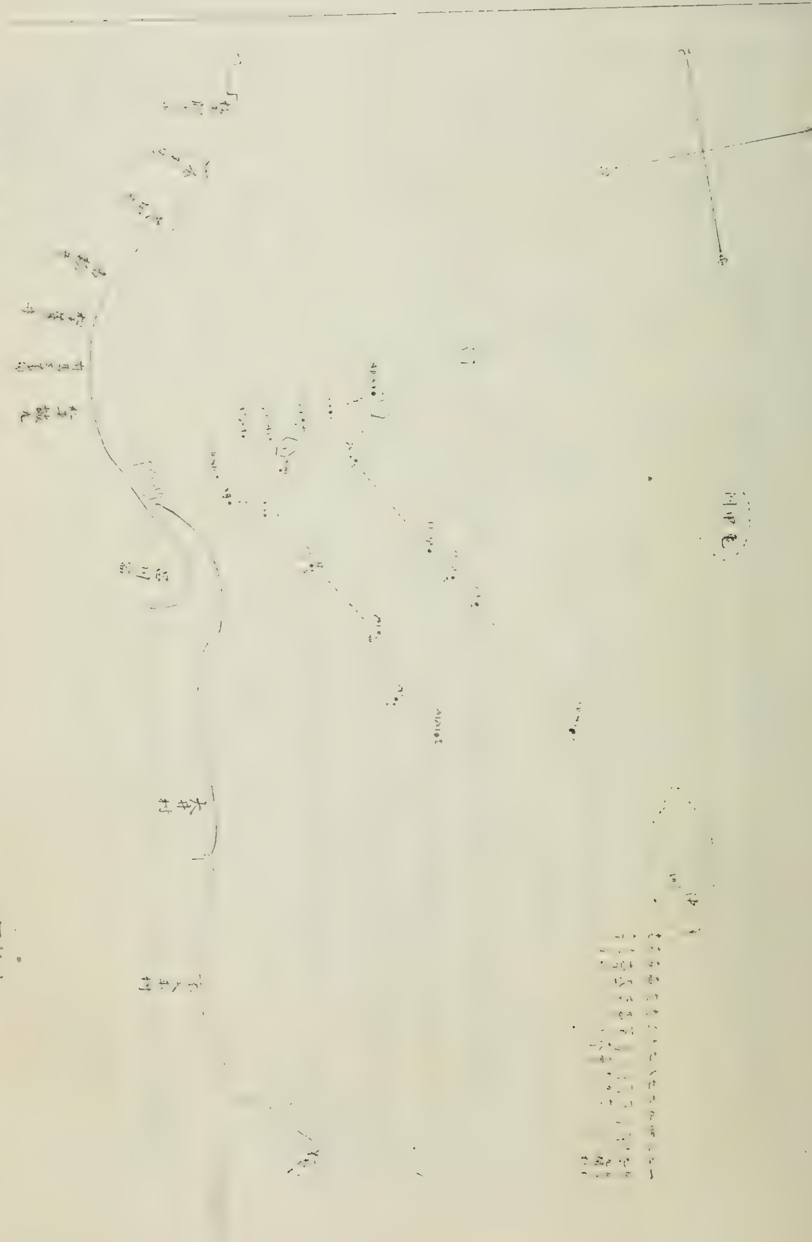
副將 アリンムス眞圖

靱負申候。三郎助(中島)ハ餘程氣象も有之、應接嚴敷候由。香山榮左衛門ハ温順にして平穏を祈、夷奴之應接も三郎助程にハ不參候趣。當時筆頭ハ三郎助之由。

狛山城今朝罷出候節相咄候を、先日之應接有之候節、浦賀與力之者アハタムス眞像を寫し候



品川一ノ臺場内淺深の圖



由、右繪圖入披見。

中根靭負ゟ指出、品川一ノ御臺場内測量淺深左之通り。

今日彌應接有之候哉、昨日觸有之候祝炮聲相聞え不申、品川ニ而相聞え候よし。

今日迄ニ持場臺場護胸牆出來之積。（一昨日ゟ取掛ゝる）

今日野村淵藏ゟ書面ニ而、矢張先日同様之有様ニて、主税誠之進へ罷越候咄之違申候、それも致方無之候得共、閣老衆ニ而、大英斷相極り候とも、應接方右様ニいさし度と存候ゟ、閣老之存意拔扛け候ニ而無之候哉、左されそいよいよ御大事之義ニ付、何分尙又爲尋問明朝藤田誠之進へ靭負罷越候様、靭負へ申聞之。

中根雪江萬一の場合立退のことを川越に依頼す

今日靭負ゟ川越家來山田辰輔方へ手紙指越、其主意ハ、異國船萬一開兵端、都下火災等相發し候節、可成丈ケて此屋敷ニ而堪へ候積ニ候得共、無據場合ニ相至り候折て、奥始女中（奥とも二十人斗り）惣人數八十有餘人立退（八十有餘人ハ奥并女中守衛之）事、其節川越城下へ立退申度、假令露宿まても不苦候間、此趣我等申付候段、尙又其節至急之義ニも有之候間、設け前以支度等無之積申遣。

二月十一日

雪江東湖を訪ふ

○十一日　西洋三月九日

山城申聞候ハ、風說ニ而ハ我方の博奕樣なる事船中ニも頻ニ有之候由。尤上官ニ而ハ無之、下官ニ有之候由。一人錢を投上ケ、其錢落候處をヒストンニテ打、あたり候へハ如何程と掛いたし候由。誠ニ上手手際なるよし。船中ニ羊鹿なと猿犬等居り候よし。其時々〆殺し食用ニ相成候趣。

中根靭負罷歸り申聞候ハ、藤田誠之進へ右等之義共及尋問候處　公邊御評議之趣ハ、素より先般主税殿迄申入候通りニて、別ニ相替候義も無之、乍去應接方ニ而ハ、二ケ條許諾相好居事ニ候得ハ、閣老始より申聞候て不承知なからも畏居候ニ付、又變遷いたし候哉も難計、則此方よりも神奈川邊へ探索方遣し置候處、其方よりも先日井戶加奈川へ歸り候所、矢張先日同樣和議之節被行申候。申さて下戶の者へ酒をのミ候樣申遣し候事故、酒をやめ又下戶ニ相成、菓子ニ相成候哉も難計ニ付、此上ハ敝藩之老寡君ニ而ハ六ケ敷候間、何卒越公御周旋被下候樣ことの事。又誠之進申候ハ、方今不外御近親と申、細川侯へ被仰談、ともに被仰立候ハヽ可然、細川侯ハ隨分御宜由。靭負申候ハ、如仰不外親類ニ候へ共、是迄之手並の鹽梅も致承知居候へ共、とふも六ケ敷由申之。

又誠之進内々申候ハ、先日アメリカ人へ於屋形浦應接之節、彼ゟ書取出し申候。其書面、直ニ於神奈川釋解出來申候か、主意ハ今般通信通商願之通り御免有之候ハヽ、未ゟ遠洋中ニ指越置候軍艦數艘、日本江最早渡來之用事も無之候間、船一艘浦賀沖退帆爲致、引戻し候樣申遣度と申事。外ロシヤも近々渡來可致段も書込有之候由。其他おとしと藥餘程有之候由。

又魯亞西へも、何分外國へ交易を許し候義ならは、第一番魯西亞へ御免可有之段、證文被遣候由。

魯西亞申候由、魯西亞同樣ニアメリカを御取扱被成候てハ、アメリカ人ハ承服退帆ニ及間敷と之事。

又先日於屋形浦應接之節、彼（慶永云「アータムス」ナラン）ゟ申聞候ハ、右我方ゟ通交二條御許諾無之義ハ、定而國王之尊意と奉存候。貴所等一存ニて被申候筈ニも無之、貴所等之存慮計ニて被申候事ならは、承服出來不申、眞實ニ國王之尊念ニ候ハヽ、其信牌戴度と申候由。我方ニて實ニ國王之尊念無疑信牌を遣し候ても、應接も夫切りに相成、直ニ如何樣之變事出來可申も難計、林大學頭甚込り、分らぬ事漢文ニ相認、彼へ相贈候由。

又靱負申聞候者、昨夕横川吉十郎罷出申達候ハ、伊勢守樣私御前へ被召呼被仰聞候者、御殿山へ出張いたし候御人數甚御〆り宜、宿役人共一統致感服居候段、夫々穩密抔ゟ申立候由。伊勢守樣ニも御大悦被成候間、此段御役人中へ申聞候而宜候ハヽ、申聞候樣ニとの事ニ候旨。

右誠之進ゟ相噺候趣ニ付、何分同席申合セ、同意ニも候ハヽ、勢州へ申立、通信交易御許し無之樣致度、我等一人申立候迚、格別響きにも相成間敷旨ニ付、ケ樣ニ仕組申候間、阿波守相模守連名にて手紙遣者。趣意左之通り、

前略、然者今般異國船渡來、昨日應接有之趣ニ御座候。扨又先日水戸前君之御所置にて、先々交易通信之御評義ハ相止之可申御樣子ニ候得共、何分應接方ニ而者矢張兵端を相開候か、又ハ江戸海へ乘込候勢にも候ハヽ、通信交易二ケ條御許諾之樣ニ申唱候段、神奈川探索方ゟ申越候。

幕朝御評議前同斷ニて、御動搖ハ有之間敷候へ共、只管應接方右を唱候而者、甚御大事至極之義にて、當今二ケ條御免許有之候而者、第一昨十一月朔日重き上意と申、此間之觸達も反古と相成、諸大名へ被對候而、御信義相失可申、御代初之折柄之命令ニ、御信義相失候而者、誠ニ以御大切至極之義奉存候間、

何卒右之義ハ明朝老中へ罷出及逢對、尋問之上、若御許諾等之口氣ニも有之候ハヽ、抽精心申立度、拙者一人ニ而も迚も相通申間敷、右ニ付今夕委細御面談之上申上度奉存候間、御同意ニも被爲在候ハヽ、敞屋へ御光駕被下度候。且又御兩公樣之内之貴館へ罷出候而も不苦候。若拙宅へ御來臨之義ニも候ハヽ、御繼上下ニ而御出奉希候。尤御手間取ニハ相成不申、乍去共節鳥渡飯差上度奉存候。右之段申上度用事迄草々頓首。

越前守

（蜂須賀齊裕）
阿波守樣

（池田慶德）
相模守樣

用事

九ツ半時頃阿州ゟ返翰來る

貴翰忝拜誦仕候。愈御清迪奉賀候。然者被仰下候委曲、逐一貴答ニ而不及候得共、至極御尤之御義、先々謹承仕候。小子何以不差支候間、今夕供揃次第推參仕、其節萬縷厚く御示談可仕、先ハ差急貴酬如此御坐候。頓首拜拜

二月十一日

尙々供揃次第ニ推參仕候間、夕刻よりハ早く相出候も難斗、左樣御承知被

下度候。先本文貴酬迄申上候。因州へも小子ゟ早々申遣候。是も定メ而罷出候事と奉存候。早々不備

越國公閣下　　　　　　　　阿　裕拜

貴答

異人と獵師の爭ひ

風説にても、先日異國人「ハッテーラ」まて乘廻り候折、我方ニも獵師船に出逢候處、肴を致所望候故肴を遣し、大に親敷相成候處、獵師のかひまて異人へ水かゝり候由。夫か爭ひに相成候由。獵師異人を水中へ投候由。異人餘程水を呑ミ迷惑、獵師不便に存し助上ケ候由。異人直にハッテーラにて早々本船へ歸候由。夫ゟ以後ハッテーラにて乘廻候事相やミ候と申事。

中根雪江肥後侯を誘はんと謀る

中根靱負へ申聞候を、阿州因州申談明朝阿部へ罷越云々ニ積に候へ共、尚又外樣大名ゟも申立候ハヽ、廷議彌以相定り可申と存候。幸ひ長岡監物當時此表に罷在候樣子に候得ても、細川を誘ひ候とめ、監物へ申談に罷越候ハヽ可然段申候處、靱負申候ハ、甚願ハ敷御尤ニ御義に候へ共、先日主税迄監物ゟ申越候ハ、細川侯へ御書被遣御勵まし被下候義ハ出來申間敷哉、只御書被遣候而も、夫切に相成可申候間、監物拜見

徳島侯來る

いさゝかなけれはならさる樣ニして被遣候樣ことの事ニ候。且又當時監物他所之人へ逢候義御留メニ相成候由故、私罷越候義も六ケ敷、幸立花壹岐ハ有志之趣ニも候由故、私何となく罷越、私限りニ申談試候ハヽ如何と申候ニ付、至極可然間罷越候樣申候處、靱負猶又主税へ申談度候間、今より御持場へ罷越度段申立候ニ付、其通りニ相任セ靱負罷越候。

八ツ半時過阿波守罷越、書院へ相通ス。用人罷出口上承る。其段申達候ニ付直ニ我等ニも繼上下ニて書院へ參り、一應之及挨拶、夫ゟ誘引居間へ相通り、如例茶多葉粉盆等差出し、菓子差出、直ニ人拂申付候て及對談。

我存意十分申聞候處、阿波守も甚尤之義ニて同意之由。何分只今通信交易等之
御許免ニ相成候而も相濟不申、貴兄御咄之通り、昨年十一月中命令反古ニ相成候而已ならも、諸大名江御信義相失可申ハ勿論之義、萬一
御許し相成候而も、アメリカハ難有可及退帆哉も難斗候へ共、インキレス、おろしや、フランス等追々到來及强願候節、又御許し相成候而も、何レも三年之
御試ニも候ハヽ、十二年相掛り可申、一旦御免し有之候ハヽ、迚も夫まて相止

候彼ノ存念も有之間敷存候。　左もれもとりもなをさも日本之疲弊ハ眼前之義、今強暴之アメリカへ御平穏ニ御斷及退帆候ハヽ、却て萬國も致承知、渡來仕間敷奉存候間、何分被仰立候方御尤と奉存候。　被仰立候節、拙者幷因州も同意のよし御申聞ニいさし度、且又今日推參會議いさし候義も御咄有之候様ニ致度段申候ニ付、其義ハ左様ニ可仕段申聞候。　萬一貴兄被爲入、阿部之口氣相分り候上、時宜ニより拙者も阿部へ罷出候て可及說破候間、左様相心得候様申聞候。　阿州も同意ニ付、種々相咄ニ相成。

七ツ時前相模守ゟ返書來ル。　趣意左之通り

阿兄ゟ華墨帖相達致拜讀候。　愈御清安珍重奉存候。　然も尊慮之趣一々御尤至極、聊間然無之、尤以御同意ニ奉存候間、何卒明朝阿部へ御出御對談之御模様相伺度候。　罷出候而も宜候へとも、却而此節柄目立申候事故指扣申候。此上ハ思召次第可仕候間、乍御免倒又々御染毫御投與被下度候。　右奉復迄草々頓首。

福城賢兄　　　　鳥　取拜

內用復

此次相模守へと返書ハ此後四ノ冊と部へ譲る也

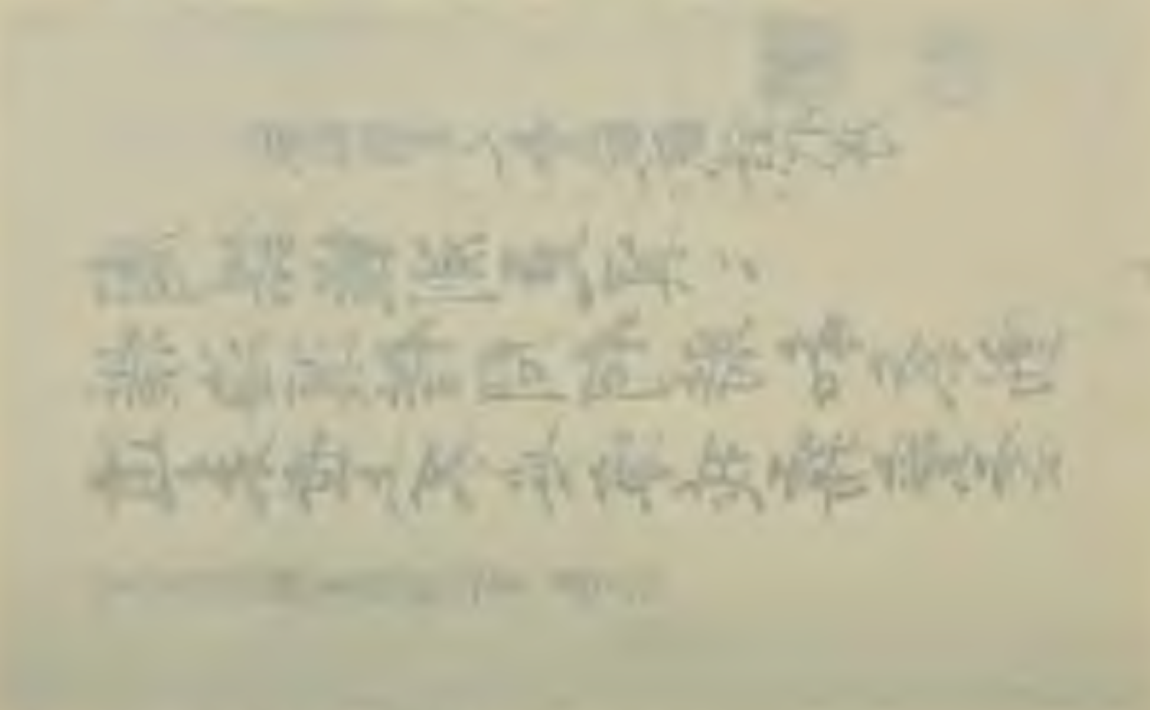
常那ら婆上野々花救まつへより
今そまたるゝ伊勢比神風

合同舶入相秘記卷之三 終

北里堅合同船艦八隻碇泊記事巻之四

邇来世上不安寧戎霧蠻雲
横海湏借問何時和氣動
廟謀難測更冥々

敬臨館主人春嶽賦詩代序



北墨合同船艦八隻碇泊記事卷之四 印

近來世上不安寧、戎霧蠻雲
橫海溟、借問何時和氣動、
廟謀難測更冥々、
敬臨館主人春嶽賦詩代序
印 印

二月十一日

池田侯の來邸を促す

大道寺七右衛門よりの報告

異人饗應の献立

嘉永七年甲寅春二月十一日、即遠西一千八百五十四年第三月第九日、北亞墨理加合衆國獨立建國以來七十九年

阿波守申談、相模守へ返書大意左之通り 平本平學代筆

貴墨被投致捧讀候。先以愈御安全之趣慶賀不啻奉存候。然ハ委細御紙上之趣奉拜承候へ共、何分御來臨之上、御對談不申上候半而ハ難相分奉存候間、只今早々御供揃ニ而、做屋へ御光駕奉希候。阿波守も最早罷越居、右之段申談奉申上候義ニ御坐候。此節柄之事故、御用談而已ニ而御手間取事ハ相成不申樣可仕候間、左樣御承知被成下、御出奉待候。艸々申縮候也。

因國公机下 慶 永拜

留守居大道寺七右衛門ゟ左之書付指出

——跡ニきゝ候へハ此献立ハ虚妄之よし

二月十日於本牧横濱亞墨利加人江御饗應之寫

一長熨斗 敷紙三方

一盃 内雲 土器三ツ組

一銚子

一吸物　鯛ひき肉

一干肴　松葉とろめ　結昆布

一中皿　そぼぢ魚目　青山椒

一御猪口　唐草かきぬ　口防風　ひきひ線

御献立

一御吸物　花子巻鯛　篠大根　粉山椒

一御硯蓋　紅袍輪蒲鉾　伊達巻をし　鶴羽盛　花形長芋　線昆布　九年母　河茸線

一平目生作り身

一御差身　ゆがし大作り／鯛小川巻／若紫そ／生のり／花山葵

一猪口　土佐醤油／いり酒／辛子味噌

さしゐ
一御吸物　鞍掛平貝／富貴の頭線

ぶた煮
一御丼　車海老／押銀杏／粒松露／目打白魚／ゑのうど

鶏卵葛引
一御大平　肉寄串子／六ツ魚小ミ木／生推茸／細引人参／火取根芋／霞山葵

一 御鉢肴

鯛筏
友身二色むし
風子ほふ〳〵
自然生土佐煮
花菜
土筆からし漬
酢取生う

一 御茶碗

鴨大身
竹ノ子
茗荷茸線

二汁五菜
御本膳

一 御膾（称り酢）

鮑（あハビ）笹作り
絲赤貝
白髪大根
鹽推茸
栗生う
葉付金柑

一 御汁

米つミ入
布袋志めし
千鳥午房

小そふ
花らとん

一御香の物

奈良漬
味噌漬蕪
志の巻菜
花の月
房山椒

一御煮物

六つ花子
煎ん豆腐
花茶

二ノ膳

御蓋 しき味噌

小金洗鯛
より海老
白髪長芋
重推茸
揃三葉

御汁

甘鯛春切
初霜昆布

御猪口 ほふをる煮

しゝいゐ
鴨麩
志の午房

御臺引　大蒲鉾
御燒物　懸鹽鯛
御吸物　吉野魚 玉の霞
御盃
御銚子
御中皿肴　平目作り身 花生う
御飯鉢
御通ひ
御湯
水
以上

池田侯來邸

黄昏相模守罷越、諸事先刻阿波守取扱と同斷。直ニ兩侯へ一汁壹菜外ニ燒物差出。膳ㇾ上ニ而吸物酒差出。相伴有之。相濟用談。我等幷阿州心體存分相模守へ相噺候處、尤同意ニ候。阿州口氣と同樣ニ付、別段不相記、彌明日阿部へ逢對ㇾ積ニ取極候。

鈴木主稅の報告

ペリー上陸の狀況

靭負持場ゟ罷歸候。鈴木主稅ゟ差出書面、

一十日横濱應接場ニおゐて應接有之、四ツ半時頃、我より案内船押送ニ而罷越候。九ツ時前ハッテーラ廿七艘（内白ハッテーラ三艘）にて異人四百人計り上陸、夫ゟ二行ニて廿四人組、ケウエール持數組兩側ニ、玄冠口ゟ海際迄備居候。程なく北より五番目之軍艦（フレカツト）にて空炮拾七發いたし、畢りて白ハッテーラまてヘルリ彼蒸氣船ゟ參り上陸、直ニ乘り參り候ハッテーラ十艘程まて空炮二十發、尤一艘ニ大筒一挺ツヽ（長三尺計り巢口三寸計りニ見へ申候）暫くありて又拾七發放し、夫ゟ小半時斗ふて樂初り、兩方ニてかわる〳〵奏し、十篇餘も有之候。七時前北より六番目之蒸氣船より煙を出し候。七ツ時過ヘルリ船へ乘り、夫ゟ追々船へ乘り、異人皆乘り畢て、又樂を奏しなから出船いたし候。

ヘルリ裝束　冠黒（手首ニ金ノ輪三ツツヽ）

兩肩ニイホレツト惣金也



地淺黃水玉

一應接間、奧ニ八疊敷程ノ所あり。其次の間ヲ大廣間、其次ニ小間あり。其次ハ玄冠之。

一奧ノ間ハ、我井戸林兩奉行、組頭松崎滿太郎外ニ通斗（辭の）人、彼ハヘルリ始大將分四人ノ由。次ノ間ハ我與力ノ類、彼ゟ上官ノ者三十人余入ル。

一上官ノ者迄ノ饗應、茶菓子多葉粉盆、夫ゟ酒ミリン、肴吸物盛り合、人り身ノ由。其外ハ菓子斗りまて、酒樽ハ拾本余、九年甫箱數十、彼ノ舟へ贈り候由。

一四ツ時前、彼より舟一艘參り、御幕張御嚴重ニ有之候を懸念ニ存候間、御取そつし被下候樣申來候ニ付、上ノ分御幕張成丈ケ御取そつしニ相成申候由。

一彼ノ人物丈ケ高く、人物よし。上代ノ風有之候。又ケゥエール調練樂調練ハ隨分出來候ゟ、軍令ハ立不申者と相見へ申候。尤禮義ハ無之國ニ御坐候。

右間違も可有之と奉存候得共、承知仕候ま〻相記し奉入貴覽候。
〆
十一日朝認

應接之義ハ大ニ穩便之由、其趣意ハ未た審ならは候へとも、只今之處ニ而
も先
御國威をおとさは候而、穩便ニ取扱有之候由。二時計之應接ニ而相互ニ
笑ひ候て別レ候由。委細之義も追而申上候。
十一日朝認
一今十一日彼死人多く横濱邊へ葬候由。

野村拜

鈴木樣御直披

鈴木主稅の意見

阿波守相模守五ッ時前退散、玄關迄相送ル。
中根靱負申候ハ、鈴木主稅へ申談候處、矢張監物方へ靱負罷越申談候方可然段、
立花壹岐之方ハ相止メ候由、靱負申達之。右ニ付明朝遣し候細川へ之手紙今

川越侯より報告應接無事完了の件

二月十二日肥後侯へ達書

晩認置。

誠丸ゟ爲知左之通り

昨十日、於横濱亞墨利加人江應接有之ニ付、固船指出候處、午刻頃ゟ異人共上陸いたし、未中刻頃應接無滯相濟、無間〆異人本船江歸船いたし候ニ付、固船引拂候樣浦賀奉行ゟ達有之ニ付、固船引拂候段、神奈川出張之家來之者より申越候。此段致御屆候。以上

二月十一日　　松平誠丸

○十二日　西暦三月十日

我等逢對留守中、用事有之靭負長岡監物方へ遣ス。右ニ付越中守(細川斉護)へ之手紙左之通り、

一簡致拜啓候。春暖之節先々愈御清安珍重奉存候。然ハ異國船一件ニ付而ハ、兼而御用被仰蒙候御儀ニ而、何角御配慮奉推察候。夫ニ付此間ハ御觸通りニ御坐候而、一統二百餘年太平ニ浴候御厚恩奉報謝候時節到來と、憤發可仕儀と奉存候。然ル處、何歟於

公邊ハ、交易通信之御許容ニ可相成哉ニも神奈川邊ニ而ハ專ら風聞ニ有之

趣ヨ致承知候。昨年ゟ被仰出ニ申、此間ゟ御觸達と申、左様之儀ハ有御坐間敷筈とハ存候得共、異人ゟ强願ニ被任、萬一風聞之通り御聞濟相成候様ニ而ハ、御國體も難相立而已ならす、諸大名へ被對候而も御信義も相棄候儀ニ而、誠以御大切至極之儀と奉存候ニ付、同席之内申談、今日伊勢守迄存寄申達候事ニ御坐候。右ニ付御誘引申上候ヨハ無御座候へ共、貴家之儀ハ右御用も御蒙り之義ニ候得ハ、何卒

御國威之御隕墜ヨ不相成候様被仰上候ハヽ、於

公邊も格別御力ヨも可被爲成哉ニ奉存候。此末之應接、誠ニ安危ヨも可相拘時節御坐候故、指過候儀申上候も恐縮失敬ニ御座候得共、不外御間柄ニ任セ、愚存之趣一應申上試候。猶書付存寄之儀も御坐候得共、難及筆紙ニ付、御家臣長岡監物儀ハ此度御用として被召呼候由承及候ニ付、中根靭負を以愚意之趣委細申含候間、御聽取被下候様仕度奉存候。右申上度如斯ニ御坐候。

恐惶謹言

二月十二日

尙々時下御自玉奉專念候。已上

老中阿部伊勢守正弘を訪問

細越中守様　内用　　　松越前守

右書翰靭負監物方へ持參之積

五ツ時、供揃ニ而辰ノ口阿部伊勢守へ逢對、公用人呼出候處、渡邊惣兵衞罷出候。指懸り申上度儀有之候間、御用隙御逢之儀申入候。茶々葉粉盆火鉢等被指出。四ツ時過伊勢守被罷出、逢對模様左之通り、●伊勢守○我等

○申候ハ、今般異船渡來ニ付而ハ、御所置振如何被爲在候哉、乍恐晝夜不安寢食罷在候。昨年十一月中重キ上意之趣被仰出も有之、且先日觸達も有之候事ゆへ、定而御許容之可否不被仰聞儀とハ奉存候へ共、神奈川邊之風説ニ而ハ、通信通商御免も可被　仰付哉之旨承知仕候。品川御殿山邊御固メも被仰付候事ゆへ、尚又奉相伺候。

●被申候ハ、神奈川邊之風説ハ、尤とるニ不足候義にて、異國船長く滯泊之事故申唱候義ニ候。昨年十一月被仰出も有之候事故、決而二ヶ條御免被仰出候様之義ハ無之事。

○申候ハ、彌左様ニ候へハ、誠以難有奉安心候事。

●迚もアメリカへ御許容等之義ハ無之筈。既ニ長崎表へロシヤ罷出候故、

ロシヤへも三年ハ暫見合候樣可致、代替等緊用ㇾ折柄云々ㇾ趣申聞候そ、及承服候ゐ退帆いたし候。今アメリカへ二ケ條御免ニ相成候ゐて、第一昨年ㇾ被　仰出も反古ニ相成、諸侯も必定心服仕間敷、且又ロシヤへ第一御信義相欠、早速ロシヤ浦賀表へ可及渡來ハ顯然ㇾ義ニ候。其處ハ致安心罷在候樣ことの事。

○申候ハ、段々被仰聞候儀安心ㇾ至ニ候得共、萬一彼等江戸海へ乘込候か、兵端を相開候勢相示し候節て、矢張凛乎右ㇾ御英斷ニ被爲在候哉、又ハ左樣ニ無之、其節ハ

御國體を被枉、彼ㇾ情願ニ御任セ被成候へハ、彼ハ難有可及退帆、是又一時ㇾ御權道と申物、兵端ニ及ひ候ゐて、未さ

公邊御備も完全と申程ニハ至り不申、諸大名ゐ又右同斷ㇾ義ニ候ゆへ、如何相運可申哉と甚致懸念候。右樣かゝる至重ㇾ災厄ニ相成候節ハ、如何御心得被成候哉、只今ハ御英斷ㇾ所難有奉存候得共、其節ニ相成御英斷撓屈仕候ゐて、却ゐ被損

御國威、我ゟ交易を開候ニゐて無之、彼ㇾ願ニ被任候とハ乍申、降參同樣と

申上度候へ共、實ハ降參と奉存候。其節ハ如何被成候哉。

●如何體困厄之場合ニ相至り候ゆも、被損御國威候樣之義ハ致間敷候間、左樣相心得可被申候。夫故ニ必竟昨年十一月朔日命令も有之、且先日之觸達も出し候義ニゆ候。決ゆ二ヶ條御免相成候樣之義ハ無之候事。

●彼より兵端相開候節ハ、不汚御國體、一同奮發討伐可致義勿論ニ候事。

有之趣を、同席共昨日寄合申談、何レモ同意ニ付、先惣名代として申上候儀ニ御坐候。昨日罷越候を、阿波守相模守ニゆ候。越後守(津山侯)も申談度候へとも、當時病氣中、三河守(津山侯世子)ハ部屋詰、兵部大輔(明石侯)を多分存有之間敷と存候ニ付、旁以前文之通りに候事。其外存寄不殘淵底申達候へ共、問答之紙上まて我意相分り候故、別段不相記。●右之趣阿波守相模守へも可申達候。

伊勢守送り無之、四ツ時過常盤橋へ歸宅。

中根雪江長岡監物を訪問す

報負申聞候ハ今朝長岡監物方へ罷越候處、委細相心得居候旨。御直書之義を

結果を報告す

是迄之御振合ニ而、大奥ゟ御廻しニ相成候樣ニとの事。依之罷歸候上、大奥へ差出候段申達之。

狛山城の報告

山城申候ハ、十日應接之節、昨夏渡來之節とは相違、懇意ニ相成候との哉、上陸之折柄隊列も不調候趣。

異人梅花を賞す

梅椿等爛熳と咲出るを見て、彼レ釵ニて切候へとも一向切レ不申、手折候て持歸候由。彼甚珍重いたすならんと申說。

そのいにしへ、宗任か大宮人ハ何といふらんといふ歌よミ出ることそおもしろくゆふにきこえ侍る、今は異國人も梅を梅として手折るもいとゝしく口惜しくおもほゆるなり。

公の歌

今ハてやかなしかりけれ蕃人も、梅としれハそ手折りつるかも　慶永

又十日應接之節、若酒被下候義ニ候へハ、下官等へもかさく不被下候樣、兼而上官ゟ賴ミ參候趣。扨當日ニ相成、下官共甚懇望いたし候故、我方役人共申候ハ、兼而上官賴ニ付不被差出、且又酒ハ一切無之と申候處、ケゥエールを遣し候故もらひ度候段申立候由。右ニ而も遣し不申候由。ケゥエールハ用意舟中ニ澤山有之候ゆへ、一挺ヤ二挺ヤ遣し候而も宜と申候由なから、此方ニ而て一滴

異人を葬る

も與へ不申候趣。

異人死人有之ハ蘭人之由、横濱某寺へ彼ノ賴ニ而埋葬いたし遣し候。是嘆息憤悶之一也。

先日舟中へ參候節、我方(中島三郎助)之者腰間ニ帶候刀を所望ニ而爲見候處、異人甚賞嘆いたし、畏懼候趣。

先日(十日)應接之節、異人へ御饗應之品之內、蒲鉾少々給へ候由。

今日勢州逢對之模樣爲心得、靱負ゟ藤田誠之進・長岡監物方へ以手紙申遣ス。

長谷部鎌三郎の報告

長谷部鎌三郎ゟ靱負迄書取指出ス。左之通り

應接人を遞更す

應接の様子

異船應接之趣も、始香山榮左衛門儀ハ、昨年ゟヘロリニ馴染も有之故、再三懇志ニ及候も如何と同人江ハ御臺場御用之方へ向ケ、組頭壹人、下役取斗として與力中島三郎助、近藤良次貳人江被仰付。右組頭異船へ罷越、浦賀前乘越江戸へ向走船仕候事、國法ニ背候樣申聞候處、ヘロリ申候ニハ、日本國法其主之都に參り候方、國所則何レノ御時代、唐明或ハ和蘭等來朝之砌、各京都江戸鎌倉等へ被召候例有之候抔と、却而彼方日本之舊事ニ委敷候由。其後井

林鶴臺等一向用に立たず

戸・林・鶴殿是等參り候處、林も儒家故ろ敵船之武備ニ恐懼仕候模樣ニ而、一向

再び香山榮左衛門應接人となる。

ペリーの口實

用ニも難相立、鵜殿も同敷武備ニ存候模様ニ而、中々ヘロリ手ニ合不申、又々再ひ榮左衛門へ被仰付。榮左衛門も無據前以て書翰等送り、夫ゟ乘付、ヘロリニ對面仕候處、馴染有之者故大ニ和ら幾、榮左衛門止メ候ハヽ江戸へ參り候事は可相止、然し浦賀へハ不歸由申候趣。左候ハヽ於此邊場所見立應接可仕趣ニ而、彼も見分ニ出別紙ミ圖面へ陣場いとなミ、應接ニ及候。皇都ゟ被仰候ハ、魯西亞同樣三五年見合可申由。ヘロリ申候ニハ、慥成事約定無之、引取候事ハ思も不寄、是ゟ戰爭好候ニハ無之候へ共、愈許容無之候ハ敵々の間、其ゆへんそ先年亞墨利加漂流ミ船四艘迄打拂ハれ候、薪水ニ乏敷窮し候船を、不仁ニ被打拂候段、不仁是ゟ甚しきを無之、此度睦ひ候へハ、其恨も無之候へ共、左なき時ハ敵々の間故、其不仁の罪を可糺抔と申候趣。尙又愈交易許容被下候ならハ、一日も早く歸國いさし度、其趣ハ今度後詰として未數艘跡船參る筈故、手間取候へハ是迄是非可參。是以費夥敷事故、事なく濟候ハヽ右船出帆止申度由申候。今度ハ陸戰の心得まて、陸戰用意ミ戰具多く持參候。鈲銃等數本有之、鑓ハ一間柄ネと有之候。

亂妨仕候說ハ皆虛說、始夏島へ上り、百姓畑仕事仕り居り候者を見かけ、角力

異人と百姓との相撲

を取らんと手品仕、頻ニ望ミ、百姓コツ〳〵三人、異人四人へ互ニ取候所、皆々異人を投付候由。翌日又々七人計り上陸仕、百姓ゟ爲若キ百姓角力好ミ者十二三人出、取候所又々日本人皆々勝候處、異人大ニ感心仕、頭巾を取丁寧ニ禮をなし退候由。浦賀へ一度上り候時ニ酒を被下候處、異人下官之向ヒ、たわいなく醉ひ日本人ニ成度杯とまてあつかひ候趣ニ候。以上

二月　日　　長谷部鎌三郎

小島五一返翰を認む

アメリカへ之御返翰出來之由。認た阿部伊勢守家來小島五一と申事。山城申候。異國人尋候ハ三艘浦と申所ハ何方ニ候哉と申、我方不知と答候へハ、彼甚笑ひ候由。

三艘浦

三艘浦を夏島の近邊ニ。むかし夷船三艘泊來之事有之、夫故ニ右之名有之趣。勢州逢對之模樣、阿波守相模守へ連名ニて申遣候。

三月十三日

○十三日　西暦三月十一日

肥後侯より返書

今夕細川ゟ返書來る。左之通

花墨拜讀仕候。如仰春色相催候處、愈御安寧奉賀候。扨異國船渡來、防禦筋猶更心配仕候事ニ御坐候。於

公邊交易通信御許容ニ可相成哉ニも神奈川邊ニ而専ら風聞之趣御承知相成萬一風聞通り御聞濟ニ相成候而ハ、

御國體爲難相立、諸大名江被對

御信義も相棄候儀ニ付、御存念之趣、御同席之内被仰談、昨日伊勢守殿まて被

仰達候由。右ニ付小子かも相違候様有之度、不外御間柄之譯を以委曲御懇書之趣難有奉存候。御家臣中根靱負江被仰含候、家僕長岡監物江爲御存意被仰下候趣、具ニ申出候。交易通信御聞屆ニ而相成不申候様ニとの儀、愚存之筋ハ去秋老中迄申上置候末ニ付、猶相違候儀ハ得斗勘考不仕候而ハ難相成候處、昨日伊勢守殿江御對話交易通信御許容ま無之段返答之趣、靱負か監物江申越候通り直ニ申出、右返答之通りニ候へハ重疊御安心之御事ニ御座候。於小子爲誠大慶仕候。異國船一件ニ而、御互ニ心配不少御事ニ御座候。先奉復而已早略仕候。頓首

二月十三日

二白御端書之趣忝仕合奉存候。不揃之氣候相成御自玉專一奉存候。以上

藤田東湖の返書

藤田誠之進ゟ返書今朝靱負入披見、趣意左ニ記ス

昨日福閣(阿部正弘)被爲入、共

君候御逢對之模様被仰下難有奉存候。　爲天下可賀可喜之至ニ候。　猶又申上候尾藩侯ハ正論被仰立候事故、乍毎度感服仕候義ニ御坐候間、弊藩ゟ誘ひ候而ハ不宜候へとも、尊藩ゟ尾公へ御書被遣、尾公ゟ本月月番上田侯へ、其君

福山上田の言質

侯辰閣(阿部正弘)へ被仰立候御趣意を以て被仰遣候様致度、左されハ上田閣老辰閣と同様之御請可被仕ハ、眼前證書同様ニ致置候ハヽ、猶以可然云々被申越候ニ付、明朝尾藩公へ手紙指出候積。

長岡監物の返答書

長岡監物ゟ返答書今朝靱負入披見。　趣意左之通り

共　君公阿部様へ被爲入御對談之趣、爲御伺被下、爲天下難有奉恐悦候。　此方様御模様未之相分り不申、追而從是可申上云々。

監物返答書右之通りニ候へ共、先刻之細候返答ニ就而ハ迚も動不申鹽梅、此方趣意ハ辰閣と逢對之模様不知積ニ而、細ゟ阿部へ逢對存分申立候ハヽ、阿部我

等と同樣可申、大廣間席ニ而も言葉質を取置候積之處、右樣之詰ニ而ハあてちかひ相成候故、細之方へ之心付ハ最早不致其儘ニ致置候。

○十四日　西洋三月十二日

一今夕尾州へ之手紙指出、留守居方御同朋松本凉阿彌迄遣ス。

二月十四日尾州侯に送書

一翰拜啓、春暖之節ニ御坐候得共、先以愈御清安可被成御起居ト奉恐壽候。然ハ是迄ニも御動靜御安否可相伺筈之處、彼是掛違御疎遠打過背本意候條、多罪之至御海恕被成下度奉存候。扨又異船碇泊罷在、今度之儀者皇國之安危分判之秋ト奉存候ニ付而ハ、日夜不安寢食苦腦罷在候事ニ御坐候。然ル處方今水府前君ハ、御參謀中其他ニ、愚存之趣申上候程ニ御依賴之御方も無之、尊君ニハ右等之義兼て御憂慮被爲在候御樣子奉拜承居候ニ付、別紙愚衷申上試候間、何卒御熟考被成下、爲天下御配慮之程奉希候。尤遠境往來之日數相懸り、其迄ニハ可及退帆かも難斗候得共、今度ハ碇泊長引可申と申取沙汰ニ御坐候故、及建白候事ニ御座候。先ハ右之段申上度如斯ニ御坐候。恐惶頓首九拜

二月十三日認

二白時下御自愛奉謹念候。以上

尾張
中納言様
内用
松平越前守

尾張
中納言様
内用副啓添
松平越前守

以副啓申上候。然ハ異船先月中旬頃より碇泊罷在、誠以不容易次第、天下之安危存亡之分界、貴前様ニハ都下之光景御目撃も不被成候事故、別而御苦脳不啻御儀与奉遙察候。仍之態々申上度儀ハ、前文申上候通り、誠ニ御一大事至極ニ而、萬一彼之兵威ニ御畏れ被成、通信交易等御許諾ニ相成候而ハ、昨十一月中御代初之折柄、重き

上意の趣も有之事故、天下の侯伯江被對候而も、御信義相失可申、御信義無之
候へは、
徳川家の御威光はこれ限りと深く恐入罷在候義ニ御坐候。是等の處致熟
考候へは、何分不失
御國體、通信交易等の儀は
御許容不相成候樣致度奉存候。方今水府前君御參謀之御儀ニ付、思召通り
ニ相成候ハヽ小生輩遺憾無之候得共、左樣ニも參兼候勢ニ相見へ、累卵危殆
の時と奉存候。扨又小生方ニ而も、苦心の餘り神奈川邊へ探索遣し置候處、
彼將官ヘルリなる者、通信交易御許し無之候ハヽ、江戸海へ乘込及戰爭候勢
を示し候由ニ而、於
幕朝は甚御懸念ニ而、體ニより通信通商御免ニも相成可申哉と申事も有之
候由。猶又種々相調へ候處、本月四日ニハ井對林大等の應接方ニ而は、何分
二ヶ條御免無之候而は應接出來不申段致決心申張候ニ付、無據可被任其意
哉の勢ニ相成候故、水府前君ニも被成方無之、被稱御病氣御引込ニ相成候由。
就夫御老中方ニも評議變替ニ相成、何分御病氣ニ而も推而御登　營有之候

様申來候ニ付、再御出勤御坐候處、右二ヶ條御免之儀ハ御沙汰止ニ相成、何分精々平穩ニ致應接、二ヶ條御免無之趣申諭候上ニも、彼夷怒つて江戸内海へ乘込候而、執政ニ逢度と申立候ハヽ、老中方逢對被致、同様諭告之積。 夫ニ而も不承知ニ而、彼ゟ兵端相開候ハヽ、戰具なしといへとも可及戰鬪 廟策ニ相定、別段御觸達も有之趣ニ相聞候付、其程迄之御覺悟相立候儀、忝く水府前公之御所置ゟも難有致降心居候處、其後又々探索方ゟ相聞候趣ニ而ハ、廷議ハ右之次第ニ候得共、應接方之樣子ハ矢張先日之有樣ニ而、何分應接方ニ而手强申立候故ゟ、精々二ヶ條御免之儀ハ不申聞候得共、萬一彼ゟ兵端相開候勢、江戸内海へも乘込候樣子ニ候得ハ、其節ハ無餘義御許容之積ニ申唱候樣子ニ相聞、右ニ而ハ老中方之覺悟有之候内詞とハ、更ニ天淵之義ニ而、何分分り兼、彌增苦惱切歯一層を增申候ニ付、精々相考候處、方今水府前公御參謀中、萬事思召通り相成候得ハ異儀無之候得共、老中方ニ而も苦惱之餘り、萬一右等之内評も有之事歟も難斗ニ付、同席共申合、老中へ逢對存寄申達、右等之所承糺し申度ニ付、昨日阿波守相模守拙宅江申越、右等之始末柄相咄候處、尤同意ニ付、昨日朝伊勢守江罷越逢對之上存分申達候處、返答之趣意ハ、假令彼ゟ

如何體嚴敷致懇願候而も、右二ヶ條之儀ハ御許諾無之、夫而爲ニ彼ゟ兵端相開候ハヽ、其節ハ昨年十一月之被
仰出幷近頃相觸候通り相心得、必死覺悟ニ而及戰鬪可申ハ勿論之旨、唯今と相成右二ヶ條御免有之候而ハ、第一昨年之被
仰出も反古と相成、且ハ魯西亞江被對候而信義難相立義ニ而、旁以決而御許之無之筈ニ候間、其處ハ致安心可罷在、此段阿波守相模守兩人江も申通候樣まとの答ニ御坐候故、漸安心仕候。尤返答次第ニより、阿州因州も追々逢對罷越、小生同樣可申立積り御坐候得共、右之通立派之答ニ御坐候故、先ツ當分兩人罷越候義ハ相止申候。細川ハ如御承知不外近親ニ付、默止之秋ニハ有之間敷段も申遣候事ニ御坐候。先右之趣ニ而、内ニハ水府前公ニ而御周旋有之、外ニハ諸大名ゟ申立、廷議之御一助ニも相成候ハヽ、奉對
東照宮二百餘年之御恩澤を奉報謝候、御奉公之片端ニも相成可申哉と婆心のミニ御坐候。夫ニ付尊藩之義ハ、
幕府之御親冑ハ勿論ニ而、殊更深く御忠慮を被盡候趣も竊ニ相伺ひ、
大廷之御幸福不過之と欽望候事ニ御坐候。然ル處、今般之次第共實ニ天下

之喪得安危分判之秋と奉存候得共、可相成共唯今之處ニ而
尊藩ゟ上田閣老江當月々番之廉を以砭鍼之御一書被成遣候ハヽ、如何斗而
公邊御評議之御強ミニも可相成儀と奉存候。左候ハヽ、定而福岡（閣）同様之尊
答も可被申上、左様相成候得共、福閣ゟハ小生輩へ言葉質を取置、月番之閣老
よりハ
尊藩江證書同様之御請被仕候様相成候ハヽ、
廟算彌確定ニも可相成儀ニ而、國家之恐悦ハ不及申、小生輩も盡く安堵至極
御坐候。兎角應接專任之向ニテ、和議のミ被行候様子ニ御坐候故、夫而爲ニ
萬一
廟謨之御あやまりニ相成候而ハ、驅馬も難及御大切至極之御儀と奉存候ニ
付、不顧不敬失禮愚昧之拙策建白仕試候事ニ御坐候。若又尊慮ニも不相背、
貴意御投與之御運ひニも相成候ハヽ、本懐至極之義と難有奉存候。
狛山城今日持場へ罷越、六ッ半時歸宅、指出書付左之通り、

野村淵藏ゟ鈴木主税迄之書面
一十日應接之儀、先只今之處通信交易之名ハ無之趣意之由　又兵端ニ及ひ

候勢も見へ不申候。併彼より献上物有之、我よりも贈り物有之位ニ而、退帆ニ及ひ候勢之由。

彼より献上物有之、我より贈り物有之候へとも、名ハふくとも實ハ通信ニあらは候や。

一右應接之節、彼より種々書取いたし、難題申懸ケ候積ニ相見へ候處、我より先を取、此義ハ取上ケ候而、此義ハ取上ケかたき候段一々爲申聞候故而、彼可申張筈之處穩便ニ而不申立候而相濟候由。

一十一日黑川彼之船へ罷越、種々懸合有之候。此よりそろ〳〵手事ニ而、穩便ニ相濟候勢と相見へ申候。黑川此間より應接ニ不加居候處、又々右樣ニ相成候儀ハ、宜敷方と奉存候。

十二日朝認

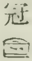
一十一日ハツテーラにて羽田邊所々測量いたし候由。

一十五日頃まて、献上物を應接場へ指出度積之由。未た確とハ分り不申候。

十二日朝認

一十日應接ノ節、士卒頭ノ如き者冠

壹人、

壹人、兩肩ニイホレット衣物黒羅紗、股引黒羅紗ニ一寸計猩々緋ノ竪筋を入るゝ之、帶劔其外上官ノ者冠二品、兩肩ニ金又ハ黄ノイホレット衣物黒、股引同斷、帶劔或ハ帶小炮樂人冠、衣物猩々緋、股引淺黄帶劔士卒冠衣物黒、股引黒、又ハ淺黄イホレット定りなし、ケウヱール諸器我國ニ用るま同し、何連も裝束奇麗ニ御座候。

樂器

大皷 大小　笛　トロムメル二種　尺八ノ如き者

一十日應接ノ節犬を二疋つれ參り、大キサ猫より少し大キク候而、色ハはい毛ニ御座候。歸船ノ節、又々つれ歸り申候。

一異人久敷土をふまれ仕候故、余程病人も出來候ニ付、上陸いさし養生致度段願ノ由。ヘルリモ樂ニ不致候樣子。手をもつれ船ニ乗り候程ニ御座候。

一十二日四ッ時過、北より三番目ノ軍艦まて空炮一發、四番目ノ蒸氣船ニて

死人を葬る

一發、又三番目之舟まて二發をなし申候。此者昨十一日死人（一人之様子ニ）横濱之寺へ葬候供養之様子ニ御座候。

右死人葬候節、中をあけ吟味爲致候而葬候由。

測量

一同日ハツテーラ十艘余も出候。處々乘廻り測量いたし候。又遠目鏡まて處々見廻し申候。一艘ハ神奈川入江迄乘廻候處、船出兼候ニ付、我番船手傳いたし出し候由。余り處々測量いたし候ニ付、番船ゟ指留候得者、我國にも未た御承知無之候ハヽ、書取指上候ても宜敷様申候由。

一今日を來ル十五日獻上物彼より致度候ふつき、場所を能調度候とて、横濱ゟ罷越候節何ゟ場所も餘程廣くいたし候様子ニ御坐候。

右之外昨今ハ相變り候事無御座候様子ニ御坐候。

十三日朝認

川越侯より報告

獻貢物陳列の件

誠丸ゟ爲知左之通り

明十五日四ツ時頃、亞墨利加人獻貢物持參横濱應接場へ貳拾人餘上陸致候旨、神奈川出張之浦賀奉行ゟ達有之候旨、同所出張之家來之者ゟ申越候。此段御届候。以上

中根雪江藤田東湖に送書
二月十五日
柳河藩と池上新田
松平內藏頭と穢多
野村淵藏の報告
通信交易許可可否の件

二月十四日　　松平誠丸

今夕尾公へ手紙進呈之義爲心得、藤田誠之進迄靭負ゟ以手紙申遣ス。

○十五日　遠西三月十三日

六ツ半時供揃ニ而例月之通り登　營

立花左近將監ニ逢候ニ付、先日阿州因州申談ニ而阿部へ之逢對相咄之候而、尚又趣意之義も申聞候。　左近將監も尤同意之由被申聞候。　依之我等細川へ申越候同趣意申候處、幸明日阿部へ逢對罷越候故、其刻阿部へ可申旨被申。

立花飛驒守ニ而池上新田持場ニ被命候。　昨日とやら人數指出候由。

細川長州御臺場小舟まて固メ候樣被仰出候由。

松平內藏頭今度參府之節（則今日御禮登城）穢多多く召つれ候由風說有之ニ付、內藏頭へ直ニ趣意承候處、若及戰爭候節異人之死失を爲片付候主意之由。

加州大門前へ差出候人數七八百人と申事。

中根靭負持場へ罷越、六ツ半時歸宅。　鈴木主税ゟ指出す（淵藏ゟ出ス）

一十五日黑川彼之船へ罷越、交易之分不相成候段申聞候由。　彼よりハ未さ返答無之候樣子。　通信之義ハ如何ニ候哉相分り不申候。

交易場所に就いての風說

一應接方評議之沙汰、彼之願筋何そ取上ヶ不申候而ハ落着兼候ハ必定ニ候。左候得ハ交易ハ不相成候得共、我ろ有余之物ハ彼へ賣り候事ハ、試として二三年ゆるし候積り。又彼よりも二三年被成候而御不益ニ候ハヽ、御斷被成候と申。彼か方まも不引合候得者御斷り申上候と申候由。右ニ付場所一ヶ所彼へ貸し候積り。其場所ハ伊豆之下田か宜と申仁も有之、又長崎か越後の何とか申所か宜と申仁も有之候由。長崎ろ越後と申候趣意ハ、始終ハ彼か氣ニ入不申、左候とも江戸の方へハ直ニ參り兼候故之由。右ニ付近日林井戸又江戸表江罷出、御評議可致候積之由。右之義實否ハ申上兼候へとも、承り候儘申上候。

黒川等の心境

一黒川抔ハ、此度之處へ加り候上ハ是非なき事なり、とても無難ニ江戸表へ歸り候事ハ六ヶ敷、何レ神奈川之土ニ相成候か、又ハ彼ニ生とられ、彼之國へ行候かの二ッの内と申居候様子。しかし黒川とても右申上候評議ニハ洩れ不申仁と愚察仕候。右等之人ニ而應接有之候へハ、兵端ニハ及ひ不申候へ共、其人丈ヶ之處置ニ相成候ハ必定と奉存候。何分ニも今暫之所大機會と奉存候。

十四日朝認

一十三日應接場ニおゐて至てむらく應接有之候由。黒川のミ出張。其節彼申候ハ、願望之所成就いさし難有と挨拶有之候由。右樣ニ候ヘハ、彼ゟ方ニハ望ミ所成就いさし候と心得居候樣子ニ御坐候。我ゟ方ニハ未さ何とも御評義不足、只彼ゟ死人を葬り、彼ゟ献上物を御取上ケニ相成候との事之。此上相應之被下物ハ有之候由。併此義ハ被下候と斗ニゟて、彼ゟ承知致間敷候樣子ニ御座候。夫故此頃ハ御評議一躰むらは候樣子ニ御坐候。

一異船伊豆沖ニ二三艘見ヘ候由。此船はアメリカ船とも見ヘ難く、又他國之船ろと沙汰有之候由。

一中嶋浦賀ヘ歸り候儀ハ、此間彼之船ヘ應接ニ罷越候節、通辭守山榮之助罷越、與力方之通辭相勤メ、其上自分より何ゟ彼之方ヘ色々申候由。與力云、何を申候と尋候ヘハ、私言を申候と答候故、左候ハヽ最歸り候と申候ヘハ、未さ少シ御用ゟ有之候と申候。左候ハヽ可申述、併御用とハ何事そと尋候ヘハ、何の彼のと申候ゟ其趣意を不申候由。依ゟ應接方與力組頭ヘ罷

異船名と大砲數

越、通辭之者ハヨリの言を彼へ通し、彼の言を我ニ通し候迄之物ニ。然るに別ニ色々申候而ハ、私共相勤り不申候間、此以後ハ辰之助を通詞ニ被成下候と申候へ共、夫々ニハ種々譯合有之、且榮之助ハ亞墨利加へ直ニ通し出來候故、彼方ニてハ用辨早き候故喜ひ候樣子、故替候事ハ六ヶ敷候由。右榮之助自分ニ申候ハ、井戸林抔より内命有之共儀を通し候樣子ニ御座候。

異船名　本牧之方より

一	レキスンタン	大炮廿六挺
二	蒸氣船 セチクインナ	同　六〇〃
三	ホウハッテン	大炮八挺
四	マスドネン	同　廿二〃
五	蒸氣船 ミッセシペン	同　八〃
六	ワンデリヤ	同　廿〃
七	サラトガ	同　廿〃
八	ショヴハッテン	同　六〃

四十二間四尺斗り

蒸氣船　幅七間半　トウコ七間に五間斗り

蒸氣筒口經り九尺斗り

水より上三間余

水入九尺

水二間有之候へハ走り候由

七番目之船廿五六間斗り

其余軍艦三十間余

一只今船懸りし所　水中十尋斗之由

一十日、ハッテーラニて打候筒ハ十二ポンド」カノンし由。

二月十六日

○十六日　遠西三月十四日

平本平學相願持場へ罷越。

御城御沙汰書之内

金十兩　　御徒目付　河津三郎太郎

松前并蝦夷地江爲御用罷越候ニ付被下之。

鳥取藩よりの報告

右於燒火之間遠藤但馬守申渡之

相模守より來候御届寫

昨朝申達置候本牧沖之方へ乘廻し居候異船壹艘、昨巳刻頃ゟ帆を揚ケ、拙者持場乘越、神奈川沖へ乘入、都合七艘共一所ニ滯船仕候樣相見候段、持場詰家來之者ゟ昨夜注進申越候。此段御届申達候。以上

二月三日　松平相模守

今申之中刻松輪崎内へ異船壹艘颿込候樣ニ、拙者持場ゟ相見へ申候段、持場詰家來之者ゟ注進申越候。此段御届申達候。以上

二月五日　松平相模守

一昨夜御届申達候異船壹艘、昨朝ゟ猿嶋沖を乘廻居り候所、同申中刻拙者持場沖ニ颿込候樣相見申候旨、持場詰家來之者ゟ注進申越候。此段御届申達し候。已上

二月七日　松平相模守

今朝申達置候亞墨利加船壹艘、本牧沖を颺通夜ニ入先船七艘之場所江乘込候段、持場詰家來之者ゟ只今注進申越候。此段御屆申達候。已上

二月七日　松平相模守

出淵傳之丞の報告

應接場へ上陸入場者人名表

十日應接場へ上陸之分

船名

ホウハツテン　一ヘルリ
ワンテリヤ　一ホーノス
サラトカ　一ゴールスバラン
ホウハツテン　一エルレリツ
レキスンタン　一デルツン醫者
ワンデリヤ　一レスートク

同　一アーダムス
レキスタン　一ラースン
一スペイデン
ワンデリヤ　一バーボー
同　一マイノウ
シヨウハツテン　一ハウストン醫者

ミツセシヘン　一ブカナン
ホウハツテン　一レスン
同　一ハルレス
ホウハツテン　一シーール
シヨウハツテン　一ロセール
サラトカ　一コセム

一ボース（セチクインナ）　一同ヘッテンズー　一シヨウミス（シツセツテン）
一ワイネ（マスド子ン）　一同ケリヤム醫者　一フラウン（セチクインナ）
一フレッベル（マスド子ン）　一ソイドクレイン醫者（ミツセシヘン）　一アラスン（マスドネン）
一マキスベウッ醫者（ホウハッテン）　一ウリヤム（サフトガ）　一ハイ子畫工（ホウハッテン）
一同ウリヤムス日本通　一同ホッラメンオランダ通

〆三十三人外ニ小遣六人

一將官付銃卒五人内紺將官旗持傘壹人　一赤旗持　三人
一赤白布交旗持　壹人　一コンマンダント　五人
一ヲフシイン　六人　一ソルダート百六十六人内コルポラール十二人ザーセント十二人
一マトロス百九十一人　一樂方　三十一人
一艀二十八艘但十二ポンドカノン十挺

惣人數四百四十六人外ニ艀ニ殘り候者凡二百人

我より彼へ申聞候沙汰。交易と申候ゟハ不相成候共、其方ニ望し品有之候へハ、成丈ハ被下候段申聞候沙汰。此間願望成就し挨拶ハ、是故と愚察仕候。併

彼申候ニハ、只被下切ニ而ハ不相成、何そ替りを指上不申候而ハ、御貰ひ難申と申候様子ニ御座候。

被下候品、石炭米穀其外種々之由。此節御用意有之候沙汰。

十五日朝認

愚按

今日ニ至り、彼より獻上物幷諸向へ贈り物有之候上ハ、御答禮之事ハ是非も無之事と奉存候。然を、夫ニ而も彼承知いたし歸帆ニハ及間敷沙汰ニ御坐候。左候へハ名ハ通信交易とハ無之候とも、業ハ通信交易ニ相成候事ハ必定と奉恐察候。御良策御坐候ハヽ、乍恐只今之内御周旋可然と奉恐察候。應接方之語勢、いつとなく次第ニ弱く相成、義氣之意ハ見へ不申候。此末ハ如何之處へ運ひ候哉、何とも難申上時勢と奉恐察候。

（獻上物に對し答禮に就きての意見）

十五日晩認

今日ハ異船之方へ罷越候ニ付認置申候。尤船中へハ入不申候。

十六日朝認

一十五日獻上物承知仕候丈ヶ書記し申上候。

獻上の品目

蒸氣車　大炮　玉藥　時計　種々圖面　卷物類　箱封物類　農道具品々

芋　ハッテーラ三艘内壹艘ハ公儀江獻上しハッテーラニハ葵し御紋し吹

貫を立參り候由。

其外閣老中江鈒筒ニ六發し小筒を添候由。其外應接方へ鐵炮鈒酒抔夫々

へ持參し由。ハッテーラ長サ四間斗（一艘ハ赤、一艘ハ黑、一艘ハ萌黄）

右し外委敷相分り候次第追々申上候。

十五日晩認

一水兵の上陸の件

二月十六日

態々得御意候。然る異船內調見物旁石本直八・大谷安之助・橋本新左衛門神奈川邊迄差遣候處、右驛ニ而兼子留吉と申裏江、水船ゟ異人壹人上陸いさし候趣ニ而、明石樣御臺場其外神奈川邊ハ不殘一覽いさし、御臺場抔へ罷越、大砲し寸尺を取、委敷及吟味、夫ゟ江戸方へ參り度樣子ニ而頻ニ手眞似いさし、異人誠ニ急足ニ而罷越候故、宿役人十五人計附添、指留も不致、先拂し樣ニ而會釋もなく參り、道筋大き成家并寺方へハ立寄、川崎迄參り渡場を越し候樣ニ申候由ニ候

間、六郷川渡船ハ一艘も不殘片付、其邊ニ無之樣いたし、異人通行筋ハ悉く端を卸させ、女抔ハ壹人も指出し置不申、詰り六郷川渡し場迄參り、江戸方へと申聞候得共、渡船無之旨申候處、無是非次第ニ而大師河原之方へ參り、大師迄罷越參拜いたし、最早致方無之故罷歸り候由。 尤六郷川渡ハ、暫留川ニ相成り候由。餘り之事ニ而再三右三人ニ承り糺候處、相違無之旨ニ付、今晩ゟ品川南北之番所御臺場不殘增番等申付、其餘番頭へも通達致置、何時ニ而も油斷無之應變も出來候樣ニ手配いたし、夜廻り等ハ添嚴重ニ取斗申候間御休意被下度候。 尚又新左衞門・安之助兩人差越候間、具ニ御聞取可被下候。 明石樣御固場所へ上陸いたし候へ共、指留も不申、又宿役人案内ニ而大師河原迄罷越、其上道筋方々立寄、剩一臺場抔ニ而ハ大炮を撫廻し、寸尺迄取候抔とハ誠ニ言語同斷ニ付、爲再調只今ゟ御徒目付ニ組之者指添、神奈川驛迄遣申候間、相分候ハヽ又々明日得御意候と存候。 先ハ不取敢一應得御意候間、可然御取斗被下度候。 以上

二月十六日

追而異人裝束廻り、組之者ニ御調可被下候。 呉々大變之有樣恐入申候。 以上

水兵の人相服装

組ミ者ニ承り候次第書

調ニ罷越候處、騒々敷相成候故承り候處、異人上陸、目茶色頭ニ鳥毛ミ笠を冠り、手ニハ鉄筒壹挺携、紺ミ羅紗様ミ衣服金ミ牡丹〆、足ニハ革足袋の如き沓と稱候趣、高サ六尺余、下目ニ人をナガメ、寺抔へ土足ニて座敷へ入り見廻し、一軒も菓子を出し候處有之由、不食と申事。大き成家の門口戸開き有之處ハ入り候趣。何ミ趣意ニて見候趣承り候へ共、合點行不申由。浦賀役人方通辭も壹人附居ると組ミ者申候へ共不憚、道を歩行する急速成事、中々組ミ者追付事不出來位と申候。小川抔を飛ぶ事、足長き故哉日本人も込り候由。大師ニて片手ニ劔筒を持居り、片手ニそ拜ミ候樣咄し申候。所の人々云、アノ異人ハ日本ニそハ御老中ミ樣な身柄な人ジャと申候由、推察不憚事。此頃異船へ鶏と鶏卵と大根を船毎ニ被遣候由。船中ニて右大根を食し候姿を見ある由。日本方日毎ニ水を異船へ運び候事ミ由。船中ニ瓶澤山有之、其中へ入る事ミ由。右上陸ミ異人、則水を運び候船ニ飛參り來り、上陸と申事ニ候。異人小船ニて澤山乘廻り、番船抔ハ少も貪着無之樣子、井戸林抔ミ船ニハ、紫の御紋ミ幕打有之由。井戸林抔異船へ毎度被行候沙汰ミ由。

The son of Adams, 18 ys.



Adams 50 years.



土屋十郎右衛門様
出淵傳之丞

二月十七日

○十七日　丙戌三月十五日

立花左近將監ゟ手紙來る、右圖面を立花家來横濱ニて寫候由。直ニ茂太夫へ

市川齋宮

申付模寫致させ、横文を齋宮へ申付爲認、及譯解も申付ヶ差出候ゆへ如斯張置。

今日承る

幕府よりの贈呈品

國王へ（慶永云國王ニあらすフリシテンドヽ可言）

黒蠟色蒔繪　廣蓋　壹組

蒔繪　花生　壹ツ花臺とも

黒塗蒔繪　手焙り　壹對

置物　壹ツ臺共

梨子地蒔繪　料紙硯箱　壹通り

黒蠟色蒔繪　書棚　壹ツ

同斷　机　壹脚

紅白羽二重　二拾疋

紋ちりめん　五疋
板〆縮緬　五疋
使節へ
黒塗蒔繪料紙硯箱　壹通り
紅白羽二重　五疋
紋縮緬　二疋
板〆縮緬　三疋
船將始九人江
紅白羽二重　三疋ツヽ
板〆ちりめん二疋ツヽ
通辨官へ
板〆ちりめん三疋
惣士官へ五拾六人程へ拾人前ツヽ
吸物椀　六百六拾人前ツヽ但拾人前箱入
乘組惣中へ

米　　　　　　弐百俵 但五斗入

鷄　　　　　　三百羽

右之通り被下候間、致支度浦賀奉行へ可被相廻候。

角力取が贈呈品を運搬す

右米船中ニ運送いたし候ハ角力願ニより被仰付候よし風說有之。外ニ御老中方に迄物返物として郡内嶋六拾疋、用意八拾疋、右ハ御願用之事

香山榮左衛門の入牢

香山榮左衛門此節入牢いたし居候由。右ハ昨夏アメリカ船渡來之節應接不宜趣ニ就ての由。

二月十八日

中根雪江阿部伊勢守の用人を訪問

〇十八日　遠西三月十六日

先日我等及逢對候節之勢州話を、又淵藏方申參り候趣意と如何ニも天淵之相違ニ付、我等ニも日夜不安心候へ共、誠分明無之事ニ候ゆへ、表向承候義ハ出來不申候事故、内々靱負辰ノ口迄罷出、藤田與一兵衛迄談見候ハヽ、少しハ相分り可申との靱負見込ニ付、及指圖靱負辰ノ口へ罷出候て、藤田與一兵衛へ逢申聞候ハ、先日越前守樣被爲入御逢對之節、御談話之趣ヲ決て御疑被成候て之御尋問ニハ無之候へ共、何分應接方ニ於てハ、頻ニ交易通信等相許し不申候半ては彼も承服致間敷との事ニて、其說大ニ行ハレ申候趣、内々金川邊へ探索ニ遣置

阿部伊勢守の回答

候者ゟ申越候ニ就而者、甚御案思被成候義ニ御座候間、尚又貴前様迄内々伺候様被仰付候由申述候處、與一兵衛暫ク相默し居、何分伊勢守様へ申上、御内々伺見可申段申聞其座を退候由。無程與一兵衛罷出、靱負へ申聞候而、伊勢守様へ相伺候處、御尤之御儀ニ被思召候。極々機密之儀ニ而、難申事ニ候へ共、左程ニ御苦惱被成候事故

廟議之根元相漏し候。元來本法ニて申候へ者、今度之様ナル御措置者誰レも快く取扱候義ニ而者無之、泣血不得止次第ニ而、切歯憤悶ニ堪へ兼候事と申もの、乍去只今諸有司ハ勿論、諸侯之内交易を唱へ候ものも有之、御國威を示し度と申ものも有之、年々ニ相成居候事故、何分ニも今度者平穏ニ爲濟候積。昔ニ候ハヽ、獻上物も御返却ニ相成、拜領物も無之筈ニ候得共、前文之次第ニ付不快事ニハ候へ共、右之通りま候。乍去通信交易者、とこ迄も御免無之事ニ候。併先月中旬ゟ渡來長滯留ニ相成候ニ付、彼ニ而も失費不少儀ニ而候間、當年限り石炭ハ爲雜費被下候。尤渡場所之義ハ長崎之積之よし。此五ヶ年之間通信交易御斷之義ハ、彼ニ而も致承知候。五年之間若難風カ其他ニ而も食量薪水石炭等相願度候ハヽ、蘭人之手を以テ相願候様可仕、且

又世上ニ而ハ如何申候も難量候へ共、是等之義ハ悉ク水府前公と御參謀御同意之上ニ候。勿論廟議も井戸林を始應接方之模様と相替候義も無之、應接方ニ而自儘之取計致候義有之間敷、其子細ハ一々加奈川應接方ゟ伺出候義ニ候間、極密之義ニ候間内々越前守様へ申上候様可致旨、與一兵衛聞之。

黒船歸帆の意

與一兵衛咄ニ而ハ異船も近々之内退帆ニ及ひ可申旨、乍去日限ハ彼より不申聞而、掟の由。二三日前ニ相成申達候振合之由。

川邊侯よりの報告

誠丸ゟ爲知左之通り

今十八日午之刻、横濱應接場江異人上陸致候ニ付、都而去ル十五日之通り相心得候様神奈川出張之浦賀奉行ゟ達有之旨、同所出張之家來之者ゟ申越候。此段致御届候。以上

二月十八日　松平誠丸

御沙汰書之内

御勘定吟味方改役　青山金左衛門

青山彌惣右衛門

今二枚 時數二ツ、

今回輸入相秘記

金貳拾兩ツヽ

御勘定 猪俣英次郎
支配勘定 安間純之進
同出役 矢口清三郎

松前幷蝦夷地江爲御用差越候ニ付被下之。

右於御右筆部屋緣頰伊勢守申渡之、遠藤但馬守侍座

品川ゟ届ケ

問屋下役 孫兵衛

南品川宿堺木戸〆切の件

南品川宿堺木戸今晩より〆切、壹人立往來ニ相成、尤馬駕等之儀御番人宿役人御役人江相斷候へハ、明ケ可申旨、御勘定奉行松平河内守殿より、御代官齋藤嘉兵衛殿へ御達ニ相成、夫ゟ當所出役嘉兵衛殿手附羽取森藏ゟ當宿役人へ申付有之候旨、右孫兵衛申來候事。

南品川宿役人代り
家持 九右衛門

右同斷之旨申來ル

坊主ゟ御目附方へ相調候處、左之通之由、

アメリカよりの貢獻品

亞墨利加國王ゟ獻貢物荒增左之通り

一　蒸氣車　壹軸

一　エレキ　三連

一　羅紗　一切

一　馬上刀　拾六振

一　鐵炮　貳挺

一　ハッテーラ　貳艘

但内一艘鐵張

一　皿

一　茶器

〆

御臺樣へと申候而

一　鏡

一　綾糸織　一

一　匂ひの水　三切

〆

前田久盛より差出ス

魯國と蝦夷地との件

寅正月十三日阿部伊勢守殿へ家來呼出御渡し書付

松前伊豆守
家來江

魯西亞國より蝦夷地江上陸之もの有之由、外ニ野心之筋無之旨於長崎表彼國使節ゟ書面指出候間、此方ゟ卒爾之儀等仕懸爭論ニ不及樣彼地へ可申越候。尤近〻蝦夷地徑界道ニ見分役之者被差遣候筈ニ付、其以前一此方ゟ鬪論等起候而ハ、以之外之事ニ候間、其旨能〻差遣置候家老共江申諭候樣早〻可申越候。

上陸水兵の件に關する詳報

一昨日内調ニ遣候御徒目付并組之者昨夜罷歸、今朝別紙之通り相違候間、御家老中へ入披見、相濟候間差越申候間、御落手之上可然御取計被下度候。

一過日ハ水船ニ而上陸いたし候旨得御意候得共、別紙ニハ海苔取船と有之候故、能〻承糺候處、ハッテーラニ而水主不居合海苔取船迄漕附、異人壹人乘移り上陸いたし候由。甚不審敷事、水船ニ而ハ役人も詰合候得て落度ニも可

相成哉ニ付、海苔船と轉變ニ相成候哉、晴切と分り兼申候。

一明石樣大炮御臺場前、通り掛りし節、幕を上ケ相詠候樣ニ有之候得共、是亦大炮を撫廻し寸尺迄被見透候而も、油斷し體ニ而御固メし所詮も無之故歟分兼申候。其餘不審し廉も御坐候得共、御徒目付も一日位ニ而ハ迚も手掛も無之、眞僞し程ハ難計と申聞候間、此段御含置可被下候。世評ニ而ハ今日ハ又々應接し沙汰も有之候得共、雨天ニ而如何、乍去淵藏し方へハ人遣置候間、相分り次第ニ得御意候。尚又一通上陸し手續、別紙ニ而御承知被下度爲可得御意如此ニ御座候。以上

二月十八日

覺

一去十五日、此度亞墨利加人ゟ獻上し品々横濱し御小屋へ持込、同十六日右し品組立として異國人五六人相揚り居候。内壹人晝時頃間續ゟ野毛村と申所へ罷越、海苔取ニ相用ひ候小船ニ乘、壹人ニ而漕出し、神奈川浦ニて青木町し河岸三浦屋と申船宿し前迄乘付、棧橋ゟ上陸致し候ニ付、海邊ニ而も不意し事故一同相驚、夫々江注進等致し、宿内呼廻り候ニ付、浦賀奉行・町奉行し手

附與力同心を始、宿役人共罷出前後へ付添、宿内各々門口をメさせ往來之者等相制候内、右異人往還江出、甚行寺と申寺へ入り、所々相詠め地内ゟ出、又々熊野權現社内へ入り、又々往還へ出、明石様御固場所大炮御臺場之前、通り掛りニ幕を上ヶ相詠候而、夫ゟ同宿内半道程江戸方ニて、小安村と申所之農業道ゟ山江相上り、半道余も山道を相通り、鶴見村より又々往還へ出、川崎宿へ罷越、宗三寺へ入り本堂見廻り、又々地内を出大師道へ罷越、德泉寺へ入り候節、地内之者茶を指出し候所呑不申、水を呉候様申聞候様子ニ付指遣候由ニ而、又々地内ゟ出醫王寺へ入り、直ニ地内を出若宮八幡地内通抜、大師門前へ相向ひ候處、立花左近將監殿固人數宿陣所ニ付同家中之者三人火事裝束ニ而罷出、手眞似ニ而逢對いさし門内へ入、堂中へ相上り、金燈籠幷手水鉢等へ手指致し見候而、又々地内を出羽田手前六郷と申渡場へ相向ひ、江戸へ行度由申聞船相尋候得共、前以渡船相片付置候故、少シ異人立腹之體ニ而、腰ニ帯候劔を拔掛ヶ居り候所へ、浦賀通辭之由ニ而守山榮之助と申者幷外壹人之者後ゟ急き迎ニ罷越指留候故、夫形り元之道へ相戻り、其節夜ニ入候ニ付、高張提灯等を付、大勢ニ而相送り、生麥村ニ而濱之名主十左衛門ろさへ連レ行、

最初御代官手附杉浦武助と申者ゟ夫々船用意爲致置候押送り船ニ乘せ、浦賀役人貳人家來參人船頭十人斗乘込、異國船へ漕付候處、蒸氣船ニ而相招候ニ付、直ニ先方へ相渡罷歸候趣ニ候得共、右上陸之趣意幷乘來り候船之樣子、篤と相調候處、慥成手懸りも無御座、眞僞之儀ハ相分不申候。

二月十七日

池村半兵衛

松波甚左衛門組

野渡茂大夫

華翰被成下難有奉拜誦候。如仰春寒難去御坐候得とも、益御安泰被爲渡奉拜賀候。然ハ過日御內通申上候通り、去ル十日應接有之候由。且又昨日ハ大炮之音相聞候得共、此節之御樣子御承知無御座候ニ付、聞込罷在候儀ハ可申上旨御紙上之趣奉畏候。跪と仕候儀ハ何分難相分御座候得とも、荒々承知仕候儘御內々左ニ而申上候。尤是以風說同樣之儀、跪と御治定ニハ相成申間敷、御賢覽之上御取捨被下候樣仕度奉存候。

一去ル十日、異人共九時過上陸、其節右場所壹丁程相隔彥根樣本牧寄之方、川越樣神奈川寄之方へ御固船拾貳參艘ツヽ被指出、會津樣忍樣ニハ同所御有合

し船弐三艘ッヽ、其邊に御差出御固被成候處、追々ハッテーラ廿七艘ニ而參り、上官ゟ跡ゟ上陸、行列を立候頃本牧ニ而空炮打放し、相濟候頃又々ハッテーラニ而打放し、夫ゟ鳴物取交、調練いたしなから御小屋へ入、又々鳴物し音相聞申候由。尤異人共四五百人程上陸、内五六十人劔筒等を持海岸を固め、水主共も劔を帶居、其體至而嚴重ニ相見申候趣。夕七時過相濟、如前行列を立引取候由。尤兼而御達し通り、本船幷小船ニ而五十發餘空炮打發申候趣。眞田様小笠原様御固御人數別紙し通御坐候哉ニ承知仕候。則寫指上申候。

一御應接ハ、伊澤美作守様幷井戸對馬守様鵜殿民部少輔様林大學頭様御立合し由。尤右御應接ハ、只一通り先方し願意を御聞取ニ相成申位し事ニ而、其節異人ゟ書翰差出御受取ニ相成候而已と申事ニ御座候。右和解彼是御手間込ニ付、未引續御應接と申様ニも參り兼、日限も聢と御治定ニも相成不申候由。尤其節御料理等も種々被下置候趣ニ相聞申候。

一昨日炮發し音相聞候儀ハ、全別條無御坐、此内ゟ折々空炮打發候類ニて、何も相替候儀ハ無御座候由ニ御坐候。

先右し段荒々御受迄申上度、其余ゟ色々承候儀も御座候得共、何分聢と聞留

候儀ニ而無御座候故、御受ニ難申上奉存候。猶承知仕候儀ハ可申上候間、已來迚も聊も無御用捨被仰聞被下候樣仕度奉存候。且何等御聞込ミ儀ニ而被爲在候節ハ、何分無御腹臟御申教被成下候樣仕度此段奉願上候。右御受申上度早々如此ニ御座候。以上

二月十三日

眞田家人數書

眞田家

家老	壹人
番頭	同
軍儀役	同
鐵炮頭	貳人
留守居	壹人
旗奉行	同
使番	同
目付	同

小荷駄奉行 陣場奉行	兼	壹人
陣場奉行 武具奉行	兼	同
彈足奉行		同
士		三拾人
小役人		十人
徒士		拾四人
足輕小頭		五人
足輕		百拾八人
物持中間		百六拾人
又者		百十五人
旗貳本		
鐵炮 但八匁玉		百挺
長卷 但荷作ニテ持參		貳拾振
長柄 同		
大筒		五挺

五百目玉筒　壹挺
壹貫目筒　同
貳貫四百目　同
四貫八百目　同
拾三貫七百目　同
大皷　壹
鉦　同
貝　同
幕　拾對

〆

小笠原様御人數書ハ間違ニ哉無之候

一簡奉拜呈候。打續烈風別而春寒相覺へ候得共、益御安泰被成御張陣奉敬賀候。然て、御承知之儀ニ而可有御坐とハ奉存候へ共、承知仕候儘左ニ荒々申上候。

一昨十三日、異人共少々横濱へ上陸、是ハ献貢物置場爲見分參り候事之由。右相濟候へハ、來ル十五日彌献上物持參可仕旨御達有之候由。猶被下物ニ

有之候趣。品物も未相分不申候由ニ御坐候。

一一昨十三日終日神奈川邊ハッテーラ貳三艘ニて測量いたし、壹艘ハ神奈川臺下迄參り碇を卸居候內、干汐ニ相成出船難成、御用船ニ而手傳漸々出船いたし罷歸候由。彼是一時余も右出船ニ手間取申候趣ニ御坐候。

病死水兵を橫濱德藏院に葬る

一於船中士卒一人病死いたし候ニ付、橫濱村眞言宗德藏院墓所爲見分、黑川嘉兵衛殿合原操藏齋藤太郎助外ニ御代官手代壹人被罷越、十一日九時比異人六人當方御船ニ而上陸、德藏院山際へ穴を掘、暫相立ハッテーラ貳艘ニ而死骸箱ニ入、頭分ら者一人、導師一人、ケヘール筒七挺七人、太皷壹人、笛壹人、士卒三人、水夫拾貳人上陸、笛太皷ニ而墓所迄參り穴ら口へ直し、暫導師經文を唱埋候上、ケヘール六挺ニ而空炮三發ツヽ打放引取。

一死人ハ蘭人ニ而、年廿四歳士卒ら由。

一導師ハ黑緒様ら物ニ而、襟よりむさ有之候衣を着し、下着ハ外異人ら通り。

一棺杉ら木ら様ニ而長七尺程。

一右葬送ら節、立合御徒目付壹人、御小人目付貳人、香山榮左衛門合原操藏同心壹人、通辭壹人。

一 去十日應接の節被下御料理

茶菓子

大あるへい、

白ほさん相その

かすていら

右内朱、外黒の木具に載被下之

酒養老酒

吸物

はねをより

しめじ茸

さんせう

硯蓋

よしき玉子

紅かまぼこ

さより

菊くゐる

てんふすいしゆう

昆布さらしくるみ

かう茸

小皿盛

小盛

平目薄重

めしその心

小川まき

かくしまんしん

うと巻

花山葵

さし身

座敷外ニ居候者へも菓子斗被下之。

右ノ趣も、全御知合せニ可相成程ノ事柄ニも無御座、只々雜事而已ニ御坐候へ共、兼而蒙仰罷在候儀ニ付申上候。猶相聞候儀も御坐候ハヽ、其節可申上と奉存候。右ノ段御内々申上候間、御聞捨可被下候。早々如此ニ御座候。以上

二月十四日

猶以御繁用ノ御中、御返翰等ノ儀ハ堅御斷申上候。以上

有賀様　　笠井

野村淵藏の報告

淵藏ゟ主税迄來書

一十五日異人横濱江上陸ノ節、一人酒を飲セと申候ニ付、同心渡邊某と申者民家へ入り酒を飲を候處、女なくてハ不飲抔申候ニ付、其邊ノ女ニ酌をさセ、相互ニ酒を飲候由。右ノ趣役方へ知レ候而沙汰有之候由。

水兵上陸の件

一十六日異人横濱へ上陸いたし、十五日ノ献上物組立致候由。其節定ノ外ニ三人斗竊ニ彼ノ船ニ乘り參り上陸いたし候而、船人ハ本牧ノ方へ罷越候。其始末ハ未た相分り不申候。一人ハ其邊ノ漁船ニ乘り候而神奈川へ船を

付候様ゟ體いたし候處、漁人船を付不申候へハ、異人腰鐵炮を出し船を付不申候ハヽ打殺し候體を致候ニ付、不得止神奈川迄舟を付候由。夫ゟ神奈川邊ゟ寺へ入、又小安村ゟ民家へ入色々亂妨いたし、又明石侯ゟ御臺場を幕外ゟ覗き御筒ニハ手をさし不申候様子ニ御座候候沙汰ニ御坐候。夫ゟ片原村ゟ山ゟ登り鶴見村ゟ下り、夫ゟ大師河原ゟ羽田ゟ渡場へ行き候處、渡船盡く向ふ岸へ付置候間不相渡、夫ゟ川崎渡場へ行候處、是又同様ニ付川崎宿を通り、生麥より船ヲ乘セ歸し候由。右通行中與力同心共種々申指留候ゟ、氣逆ニ相成候へハ劔抔を拔き突候體いたし、一向聞入不申候沙汰故ニ付、神奈川ゟ異船元船へ右ゟ趣申越候處、彼より書取出し是を渡シくれ候様申候ニ付、早々持歸り其書取を渡候へハ、何ゟ顏色も替り候様子ニゟ、夫ゟ歸り候由。

右ゟ摸様ニゟ相考候へハ、我役方數十人も相懸り種々指留候處承知不致、彼ゟ少キ書取ニゟ異人恐れ候ハ、如何ゟ儀ニ候哉、此ニゟ　御國威ゟ處と異人ゟ心中とを御推察可被下候。

一十七日彼ゟ船より、我方へ無禮いたし候儀挨拶有之候沙汰。

右ゟ儀ハ彼ゟ實意ニ候哉、手事ニ候哉相分り不申候。

十八日朝認

今十八日横濱ニおゐて應接有之筈ニ處、雨天ニ付相延ひ申候。左候へハ何レ日押と奉存候。若御來馬ニ相成候ハヽ、神奈川宿迄朝五時比迄ニハ御來馬被下候樣致度奉存候。此段村田子江も乍憚御鶴聲奉願上候。

阿部用人より報告

十八日

與一兵衛申候ハ、交易通信さへ御許容有之候へ者、蒸氣船ニ付も何ニ付も獻上可致と彼ニてハ申居候由。

二月十九日

〇十九日　西洋三月十七日

今日記載無之。

二月廿日

〇廿日　西暦三月十八日

川越侯より報告

誠丸ゟ爲知左ニ通り

一昨十八日、亞墨利加人江應接可有之處、雨天ニ付延引相成、昨十九日午刻横濱江亞墨利加人上陸致應接、無滯相濟、申中刻本船江致歸船候間、神奈川出張ニ家來ニ者ゟ申越候。此段致御屆候。已上。

二月廿日　松平誠丸

神奈川沖ニ碇泊罷在候亞墨利加船八艘之内、軍艦貳艘豆州下田湊迄明後廿二日頃出船致、猶又追而神奈川沖碇泊之場所迄乘戻可申候得共、聊異變之筋ニ而無之旨、尤出船日限相延候而も、別段相達申間敷旨、神奈川出張之浦賀奉行より爲心得達有之段、同所出張之家來之者より申越候。此段致御屆候。以上

二月廿日

松平誠丸

神奈川沖へ碇泊之亞墨利加船八艘之内、軍艦貳艘豆州下田湊迄明後廿二日頃出船いたし、尚又追而右碇泊之場所迄乘戻シ可申候得共、聊異變之筋ニ而無之旨、爲心得伊澤美作守より達有之候。尤出船日限相延候而も、別段達有之間敷旨も同人より達候段、神奈川驛より出張家來之者より申越候。此段御屆申達候。以上

二月廿日

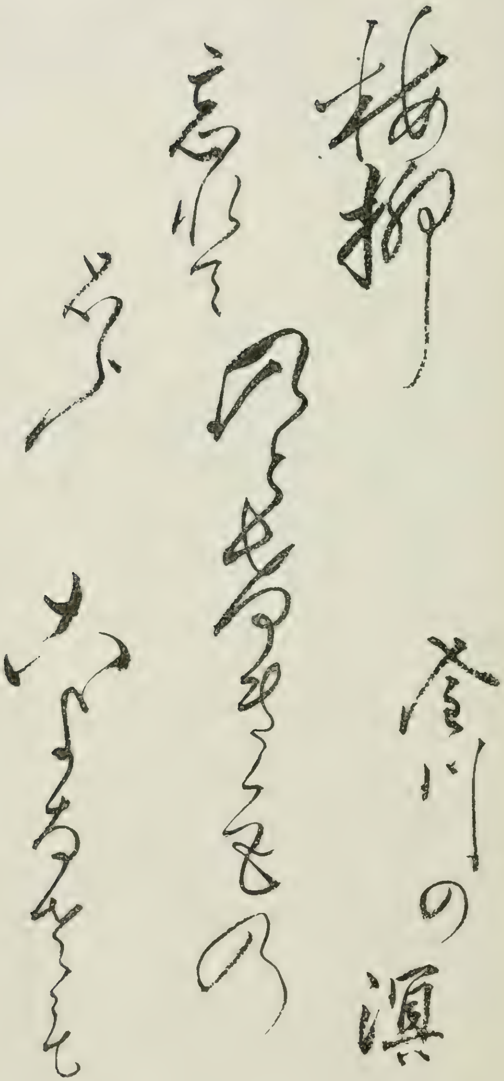
井伊掃部頭

今辰刻頃、房州洲之崎より壹里程沖合へ異國船壹艘相見へ、西之方へ艜候趣。兼而指出置候遠見之者ゟ申越候ニ付、猶又物見船指出嚴敷心得方相達置候段、相州陣屋詰家來之者ゟ申越候。此段御屆申達候。以上

二月廿日　井伊掃部頭

明日彌品川持場へ爲巡見罷越へき段靭負申付

畢



松平春嶽全集第一卷索引

ア

ウ

エ・ヱ

オ・ヲ

カ

キ

ク

ナ

索引　終

松平春嶽全集編纂刊行會

昭和十五年十月設立

顧問　侯爵　松平康昌　同　玉村美雄
同　子爵　松平慶民　同　笹原清
同　侯爵　德川義親　同　本多忠之
會長　岡田啓介　同　德山國三郎
相談役　横山彥六　同　西尾彌
同　大谷登
委員長　加藤亮一
委員　永井環
同　平泉澄
同　滋賀貞
同　蘆田伊人
同　糟谷季之助
同　島連太郎

昭和十六年七月二十五日印刷
昭和十六年七月三十一日發行

非賣品

東京市澁谷區千駄ケ谷一ノ五六二
松平侯爵家內
發行者　松平春嶽全集編纂刊行會
代表者
會長　岡田啓介
東京市淀橋區柏木四ノ八七一
編纂者　蘆田伊人
東京市神田區美土代町一六
印刷者　嶋誠
東京市神田區美土代町一六
印刷所　三秀舍

東京市澁谷區千駄ケ谷一ノ五六二
松平侯爵家內
發行所　松平春嶽全集編纂刊行會



